財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第411集

福沢新田遺跡
細谷合ノ谷遺跡
細谷八幡遺跡

国道354号太田バイパス道路特殊改良一種
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

第一分冊　本　文　編

2007

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査研究館1F保管

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第411集

福沢新田遺跡
細谷合ノ谷遺跡
細谷八幡遺跡

国道354号太田バイパス道路特殊改良一種
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

第一分冊　本　文　編

2007

群馬県太田土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

遺跡遠景（南・利根川上空から）

福沢新田遺跡７号溝出土の焙烙

序

本書は国道354号太田バイパス道路特殊改良一種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第２集です。本事業の用地内には西から細谷南遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡の４遺跡があり、平成13年度から当事業団が発掘調査を実施してまいりました。それらのうち細谷南遺跡・細谷八幡遺跡の発掘調査の成果につきましては、すでに平成18年度に第１集として刊行しています。本書はそれを引き継ぎ、残る福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡の発掘調査の成果と、平成18年度に行われた細谷八幡遺跡の追加調査の成果を収めました。

福沢新田遺跡は平安時代前期の短期間の集落跡であり、細谷合ノ谷遺跡は主として縄文時代後期の集落跡で、多量の土器が出土しました。また、細谷八幡遺跡では、第１集で報告しました平安時代前期の集落の続きを調査しております。得られた成果は本地域の歴史を解明する上で貴重なものであり、今後の研究資料として役立つものと確信しております。

最後になりましたが、群馬県県土整備局、同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化課、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本報告書の発刊に際し、心から感謝申し上げると共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成19年10月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　高　橋　勇　夫

例　言

1．本書は、国道354号太田バイパス道路特殊改良一種事業に伴って実施された、埋蔵文化財発掘調査の発掘調査報告書の第２集である。本書における報告は、福沢新田遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡の一部から検出された遺構・遺物を対象とする。第１集では「細谷南遺跡・細谷八幡遺跡」として刊行されている。

2．福沢新田遺跡は、群馬県太田市福沢町300-2、307-1、308-1番地（以上１区）、182-1番地（以上２区）、307-3・5・6番地（以上３区）、307-4番地（以上４区）、175-1・2番地（以上５区）、302-2・3番地（以上６区）に所在する。

細谷合ノ谷遺跡は太田市細谷町217-1・3、226、230番地（以上１区）、227、228番地（以上２区）、99、100-1・3・6・7・8、104番地（以上３区）に所在する。

細谷八幡遺跡は太田市細谷町92-1・2・3・6・7、93-2・3、94-3、98-1・2・3番地に所在する。

3．福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡・細谷八幡遺跡の遺跡名は小字名の新田・合ノ谷・八幡の前に大字名にあたる福沢町・細谷町の町名を付し、大字名小字名で遺跡名としている。

4．発掘調査・整理事業は群馬県太田土木事務所から群馬県教育委員会文化課の調整を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け実施されたものである。

5．調査・整理体制及び期間は下記の通りである。

○発掘調査

平成13年度　（福沢新田遺跡　平成14年３月13日～平成14年３月31日）

事務担当　小野宇三郎、吉田　豊、赤山容造、水田　稔、津金澤吉茂、佐藤明人、柳岡良宏、田中賢一

調査担当　高井佳弘、庭山邦幸

平成14年度　（福沢新田遺跡　平成14年４月１日～平成14年５月31日）

事務担当　小野宇三郎、吉田　豊、神保侑史、能登　健、真下高幸、佐藤明人、笠原秀樹、柳岡良宏、中澤恵子

調査担当　庭山邦幸、金井　武

平成15年度　（福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡　平成15年７月１日～平成16年１月31日）

事務担当　小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、平野進一、真下高幸、中沢　悟、笠原秀樹、柳岡良宏、北野勝美、中澤恵子、金子三枝子

調査担当　今井和久、平方篤行、森田真一

平成16年度　（福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡　平成16年６月１日～平成16年12月28日）

事務担当　小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、平野進一、真下高幸、中沢　悟、笠原秀樹、柳岡良宏、今泉大作、清水秀紀、中澤恵子、金子三枝子

調査担当　平方篤行、森田真一

平成17年度　（福沢新田遺跡　平成17年４月１日～平成17年８月31日）

事務担当　小野宇三郎、高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、平野進一、真下高幸、笠原秀樹、柳岡良宏、中澤恵子、金子三枝子

調査担当　石塚久則、柿沼弘之、森田真一、佐藤亨彦

平成18年度　(細谷八幡遺跡　平成18年11月1日～平成18年11月30日

事務担当　高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、西田健彦、萩原　勉、笠原秀樹、石井　清、国定　均、須田朋子、斉藤恵利子、柳岡良宏、今泉大作、栗原幸代、佐藤聖行、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、内山佳子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典

調査担当　西田健彦、山田精一

○整理事業

平成17年度　平成17年8月1日～平成19年3月31日

事務担当　小野宇三郎、高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、矢崎俊夫、中東耕志、相京建史、宮前結城雄、竹内　宏、石井　清、国定　均、須田朋子、吉田有光、今泉大作、清水秀紀、栗原幸代、佐藤聖行、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、内山佳子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典

整理担当　金井　武（平成17年8月1日～平成18年3月31日）
森田真一（平成17年12月1日～平成18年3月31日）

平成18年度　平成18年4月1日～平成19年3月31日

事務担当　高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原　勉、中東耕志、関　晴彦、笠原秀樹、石井　清、国定　均、須田朋子、斉藤恵利子、柳岡良宏、今泉大作、栗原幸代、佐藤聖行、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、内山佳子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典

整理担当　金井　武・高井佳弘

6．調査面積は以下の通りである。

福沢新田遺跡　4,012㎡（平成13・14年度 1,753㎡　平成15年度　1,137㎡　平成16年度　933㎡　平成17年度　189㎡）

細谷合ノ谷遺跡　4,940㎡（平成15年度　1,602㎡　　平成16年度　3,338㎡）

細谷八幡遺跡　342㎡

7．本書作成の担当は次の通りである。

編　　集	金井　武・高井佳弘
本 文 執 筆	第1～3・5章・第6章第1節　高井佳弘、第4章・第6章第2節　金井　武
遺物観察	福沢新田遺跡　金井　武・高井佳弘　　細谷合ノ谷遺跡　金井　武 細谷八幡遺跡　高井佳弘
遺構写真撮影	各発掘調査担当
遺物写真撮影	佐藤元彦
金属器保存処理	関　邦一、土橋まり子、小村浩一、津久井桂一、森田智子、多田ひさ子
遺物機械実測	田中精子、富沢スミ江、小菅優子
整理作業	鈴木幹子、丸橋富美子、小林町子、関口照子、大竹由美子、狩野清美、 阿部和子、飯田文子、大勝桂子、清水ゆり子、星野智恵美、樋口宣之

8．石材鑑定は、群馬県地質研究会の飯島静男氏にお願いした。

9．発掘調査資料、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10．発掘調査及び報告書作成では以下の方々にご協力・ご指導いただいた。記して感謝の意を表す。

群馬県教育委員会、太田市教育委員会、宮田　毅、地元関係者各位

凡　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、国土座標（2002.4改正前の日本測地系）の第Ⅸ系を使用している。グリッドの設定は国土座標を使用し、５ｍ方眼を設定した。グリッドの名称は国土座標の下３桁（下記・例参照）を用い、南東隅を起点とした。グリッドの略称で「G」を用いた。本文中で遺構の位置を示す場合には国土座標系をそのまま示したところが多い。

例　　X＝29750　　Y＝－43100　の場合、750－100G

2．調査区名は、福沢新田遺跡では調査した順に１区～６区まで、細谷合ノ谷遺跡では３区画に分かれ、調査順に１区～３区と付けた。細谷八幡遺跡は第１集「細谷南遺跡・細谷八幡遺跡」で報告したＢ区にあたることから、今回の報告はＢ区として報告する。

3．遺構名称は、福沢新田遺跡では区に関わらず遺構の種類毎に通し番号を付した。細谷合ノ谷遺跡では区毎に遺構の種類毎に通し番号を付した。細谷八幡遺跡では区毎に遺構の種類毎に通し番号を付すが、今回新たに見つかった遺構については第１集で報告した次の番号から付した。

4．本書におけるテフラの名称は、次の略称で示した。

Ａｓ－Ａ・・浅間Ａ軽石、1783（天明３）年、　　Ａｓ－Ｂ・・浅間Ｂ軽石、1108（天仁元）年

Ｈｒ－ＦＡ・榛名二ツ岳渋川テフラ（６世紀初頭）、　Ａｓ－ＹＰ・浅間板鼻黄色軽石（1.3～1.4万年前）

Ａｓ－ＢＰ・浅間板鼻褐色軽石群（1.9～2.4万年前）、ＡＴ・・・・姶良丹沢火山灰（2.4～2.5万年前）

5．遺構の方位は、北を基準に傾きを計測した。東に傾いた場合Ｎ－○°－Ｅというように表記した。

6．本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。下記以外は図版ごとに凡例を示す。

焼土範囲

7．遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はｍを用いた。

8．遺構・遺物実測図の縮尺は基本的には以下の通りであるが、それぞれの場合に適したものを採用した場合があるので、各図のスケールを参照していただきたい。

竪穴住居1/60、竈1/30、土坑・ピット1/40、埋甕1/30、溝平面図1/100、溝断面図1/50

土師器・須恵器・縄文土器・石器（打製石斧・磨石）1/3、紡錘車1/2、石器（石鏃）・銭貨1/1、石器（石皿）・縄文土器1/4、焙烙1/6.

9．住居の床面積の計測は、プラニメーターで３回計測し、その平均値を採用した。

10．遺物観察表の計測値の（　）の数値は現存部分の最大値および推定値である。色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修1994年版『新版標準土色帳』を用いて記載した。

11．遺物写真の縮尺は基本的に実測図と同様とした。

目　次

第一分冊・本文編

口絵・カラー図版
序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯・方法・経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 3
　第３節　調査の経過 …… 3
第２章　遺跡をとりまく環境 …… 6
　第１節　自然環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　福沢新田遺跡 …… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　竪穴住居跡 …… 13
　第３節　掘立柱建物 …… 38
　第４節　土坑 …… 42
　第５節　溝 …… 59
　第６節　井戸 …… 86
　第７節　ピット …… 88
　第８節　旧石器時代の調査 …… 89
　第９節　遺構外出土の遺物 …… 94
　遺物観察表 …… 96
第４章　細谷合ノ谷遺跡 …… 109
　第１節　遺跡の概要 …… 109
　第２節　竪穴住居跡 …… 111
　第３節　土坑 …… 129

第４節　埋甕・土器集中 …… 172
第５節　柱穴・ピット …… 175
第６節　溝 …… 196
第７節　旧石器時代の調査 …… 215
第８節　遺構外出土の遺物 …… 221
遺物観察表 …… 288
第５章　細谷八幡遺跡の追加調査 …… 401
第１節　遺跡の概要 …… 401
第２節　竪穴住居跡 …… 401
第３節　土坑 …… 405
第４節　溝 …… 408
第５節　ピット …… 413
遺物観察表 …… 414
第６章　まとめ …… 415
第１節　福沢新田遺跡発掘調査の成果 …… 415
第２節　細谷合ノ谷遺跡発掘調査の成果 …… 417

抄録

第二分冊・写真図版編

写真図版

付図　1　福沢新田遺跡・細谷八幡遺跡平成18年度調査区全体図（1/200）
　　2　福沢新田遺跡１区東部・３区全体図（1/100）
　　3　細谷合ノ谷遺跡１区・２区全体図（1/200）
　　4　細谷合ノ谷遺跡３区全体図（1/200）
　　5　調査区位置図（1/1,000）

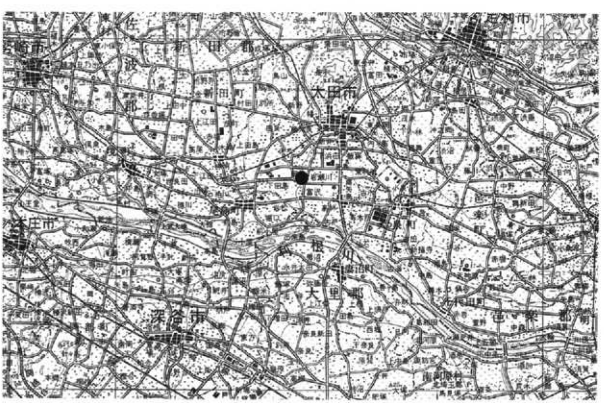
第１章　調査の経緯・方法・経過

第１節　調査に至る経緯

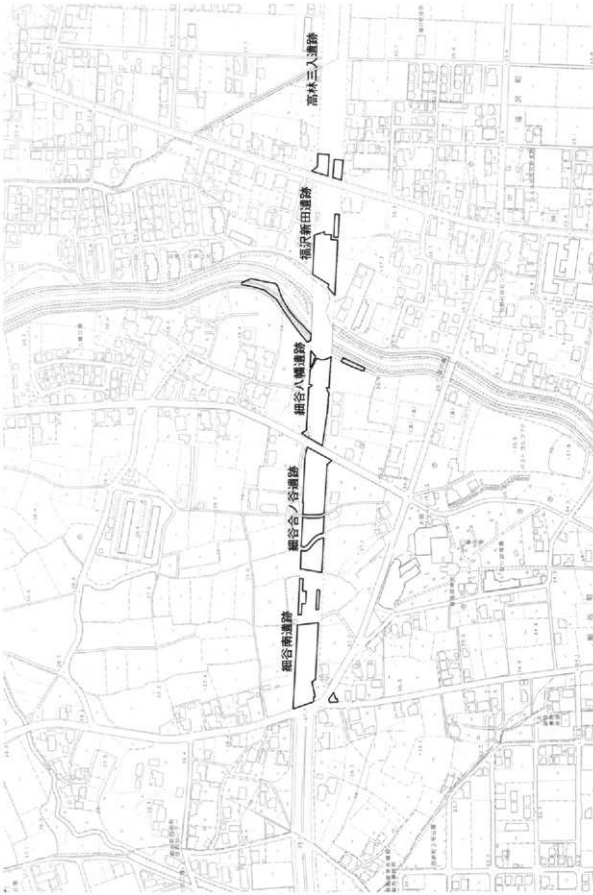
太田市の南部を走る国道354号太田バイパスは、1981年に市道細谷・牛沢線以西が開通していたが、その東側延伸部分の建設が群馬県土木部（現県土整備局）によって計画され、平成11年度に県教育委員会文化財保護課（現文化課）に埋蔵文化財についての照会があった。文化財保護課では平成12年２月に、事業対象地のうち用地買収の終了した西端部分の試掘調査を行ったところ、住居跡などの遺構の存在を確認したため、本調査が必要と判断した。事業対象地は東西約700ｍに及び、遺跡は西側から細谷南遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡に分けられ（第２図）、それらの調査は群馬県埋蔵文化財調査事業団が行うこととなった。

本調査は平成13年度から開始した。まず事業用地の最も西側にある細谷南遺跡の調査から着手し、次いで年度末に最も東側の福沢新田遺跡の発掘調査に移った。この福沢新田遺跡は平成14年度にも継続して調査を行った。その後用地買収の進捗に伴い、平成14年度は細谷八幡遺跡、平成15年度は福沢新田遺跡、細谷八幡遺跡、細谷合ノ谷遺跡の３遺跡、平成16年度は福沢新田遺跡、細谷合ノ谷遺跡、細谷南遺跡の３遺跡、平成17年度は細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡、細谷南遺跡の３遺跡の発掘調査を行ったほか、平成18年度には細谷八幡遺跡の追加調査を行った。

なお、本事業の東側延伸部は（都）3.3.2東毛幹線道路改良事業であり、それに伴う発掘調査の成果は、すでに2005年に『高林三入遺跡・八反田遺跡』として当事業団から刊行されている。



第１図　遺跡位置図（1/200,000）　国土地理院20万分の1地勢図『宇都宮』使用



第２図　調査区位置図（1/5,000）　太田市発行1/2,500地形図60・69（2006）使用

第２節　調査の方法

福沢新田遺跡・細谷台ノ谷遺跡・細谷八幡遺跡の調査は、平成13年度から18年度にかけて断続的に行った。そのため、各遺跡の発掘調査における地区分けなどについては、各遺跡の調査時の状況などによって基準が異なる結果となった。本書では、それらの遺跡毎の事情については各遺跡ごとの記述に譲り、ここでは全体に関する調査方法について記述することにする。

調査方法には特殊な点はなく、ごく標準的な方法を用いた。

表土除去は基本的に重機（バックホー）を用いた。表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認できた遺構について調査を行った。遺構の種類は竪穴住居跡、掘立柱建物のほか、土坑、溝、井戸などであり、それぞれに適した方法を用いた。遺構名は、それぞれの遺跡で調査が複数回にわたったので、厳密な統一をとることができなかった。そのため、一部呼び方が煩雑となり、整理時に遺構番号の変更が必要となった。各遺跡における遺構番号付与方法などについては、遺跡毎の記述を参照していただきたい。

遺構の平面実測図の大部分は測量業者に委託し、その際は基本的に電子平板を用いて行い、打ち出す図面の縮尺は1/10、1/20、1/40を遺構の性格に合わせて適宜使用した。調査に用いたグリッドは特に遺跡特有のものを設定することはせず、国土座標Ⅸ系（旧国土座標系）を用い、Ｘ・Ｙ座標について、その下３桁を用いて表すことにした(例Ｘ＝29700、Ｙ＝－43100の場合、700-100)。遺物取り上げの際や遺構の所在地点を表す際には、５ｍ四方のグリッドを用いている場合が多い。

低地にあたる調査区を除き、遺構調査終了後には旧石器の試掘調査を行ない、遺物が出土した場合は周囲に範囲を広げて調査を行った。

遺構写真の撮影は、35㎜モノクロと同リバーサルを併用し、適宜６×７版モノクロも撮影した。また、調査区の全景を撮影するためには高所作業車を用い、さらにラジコンヘリによる空撮を行った。

第３節　調査の経過

福沢新田遺跡

福沢新田遺跡の調査は平成13年・14年・15年・16年・17年の各年度に行った。

平成13年度は、細谷南遺跡の調査終了に伴い、年度末から調査を行った。平成14年３月よりプレハブ建設などの準備作業を行い、表土除去は14日より開始した。この年度に調査したのは１区の南西部であり、その南西隅から表土除去を行った。この区は竹林・畑として利用されていたため、確認面には竹の根が多く入っていたが、竪穴住居が比較的濃密に分布することが判明した。この年度の表土除去は19日で終了とし、並行して遺構精査を行い、一部遺構の掘り下げに着手した段階で、調査を一旦中断した。

平成14年度は前年度の継続作業から開始した。現地における作業は４月８日から開始し、前年度表土除去を行った部分の遺構精査を継続しながら、９日からはさらに北側に向かって表土除去を再開した。この表土除去は16日に終了した。この１区の調査と並行して２区の調査も行い、表土は４月24・25日、５月２・７日に除去して順次遺構精査・遺構調査を行った。１区で調査した遺構の数は竪穴住居９軒、掘立柱建物１棟、溝11条、土坑18基、井戸１であり、比較的濃密な遺構分布であったのに対して、２区の遺構数は比較的少なく、竪穴住居３軒、溝１条、土坑12基などであった。これらの遺構の調査は主として５月15日まで行い、以後は１区の旧石器時代の試掘調査に移行した。その結果２カ所から石器の出土をみたが、調査期間の関係から、その本調査と２区の旧石器時代の調査とは次年度以降に行うこととした。そのため埋め戻しの作業を５月23日から28日

に行い、現地での作業を終了した。

平成15年度は１区・３区・４区の調査を行った。現地における作業は８月11日より開始し、まず１区・３区の表土除去を行い、さらに19日には４区の試掘調査を行った。４区は１区の西側で蛇川への斜面にあたる部分であり、トレンチを３本設定して遺構の有無を確認した。その結果、遺構は見つからず、この部分の本調査は行わないこととした。１区は前年度石器が出土したので、19日以後、出土地点の周囲を拡張して本調査を行ったが、遺物は出土しなかった。３区はこの年度の調査の中心となる部分である。表土除去と並行して遺構確認作業を行い、順次遺構の調査に着手した。遺構は竪穴住居２軒のほか、溝・土坑があったが、調査前に住宅があった場所であり、多くの攪乱が入っていて調査は難航した。その後旧石器時代の試掘調査を９月18日から開始し、以後、遺構の調査と並行して行った。この試掘調査は10月８日に終了したが石器は出土しなかった。その後、１区と３区との間に未調査の部分があることが判明し、10月９日からその部分の表土除去を行い、直ちに遺構確認・調査を行った。これらの調査は10月16日に終了し、21日に空撮を行い、埋め戻し作業は23日～25日に行った。その後31日まで調査地の整備作業を行い、この年度の現地における調査は終了した。

平成16年度は県道太田小島線東側の２区・５区の調査を行った。２区は14年度に旧石器時代の試掘調査を除いて調査が終了していた部分であり、この年度はその試掘調査のみを行った。まず５区の表土除去を６月３日から開始し、次いで２区の表土を除去した。つづいて14日から作業員を入れて調査を開始し、まず５区において遺構確認を行い、各遺構の調査に入った。５区は遺構が少なく、29日には全景撮影、その後平面実測を行いながら７月１日から旧石器時代の試掘調査に着手した。２区の試掘調査は６月30日から開始し、以後５区と並行して行った。その結果、２区で石器が１点出土し、その地点は拡張して調査することにしたが、それ以上の石器は出土しなかった。５区では石器が全く出土せず、２区・５区の試掘調査は７月12日に終了した。その後13日～15日に埋め戻しを行い、この年度の現地における調査は終了した。

平成17年度は６区の調査のみである。表土除去は６月29日・７月１日に行い、遺構確認作業は７日から開始し、順次各遺構の調査に入った。６区は小面積であったため、遺構の調査は８月９日には完了し、これによって福沢新田遺跡の調査は全て終了した。

細谷合ノ谷遺跡

細谷合ノ谷遺跡の調査は用地買収の関係等から、平成15年度と16年度の２回に分けて実施された。平成15年度は、１区南側半分と２区の調査が実施された。平成15年９月26日から１区の表土掘削から始まった。９月末は細谷合ノ谷遺跡、細谷八幡遺跡、福沢新田遺跡の発掘調査が同時に行われる状況であった。１区の表土掘削は９月29日で終了し、遺構確認作業から始められ、１号溝から徐々に遺構の調査が行われた。１号溝周辺は多量に縄文土器が出土し、包含層を掘り下げつつ遺構確認作業、遺構調査が行われた。10月３～６日で２区の表土掘削が行われた。６日は、東西方向に長く３本のトレンチと北西隅に基本土層用のトレンチを設定し、重機で掘削を行った。２区は、Ａｓ－Ｂ層が残存し、Ａｓ－Ｂ下の水田調査を想定したが、Ａｓ－Ｂは確認されなかった。そのためトレンチ内を精査し、土層断面の観察、写真撮影、作図を行い、８日で調査を終了した。20日に高所作業車で１区と２区全景の写真撮影を行った。21日はラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。22～24日で包含層の遺物取り上げを行い、24日から旧石器時代の試掘調査が始められた。ナイフ型石器、石核が出土した。出土位置、土層断面図、写真撮影を行い、29日で調査を終了し、埋め戻しを行い、平成15年度の調査を終了した。

平成16年度は、１区北側半分と３区の調査が実施された。平成16年８月３日、３区東側から表土掘削が開始され、12日までに１区北側半分（３区北側の

道路部分と１区北側半分の北西部を除き）まで表土掘削を終了した。他の遺跡の調査との関係で一時調査を中断した。９月13日、３区遺構確認作業から調査は再開された。10月６日から３区遺構調査と併行して１区遺構確認作業、遺構調査が進められた。天候不順で湧水と雨水で水没し、ポンプで排水することもあった。26日に高所作業車で１区全景写真を撮影した。11月１日より１区で旧石器時代の試掘調査を３区遺構調査と併行して開始した。１区で表土掘削をしていなかった北西部分の表土掘削を10日に行った。24日に１・３区の全景をラジコンヘリで、写真撮影を行った。25・26日で３区北側の道路下の掘削と道路の付け替えを行った。遺構確認、遺構掘削を行った。３区で12月３日より旧石器時代の試掘調査行った。１・３区の全景写真を23日に高所作業車で撮影した。旧石器試掘トレンチの土層断面の観察・記録を行い、22日から１区埋め戻しを始め、24日で３区の埋め戻しを終了し、撤収作業等を行い28日で、細谷合ノ谷遺跡の調査すべてを終了した。（細谷合ノ谷遺跡の項は金井武執筆。）

細谷八幡遺跡

細谷八幡遺跡については平成14年～17年に大部分の調査が終了し、その調査の内容は第１集で報告済みである。今回報告するのは平成18年度に用地買収が行われて急遽調査が行われた部分である。

現地における調査は18年11月13日から開始し、東側より表土除去に着手した。遺構確認はそれと並行して行い、確認された遺構から調査に入った。表土除去は16日に終了、以後30日まで調査を行い、当日撤収作業を行って現地における調査は終了した。

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　自然環境

太田市は群馬県の南東部に位置している。関東地方北部の山地が関東平野に移行したところにあるので、市域の大部分は平坦な地形であるが、中央部には金山・八王子丘陵が突出している。南と北には西・北部から流れ下る大河川、利根川と渡良瀬川があり、これが埼玉県、栃木県との県境になっている。金山・八王子丘陵から市域の南西部をみると、西側は大間々扇状地、南側は台地と谷底平野とが広がり、さらに南には利根川が東西に流れている。

太田バイパス関連の４遺跡は、金山・八王子丘陵の南西にある由良台地と呼ばれる台地上にあるが、この台地は大間々扇状地の岩宿面といわれる面に相当する。大間々扇状地はみどり市大間々町を扇央として南に広がり、太田市から伊勢崎市にかけての海抜50～60ｍ付近を扇端とする広大な扇状地で、由良台地はその南東端にあたる位置にある。この台地は北西から南東に向かって緩やかに高度を下げるが、遺跡はその南端に近い位置にあり、南東方向には低地が広がっていて、細谷合ノ谷遺跡西側にも浅い谷が入っている。これらの低地・谷は地形的には谷底平野に分類される。また、台地を南北に貫いて蛇川が流れている。この蛇川は台地を深く浸食して流れており、両岸の台地は本来つながっていたものと思われる。今回調査の遺跡の中では、福沢新田遺跡が唯一この蛇川の東岸にある。遺跡の標高は37.0ｍ前後で、台地上はほぼ平坦で起伏が少ない。

第２節　歴史的環境

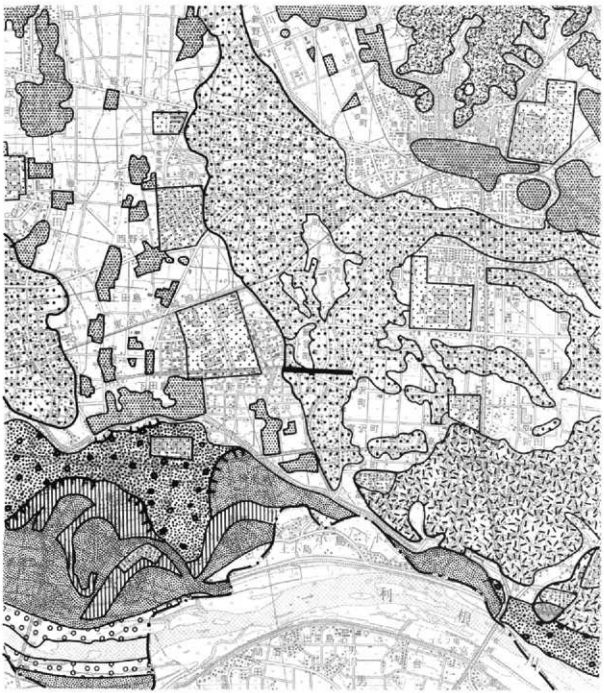
太田市周辺は多くの遺跡に恵まれ、古くから考古学の調査・研究の盛んだった地域である。特に古墳時代には東国一の規模を誇る天神山古墳を初めとした多くの古墳が存在する。ここでは、福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡・細谷八幡遺跡の周辺に限り、各時代の遺跡を概観したい。(以下の記述の中で、遺跡名の前に付いているアルファベットや数字は、第４図「周辺の遺跡」の番号と一致している。)

まず旧石器時代については、これまでさほど調査例が多くなかったが、近年当事業団が行った調査ではいくつかの遺跡で旧石器が出土し、資料が増加している。まず、23高林三入遺跡では数カ所の石器ブロックが検出され、特にＢ区ではナイフ形石器、石核、剥片が計200点以上出土している。44高林西原古墳群でも石器の出土が３ブロック見られ、まとまった資料が得られている。本書で報告する遺跡でも、Ｄ福沢新田遺跡で黒曜石製の掻器、黒色頁岩製の石刃、Ｂ細谷合ノ谷遺跡で黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡も多くはない。51柴場遺跡では草創期の爪形文土器が出土している。早期では撚糸文土器が柴場遺跡、古戸遺跡、41牛沢遺跡で発見されている。中期は柴場遺跡で中期後半の埋甕が発見されている。後期は寄木戸遺跡がある。Ｂ細谷合ノ谷遺跡では後期前葉の竪穴住居、埋甕などが確認されている。Ｄ福沢新田遺跡では土器・石器がわずかに出土するのみで、遺構は見られない。

弥生時代の遺跡は少なく、この地域のひとつの特徴である。この時期の土器片が見つかることはあるが、遺構は確認されていない。

古墳時代は数多くの遺跡が存在する。前期の遺跡では、上野地域の古墳時代前期を代表する土器である、石田川式土器の標識遺跡の32石田川遺跡がある。昭和27年（1952）の石田川河川改修工事に伴う土取り工事によって発見され、緊急調査された。その際、東海系の特徴を示す土器の一群が発見され、「石



扇状地
丘陵
砂質台地
砂礫台地
古砂丘
谷底平野
自然堤防
蛇行州
河原
旧流路
人工改変地
低崖
崖

群馬県「土地分類基本調査・深谷」(1991)、国土地理院5万分の1地形図「深谷」使用

第3図　周辺地形分類図（1/50,000）

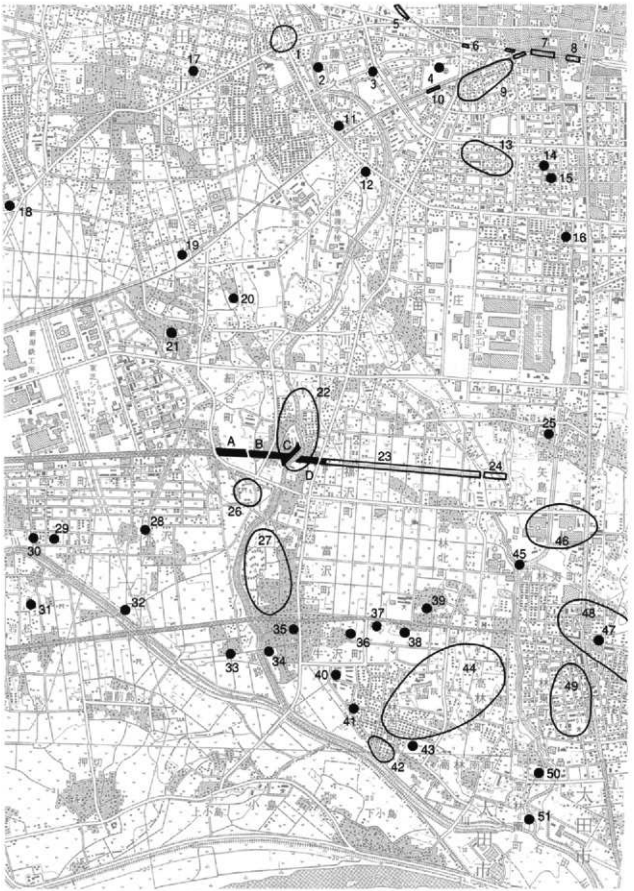
田川式」と命名された。同じく前期の遺跡としては38高林遺跡がある。昭和34年（1959）に明治大学の大塚初重、小林三郎らによって発掘された遺跡であり、学史的にもよく知られた遺跡である。古墳では、当地域で最初に出現したと考えられている33頼母子古墳がある。円墳あるいは前方後円墳と考えられているが、既に削平されて現存しない。出土遺物には銅鏡30点、三角縁神獣鏡などの銅鏡３面などが知られている。この頼母子古墳の後を受ける古墳としては、37朝子塚古墳がある。本格的な調査は行われていないが、全長124ｍの前方後円墳であり、４世紀後半のものと考えられている。本遺跡の南にある27富沢古墳群では前期の方形周溝墓や円形周溝墓が確認されている。中期から後期にかけては、この地域には多くの群集墳が営まれる。細谷八幡遺跡・福沢新田遺跡に一部重なる位置には22岩瀬川古墳群があり、南近接地には26細谷古墳群がある。南東の高林台地上には、44高林古墳群や48東矢島古墳群がある。前者は帆立貝形古墳や円墳など多数からなり、後者は調査が行われていないが、６基の前方後円墳を中心として多くの古墳があったことが分かっている。その他、北にやや離れた場所には１藤阿久古墳群、９浜町古墳群、13新井古墳群などがある。このように、本地域には数多くの群集墳があり、県内でも有数の古墳密集地帯ということができる。太田バイパス関連の各遺跡では古墳そのものはなく、ごく少数の埴輪片が出土しているだけである。古墳時代の集落跡の調査は３舞台Ａ・Ｄ遺跡、12川窯遺跡、50高林梁場遺跡などがある。Ａ細谷南遺跡の集落は３世紀末頃から始まっている。福沢新田遺跡・細谷八幡遺跡は古墳時代の遺構・遺物は希薄であるが、細谷合ノ谷遺跡では７世紀の竪穴住居が調査されている。

奈良・平安時代では、48東矢島古墳群の中に47東矢島廃寺があることが特筆される。この付近には東山道武蔵路が通っていると推定されるので、古代では要衝の地であり、そこに古代寺院が建立されていることはきわめて重要な事実である。しかし、東矢島廃寺は瓦の出土が知られているのみで、遺構は全く不明であり、現在ではその位置すら明確ではなくなってしまっている。集落跡では、49高林向野遺跡、50高林梁場遺跡、Ａ細谷南遺跡などが調査されている。なお、東山道武蔵路の有力な推定地が24八反田遺跡として調査されたが、そこには道路跡が発見されず、まだ武蔵路の位置は確定していない。細谷八幡遺跡は９世紀代の集落遺跡であり、福沢新田遺跡もほぼ同じ時期の集落遺跡である。

中近世では、多くの館、城の跡が知られている。本遺跡の近くには15新井館跡、25矢島館跡、31岩松館跡、34牛沢館跡、45高林城跡があり、25、31、34の存続期間は16世紀である。堀や土居、戸口などが残っているものもあるが、残存状態はいずれもよくない。福沢新田遺跡では、溝の中から中近世の遺物が数多く出土し、館などの区画溝である可能性が考えられる。

参考文献（番号は遺跡一覧表の主な文献に一致）

(1)　『考古学集刊第３巻下』東京考古学会　1968
(2)　尾崎喜左雄・今井信次・松島栄治『石田川』1968
(3)　『高林102号古墳報告書』太田市教育委員会　1969
(4)　『群馬県遺跡台帳東毛編』群馬県教育委員会　1971
(5)　『米沢二ツ山古墳』群馬県教育委員会　1971
(6)　『武野村第63号墳発掘調査概報』太田市教育委員会・1977
(7)　『群馬県史資料編３』1981
(8)　『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会　1989
(9)　『群馬県史通史編』群馬県　1990
(10)　『太田市文化財地図』太田市教育委員会　1991
(11)　『西原古墳群』東毛病院宿舎遺跡調査会　1993
(12)　『埋蔵文化財発掘調査年報４』太田市教育委員会　1994
(13)　『市内遺跡X』太田市教育委員会　1994
(14)　『太田市史通史編・原始古代』太田市　1996
(15)　『年報20』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
(16)　『群馬県文化財情報システム』群馬県教育委員会　2001
(17)　『年報21』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
(18)　『梁場遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(19)　『年保・鳥山下遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(20)　『年報22』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
(21)　『年報23』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004
(22)　『高林三入遺跡・八反田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(23)　『浪町遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(24)　『年報24』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
(25)　『塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
(26)　『高林西原古墳群』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
(27)　『細谷南遺跡・細谷八幡遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007



第4図　周辺の遺跡（1/25,000）　国土地理院2万5千分の1地形図「上野境」「足利南部」「渕谷」「妻沼」使用

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	遺構の内容	主な文献
A	細谷南遺跡	古墳～平安	古墳・奈良・平安の竪穴住居。	(27)
B	細谷台ノ谷遺跡	旧石器・縄文～平安	旧石器ナイフ形石器、縄文後期竪穴住居、埋甕、土坑。	本書
C	細谷八幡遺跡	奈良・平安	奈良・平安の竪穴住居。	(27) 本書
D	福沢新田遺跡	旧石器～中世	旧石器馬蹄石製の掻器。平安竪穴住居。中世溝。	本書
1	藤阿久古墳群	古墳	径15mほどの円墳が多く、横穴式石室か。6世紀代。	(14)
2	藤阿久大道北遺跡	古墳	古墳時代の竪穴住居。	(10)
3	舞台A・D遺跡	古墳後～平安	古墳後期の大規模集落。	(14)
4	稲荷山古墳	古墳	径20mの円墳。形象埴輪は太田高校で保管。	(14)
5	三島本遺跡	縄文・奈良・平安・中世	奈良・平安の土坑、中世の掘立柱建物。	(25)
6	稲荷前遺跡	平安	平安時代の竪穴住居。	(25)
7	浜町遺跡	古墳・平安	古墳～平安の竪穴住居。中世の溝、井戸。	(23)
8	宮内遺跡	縄文～中世	縄文前期包含層。古墳～平安の竪穴住居。	(25)
9	浜町古墳群	古墳	古墳後期。詳細不明。	(16)
10	塚畑遺跡	縄文・古墳・平安	縄文中期土坑。古墳～平安の竪穴住居。	(25)
11	舞台C遺跡	古墳後期	古墳後期の集落。	(14)
12	川窪遺跡	古墳前～平安	古墳前～後期、及び平安の集落跡。	(14)
13	新井古墳群	古墳	6世紀後半から7世紀にかけての古墳群。八幡神社古墳は横穴式石室。	(14)
14	五（御）廐稲荷古墳	古墳	円墳。	(4)
15	新井館跡	中世	堀跡。	(8)
16	稲荷塚古墳	古墳	全長50m程の前方後円墳か。刀、馬具、玉、鈴など。	(14)
17	天狗林遺跡	古墳	古墳時代後期の集落。	(12)
18	五反田遺跡	古墳	前期竪穴住居。	(14)
19	細谷清川遺跡	古墳	古墳時代の集落。	(16)
20	細谷東遺跡	古墳・奈良	古墳・奈良の集落。	(16)
21	細谷中遺跡	古墳～平安	古墳～平安の集落。	(16)
22	岩淵川古墳群	古墳	後期の古墳群。	(14)
23	高野三入遺跡	古墳	古墳前期～中期の集落。	(22)
24	八反田遺跡	古墳～中世	土坑・溝などを調査。	(23)
25	矢島館跡	中世	堀、土居跡。	(8)
26	細谷古墳群	古墳	冠稲荷神社内に5基が残存。	(4)
27	富沢古墳群	古墳	前期・後期の集落と古墳群。方形周溝墓や円形周溝墓も。	(14)
28	米沢中遺跡	古墳	前期の遺跡。角形土製品が出土。	(14)
29	米沢二ツ山古墳	古墳	5世紀後半の前方後円墳。鏡形埴輪。	(5)
30	米沢西遺跡	古墳	前期竪穴住居。	(5)
31	岩松館跡	中世	堀、土居、戸口、櫓台跡。	(8)
32	石田川遺跡	古墳	前期集落。石田川式土器の標識遺跡として有名。	(2)
33	根母子古墳	古墳	前期古墳（円墳か）。銅鏡30本、銅鏃3面、刀身一振など。	(14)
34	牛沢館跡	中世	堀、土居、戸口跡。	(8)
35	沢野村27号墳	古墳	41mの帆立貝形古墳。5世紀末～6世紀初め。	(14)
36	雉城塚古墳	古墳	5世紀前半（沢野村45号墳）の円墳。削平され現存しない。	(14)
37	朝子塚古墳	古墳	4世紀後半の前方後円墳。形象埴輪（家形、盾形）、円筒埴輪。	(14)
38	高林遺跡	古墳	前期竪穴住居、石田川式土器。	(1)
39	沢野村102号墳	古墳	終末期（7世紀前半）の複室構造横穴石室を持つ円墳か。	(3)
40	小谷場古墳群	古墳	戦後削平。『総覧』では17基。中～後期の古墳群。	(14)
41	牛沢遺跡	縄文	縄文早期撚糸文土器。	(14)
42	小谷場遺跡	古墳～平安	平安の竪穴住居（9世紀）。	(14)
43	沢野村96号墳	古墳	後期（6世紀後半）の円墳。	(14)
44	高林古墳群	古墳	古墳時代中期～後期の古墳群。	(11) (14)
45	高林城跡	中世	遺構消滅。	(8)
46	西矢島古墳群	古墳	47号は前方後円墳。他は円墳からなる後期の古墳群。	(14)
47	東矢島廃寺	奈良・平安	古代の瓦出土。寺院跡と推定。	(14)
48	東矢島古墳群	古墳	6基の前方後円墳と多数の円墳からなる後期の古墳群。	(14)
49	高林向野遺跡	奈良・平安	平安の集落、緑釉陶器。	(14)
50	高林梁場遺跡	古墳後期～平安	古墳後期と平安の集落、緑釉陶器。	(13)
51	梁場遺跡	縄文・古墳	縄文草創期爪形文土器、中期埋甕。平安竪穴住居。	(18)

第３章　福沢新田遺跡

第１節　遺跡の概要

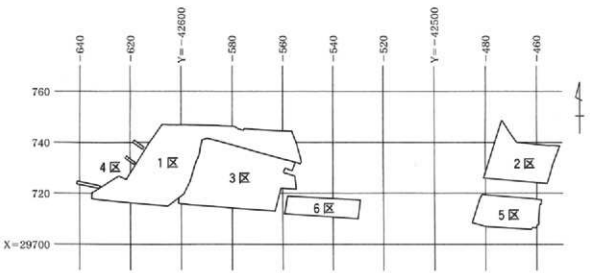
福沢新田遺跡は、今回調査した太田バイパスの４遺跡の中では唯一蛇川東岸に立地している。発掘調査は用地買収の進捗に合わせて、平成13年度から平成17年度にかけて５回に分けて行った。調査区は各年度の調査範囲をそのまま一つの区画とし、それぞれの区名は調査順に１～６区と付けた（第５図）。このうち４区は１区の西側で蛇川への斜面にあたる部分であるが、トレンチを３本設定して試掘調査を行ったところ、遺構が確認されなかったため、本調査は行っていない。

地形的には全ての調査区が台地上にある。現状では１区以東はほぼ平坦であるように見えるが、旧地形は１・３区の東端から２・５区の西半にかけてやや低くなっていたようで、この部分のロームには水の影響をみることができた。４区は、先述のように、蛇川に向かって斜面となっているが、本来はここも１区の続きの平坦な台地であったと考えられ、斜面は後世の削平によるものであろう。遺構が全く見つからないのは、その削平のためだと思われる。

調査前の現状は宅地、畑、竹林などである。遺構確認面が比較的浅いため全域に攪乱が見られたが、特に宅地となっていた３区では攪乱が多く、遺構の残りが悪かった。また、県道太田・小島線の西側隣接地では、遺構面が完全に破壊されていることが県教育委員会の試掘調査によって確認されていたため、この部分の本調査は行わず現地事務所用地として利用することにした。

調査した遺構は、総計で竪穴住居14軒、掘立柱建物３棟、土坑84基、溝33条、井戸３基、ピット16基であり、その他に旧石器の試掘調査で石器が３点出土している。それぞれの遺構名は各調査区毎に別個に付けられていたが、今回はそれらを整理し、調査区に関わらず遺構の種類毎の続き番号とした。

竪穴住居14軒は、１・３区と２区とに分布し、間に大きな空白地域がある。先述したように、１・３区の東端から２・５区の西半にかけてはやや低地に



第５図　調査区設定図（1/1,500）

あたっているので、そのために竪穴住居が見られない可能性があるが、６区と２・５区の間は後世の攪乱で遺構が破壊されているため、本来の状況は確定できない。これらの住居の時期は、遺物が出土しないために確定できないものを除いて、いずれも９世紀後半に収まり、比較的短期間に限定できる集落である。同様な傾向は蛇川の対岸にある細谷八幡遺跡でもみられる。さらに２区の東側隣接地である高林三入遺跡Ａ－１区でも２軒の９世紀中頃の住居がみつかっていて、比較的広い範囲に同時期の集落が広がっていたことが分かる。

掘立柱建物は３棟であり、１・３区の東側に集まっている。３棟の柱筋をみると、相互に比較的揃っているように見えるが、１・３号掘立柱建物の２棟と２号掘立柱建物とは、柱穴の形状・大きさが異なり、同時期のものとは思えない。２号掘立柱建物は出土遺物から古代のものであることは確実であるが、１・３号掘立柱建物は遺物が出土しないので時期は不明である。

土坑は全域に分布する。各調査年度で調査した土坑について、整理作業の過程で遺構名を付け直したが、その後に近現代の攪乱であることが判明したものがあり、最終的にそれらを除外した結果、欠番のものが少なからず生じてしまうこととなった。いずれも明確な共伴遺物がなく、時期・性格共に不明なものが大部分である。１区西部北側では長方形の土坑が集中し、その長軸方向が２～５号溝とほぼ揃っているのが注目される。おそらく区画方向に沿って掘られたものであろう。同様に２区西半部でも、長方形の土坑が南北に列をなしている。これらの土坑の長軸方向は、南に隣接する５区の溝とほぼ直交ないし並行しており、やはり区画方向に沿って掘られたものと思われる。

溝は33条調査した。遺物が出土しないか、あるいは出土したとしてもごく少数であるために時期が全く不明な溝もあるが、多くは近世の焙烙片などが出土し、近世以降のものであることが判明する。それらのうち、１・３・６区にある２・５・10・16・22号などの溝は、全体に直線的で、しかも相互に方向が揃っており、何らかの区画方向を反映しているものと思われる。同様に５区の19・20・21号溝もほぼ同様の方向を示しており、やはり区画に関わるものであろう。以上の溝のうち、特に５・10・19・22号は比較的深く、屋敷地などの区画溝である可能性を考えるべきであろう。なお、10・19号溝からは近現代の陶磁器も出土するので、これらの区画方向は、近世以降、遅ければ戦前頃まで踏襲されていた方向であると思われる。

その他の溝は基本的に南北方向に近い走向で、途中で緩やかに蛇行するものが多いが、これらのうち８・９・11・12・14号の５条は、出土遺物や重複関係から古代に遡る可能性がある。特に11号は９世紀後半の13号住居に壊されているため、確実にそれ以前のものである。これら５条は配置も不規則で走向も揃っていないため、区画に関わるものではないと思われ、その用途は明らかではない。

それ以外に注目されるのは７号溝である。この溝の埋土中・上層からは大量の焙烙片が出土している。先述した区画に関わる可能性がある溝よりも古い時期（５号溝に切られる）のものであり、近世以降と考えられる溝のなかでは古いものである。

また、全33条の溝のうち、流水の痕跡が見られたのは27号溝のみであり、それ以外は水が流れていたか否かは不明である。

井戸と思われるものは１・３区に３基あるが、このうち３号井戸は底面が浅く、井戸ではない可能性もある。時期は、２号は陶磁器や焙烙が出土するので近世以降であるのに対して、１・３号は土師器・須恵器が出土し、中近世以降の遺物が出土しないため、古代に遡る可能性がある。

この他、１区と２区で３点田石器が出土している。いずれも１点ずつの出土であり、周囲に遺物は見られなかった。

第2節　竪穴住居跡

1号住居（第6・7図、第4表、PL.2・31）

1区西部の南側にあり、県教委の試掘トレンチと2号溝によって一部を破壊されている。

位置　X＝29722～726、Y＝－42613～618

重複遺構　北東隅に2号溝が重複して破壊されている。断面図で明らかなように、本住居の方が古い。

形態　北東隅を2号溝に、北西隅をトレンチに壊されてしまっているが、東西方向にやや長い方形になるものと思われる。

方位　N－90°－E

規模　3.66×（3.26）m

面積　（9.22）㎡

壁高　26cm

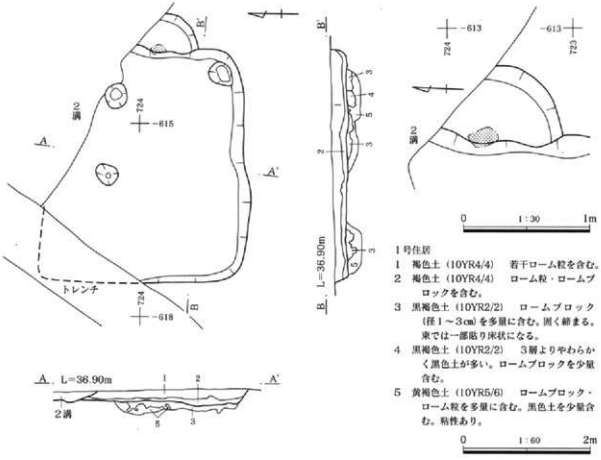
床面　掘方底面は土坑状の凹みがいくつか見られるが、それを黒褐色土や黄褐色土で埋め戻し、床面とする。一部は地山のローム面をそのまま床面としている。

柱穴　床面には3カ所のピットを確認したが、その位置からいずれも柱穴ではないと思われ、本住居に柱穴はなかった可能性が高い。

貯蔵穴　調査した範囲には見つかっていない。2号溝で破壊された可能性もある。

周溝　確認できない

竈　東壁中央の張り出し部に焼土があったため、ここが竈である可能性があるが、だとすれば廃棄後に破壊されたらしく、幅が広い形状になっている。幅は不明だが、長さは58cmである。

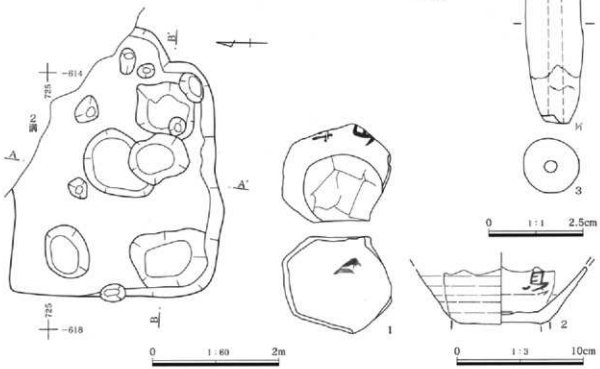


1号住居
1　褐色土（10YR4/4）　若干ローム粒を含む。
2　褐色土（10YR4/4）　ローム粒・ロームブロックを含む。
3　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック（径1～3cm）を多量に含む。固く締まる。東では一部貼り床状になる。
4　黒褐色土（10YR2/2）　3層よりやわらかく黒色土が多い。ロームブロックを少量含む。
5　黄褐色土（10YR5/6）　ロームブロック・ローム粒を多量に含む。黒色土を少量含む。粘性あり。

第6図　1号住居・竈平・断面図

遺物　出土遺物は非常に少ない。報告できるのは墨書土器２点と土錘１点である。１は土師器坏の底部で、２は須恵器高台付埦であり、墨書はいずれも判読不可能である。

所見　出土遺物は少ないが、住居の時期は、土師器坏・須恵器高台付埦の特徴から、９世紀後半であると考えられる。



第７図　１号住居掘方・竈掘方平面図、出土遺物

２号住居（第８・９・10図、第４表、ＰＬ.２・31）

１区西部の南端近くにある。北東と南西の隅に溝・土坑が重複するが、破壊されているのはわずかな部分である。

位置　Ｘ＝29718～722、Ｙ＝－42606～613

重複遺構　北東隅に２号溝、南西隅に１号土坑が重複する。本住居は２号溝よりも古く、１号土坑よりも新しい。さらに掘方面の調査で17号土坑が下層に存在することが分かったが、この土坑はＢ－Ｂ'セクションにみるように、本住居の掘方埋土を切っている。このため、本住居と同時存在していた時期があるものと考えられるが、最終床面の時には埋まっていた。

形態　東西に長い長方形である。

方位　Ｎ－90°－Ｅ

規模　4.65×3.44m

面積　16.50㎡

壁高　26cm

床面　掘方底面は一部土坑状に深く掘られているところがある。これらをロームブロックなどを含む黄褐色土で埋め戻して床面を作っているが、ほとんどの部分は掘方が浅く、地山を直接床面としているところもある。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　確認できなかった。

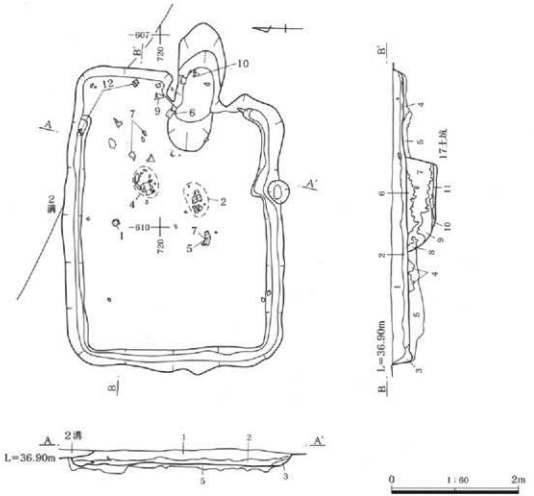
周溝　竈のある東壁を除いた３方向は全周する。幅

は12～20cm、深さは4～7cmで、しっかりとした周溝である。

竈　東壁中央やや南寄りにある。焚き口幅55cm、長さ138cmである。両袖の一部が残り、燃焼部の床面は深さ10cmほど掘り込まれている。覆土には焼土粒が多く見られ、比較的よく使用されているようである。竈内からは6・9・10の甕が出土した。

遺物　出土遺物は比較的多い。竈とその前面、北東隅にかけて土器片が散るように出土した。掲載するのは土師器甕が中心で、その他、土師器坏、須恵器高台付埦、同皿がある。縄文土器2点は混入品である。

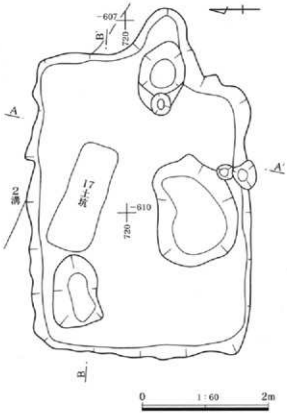
所見　出土遺物から、本住居の時期は9世紀後半と考えられる。

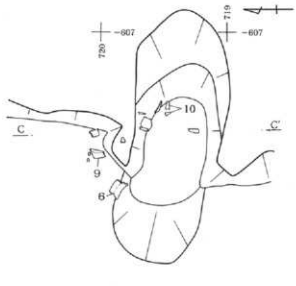


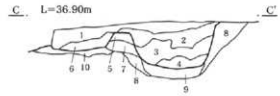
2号住居

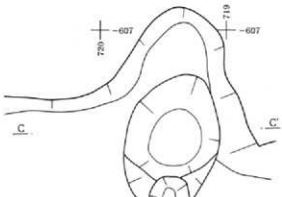
1　褐色土（10YR4/4）　焼土粒、ローム粒を含む。
2　褐色土（10YR4/4）　少量の焼土粒と1層より多くローム粒を含む。
3　褐色土（10YR4/4）　ローム粒を多く含む。
4　黄褐色土（10YR5/6）　炭化物・焼土粒を微量含む。
5　黄橙色土（10YR7/8）　ロームブロック（径1～5cm）、ローム粒を多量に含む。部分的に少量の黒色土（10YR2/2）を含む。
6　黒褐色土（10YR3/1）　（17号土坑）ローム粒、炭化物を含む。締まりあり。
7　にぶい黄橙色土（10YR6/3）　（17号土坑）ローム粒を多量に含む。ロームブロック（径1～2cm）、炭化物を微量含む。
8　黄橙色土（10YR8/8）　（17号土坑）ロームブロックの層。壁崩落土。
9　明黄褐色土（10YR7/6）　（17号土坑）ロームブロック（φ1～4cm）とローム粒を多量に含む。
10　暗褐色粘質土（10YR3/4）　（17号土坑）締まりあり。ローム粒を少量含む。
11　褐色粘質土（10YR4/6）　（17号土坑）粘土化している。ローム粒を少量含む。

第8図　2号住居平・断面図







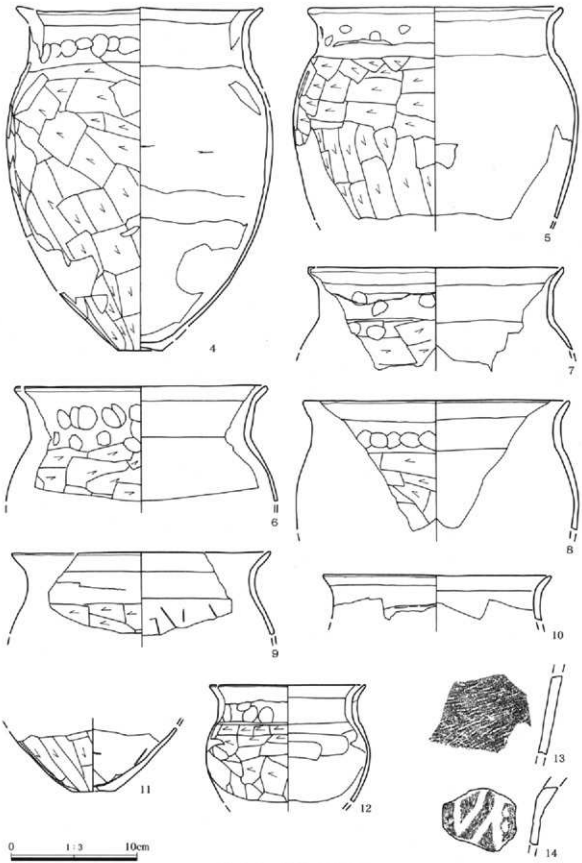


２号住居竈

1　暗褐色土（10YR3/4）　焼土粒・炭化物・ローム粒を少量含む。
2　明黄褐色粘質土（10YR6/6）　しまりあり。焼土粒・粘土ブロックを含む。
3　黄橙色粘質土（10YR7/8）　しまりあり。焼土粒・焼土ブロックを含む。
4　暗褐色土（10YR3/3）　焼土粒をやや多く含む。粘土ブロックを部分的に含む。粘土質でしまりあり。
5　明黄褐色粘質土（10YR6/6）　しまりあり。竈袖の粘土の一部。
6　黒褐色土（10YR3/1）　焼土粒・炭化物を微量含む。
7　明黄褐色粘質土（10YR6/6）　しまりあり。竈袖の粘土と思われる。部分的に焼土ブロック（φ７～８㎝）を含む。
8　にぶい黄橙色土（10YR6/4）ローム粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。
9　赤褐色土（2.5YR4/6）　しまりあり。粘性あり。焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。
10　黄橙色土（10YR7/8）　ロームブロック（径１～５㎝）、ローム粒を多量に含む。部分的に少量の黒色土（10YR2/2）を含む。

0　1:30　1m

第９図　２号住居掘方・竈平・断面図、出土遺物



第10図　2号住居出土遺物

３号住居（第11～14図、第４表、ＰＬ.２・３・32）

１区西部の中央やや南寄りにある。次の６号住居と重複しているが、これは本遺跡で唯一の住居同士の重複例である。

位置　Ｘ＝29725～731、Ｙ＝－42608～614

重複遺構　南側に６号住居が大きく重複する。Ａ－Ａ'セクションに見るように本住居が新しい。

形態　東壁がやや不整形で、北側で東に張り出すようになっているが、全体の形状は正方形に近い方形になるものと思われる。

方位　Ｎ－１°－Ｅ

規模　3.48×3.87m

面積　13.39㎡

壁高　比較的深く36cmあり、６号住居の掘方底面まで壊している。

床面　掘方底面は壁にそって深く掘られ、一部土坑状になっており、それらをロームブロックを含む黒褐色土で埋め戻して床面を作っている。

柱穴　柱穴と思われるピットが４隅に１本ずつ見られるが、Ｐ３のみはやや内側に入った位置にある。規模は以下の通りであるが、いずれも浅く、柱穴としてはやや疑問が残るものである。

Ｐ１　径45×57cm　深さ19cm

Ｐ２　径45×53cm　深さ18cm

Ｐ３　径43×66cm　深さ10cm

Ｐ４　径51×61cm　深さ10cm

貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　西半分にあり、竈のある北壁の東半分と東壁にはみられないほか、Ｐ１の周囲にもみられない。幅10～25cm、深さ５～７cmである。

竈　北壁中央と東壁の南側とにある。これら２基の竈は、住居の大きさからみて同時に使用されていたとは思えず、袖が残っていた東側竈の方がより新しいものと思われる。

東壁のものは両袖が残り、焚き口幅70cm、全長95cmである。

北壁のものは袖がなく、住居の壁で切られたような形状なので、すでに廃棄され、この部分は住居の壁となっていた可能性が強い。幅は住居壁の部分で45cm、全長も壁から計測して110cmである。

遺物　東竈やその南側を中心として、床面に広く土器が散っていた。報告するのは土師器坏、須恵器坏、土師器甕、土師器台付甕、須恵器甕、砥石である。

所見　出土遺物から、本住居の時期は９世紀後半であると思われる。

６号住居（第11・12図、ＰＬ.２・３）

１区西部の中央やや南寄りにある。北側のほとんどを３号住居に切られる。

位置　Ｘ＝29725～727、Ｙ＝－42609～613

重複遺構　北側に３号住居が大きく重複する。Ａ－Ａ'セクションに見るように本住居が古く、大部分を破壊されている。

形態　３号住居に大きく破壊されるため不明である。

方位　Ｎ－１°－Ｗ

規模　3.59×（0.96）m

面積　（3.21）㎡

壁高　比較的深く26cmある。

床面　掘方底面から11～16cm埋め戻し床面とする。

柱穴　確認できなかった。

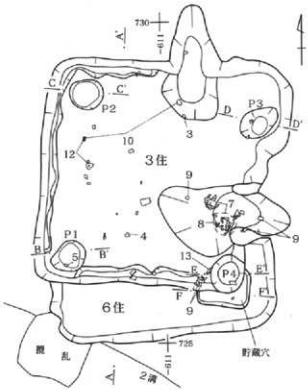
貯蔵穴　小面積の調査で不明確であるが、東側に見つかった方形の小土坑が貯蔵穴であると思われる。長さ83cm、幅62cmの長方形であると思われ、深さは16cmとやや浅い。

周溝　確認できなかった。床面が小面積しか残っていないため、本来存在したか否かは不明である。

竈　確認できなかった。３号住居によって破壊されたものと思われる。

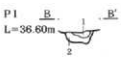
遺物　出土遺物は少なく、土師器・須恵器の小破片が出土しているにすぎない。

所見　南壁付近がわずかに残るだけなので、詳細は不明である。出土遺物が少ないので時期も確定できないが、土器の小破片から古代に収まることは確実である。



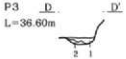
3号・6号住居

1　黒褐色土（10YR3/2）　（3号住居）若干のローム粒・焼土粒を含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　（3号住居）3cm前後のロームブロックを含む。若干焼土粒を含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　（3号住居）ローム粒を多く含む。
4　黒褐色土（10YR3/2）　（6号住居）1層よりローム粒の量を多く含む。焼土粒はみられない。
5　暗褐色土（10YR3/3）　（6号住居）ロームブロック、ローム粒含む。
6　暗褐色土（10YR3/3）　（6号住居）3層に類似。ローム粒を多く含む。
7　黒褐色土（10YR3/2）　（3号住居）ロームブロック（1～5cm）を多量に含む。焼土粒・炭化物を少量含む。
8　赤褐色土（2.5YR4/8）　（3号住居）焼土粒・焼土ブロック（1～2cm）を多量に含む。炭化物を含む。
9　明黄褐色土（10YR6/6）　（6号住居）ロームブロック（1～4cm程度）を多量に含む。ボロボロくずれやすい部分がある。



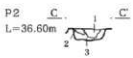
P1

1　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒と焼土粒を少量含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　ローム粒とロームブロック（径1～3cm）を多量に含む。



P3

1　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。
2　黄橙色土（10YR7/8）　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。



P2

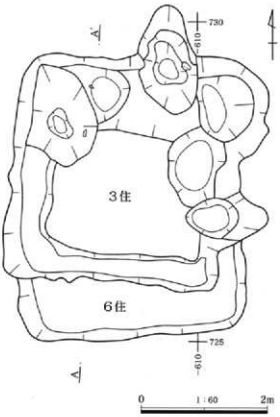
1　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒と焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土（10YR5/8）　ローム粒を多量に含む。ロームブロックを少量含む。
3　黄橙色土（10YR7/8）　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

P4

1　黒褐色土（10YR3/2）　焼土粒・ロームブロックを多量に含む。
2　黄褐色土（10YR5/8）　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

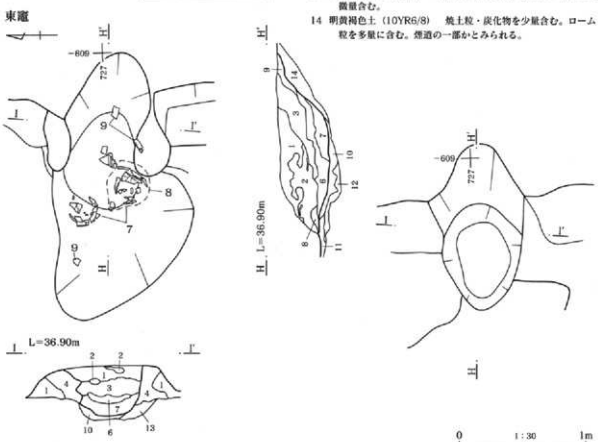
0　1:60　2m

第11図　3・6号住居平・断面図

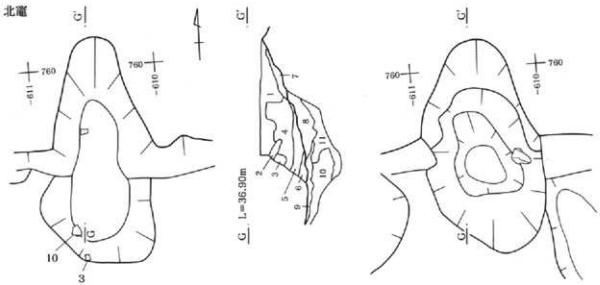


３号住居東竈

1　黒褐色土（10YR3/2）　焼土粒・黄橙色粘土粒を少量含む。住居埋土の一部とみられる。
2　黄橙色粘土（10YR8/6）　粘性があり、固くしまっている粘土の層。粘土中には砂粒が少量含まれている。
3　赤褐色土（2.5YR4/8）　焼土粒・焼土塊を多量に含む。黄橙色粘土粒及び炭化物を少量含む。
4　黄橙粘質土（10YR7/8）　全体に固くしまっている。黄橙色粘土を多量に含む。焼土粒を含む。4・5層で袖となるようである。
5　黄橙色粘土（10YR8/6）　2層に近いが2層よりやわらかい粘土。粘土中に焼土粒・炭化物が少量含まれる。
6　褐灰色土（10YR4/1）　やわらかくしまりなし。灰・炭化物を大量に含み、焼土粒も大量に含まれる。
7　赤褐色土（2.5YR4/8）　焼土粒・焼土塊を大量に含む。炭化物及び黄橙色粘土粒も少量含まれる。
8　黒褐色土（10YR2/3）　焼土粒・炭化物を多量に含む。黄橙色粘土粒を少量含む。しまりあり。
9　黄橙色土（10YR7/8）　ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む。
10　黄褐色土（10YR5/8）　焼土粒・焼土ブロック（5～15mm）を多量に含む。ややしまりあり。
11　黒褐色土（10YR3/2）　貼り床。ロームブロックを含む。
12　明黄褐色土（10YR6/8）　ロームブロック・ローム粒を含む。焼土・炭化物を微量含む。
13　暗褐色土（10YR3/4）　かたくしまりあり。焼土粒・粘土粒を微量含む。
14　明黄褐色土（10YR6/8）　焼土粒・炭化物を少量含む。ローム粒を多量に含む。煙道の一部かとみられる。

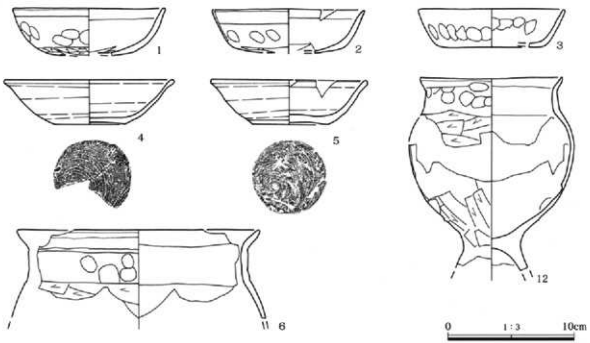


第12図　３・６号住居掘方・東竈平・断面図

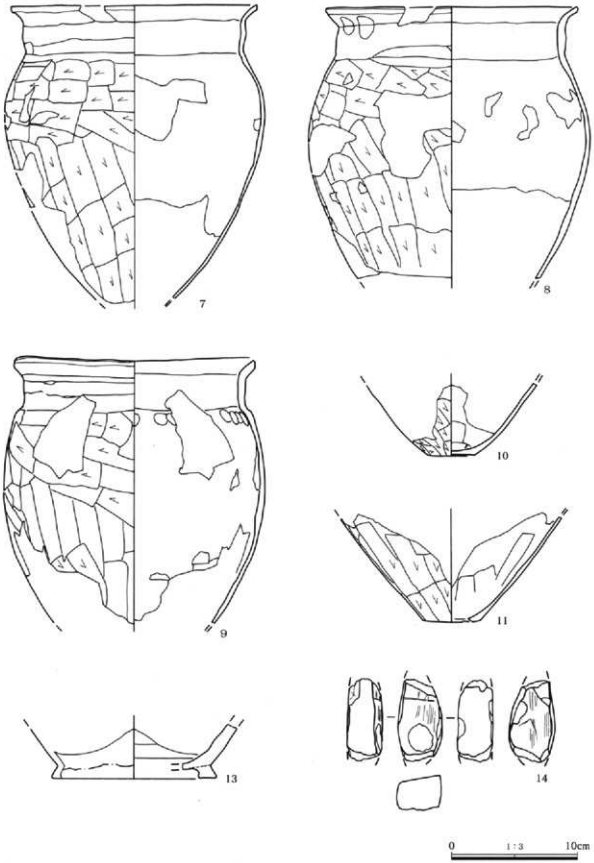


3号住居北竈

1　暗褐色土（10YR3/4）　若干の焼土粒・ローム粒を含む。
2　黒褐色土（10YR3/1）　若干の焼土粒を含む。
3　暗褐色土（10YR3/4）　1に同じ。
4　明黄褐色土（10YR6/6）　やや粘質で、焼土粒・ロームブロックを含む。天井部の崩落。
5　褐灰粘質土（10YR4/4）　焼土粒を含む。天井部の崩落。
6　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物を含む灰層。
7　黄橙色土（10YR7/8）　ローム主体に1層暗褐色土を混入。
8　赤褐色土（2.5YR4/6）　焼土粒を多量に含む。焼土ブロック（5～15mm）を少量含む。焼土ブロックはボロボロと崩れやすい部分もある。
9　黒褐色土（10YR2/2）　焼土粒・炭化物を少量含む。しまりあり。
10　黄褐色土（10YR5/8）　焼土粒・炭化物を少量含む。ロームブロックを含む。
11　黄橙色土（10YR7/8）　ロームブロック（10～30mm程度）とローム粒を多量に含む。焼土粒を少量含む。



第13図　3号住居西竈平・断面図、出土遺物



第14図　3号住居出土遺物

4号住居（第15・16図、第4表、PL.3・33）

1区西部南東隅にあり、南東隅のごく一部が調査区外となる。

位置　X＝29716～721、Y＝－42602～606

重複遺構　北半部に2号溝が重複する。A－A'セクションにみるように本住居が古い。この2号溝は浅いため、本住居の床面がごく一部破壊されただけで、住居の形などはよく残されている。

形態　南東隅が調査区外となり、その部分が歪むように見えるが、全体の形態は南北にやや長い方形である。

方位　N－90°－E

規模　3.04×3.78m

面積　10.30㎡

壁高　比較的深く、31cmある。

床面　掘方底面には住居中央を中心に土坑状の掘り込みが多い。これらを黒褐色土・黄褐色土で埋め戻して床面としている。床面には中央部と竈前面とに広く焼土が散っていた。

柱穴　確認できなかった。

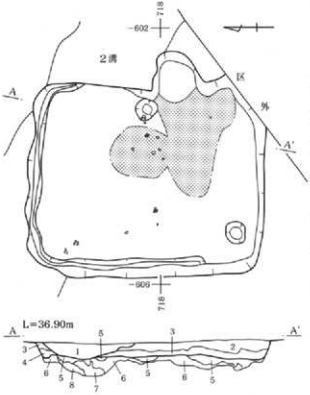
貯蔵穴　確認できなかった。掘方の調査で見つかった、南東隅の土坑は貯蔵穴の可能性があるが、確定できない。

周溝　北壁と西壁の大部分に周溝が巡っている。幅10～20cmで、深さ2～5cmである。

竈　東壁の中央やや南寄りにある。竈前面には広く焼土が散っている。北側を2号溝で破壊されるが、焚き口幅は65cm、全長は73cmである。

遺物　遺物は床面に小破片が散るような状態で出土したが数は少なく、報告できるものは土師器甕3点のみである。

所見　出土遺物が少ないので、時期を確定するのは困難であるが、甕の形態から9世紀後半ものであると思われる。



4号住居

1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　（2号溝）ローム粒を少量含む。やわらかい。

2　暗褐色土（10YR3/4）　若干のロームブロック（5cm大）を含む。ローム粒・焼土粒を含む。

3　暗褐色土（10YR3/4）　1層よりローム粒の混入が少ない。焼土粒を若干含む。

4　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒を含む。土はやわらかい。

5　黒褐色土（10YR3/1）　固くしまりあり。（特に南側）ロームブロック・焼土粒を含む。

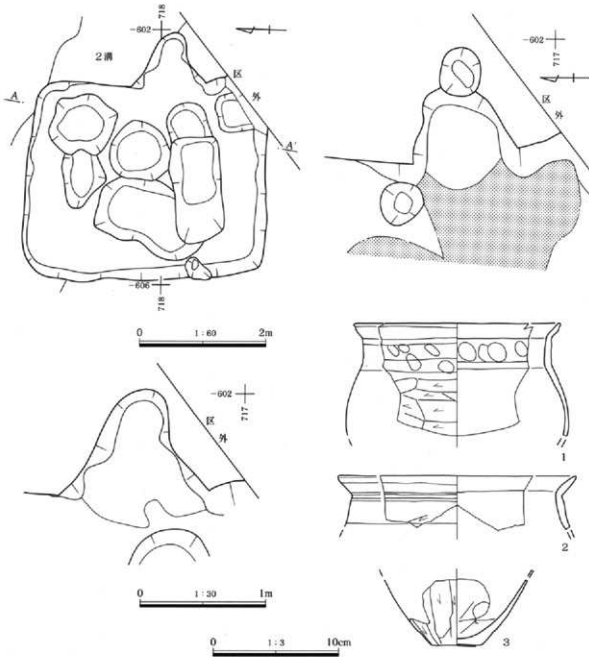
6　黄褐色土（10YR5/6）　固くしまりあり。粘性あり。ロームブロック（1～3cm大）を多量に含む。

7　黄褐色土（10YR5/4）　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（1～3cm大）を含む。4・5層よりやわらかく、崩れやすい。

8　黄橙色土（10YR7/8）　ロームブロックを多量に含む。ローム粒を含む。粘性あり。

0　1：60　2m

第15図　4号住居平・断面図



第16図　4号住居掘方・竈平面図、出土遺物

5号住居（第17・18図、第4表、PL.4・33）

1区西部中央やや東寄りにある。5号溝と重複し、中央部分を破壊されている。

位置　X＝29725～729、Y＝－42598～603

重複遺構　住居の北側から東側にかけて5号溝と大きく重複するほか、4号溝とも重複する。平面・断面観察から、両溝より本住居が古い。

形態　南北にやや長い方形である。

方位　N－90°－E

規模　3.48×3.68m

面積　(12.30) ㎡

壁高　23cm

床面　掘方底面は3カ所の土坑状の掘り込みを除いて平坦で、それを暗褐色土・黄褐色土で10～15cmほど埋め戻して床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。

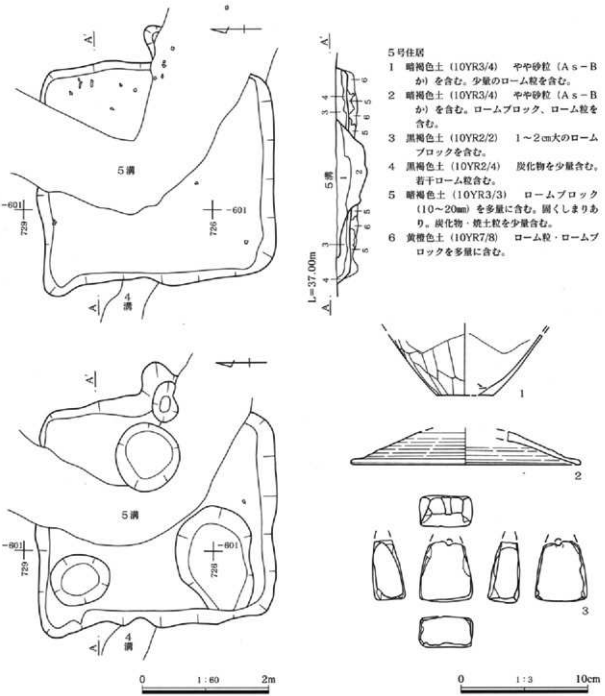
貯蔵穴　確認できなかったが5号溝に破壊されている可能性もある。

周溝　確認できなかった。

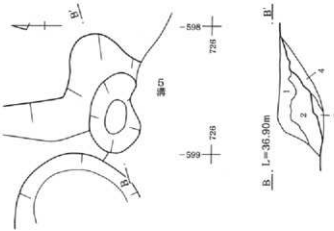
竈　東壁のほぼ中央にあるが、煙道の先端を除いて5号溝に破壊されている。そのため幅・長さ共に不明である。覆土には焼土が多く含まれているほか、1の土師器甕が出土した。

遺物　出土遺物は少なく、北東部を中心として土器の小破片がまばらに散布していた。報告できる個体は土師器甕の底部1点と須恵器蓋1点、砥石1点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、9世紀後半の住居であると思われる。



第17図　5号住居・掘方平・断面図、出土遺物



５号住居竈
1　暗褐色土（10YR3/3）　焼土粒・ローム粒を少量含む。焼土ブロック・炭化物を少量含む。
2　赤褐色土（2.5YR4/8）　焼土粒・ローム粒多量に含む。ロームブロックを少量含む。
3　黄橙色土（10YR7/8）　焼土粒・ローム粒を多量に含む。ロームブロックを含む。土師器甕片出土。
4　黄褐色土（10YR5/8）　ローム粒・焼土粒を少量含む。ロームブロックを微量含む。

0　1:30　1m

第18図　５号住居竈平・断面図

７号住居（第19図、ＰＬ.４）

１区西部南端やや西寄りにあり、南側の大部分が調査区外となるほか、中央部に大きく攪乱（竹の根）が入るため、調査できたのは北壁近くのごく一部である。

位置　Ｘ＝29716～718、Ｙ＝－42623～627

重複遺構　なし。

形態　ほとんどが調査区外となるため不明である。

方位　Ｎ－85°－Ｅ

規模　3.36×（0.61）m

面積　（2.25）㎡

壁高　28㎝

床面　調査した範囲では地山のロームを直接床面としている。

柱穴　確認できなかった。

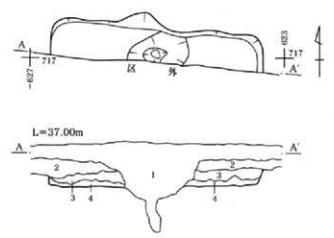
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　調査した範囲内では確認できなかった。

遺物　出土遺物は非常に少なく、土師器・須恵器の小破片がわずかに出土しているにすぎない。

所見　ごく小面積しか調査できなかったため詳細は不明であるが、時期は古代に収まるものである。



７号住居
1　耕作土。竹の根が多く入る。全体に砂質で柔らかく崩れやすい部分と固くしまっている部分がある。
2　全体に砂質である。ややしまっているが、竹の根が多く入り込む。ローム粒を少量含む。炭化物粒を微量含む。
3　黒褐色土（10YR2/3）　やや砂質の黒色土に、ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。ややしまりあり。
4　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・焼土粒・炭化物を少量含む。３層よりしまりあり。ロームブロックを微量含む。

0　1:60　2m

第19図　７号住居平・断面図

８号住居（第20・21図、第４表、ＰＬ.５・33）
１区西部の北側にある。

位置　Ｘ＝29736～740、Ｙ＝－42596～600

重複遺構　東壁から東南隅にかけて５号溝・６号溝と重複するほか、南壁近くに10号土坑が重複する。いずれも本住居が古い。

形態　東西に長い長方形である。

方位　Ｎ－89°－Ｅ

規模　(3.60)　×2.80ｍ

面積　(11.20)　㎡

壁高　22cm

床面　掘方底面はほぼ平坦で、それを浅く埋め戻して床面をつくっている。

柱穴　確認できなかった。

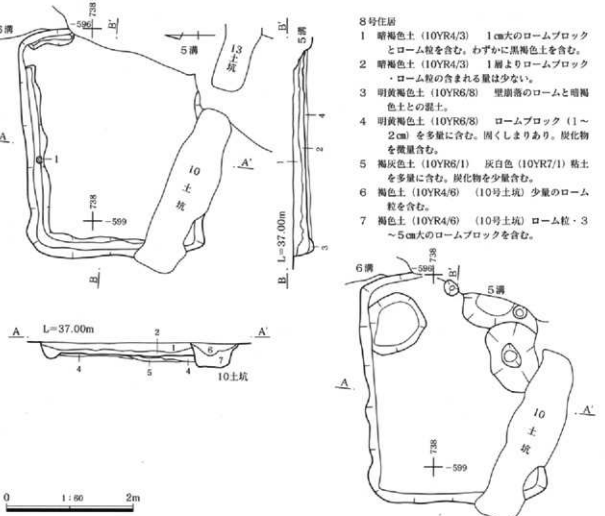
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　調査できた範囲内では、北東隅のごく一部を除いて全周している。幅15～20cm、深さ５～８cmで明瞭な周溝である。

竈　調査範囲内では確認できなかった。５号溝で破壊された東壁に存在した可能性が高い。

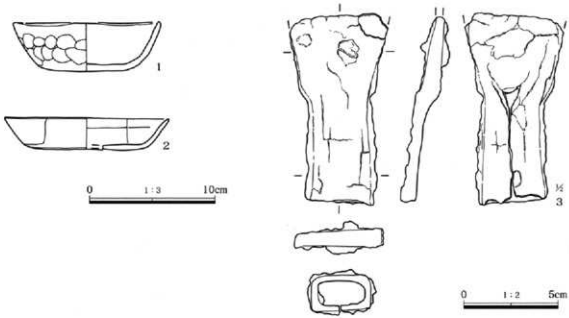
遺物　出土遺物は少なく、報告できるのは土師器坏・須恵器坏各１点と鉄斧１点のみである。３の鉄斧は刃先の一部を欠くがほぼ完形品である。

所見　出土遺物が少ないので、時期を特定することは難しいが、９世紀後半のものであると思われる。



８号住居
1　暗褐色土（10YR4/3）　１cm大のロームブロックとローム粒を含む。わずかに黒褐色土を含む。
2　暗褐色土（10YR4/3）　１層よりロームブロック・ローム粒の含まれる量は少ない。
3　明黄褐色土（10YR6/8）　壁崩落のロームと暗褐色土との混土。
4　明黄褐色土（10YR6/8）　ロームブロック（１～２cm）を多量に含む。固くしまりあり。炭化物を微量含む。
5　褐灰色土（10YR6/1）　灰白色（10YR7/1）粘土を多量に含む。炭化物を少量含む。
6　褐色土（10YR4/6）　（10号土坑）少量のローム粒を含む。
7　褐色土（10YR4/6）　（10号土坑）ローム粒・３～５cm大のロームブロックを含む。

第20図　８号住居・掘方平・断面図



第21図　８号住居出土遺物

９号住居（第22～24図、第４表、ＰＬ.５・６・33）

１区西部の北側にある。土坑と攪乱に一部を破壊されている。

位置　Ｘ＝29739～744、Ｙ＝－42597～42601

重複遺構　南西隅付近に９号土坑が重複する。平面確認から、本住居の方が古いことが確認できた。

形態　南北にやや長い方形である。

方位　Ｎ－90°－Ｅ

規模　3.33×3.64m

面積　(11.56) ㎡

壁高　比較的高く、最も高いところでは30㎝ある。

床面　掘方底面は住居の北側が一段深くなっているほか、南側は竈の前を中心として土坑状の掘り込みが複数ある。それらをロームブロック・ローム粒を多く含むにぶい黄褐色土で埋め戻し、床面を作っている。床面はおおむね平坦であるが、東壁際と竈の南西付近がやや低くなっている。

柱穴　確認できなかった。

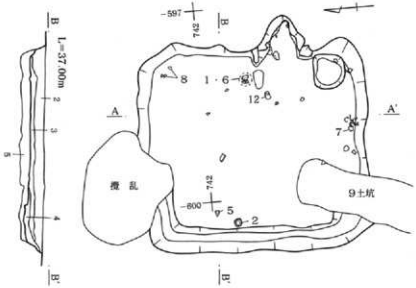
貯蔵穴　竈右側の住居南東隅にある。長さ55㎝、幅49㎝のやや不整な方形である。深さは最大で12㎝なので、やや浅い貯蔵穴である。

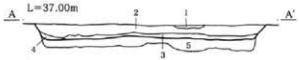
周溝　西辺にみられる。幅20㎝、深さ１～５㎝で、やや幅の広い周溝である。西辺以外には確認できなかったが、西辺でも１㎝前後の浅い部分が多いので、他の辺では不明瞭になってしまった可能性も考えられる。

竈　東壁中央南寄りにある。右袖は残りが悪かったが、左袖の一部が残っていた。左袖の側からは芯材として用いられていたと思われる石が出土している。焚き口幅70㎝、長さ72㎝である。覆土には焼土・炭化物を多く含み、よく使用されていたらしい。

遺物　遺物は住居全体に散る形で出土している。そのうち報告できるものは比較的多く、土師器坏１点、須恵器坏５点、同皿２点、土師器甕２点などである。その他墨書土器１点と羽口１点が出土している。墨書土器は摩滅しているらしく、判読不能である。

所見　出土遺物から本住居の時期は９世紀後半であると思われる。





9号住居

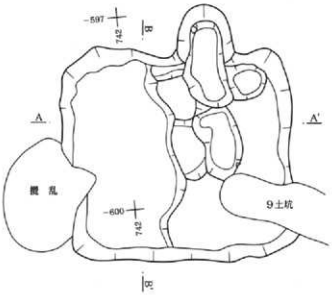
1　褐色土（10YR4/4）　耕作土。ローム粒、ビニールを含む。撹乱。

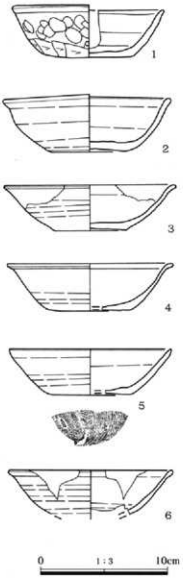
2　暗褐色土（10YR3/4）　少量の焼土粒・ローム粒を含む。

3　暗褐色土（10YR3/4）　2層より焼土粒を多く含む。少量のローム粒を含む。

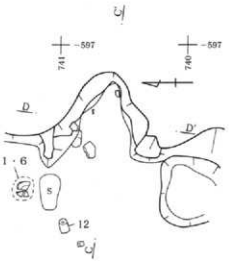
4　暗褐色土（10YR3/4）　3cm大のロームブロックを含む。

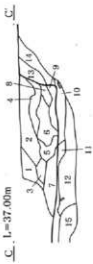
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロック（1～5cm）と黒色土（10YR2/1）との混土。ローム粒を多量に含む。かまど西側では黒色土がやや多く含まれる部分がある。

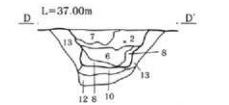


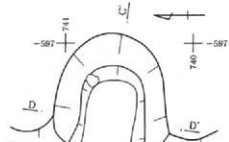


第22図　9号住居・掘方平・断面図、出土遺物









9号住居竈

1　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・焼土粒・ロームブロックを少量含む。住居埋土の一部。

2　黄褐色土（10YR5/6）粘性あり。粘土ブロック・ロームブロック・焼土ブロックを含む。天井部の崩落か。

3　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒・焼土粒を少量含む。

4　黄褐色土（10YR5/6）　焼土粒・黄橙（10YR7/8）粘土粒を少量含む。

5　褐灰色土（10YR6/1）　粘性のある褐灰色粘土が多量に含まれ、焼土粒が少量含まれる。

6　褐灰色土（10YR6/1）　褐灰粘土。かたくしまり粘性の強い褐灰色粘土ブロックである。部分的に焼土が少量含まれる。竈袖・天井部が崩落したもの。

7　黄褐色土（10YR5/6）　焼土ブロック・焼土粒・粘土粒を少量含む。

8　にぶい黄橙色土（10YR7/4）　やわらかくしまりなし。粘土粒がサラサラした感じで含まれる。焼土ブロック（10～15mm）を少量含む。

9　灰黄褐色土（10YR5/2）　やわらかくしまりなし。粘土粒を多量に含む。焼土粒・焼土ブロックを少量含む。

10　暗褐色土（10YR3/4）　焼土粒・炭化物を多量に含む。粘土粒（にぶい黄橙10YR6/3）を多量に含む。やわらかい。

11　灰黄褐色土（10YR4/2）　焼土粒・炭化物粒・粘土粒（にぶい黄橙10YR6/3）を多量に含む。

12　明黄褐色土（10YR6/6）　焼土粒・炭化物粒・ロームブロックを多量に含む。

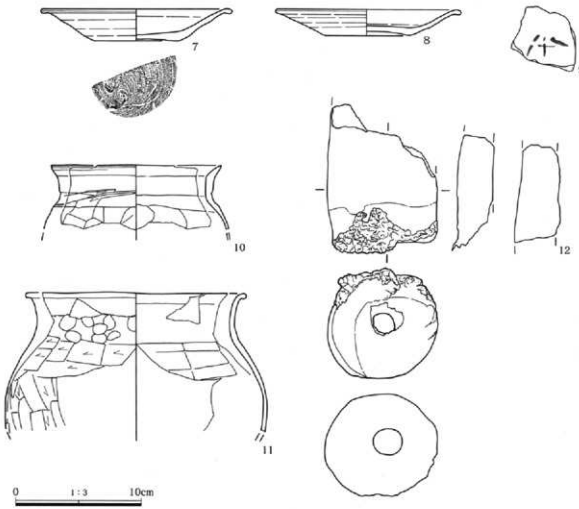
13　明赤褐色土（2.5YR5/8）　焼土ブロック（1～3cm）を多量に含む。粘土粒（にぶい黄橙6/3）を含む。

14　明黄褐色土（10YR6/8）　焼土粒・粘土粒・ローム粒を含む。（煙道の一部とみられる）しまり少ない。

15　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロック（1～5cm）と黒色土（10YR2/1）との混土。ローム粒を多量に含む。

0　1:30　1m

第23図　9号住居竈平・断面図



第24図　９号住居出土遺物

10号住居（第25図、第４表、ＰＬ.６・33）

２区北端近くの中央にある。２区は遺構上面が削平されている上、攪乱が多くみられ、遺構の残りは全体によくない。本住居は床面が削平されていたため、掘方のみを調査した。

位置　X＝29734～739、Y＝－42461～466

重複遺構　重複遺構はないが攪乱が多く、破壊されている部分が大きい。

形態　正方形に近い方形である。

方位　N－45°－W

規模　3.18×3.10m

面積　(9.61) ㎡

壁高　削平されている。

床面　削平のためなくなっている。掘方底面は緩やかな凹凸が見られ、それを埋め戻して床面を作っていたらしい。

柱穴　確認できなかった。

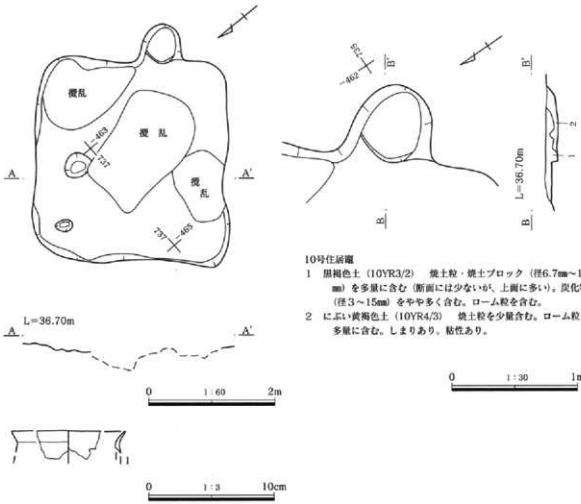
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　南東壁の中央やや南寄りにある。上面が削平されているので、袖などは全く残っていない。確認面で計測して焚き口幅80cm、長さ57cmである。

遺物　出土数が少なく、報告できる遺物は土師器甕の小破片１点のみである。

所見　出土遺物がほとんどないので詳細な時期は確定できない。図示した甕は９世紀後半のものと思われるが、ごく小さな破片であり、これのみで時期を断定するのは控えたい。



10号住居竈
1　黒褐色土（10YR3/2）　焼土粒・焼土ブロック（径6.7mm～10mm）を多量に含む（断面には少ないが、上面に多い）。炭化物（径３～15mm）をやや多く含む。ローム粒を含む。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　焼土粒を少量含む。ローム粒を多量に含む。しまりあり。粘性あり。

第25図　10号住居・竈平・断面図、出土遺物

11号住居（第26図、第４表、ＰＬ.６・33）

２区の東側にある。床面まで削平されていたため、掘方のみを調査した。

位置　X＝29731～736、Y＝－42458～463

重複遺構　重複する遺構はないが、攪乱が２カ所に掘られていた。

形態　南西隅が歪んでいるが、南北にやや長い方形である。

方位　N－69°－W

規模　3.26×3.46m

面積　11.40㎡

壁高　削平のため残っていない。

床面　削平のため残っていない。掘方底面は緩やかな凹凸があり、それを埋め戻して床面を作っていたらしい。

柱穴　確認できなかった。南西隅近くに２基のやや深いピットがあるが、位置から考えて柱穴とは思えない。

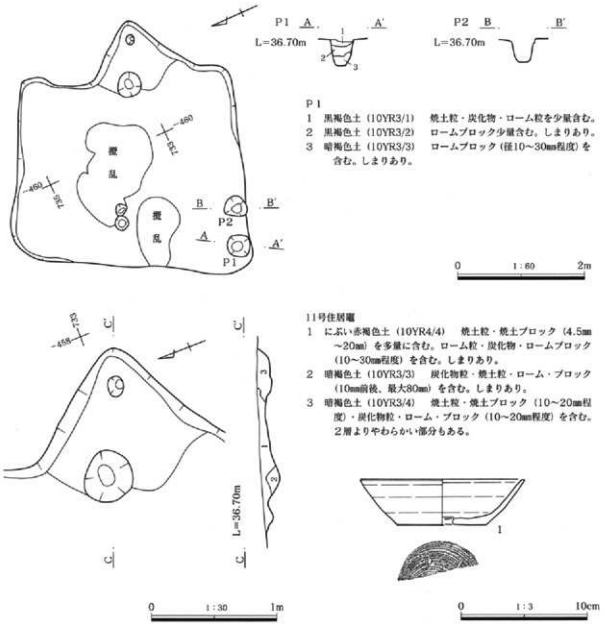
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁中央にある。現状では焚き口が広がる形状であり、確認面で計測して焚き口幅170cm、長さ85cmであるが、使用時の形状を反映したものではないと思われる。

遺物　報告できるのは須恵器坏１点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、住居の時期は９世紀後半であると思われる。



第26図　11号住居・竈平・断面図、出土遺物

12号住居（第27図、第４表、ＰＬ.７・34）

２区の北東隅付近にある。床面が削平されていたほか、多くの攪乱に破壊され、残りは非常に悪かった。

位置　Ｘ＝29734～738、Ｙ＝－42453～458

重複遺構　重複遺構はないが攪乱が多く、住居のかなりの部分が破壊されている。

形態　北壁がほとんど破壊されているが、南北方向にやや長い長方形だと思われる。

方位　Ｎ－63°－Ｗ

規模　3.40×3.87ｍ

面積　（12.27）㎡

壁高　削平のため残っていない。

床面　削平のため残っていない。掘方底面には竈前を中心として土坑状に掘られているところがあり、それらを埋め戻して床面を作っている。

柱穴　確認できなかった。

貯蔵穴　確認できなかった。住居南東隅にある小土

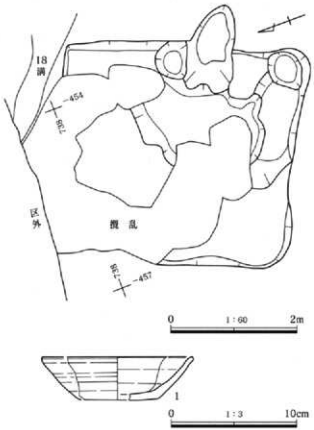
坑が貯蔵穴の可能性があるが、確定できない。この小土坑の大きさは掘方底面から計測して長さ69cm、幅52cm、深さは確認面から計測して15cmである。

周溝　確認できなかった。

竈　東壁中央やや南寄りにある。確認面で計測して、焚き口幅66cm、長さ65cmである。

遺物　出土遺物は少なく、報告できるのは須恵器坏1点のみである。

所見　出土遺物が少ないが、本住居の時期は9世紀後半と思われる。



12号住居竈

1　黒褐色土（10YR2/3）　焼土粒を部分的に多量に含む。焼土ブロック（径10mm前後）を少量含む。炭化物（2～8mm）をやや多く含む。

2　黒褐色土（10YR2/2）　焼土粒・炭化物粒を少量含む。ロームブロック（径20～30mm）を少量含む。

3　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　焼土粒・炭化物粒を少量含む。ローム粒を多量に含む。

第27図　12号住居・竈平・断面図、出土遺物

13号住居（第28・29図、第4表、PL.7・34）

3区中央北寄りにある。上面が削平されて壁がほとんど残っていなかった。

位置　X＝29729～734、Y＝－42575～581

重複遺構　東壁近くに11号溝が重複する。本住居が新しい。他には西側に攪乱が2カ所あり、西壁や南西隅の一部が破壊されている。

形態　東西にやや長く、さらに東壁に比べて西壁が短い台形である。

方位　N－90°－E

規模　4.40×3.93m

面積　(16.20) ㎡

壁高　最大で10cmあるが、削平されて低くなり、ほとんどないところもある。

床面　掘方底面は南半部と北側壁際が低く掘られ、土坑状に掘られているところもある（床下土坑1・2）。そこを黒褐色土・浅黄褐色土で埋め戻して床面を作っている。黒褐色土の上面が床面であり、部分的に固く締まっている。

柱穴　確認できなかった。南壁にそって2基のピッ

トが見つかっているが、それが柱穴かどうかは断定できない。東側のもの（P１）には柱痕がある。

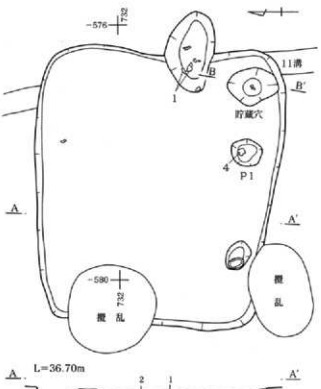
貯蔵穴　南東隅にある。長さ69cm、幅53cmの不整な楕円形で、深さは26cmである。

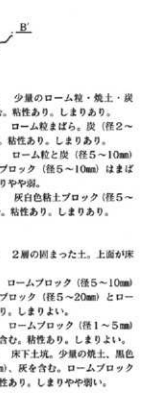
周溝　確認できなかった。

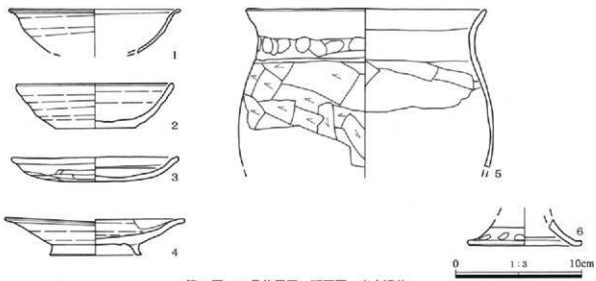
竈　東壁やや南寄りにある。上面が削平され、現状では浅い土坑状になっている。幅105cm、長さ150cmである。

遺物　出土遺物は多くないが、報告できる個体は須恵器坏・同高台付皿、土師器甕などがある。

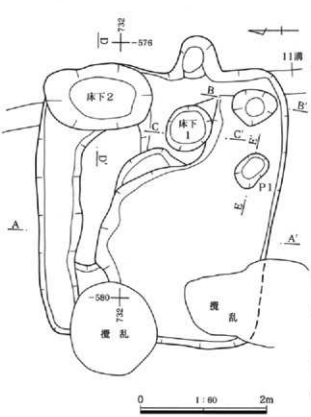
所見　出土した遺物から、本住居の時期は９世紀後半だと思われる。

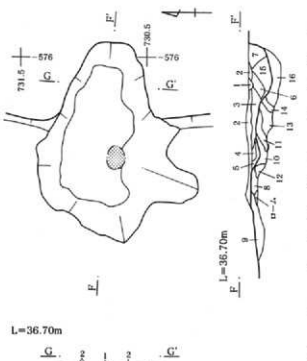




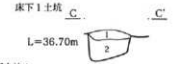


第28図　13号住居平・断面図、出土遺物





床下1土坑

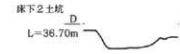


床下土坑1

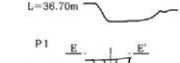
1　黒褐色土（10YR3/1）　焼土（径2～5mm）・ローム粒少量、炭化物（径2～3mm）含む。粘性あり。しまりやや弱い。

2　黒褐色土（10YR3/1）　焼土（径2～5mm）・炭・黒色土ブロック（径2cm）を少量、ロームブロック（径1～2cm）・炭化物（径2mm）を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。

床下2土坑



P1



P1

1　黒褐色土（10YR3/1）　少量のローム粒、微量の炭（径5mm）を含む。粘性あり。しまりあり。

2　黒褐色土（10YR3/1）　少量のローム粒とロームブロック（径5～10mm）、微量の焼土（径2～3mm）と灰を含む。粘性あり。しまりあり。

13号住居竈

1　にぶい橙色土（5YR6/4）　焼土粒（径1～2mm）を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。

2　灰白色土（7.5YR8/1）　灰白色粘土ブロック（径5～10mm）を多量に含む。粘性・しまりあり。

3　褐灰色土（7.5YR4/1）　灰・炭化物（径1～2mm）・焼土粒を微量含む。ローム粒（径1～2mm）は少量含む。粘性・しまりあり。

4　黒褐色土（7.5YR3/1）　焼土粒（径1mm）を微量含む。粘性しまりあり。

5　暗青灰色土（5PB3/1）　灰が多い。粘性ややあり。しまりやや弱。

6　黒褐色土（10YR3/1）　灰（径2～3mm）を微量含む。粘性あり。しまりあり。

7　灰黄色土（10YR4/2）　焼土（径1～4mm）・炭（径1cm）・ローム粒を微量含む。灰白色粘土を少量含む。粘性・しまりあり。

8　黒褐色土（10YR3/1）　焼土（径2～3mm）・炭（径2～3mm）・ローム粒・灰を少量含む。粘性・しまりあり。

9　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒・焼土（径2mm）・灰白粒を微量含む。粘性・しまりあり。

10　褐灰色土（10YR4/1）　灰が多い。焼土（径2mm）を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。

11　灰黄色土（10YR5/2）　ローム粒・灰白粘土・炭（径1mm）・ロームブロック（径5mm）を少量含む。粘性・しまりあり。

12　黒褐色土（10YR3/2）　多量のローム・ブロック（径2～5mm）と少量の焼土ブロック（径2～5mm）を含む。粘性・しまりあり。

13　褐灰色土（10YR4/1）　微量の焼土粒・焼土ブロック（径3～5mm）・粘土ブロック（径1cm）・灰ブロック（径5～10mm）を含む。粘性あり。しまりやや弱い。

14　黄橙色土（10YR8/6）　ローム粒多い。粘性・しまりあり。

15　褐灰色土（10YR4/1）　焼土ブロック（径3mm）と灰を少量含む。ロームブロック（径5mm）をまばらに含む。粘性・しまりあり。

16　褐灰色土（10YR4/1）　焼土ブロック（径5～10mm）・灰白粒・ロームブロック（径5mm）を少量含む。粘性あり。しまり弱い。

第29図　13号住居掘方・竈平・断面図

14号住居（第30図、第４表、ＰＬ.７・34）

３区の北西部にある。攪乱に大きく壊され、ごく一部しか残っていない。床面も削平されており、掘方のみ調査を行った。

位置　X＝29733～737、Y＝－42582～587

重複遺構　重複する遺構はないが、攪乱で大きく破壊されている。

形態　北壁とその周辺しか残っておらず、形態は不明である。

方位　N－0°

規模　(1.74)　×3.90m

面積　(3.17)　㎡

壁高　削平のため残っていない。

床面　削平のため残っていない。掘方底面はほぼ平坦で、それらを最大で22cm以上埋め戻して床面としている。

柱穴　竈の南側に２基のピットがあり、そのうち南側は掘方底面から計測しても55cmの深さがあり、柱穴の可能性もあるが断定できない。

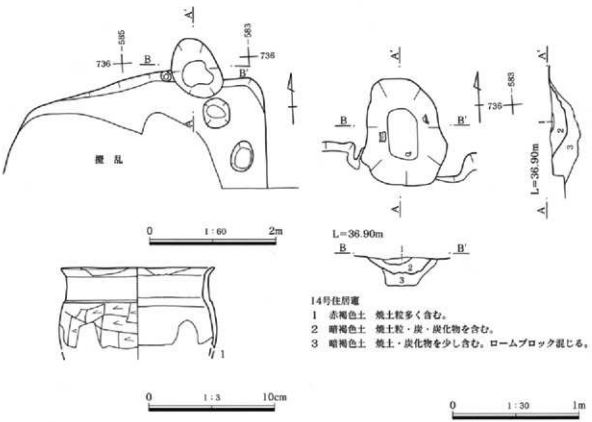
貯蔵穴　確認できなかった。

周溝　確認できなかった。

竈　北壁の東寄りにある。両袖の痕跡がわずかに残っている。焚き口幅60cm、長さ83cmである。覆土には焼土を多く含むので、よく使用されたものらしい。

遺物　遺物は少なく、報告できるのは土師器甕１点のみであり、これは竈の覆土内から出土した。

所見　一部分しか残っていないため、詳細は不明である。本住居の時期は唯一出土した甕から、９世紀後半であると思われる。



第30図　14号住居・竈平・断面図、出土遺物

第３節　掘立柱建物

１号掘立柱建物（第31図、ＰＬ.８・９）

１区東部にある２間×２間の側柱の建物である。

位置　Ｘ＝29736～743、Ｙ＝－42566～572

重複遺構　柱穴と直接重複する遺構はないが、中央部に15号土坑がある。この土坑からは近現代の遺物が出土しており、掘立柱建物に伴うものではない。

形態　南北に長い長方形であるが、各柱筋に歪みが見られ、直角に交わらない。各辺の長さも不揃いで、特に東辺が長い。

方位　Ｎ－９°－Ｗ

規模　各辺の長さは、隅柱穴の心心距離で計測して以下の通りである。

北辺（Ｐ１～Ｐ３）　3.62m
東辺（Ｐ３～Ｐ５）　5.73m
南辺（Ｐ５～Ｐ７）　3.58m
西辺（Ｐ７～Ｐ１）　5.15m

柱穴　いずれも不整円形で、大きさは比較的小さい。それぞれの規模は下記の通りである。柱痕が残る柱穴もある。

Ｐ１　径40×45㎝　深さ31㎝
Ｐ２　径34×39㎝　深さ24㎝
Ｐ３　径39×51㎝　深さ36㎝
Ｐ４　径53×55㎝　深さ28㎝
Ｐ５　径48×54㎝　深さ27㎝
Ｐ６　径50×60㎝　深さ40㎝
Ｐ７　径28×42㎝　深さ35㎝
Ｐ８　径40×46㎝　深さ29㎝

出土遺物　各柱穴からは遺物は全く出土しなかった。

所見　２間×２間の側柱の建物である。出土遺物がないので時期は確定できない。

２号掘立柱建物（第32図、ＰＬ.９）

３区の東部にある側柱の建物である。柱間が変則的であり、３辺は２間だが、東辺のみ３間となっている。

位置　Ｘ＝29725～733、Ｙ＝－42569～576

重複遺構　北東隅のＰ３が10号溝と、東辺のＰ５が16号溝と、西辺のＰ９が36号土坑と重複する。本遺構は溝よりも古いことは確実であるが、36号土坑とはわずかな面積の重複であり、しかも土坑からは遺物が出土していないので、新旧関係を把握することはできなかった。

形態　南北にやや長い長方形である。

方位　Ｎ－３°－Ｗ

規模　各辺の長さは隅柱穴の柱痕の心心距離で計測して以下の通りである。

北辺（Ｐ１～３）　5.28m
東辺（Ｐ３～６）　5.57m
南辺（Ｐ６～８）　5.31m
西辺（Ｐ８～１）　5.78m

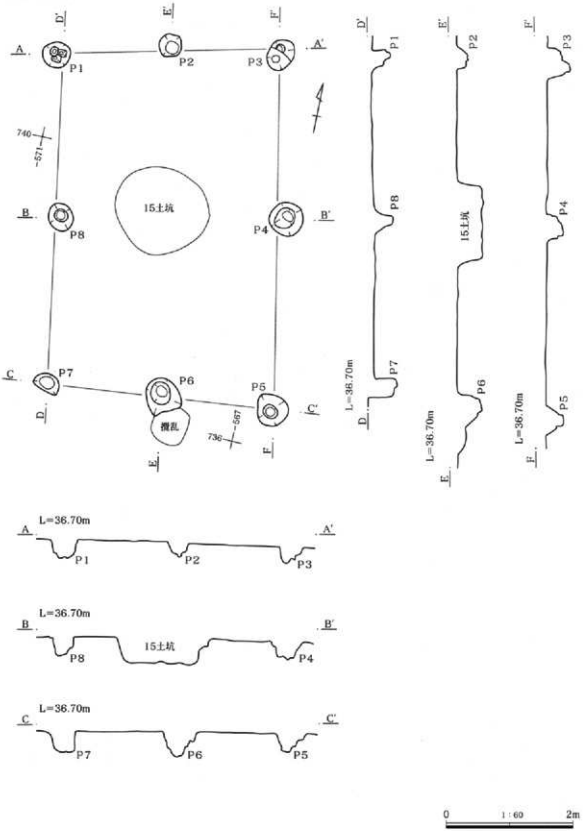
柱穴　平面形状が方形で、攪乱で破壊されているＰ２以外は柱痕が明確である。隅の柱穴が柱筋に対してやや傾くようになっているのが特徴である。各柱穴の規模は下記の通り。

Ｐ１　径70×110㎝　深さ62㎝
Ｐ２　径81×－㎝　深さ44㎝
Ｐ３　径－×118㎝　深さ44㎝
Ｐ４　径79×108㎝　深さ48㎝
Ｐ５　径59×99㎝　深さ51㎝
Ｐ６　径78×116㎝　深さ52㎝
Ｐ７　径76×120㎝　深さ58㎝
Ｐ８　径74×122㎝　深さ56㎝
Ｐ９　径100×127㎝　深さ60㎝

出土遺物　各柱穴から土師器・須恵器の破片が少なからず出土しているが、いずれも小破片であり、図示できるものはない。

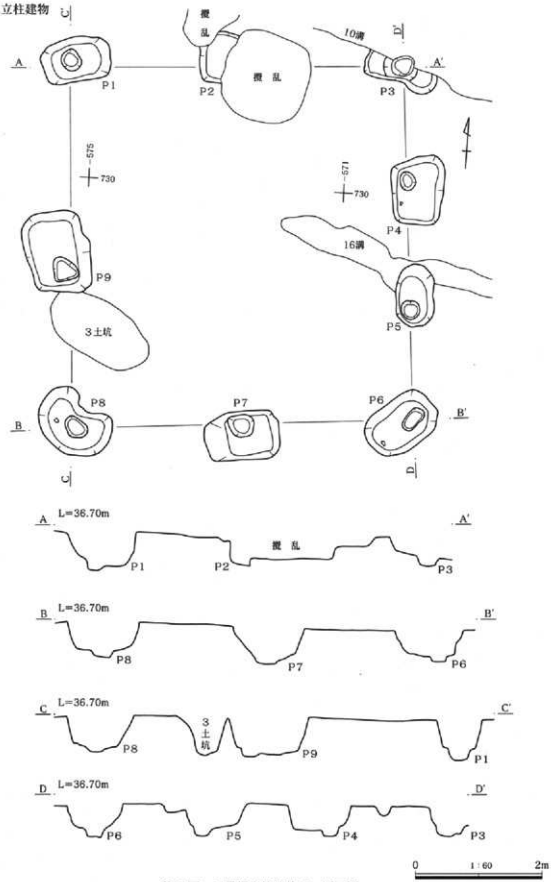
所見　梁間２間、桁行２・３間の変則的な柱間の建物である。出土遺物は小破片ばかりであるが、８世紀後半から９世紀後半のものが多いので、この建物もその前後の時期と思われる。

１号掘立柱建物



第31図　１号掘立柱建物平・断面図

２号掘立柱建物



第32図　２号掘立柱建物平・断面図

3号掘立柱建物（第33図、ＰＬ．10）

３区の東部にあり、１間×２間の側柱建物である。

位置　X＝29730～734、Y＝－42562～568

重複遺構　南側に10号溝、48号土坑が重複する。10号溝よりも本建物の方が古いことは、平面観察の結果確実であるが、48号土坑と柱穴とは直接重複していない。48号土坑からは近世の陶磁器や瓦が出土するので、本建物の方が古い可能性が高い。

形態　やや歪むが、東西方向に長い長方形である。

方位　N－85°－E

規模　各辺の長さは隅柱穴の心心距離で計測して以下の通りである。

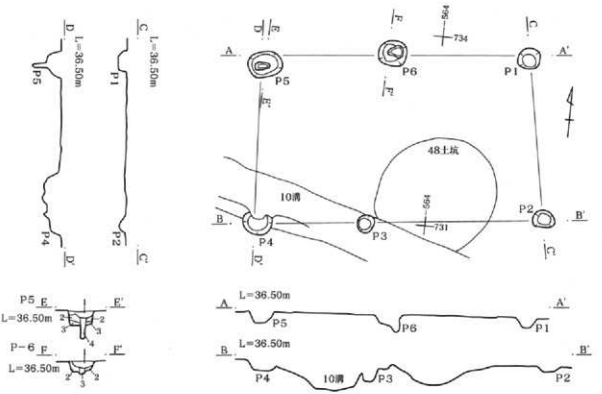
東辺（Ｐ１～Ｐ２）　2.52m
南辺（Ｐ２～Ｐ４）　4.54m
西辺（Ｐ４～Ｐ５）　2.47m
北辺（Ｐ５～Ｐ１）　4.22m

柱穴　やや不整な円形で、いずれも浅い。柱痕が明瞭なものもある。各柱穴の規模は下記の通り。

Ｐ１　径33×38cm　深さ14cm
Ｐ２　径28×36cm　深さ11cm
Ｐ３　径25×28cm　深さ22cm
Ｐ４　径－×46cm　深さ20cm
Ｐ５　径40×54cm　深さ44cm
Ｐ６　径46×40cm　深さ27cm

出土遺物　遺物は全く出土しなかった。

所見　遺物が出土しなかったので時期は不明だが、１号掘立建物と類似しており、同時存在の可能性も考えられる。



3号掘立柱建物Ｐ５・Ｐ６
1　黒褐色土　白色軽石を含む。しまりなし。
2　暗褐色土　白色軽石を少し含む。ややしまっている。ロームブロック含む。
3　暗褐色土　白色軽石をわずかに含む。ロームブロック多く含む。
4　黒褐色土　（柱痕か）白色軽石を少し含む。しまりなし。

0　1:60　2m

第33図　3号掘立柱建物平・断面図

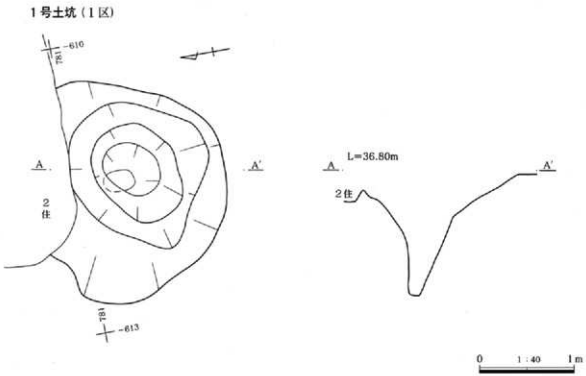
第４節　土坑

土坑は１～６区の全域で総計84基を調査した。これらの調査区のうち６区では、近現代の攪乱がきわめて多くあり、それらが調査時に厳密に区別できなかったため、土坑として調査したものが後に近現代のものであったと判明した場合が少なからず生じることとなった。それらは本書では攪乱と扱うことにしたが、以下の報告において、特に50号以降の土坑に欠番が多く存在するのはそうした理由による。６区の土坑は小さなものが多くピットと呼ぶべきものであるが、混乱を避けるため特に言い換えなかった。

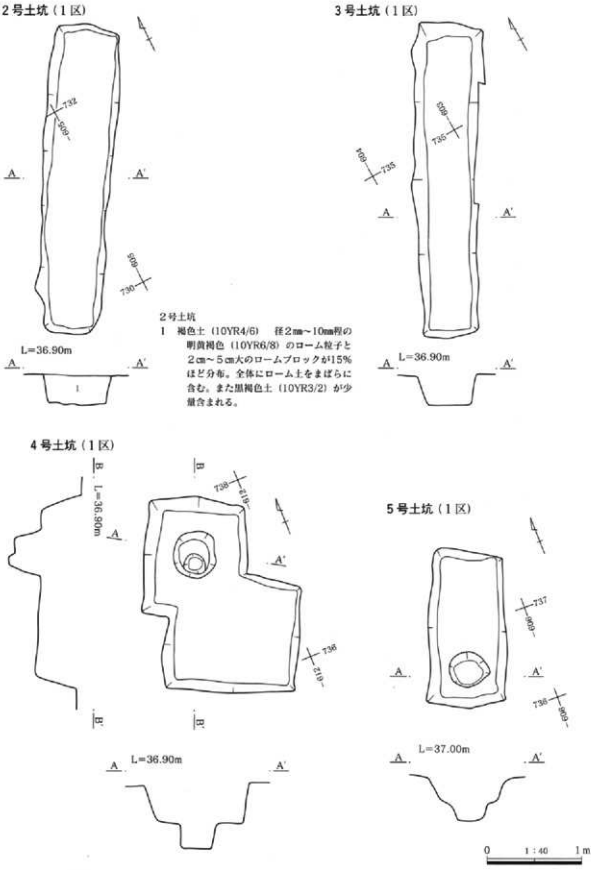
土坑はいずれも出土遺物が少なく、時期・性格とも不明なものばかりである。そのためここではいくつかの特徴について述べ、各土坑については、平面図・断面図・写真をあげるにとどめた。計測値などのデータは第２表にあげたとおりである。

遺構と認定した土坑は調査対象地全域に分布するが、その配置で目を引くのは、１区西部北半と、２区西部であろう。両者とも長方形の土坑がある一定の方向に沿って並んでおり、何らかの区画を反映した配置だと推定される。詳細な時期は確定できないが、１区の土坑には焼塔片が出土したものが多いので、ここの土坑の多くは近世以降のものと思われる。３区の土坑からは土師器の小破片がわずかに出土しているのみであるが、土坑の形態から１区のものとごく近い時期が考えられる。おそらく、近世以降の区画に沿ってこれらの土坑が掘られたと考えて大過ないのではなかろうか。

１区には４・５・６・20号など、柱痕と思われる凹みが底面にある土坑が存在する。平面形は、５号を除いて正方形に近い整った形状であり、掘立柱建物の柱穴かと思われたが、直線上に並ぶものが存在しないため、それぞれ単独で掘られたものと思われ、性格不明である。６号からは焼塔片が出土しているので、これらも近世以降のものであろう。



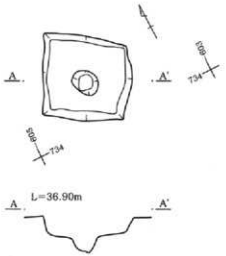
第34図　１号土坑平・断面図



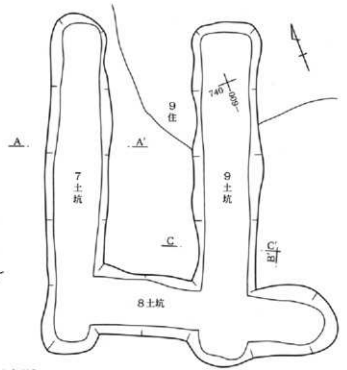
2号土坑
1　褐色土（10YR4/6）　径2mm～10mm程の明黄褐色（10YR6/8）のローム粒子と2cm～5cm大のロームブロックが15%ほど分布。全体にローム土をまばらに含む。また黒褐色土（10YR3/2）が少量含まれる。

第35図　2号～5号土坑平・断面図

６号土坑（１区）



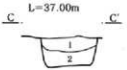
７号・８号・９号土坑（１区）



８号土坑

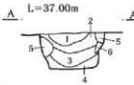
８号土坑
1　褐色土（10YR4/6）　径５mm～10mm大の明黄褐色ローム土（10YR8/6）が多量にまざる、また黒色の炭化物がわずかにまざる。
2　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロック（径３cm～５cm）をわずかに含む。

９号土坑



９号土坑
1　褐色土（10YR4/6）　径５mm～10mm大の明黄褐色ローム土（10YR8/6）が多量にまざる、また黒色の炭化物がわずかにまざる。
2　暗褐色土（10YR3/3）　１層に含まれるものと同色のロームブロック（径３～５cm）が少量含まれる。

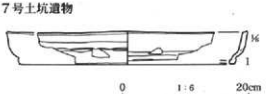
７号土坑



７号土坑
1　褐色土（10YR4/6）　径１mm～10mm程度の明黄褐色（10YR8/6）のローム粒子が多数まざる。
2　褐色土（10YR4/6）　径１mm～５mm程度の明黄褐色（10YR8/6）のローム粒子及び、３cm～５cm大のロームブロックが少量まざる。
3　暗褐色土（10YR3/3）　３～５cm大の明黄褐色（10YR8/6）のロームブロックがわずかに含まれる、また、１mm～10mm程度のローム粒子が少量含まれる。
4　暗褐色土（10YR3/3）　径1mm程度の明黄褐色（10YR8/6）のローム粒子が少量まざる。
5　黄褐色ローム土（10YR5/6）　地山の崩落の土と考えられる。
6　黄褐色ローム土（10YR5/6）　５層と同じ。やや３層がまざる。

0　1：40　1m

７号土坑遺物

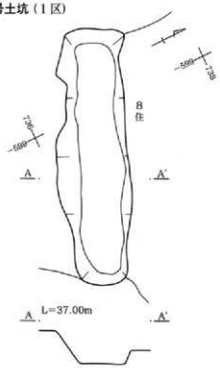


0　1：6　20cm

0　1：3　10cm

第36図　６号～９号土坑平・断面図、出土遺物

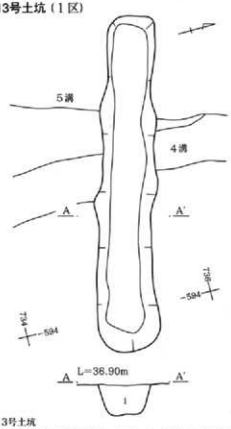
10号土坑（1区）



12号土坑（1区）

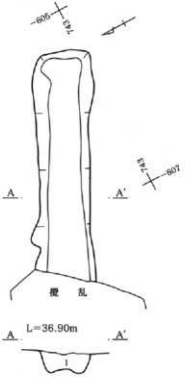
12号土坑
1　褐灰土（10YR4/1）　明黄褐色ローム粒子（10YR8/6）がわずかにまざる。
2　灰黄褐土（10YR4/2）　明黄褐色ローム粒子及びローム ブロック（10YR8/6）が少量まざる、また黒褐色（10YR3/1）土のブロック（3㎝大）がわずかにまざる。

13号土坑（1区）



13号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　径1～5㎜程度の明黄褐色（10YR8/6）ローム粒子及び、1㎝～3㎝大のローム ブロックが少量まざる。

14号土坑（1区）

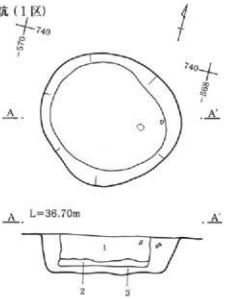


14号土坑
1　暗褐色土　1～2㎝大のローム ブロック、ローム粒を含む。

0　1：40　1m

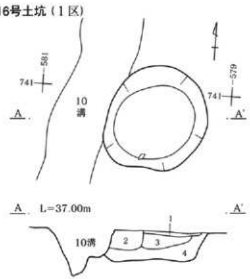
第37図　10号・12号～14号土坑平・断面図

15号土坑（１区）



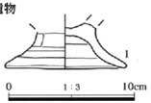
15号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒、１～２cm大の灰白色粘質土ブロック（10YR7/1）と１cm大の黒褐色粘質土ブロック（10YR2/3）を含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒を１より多く含む。灰白色粘質土ブロック５cm大、黒褐色（10YR7/1）、粘質土（10YR2/3）ブロック１cm大を含む。
3　黒褐色土（10YR2/3）　黒褐色粘質土主体に灰白色粘質土１～３cm大をブロック状に含む。ロームブロック１～２cm大を少量含む。（底面と壁面に粘質土を貼付けている）

16号土坑（１区）

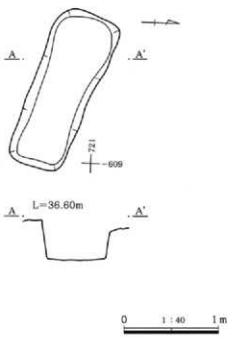


16号土坑
1　暗褐色土（10YR3/3）　少量のローム粒、焼土粒を含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　１cm大のロームブロック、ローム粒を含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色土とローム粒、１～２cm大のロームブロックの混土。
4　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色土主体にロームブロック３cm大と焼土粒を含む。

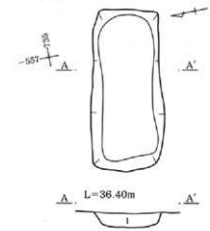
16号土坑遺物



17号土坑（１区）



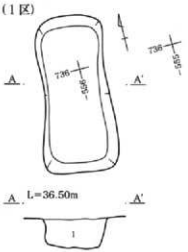
18号土坑（１区）



18号土坑
1　黒褐色粘質土（10YR2/3）　ローム粒子（２～10mm）及び、ロームブロック（3cm大）を少量含む。しまりがよい。

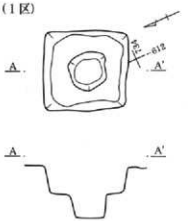
第38図　15号～18号土坑平・断面図、出土遺物

19号土坑（1区）

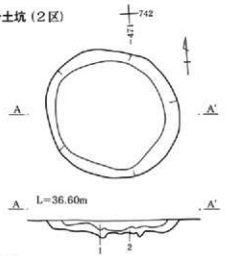


19号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子、及び2～5㎝大のローム ブロックを多く含む。

20号土坑（1区）

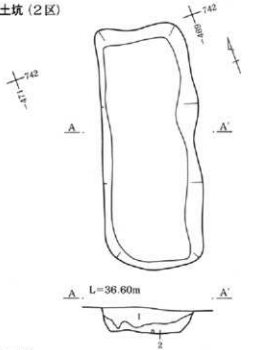


21号土坑（2区）



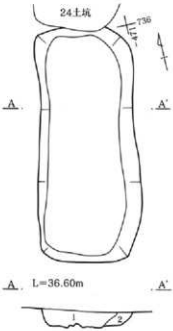
21号土坑
1　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒、赤色粒を含む。
2　黒褐色土（10YR3/1）　2～3㎝大のロームブロック粒を含む。

22号土坑（2区）



22号土坑
1　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を含む。層の中間に2～3㎜の砂粒を含む。
2　明黄褐色土（10YR6/6）　地山ロームを主体とする。黒褐色土（1層）を含む。

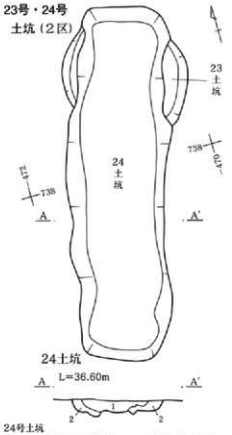
25号土坑（2区）



25号土坑
1　黒褐色土（10YR3/2）　1㎝大のロームブロック少量とローム粒を含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　暗褐色土主体に黒褐色土ブロック、ロームブロックの混土。

0　1：40　1m

第39図　19号～22号・25号土坑平・断面図

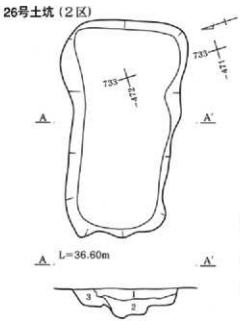


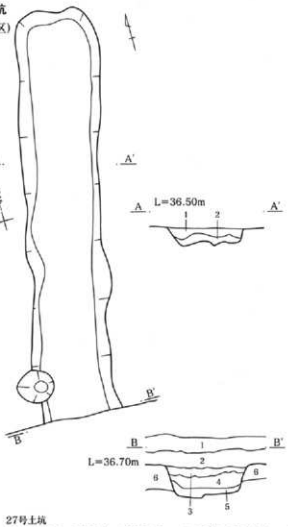
24号土坑

1　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒、３cm大のロームブロックを含む。

2　暗褐色土（10YR3/3）　１層よりローム粒を多く、ロームブロック（５～10cm大）を含む。

3　明黄褐色土（10YR6/6）　ローム主体に少量の暗褐色土を混入する。





27号土坑

1　現耕作土　黒褐色土（10YR3/2）。　やや砂質で固くしまっている。炭化物粒子を少量含む。

2　暗褐色土（10YR3/3）　旧耕作土か。やや砂質で固くしまっている。炭化物（径７～10mm）と土器片を少量含む。

3　暗褐色土（10YR3/3）　やや砂質でローム粒・炭化物を少量含む。しまりはない。

4　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒・炭化物を含む。３層よりしまりあり。

5　灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム粒・ロームブロック（10～40mm前後）を大量に含む。しまりあり。粘土質である。

6　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。

26号土坑

1　黒褐色土（10YR3/2）　少量のローム粒と３cm大のロームブロックを含む。

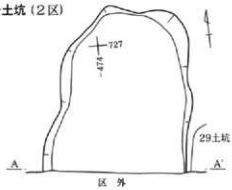
2　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色土主体に、５～10cm大のロームブロックを含む。

3　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒、２～３cm大のロームブロックを含む。粘性がある。

0　1:40　1m

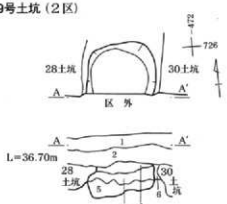
第40図　23号・24号・26号・27号土坑平・断面図

28号土坑（2区）



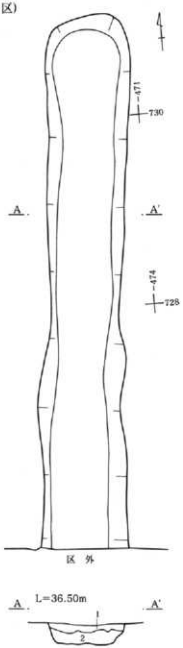
28号土坑
1　現耕作土　黒褐色土（10YR3/2）。やや砂質で固くしまっている。炭化物粒子を少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　旧耕作土か。やや砂質で固くしまっている。炭化物（径7～10mm）と土器片を少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　やや砂質で炭化物を少量含む。ローム粒を少量含む。しまりは少ない。
4　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を少量含む。
5　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　ローム粒・ローム・ブロック（10～30mm前後）を多量に含む。しまりあり。
6　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。

29号土坑（2区）



29号土坑
1　現耕作土　黒褐色土（10YR3/2）。やや砂質で固くしまっている。炭化物粒子を少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　旧耕作土か。やや砂質で固くしまっている。炭化物（径7～10mm）と土器片を少量含む。
3　黒褐色土（10YR3/2）　やや砂質で、ローム粒を含む。しまりは少ない。
4　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒をやや多く含む。3層よりしまっている。

30号土坑（2区）

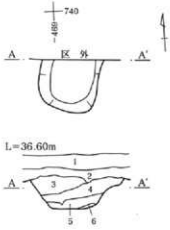


30号土坑
1　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒を少量含み、しまりは少ない。
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　ローム粒・ロームブロック（10～30mm前後）を多量に含む。しまりあり。
5　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　ローム粒・ロームブロック（10～30mm）を多量に含む。しまりあり。
6　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を少量含む。しまり・粘性あり。

0　1：40　1m

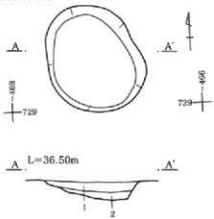
第41図　28号～30号土坑平・断面図

31号土坑（2区）



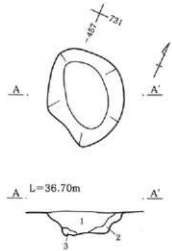
31号土坑
1　現耕作土　黒褐色土（10YR3/2）。やや砂質で固くしまっている。炭化物粒子を少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　旧耕作土か。やや砂質で固くしまっている。炭化物（径7～10mm）と土器片を少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒をやや多く含む。炭化物をごく少量含む。かたくしまっている。
4　暗褐色土（10YR2/3）　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（10～30mm）を少量含む。かたくしまっている。
5　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（7～10mm）と炭化物を少量含む。ややしまりあり。
6　明黄褐色土（10YR6/6）　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（10～20mm前後）を少量含む。しまりは少ない。

32号土坑（2区）



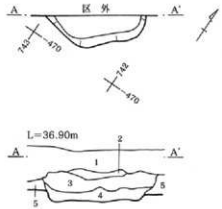
32号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　少量のロームブロックとローム粒を含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒を多量に含む。ほそぼそでしまりはない。

33号土坑（2区）



33号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　少量のロームブロックとローム粒を含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒を多量に含む。ほそぼそでしまりない。
3　明黄褐色土（10YR6/6）　ローム主体に黒褐色土をわずかに含む。しまりなく、やわらかい。

34号土坑（2区）

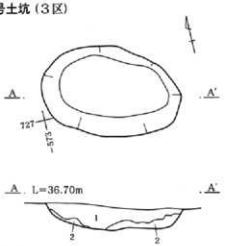


34号土坑
1　耕作土　黒褐色土（10YR3/2）。やや砂質で固くしまっている。炭化物粒子を少量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　やや砂質でローム粒・炭化物粒を少量含む。固くしまっている。
3　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒を含む。固くしまっている。
4　灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム粒を多量に含む。ロームブロック（径1～3cm前後）を少量含む。固くしまっている。
5　暗褐色土（10YR3/3）　耕作の影響を受けた表土層。やや砂質でとても固くしまっている。炭化物（7～10mm）を含む。

0　1:40　1m

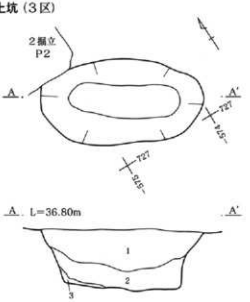
第42図　31号～34号土坑平・断面図

35号土坑（3区）



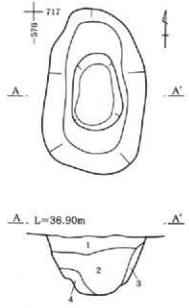
35号土坑
1　黒色土（10YR2/1）　白色粒（径1mm以下）を多量に含む。微量のローム粒を含む。粘性あり。しまりやや強。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒多い。ローム・ブロック（径5～10mm）と黒色土を少量含む。粘性・しまりあり。

36号土坑（3区）



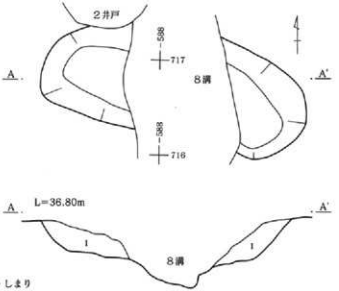
36号土坑
1　黒色土（10YR2/1）　白色粒（径1mm以下）・ローム粒を微量含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒多い。ローム・ブロック（径5～20mm）はまばら。粘性・しまりあり。
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒多い。黒色土を微量含む。粘性・しまりあり。

40号土坑（3区）



40号土坑
1　黒褐色土（10YR3/1）　白色粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土（10YR2/1）　白色粒を微量含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土（10YR3/1）　少量のローム粒と微量の白色粒を含む。粘性・しまりあり。
1黒色土（10YR2/1）　ロームブロック（径1～2cm）を少量含む。粘性・しまりあり。

41号土坑（3区）

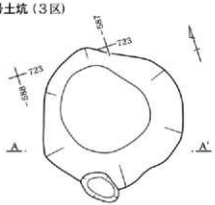


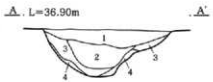
41号土坑
1　褐灰色土（10YR4/1）ローム粒（径5～10mm）・橙色粒（径1～2mm）・灰色粘質土を微量含む。灰色粘質土ブロック（径5～10mm）を多量に含む。白色粒（径1～2mm）少量含む。粘性やや強い。しまりやや強い。

0　1:40　1m

第43図　35号・36号・40号・41号土坑平・断面図

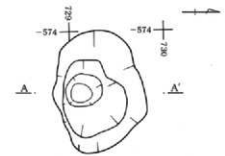
42号土坑（3区）



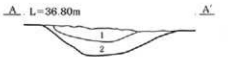


42号土坑
1　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を微量含む。粘性・しまりあり。
2　黒色土（10YR2/1）　少量のローム粒と微量のロームブロック（径2～5mm）を含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土（10YR3/2）　少量のローム粒と微量の黒色土ブロック（径1～2cm）を含む。粘性・しまりあり。
4　明黄色土（10YR7/6）　ローム粒をまばらに含む。ロームブロック（径5～20mm）を少量含む。粘性あり。しまりやや強い。

43号土坑（3区）

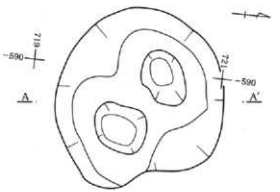


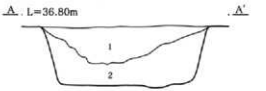
44号土坑（3区）



44号土坑
1　暗褐色土　白色軽石を少量含む。ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　白色軽石をわずかに含む。ロームブロックを含む。やや粘性をおびる。

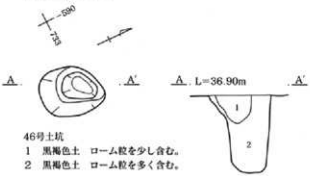
45号土坑（3区）





45号土坑
1　暗褐色土　白色軽石とローム粒を含む。しまりなし。
2　暗褐色土　白色軽石を少し含む。ロームブロックを多く含む。粘性あり。しまりあり。

46号土坑（3区）

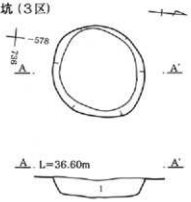


46号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を少し含む。
2　黒褐色土　ローム粒を多く含む。

0　1:40　1m

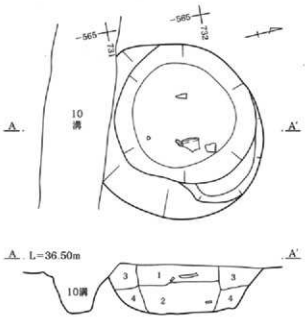
第44図　42号～46号土坑平・断面図

47号土坑（3区）



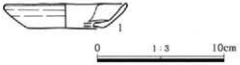
47号土坑
1　暗褐色土　白色軽石を含む。しまりなし。

48号土坑（3区）

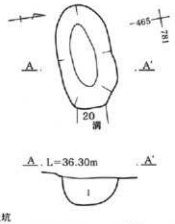


48号土坑
1　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性あり。
2　黒褐色土　ローム粒なし。粘性あり。
3　暗褐色粘質土　ロームブロック多く含む。非常に粘性あり。
4　暗褐色粘質土　ロームブロックを少し含む。非常に粘性あり。

48号土坑遺物

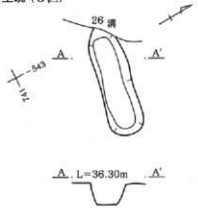


50号土坑（5区）

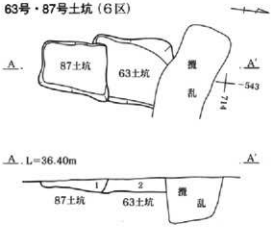


50号土坑
1　黒褐色土（10YR2/3）　ローム土粒・ロームブロックを含む。しまりあり。

62号土坑（6区）



63号・87号土坑（6区）



63号・87号土坑
1　黒褐色粘質土と黄色ロームとの混土
2　黒褐色土（2.5Y3/1）　黒褐色粘質土と黄色ロームとの混土

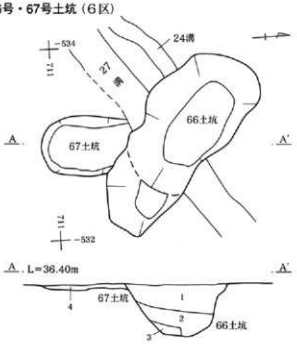
0　1 : 40　1 m

第45図　47号・48号・50号・62号・63号・87号土坑平・断面図、出土遺物

64号土坑（６区）

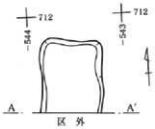
64号土坑
1　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）

66号・67号土坑（６区）



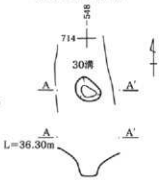
66号・67号土坑
1　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）と黄色ロームとの混土
2　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）
3　黄色ローム（2.5Y8/6）
4　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）

65号土坑（６区）

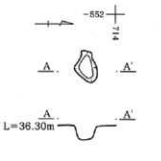


65号土坑
1　オリーブ黒色土（5Y3/1）　焼土・Ａｓ－Ｂ含む。
2　黒褐色粘質土と黄色ロームとの混土
3　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）

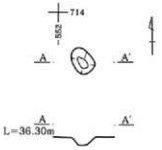
75号土坑（６区）



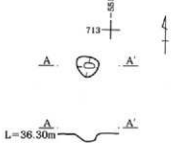
78号土坑（６区）



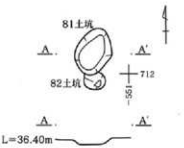
79号土坑（６区）



80号土坑（６区）



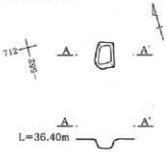
81号・82号土坑（６区）



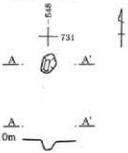
0　1:40　1m

第46図　64号～67号・75号・78号～81号土坑平・断面図

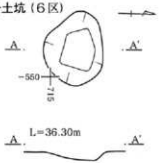
83号土坑（6区）



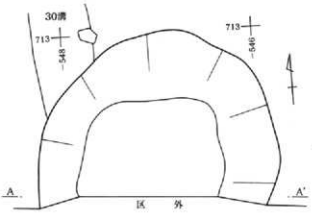
84号土坑（6区）



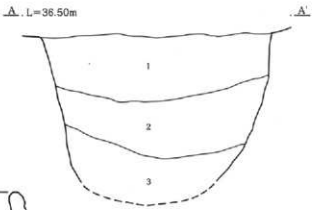
85号土坑（6区）



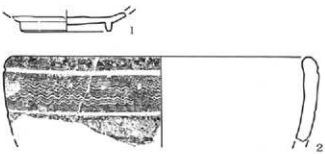
86号土坑（6区）



86号土坑
1　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）
2　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）　灰白色粘土（5Y7/1）ブロックを含む。
3　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）

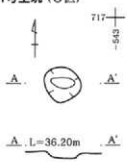


86号土坑遺物

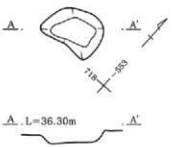


0　1：3　10cm

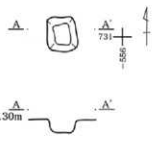
91号土坑（6区）



92号土坑（6区）

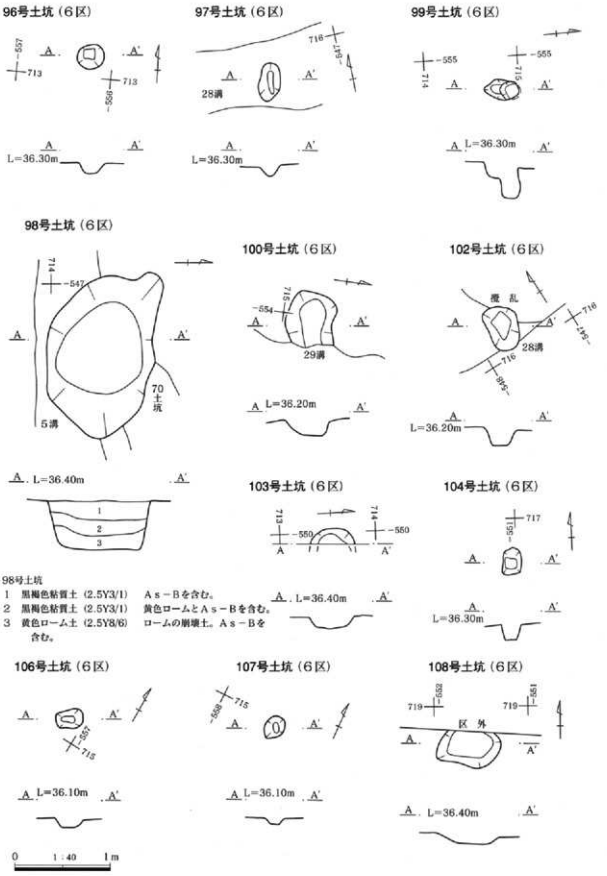


94号土坑（6区）



0　1：40　1m

第47図　83号～86号・91号・92号・94号土坑平・断面図、出土遺物

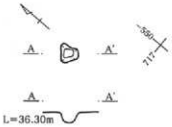


98号土坑

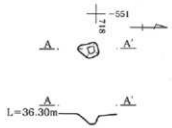
1	黒褐色粘質土（2.5Y3/1）	Ａｓ－Ｂを含む。
2	黒褐色粘質土（2.5Y3/1）	黄色ロームとＡｓ－Ｂを含む。
3	黄色ローム土（2.5Y8/6）含む。	ロームの崩壊土。Ａｓ－Ｂを

第48図　96号～100号・102号～104号・106号～108号土坑平・断面図

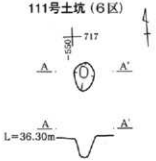
109号土坑（6区）



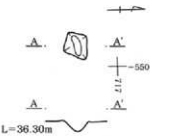
110号土坑（6区）



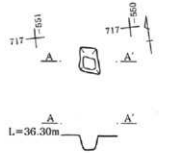
111号土坑（6区）



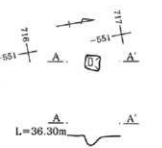
112号土坑（6区）



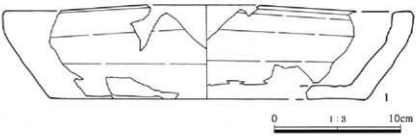
113号土坑（6区）



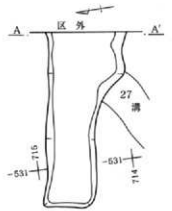
114号土坑（6区）

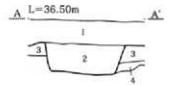


114号土坑遺物



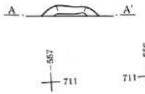
115号土坑（6区）

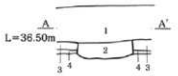




115号土坑
1　オリーブ黒色土（5Y3/1）　表土。焼土・As－Bを含む。
2　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）と黄色ローム（2.5Y8/6）との混土。
3　黒色粘質土（5Y2/1）　FAと少量のローム粒を含む。
4　浅黄色ローム（2.5Y7/4）

116号土坑（6区）





116号土坑
1　オリーブ黒色土（5Y3/1）　表土。焼土・As－Bを含む。
2　黒色粘質土（5Y2/1）　As－Bを含む。
3　黒褐色土（2.5Y3/1）
4　浅黄色ローム（2.5Y7/4）

0　1:40　1m

第49図　109号～116号土坑平・断面図、出土遺物

第2表　土坑一覧表

No.	区	位置	大きさ（m）			方位	備考
			長軸	短軸	深さ		
1	1区	716-610	2.28	(1.83)	(1.18)	N-72°-W	
2	1区	729-604	3.26	0.76	0.31	N-32°-E	
3	1区	733-602	3.34	0.74	0.32	N-35°-E	
4-1	1区	735-612	1.24	1.08	0.76	N-27°-E	
4-2	1区	735-611	1.44	1.24	0.42	N-57°-W	
5	1区	736-606	1.64	0.82	0.47	N-25°-E	
6	1区	743-603	0.94	0.90	0.36	N-62°-E	
7	1区	738-601	3.58	0.68	0.38	N-23°-E	焼塩出土
8	1区	737-599	(2.66)	0.74	0.36	N-62°-W	
9	1区	737-599	3.62	0.75	0.33	N-22°-E	
10	1区	735-597	2.70	0.76	0.27	N-65°-W	
11	欠番						
12	1区	741-595	1.06	0.62	0.20	N-88°-E	
13	1区	734-593	3.54	0.62	0.32	N-69°-W	
14	1区	743-605	(2.40)	0.64	0.21	N-65°-W	
15	1区	738-568	1.49	(1.37)	0.40	N-79°-E	
16	1区	740-579	1.16	1.06	0.32	N-10°-E	
17	1区	720-609	1.72	0.71	0.39	N-67°-E	
18	1区	743-556	1.70	0.78	0.15	N-80°-W	
19	1区	735-555	1.66	0.77	0.31	N-13°-E	
20	1区	734-611	0.90	0.84	0.54	N-27°-E	
21	2区	740-470	1.42	1.33	0.18	N-88°-W	
22	2区	739-469	2.54	1.04	0.26	N-16°-E	
23	2区	738-470	1.34	－	－	N-73°-W	
24	2区	736-470	3.71	1.10	0.18	N-16°-E	
25	2区	733-471	2.46	1.08	0.18	N-11°-E	
26	2区	731-471	2.30	1.32	0.31	N-20°-E	
27	2区	725-474	(4.30)	0.86	0.31	N-16°-E	
28	2区	725-473	(1.75)	1.50	0.32	N-12°-E	
29	2区	725-472	(0.55)	0.72	0.35	N- 6°-E	
30	2区	725-471	(5.62)	0.90	0.21	N- 5°-E	
31	2区	739-463	(0.56)	0.63	0.35	N-10°-E	
32	2区	729-466	1.18	0.96	0.19	N-16°-W	
33	2区	729-456	1.02	0.82	0.25	N-30°-W	
34	2区	742-469	0.20	0.13	0.13	N-67°-W	
35	3区	726-571	1.50	0.96	0.25	N-71°-W	
36	3区	727-574	1.73	0.90	0.65	N-55°-W	
37	欠番						
38	欠番						
39	欠番						
40	3区	715-574	1.77	1.04	0.62	N- 0°	
41	3区	716-596	2.84	(1.10)	0.44	N-78°-W	
42	3区	721-584	1.58	1.50	0.50	N-87°-W	
43	3区	728-572	1.28	0.99	0.31	N-90°-E	
44	3区	715-595	1.44	(0.44)	0.28	N-82°-W	
45	3区	719-588	1.96	1.83	0.64	N-76°-W	
46	3区	732-588	0.71	0.52	0.81	N-28°-E	
47	3区	736-577	0.98	0.94	0.20	N- 2°-E	
48	3区	730-562	1.84	(1.66)	0.52	N-25°-E	
49	欠番						
50	5区	716-463	1.10	0.58	0.28	N-88°-E	
51～61号土坑欠番							
62	6区	714-541	1.18	0.37	0.27	N-79°-W	
63	6区	712-542	0.87	0.71	0.14	N- 0°	
64	6区	712-543	1.09	0.58	0.09	N- 6°-E	
65	6区	710-543	(0.78)	0.64	0.20	N- 5°-E	
66	6区	711-532	2.18	0.98	0.54	N-48°-W	
67	6区	710-532	(0.98)	0.62	0.06	N- 2°-E	
68～74号土坑欠番							
75	6区	713-547	0.28	0.21	0.15	N-60°-W	
76	欠番						
77	欠番						
78	6区	713-551	0.34	0.23	0.15	N-75°-E	
79	6区	712-551	0.28	0.20	0.09	N-26°-W	
80	6区	712-551	0.24	0.22	0.08	N-80°-W	
81	6区	712-551	0.50	0.37	0.07	N-24°-E	
82	6区	711-551	0.24	0.20	-	N-65°-W	
83	6区	711-551	0.28	0.20	0.10	N-20°-E	
84	6区	712-547	0.22	0.14	0.10	N-20°-E	
85	6区	714-549	0.80	0.64	0.09	N-86°-W	
86	6区	711-545	2.56	(1.76)	1.76	N-82°-W	
87	6区	711-542	0.70	0.58	0.13	N- 0°	
88	欠番						
89	欠番						
90	欠番						
91	6区	716-543	0.40	0.36	0.07	N- 3°-E	
92	6区	718-553	0.67	0.52	0.10	N-49°-E	
93	欠番						
94	6区	713-554	0.37	0.31	0.14	N- 0°	
95	欠番						
96	6区	713-556	0.29	0.25	0.11	N-20°-E	
97	6区	715-547	0.41	0.23	0.11	N-20°-E	
98	6区	714-545	1.84	1.17	0.51	N-88°-W	
99	6区	714-554	0.36	0.21	0.34	N-10°-E	
100	6区	715-553	(0.60)	0.51	0.17	N-84°-E	
101	欠番						
102	6区	716-547	0.48	0.34	0.18	N-15°-E	
103	6区	713-549	0.48	(0.16)	0.11	N- 2°-W	
104	6区	716-550	0.29	0.19	0.17	N- 7°-E	
105	欠番						
106	6区	715-557	0.29	0.20	0.09	N-56°-E	
107	6区	714-557	0.27	0.20	0.07	N-13°-E	
108	6区	718-551	0.63	(0.38)	0.09	N-77°-W	
109	6区	717-550	0.22	0.18	0.11	N- 0°	
110	6区	717-550	0.22	0.15	0.10	N- 0°	
111	6区	716-549	0.30	0.21	0.22	N-12°-E	
112	6区	716-550	0.25	0.24	0.11	N-85°-W	
113	6区	716-550	0.26	0.20	0.15	N- 7°-E	
114	6区	716-550	0.16	0.14	0.09	N-23°-E	
115	6区	713-529	(1.84)	0.81	0.31	N-80°-W	
116	6区	711-556	0.59	(0.11)	(0.17)	N-95°-E	

第5節　溝

1号溝（第50図、PL.18）

1区の南西部にある南北方向の溝である。

位置　X＝29716～725、Y＝－42617～620

重複遺構　南半部に1号ピットが重複する。重複するのはわずかな部分であるが、断面図に見るように、1号ピットが新しい。

形態　北端部はトレンチや攪乱によって破壊されているが、それより北側は確認できないので、この付近で途切れているものと考えられる。南側は調査区外にのびている。断面は不整な逆台形である。

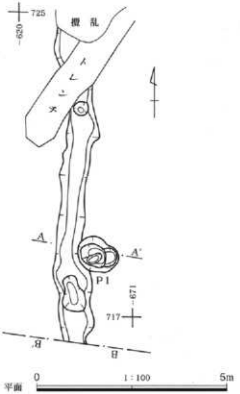
走向　中央部分はN－4°－Eであり、その南北では微妙に屈曲する部分もあるが、全体的にはほぼ直線的にのびている。

規模　全長は北端部から南の調査区境まで8mである。調査区内では幅60～90cm、深さ15cm程度であるが、調査区南東壁の断面（B－B'セクション）を見ると幅143cm、深さ37cmあるので、表土除去の際に上面を削平してしまったらしい。

埋土の状態　3層に分層することができる。流水のあった形跡はない。

遺物　出土遺物はない。

所見　調査できた長さが短く、詳細不明の溝である。走向方向が類似しているのは6号溝と11号溝の南半部であるが、関連は不明である。出土遺物がないため、時期は確定できない。



1号溝A－A'

1　暗褐色土（10YR3/3）（1号ピット）1～3cm大の明黄褐色（10YR7/6）のローム・ブロックと黒褐色（10YR3/2）のブロックが少量まざる。

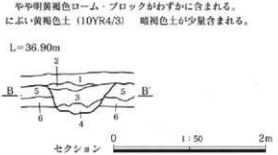
2　黒褐色土（10YR3/2）（1号ピット）明黄褐色（10YR7/6）のローム粒子及びローム・ブロックが少量まざる。

3　褐色土（10YR4/6）（1号ピット）明黄褐色（10YR7/6）のローム・ブロックとローム粒子が少量まざる。下方に5cm大の黒褐色（10YR3/2）土がブロックにまざる。2層よりやや明るい。

4　黒褐色土（10YR2/2）（1号ピット）

5　暗褐色土（10YR3/4）（1号ピット）黒褐色土が帯状に分布、やや明黄褐色ローム・ブロックがわずかに含まれる。

6　にぶい黄褐色土（10YR4/3）暗褐色土が少量含まれる。



セクション

1号溝　B－B'

1　耕作土　竹の根が多く入る。全体に砂質でやわらかく崩れやすい部分と、固くしまっている部分がある。

2　灰褐色土（10YR4/2）　かたくしまりあり、やや砂質でローム粒を微量含む。

3　褐色土層（10YR4/4）　ややしまりあり、ローム粒及びローム塊（直径1cm）を少量含む。

4　暗褐色土（10YR3/4）　しまりあり、やや粘質の部分が少しある。ローム粒を少量含む。

5　全体に砂質である。ややしまっているが竹の根が多く入る。ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。

6　ロームへの漸移層　ローム粒をやや多く含む。竹の根が入りしまりが弱い部分がある。

第50図　1号溝平・断面図

2号溝（第51・52図、第4表、ＰＬ.18・34）

１区西部の南にある東西方向の溝である。

位置　X＝29717～730、Y＝－42600～620

重複遺構　１・２・４・６号住居と重複する。１・２・４号住居とは、本溝の方が新しいことが平面・断面観察で確認できた。６号住居とは、重複部分に攪乱が入り新旧関係を直接確認できなかったが、出土遺物から本溝が新しい。

形態　住居や攪乱によって破壊されている部分もあるが、調査区を直線的に横断して、両端は調査区外へのびている。断面は浅い皿状である。

走向　N－59°－Wであり、ほぼ直線的にのびている。

規模　全長は調査区内で21ｍであり、さらに東西に延びている。幅は1.50～1.92ｍ、深さは15～20㎝である。

埋土の状態　しまりが弱くやわらかい土で埋まっている。流水のあった形跡はみられない。

遺物　墨書土器１点と焙烙の底部を再利用したと思われる土製円盤３点とが出土した。１の墨書土器は須恵器坏の底部で、３本の線が見え「三」か「川」と思われる。その他、焙烙・内耳鍋の破片や土師器・須恵器の破片が多数出土している。

所見　遺物から近世以降の溝である。この溝と類似した方向をとるものは、３・４・５･10溝などがあり、この地区の古くからの区画方向であると思われる。

3号溝（第51図、ＰＬ.18）

１区の南西部にある東西方向の溝で、２号溝の北側に並行する。

位置　X＝29721～726、Y＝－42602～610

重複遺構　西端部分に３・６号住居が重複する。本溝が新しい。

形態　西端部が住居と重複しているが、３・６号住居の土層断面（第11図）には現れないので、重複してすぐに途切れているらしい。東端も途切れているので、比較的短い溝である。断面は浅い皿状であるが、底面には凹凸がある。

走向　N－59°－W

規模　西端が不明なので全長を確定できないが、６号住居にかかる部分から東端までは7.5ｍである。幅は凹凸があり45～95㎝、深さは７～13㎝である。

埋土の状態　しまりが弱くやわらかい土で埋まっている。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器片が数点出土しているのみである。

所見　遺物が少ないので詳細な時期は確定できないが、走向が２号溝と同じであり、関連が深いと考えられる。

4号溝（第51図、ＰＬ.19）

１区西部の中央やや南寄りにある東西方向の溝である。

位置　X＝29726～732、Y＝－42602～613

重複遺構　東端に５号住居が重複する。本溝が新しい。５号溝との重複は明確ではないが、重複するとすれば本溝が古く、５号溝が新しい。

形態　調査した範囲ではわずかに北に湾曲するものの、ほぼ直線的にのびている。西端はトレンチによって破壊されている。それより西側には見られないので、ちょうどこの部分で途切れているらしい。東端は５号住居と重複し、さらにその東側には５号溝がある。本溝がそのあたりで途切れているか、あるいはさらに東にのびていたのかは明確にできなかった。断面は不整な皿状である。

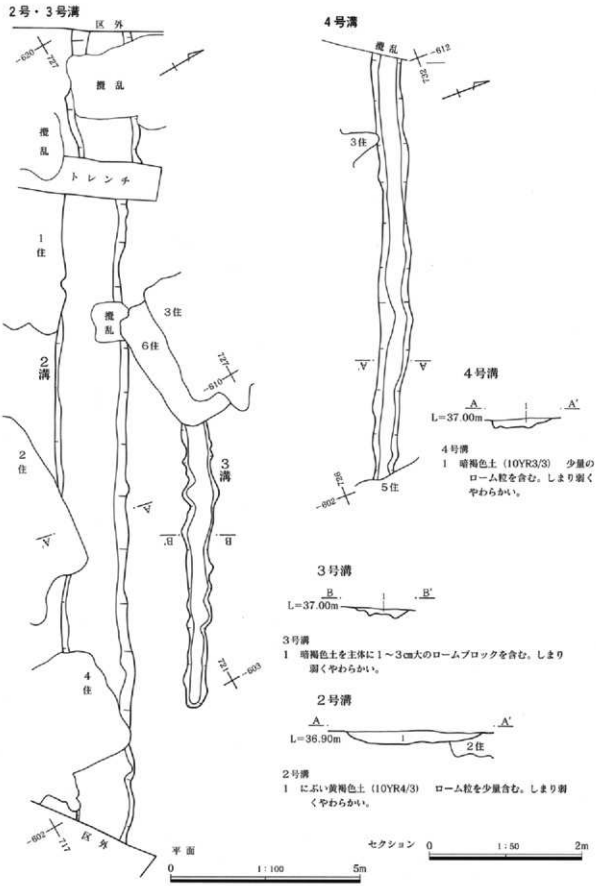
走向　N－65°－W

規模　調査できた長さは11.3ｍである。前述したように西端はほぼ確定できるが、東端ははっきりしない。幅は45～85㎝、深さは６～11㎝で浅い。

埋土の状態　しまりが弱くやわらかい土で埋まっている。流水のあった形跡はない。

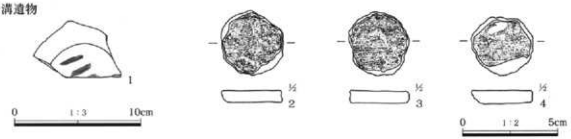
遺物　土師器・須恵器の破片が数点出土している。

所見　遺物が少ないので詳細な時期は確定できないが、２・３号溝と走向が近く、関連があるものと思われる。



第51図　2号～4号溝平・断面図

２号溝遺物



第52図　２号溝出土遺物

５号溝（付図２・第53・54図、第４表、ＰＬ.19・35）

１区西部の北東と３区南部にまたがっている。直角に曲がる溝である。

位置　Ｘ＝29713～747、Ｙ＝－42563～601

重複遺構　長い溝なので多くの遺構と重複する。５号・８号住居、６～９号・11号・12号・14号・17号溝、10号・13号・40号・42号土坑と重複している。本溝は住居とその他の溝より新しい。土坑は10・13号よりも古く、40・42号よりも新しい。13号溝は途中から北に分かれるが、本来は同一の溝であったと思われる。

形態　調査区北側から現れ、南に直線的にのびたのちほぼ直角に曲がって東へとのびる。南北方向の部分では１本の溝であるが、東西方向の部分では２本の溝が重なるような形態になる。断面を見ると北側の溝がより古いので、本来は北側の溝であったのが、南側に掘り直されたのであろう。13号溝としたものはこの北側の溝の延長にあるので、当初の５号溝は東端付近で屈曲し、北に大きく曲がっていたことになる。断面の形態は逆台形であるが、底面幅は北側の溝が狭くなる。

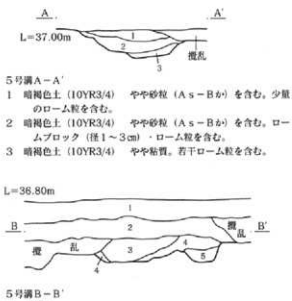
走向　南北方向の部分はＮ－25°－Ｅ、東西方向の部分はＮ－70°－Ｗである。

規模　北、東が調査区外へのびるので全長は不明であるが、調査できた長さは南北方向の部分で22m、東西方向の部分で40mである。南北方向では幅1.20～1.85m、深さ32～45cm、東西方向では幅1.45～2.40m、深さ38～53cmであり、北側の溝の方がやや浅い傾向がある。

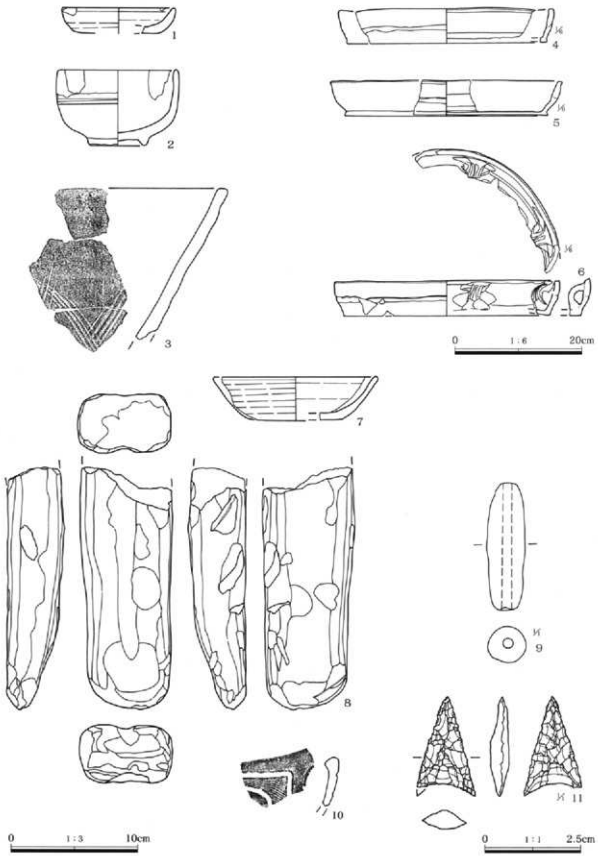
埋土の状態　暗褐色ないし褐灰色の土で埋まっている。流水のあった形跡はない。

遺物　近世までの各種の遺物が多数出土している。須恵器・縄文土器・石鏃は混入品である。

所見　遺物から近世以降の溝であるが、深くはっきりした溝であり、何らかの区画溝と思われる。走向が類似したものには２号・３号・４号・10号があり、これが古くからの区画方向であると思われる。特に10号溝とは直角に曲がる形態も似ているが、その時期は出土遺物から近現代と考えられるので、同時存在していた可能性は低い。



第53図　５号溝断面図



第54図　5号溝出土遺物

６号溝（付図２・第55図、ＰＬ.20）

１区西部の東側にある南北方向の溝である。南端部が一部３区にかかる。

位置　Ｘ＝29727～747、Ｙ＝－42594～597

重複遺構　８号住居、12号・13号土坑と重複する。本溝は住居より新しく、土坑より古い。

形態　北端部は調査区外となるが、そこからほぼ直線的に南にのび、５号溝の北1.5mのところで途切れる。断面は逆台形である。

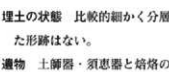
走向　Ｎ－３°－Ｗである。南端部分が多少屈曲する以外は、ほぼ直線的にのびている。

規模　調査できた長さは20mである。北端の調査区北壁で断面を見ると、幅59cm、深さ48cmである。

埋土の状態　比較的細かく分層できる。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器・須恵器と焙烙の小破片が少数出土している。

所見　遺物から近世以降の溝と思われるが、どのような目的をもった溝かは不明である。



６号溝
1　耕作土　竹の根が多く入る。全体に砂質でやわらかく崩れやすい部分と、固くしまっている部分がある。
2　全体に砂質である。ややしまっているが竹の根が多く入る。ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
3　黒褐色土（10YR3/2）　しまりあり、ローム粒、木炭粒をわずかに含む。
4　褐灰色土（10YR4/1）　やや砂質でしまりがない。ローム粒をわずかに含む。
5　褐灰色土（10YR5/1）　粘質。やや砂質の部分もみられる。
6　褐色土（10YR4/6）　ローム粒を含む、やや砂質な部分がみられる。
7　ロームへの漸移層　ローム粒をやや多く含む。竹の根が入りしまりが弱い部分がある。

第55図　６号溝断面図

７号溝（付図２・第56～62図、第４表、ＰＬ.20・21・35～37）

１区と３区の東端付近にある南北方向の溝である。中央付近で不自然に屈曲し、その部分の西側に15号溝が現れる。南半部から焙烙の破片が多数出土した。

位置　Ｘ＝29713～745、Ｙ＝－42557～571

重複遺構　調査区南端近くで５号・17号溝が重複するほか、中央の屈曲する部分で15号溝が重複する。本溝は５号溝よりも古く、15・17号溝よりも新しい。

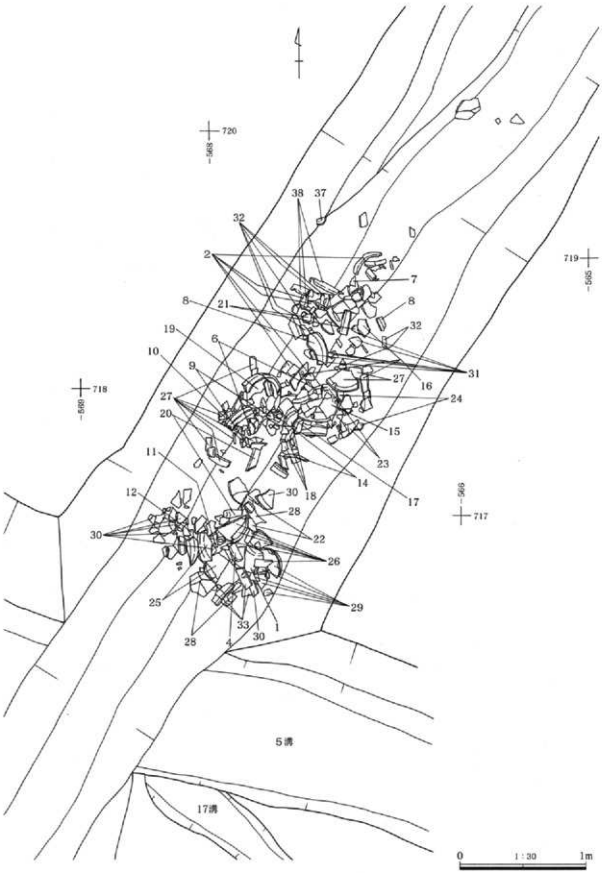
形態　南北両端が調査区外となる。北端は１区調査区北壁の東端付近で、そこからわずかに東に湾曲しながら南にのび、中央付近で不自然に蛇行してその後直線的に南西へとのびる。また、北側の断面（Ａ－Ａ'）をみると２本の溝が重複していることが判明する。これは、中央部で重複する15号溝の北延長部分が見えている可能性があるのではないかと思われるが、調査時には確定できず詳細は不明である。南端部の断面では溝の重複は見られないので、これが15号溝の残存部であるとすると、北側のごく一部で残っている可能性がある。７号溝の断面は逆台形であり、深くしっかりとした溝である。

走向　北半はわずかに湾曲してＮ－０°～21°－Ｅ。南半部はほぼ直線となり、Ｎ－35°－Ｅである。

規模　調査できたのは北端から南端まで直線で測って33m分である。幅は南端部でみると1.83m、深さは調査区南壁の断面（Ｂ－Ｂ'）で90cmである。

埋土の状態　暗褐色ないし黒褐色の粘性のある土で埋没している。流水のあった形跡はない。

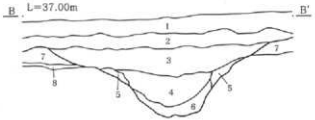
遺物　南端近くから大量の土器片が集中して出土している。これらは大部分が焙烙であり、それ以外の器種は擂り鉢（1）や用途不明の土製品（38）などがあるに過ぎない。この土製品に類似したものは10号溝からも出土している。これらの遺物の出土層位は埋土の中～上層（ＰＬ.21）であり、溝がある程度埋没してから投げ込まれたのであろ



第56図　7号溝遺物出土状態

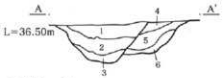
う。その他の陶磁器はほとんどない。その他、古代の土器や石斧などが出土しているが、混入品である。

所見　出土遺物から、近世の溝であると考えられる。何らかの区画溝と考えられるが、不自然に蛇行する部分もあり、詳細な用途は不明である。



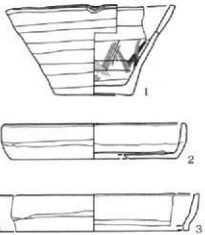
７号溝Ｂ－Ｂ'

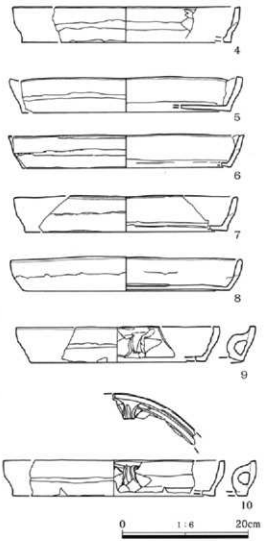
1　褐炭色土（10YR4/1）　耕作土。白色軽石（Ａｓ－Ａ・径２～４mm）をまばらに含む。粘性あり。しまり弱い。
2　黒褐色土（10YR3/2）　耕作土。白色軽石（Ａｓ－Ａ・径２～４mm）を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
3　褐炭色土（10YR4/1）　橙色土粒径（径１mm）を微量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
4　黒褐色土（10YR3/1）　橙色土粒・白色土粒を微量含む。粘性・しまりあり。
5　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を少量、炭化物（径２～３mm）を微量含む。ロームブロック（径２～４mm）と砂（径１mm）をまばらに含む。粘性あり。しまりやや強い。
6　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を少量含む。ロームブロック（径５～10mm）は多く含む。しまりやや強い。
7　黒色土（10YR2/1）　粘性・しまりあり。
8　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を少量含む。ロームブロック（径２～４cm）をまばらに含む。粘性あり。しまり強い。ローム漸移層。



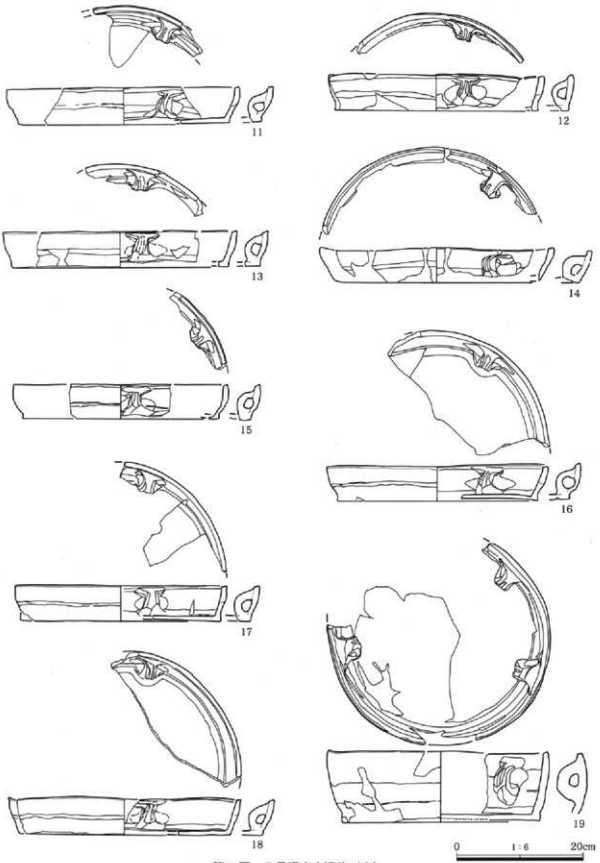
７号溝Ａ－Ａ'

1　暗褐色土（10YR3/3）　若干赤色粒（焼土粒か？）を含む。粘性ややあり。
2　暗褐色粘質土（10YR3/4）　ローム粒（赤色粒）を含む。粘性が強い。
3　暗褐色粘質土（10YR3/4）　ローム粒を多く含む。粘性が強い。
4　暗褐色粘質土（10YR3/3）　３層に類似、赤色粒はみられない。粘性やや強い。
5　暗褐色粘質土（10YR3/4）　若干のローム粒を含む。粘性が強い。
6　暗褐色粘質土（10YR3/4）　２～３cm大のロームブロックを含む。粘性が強い。

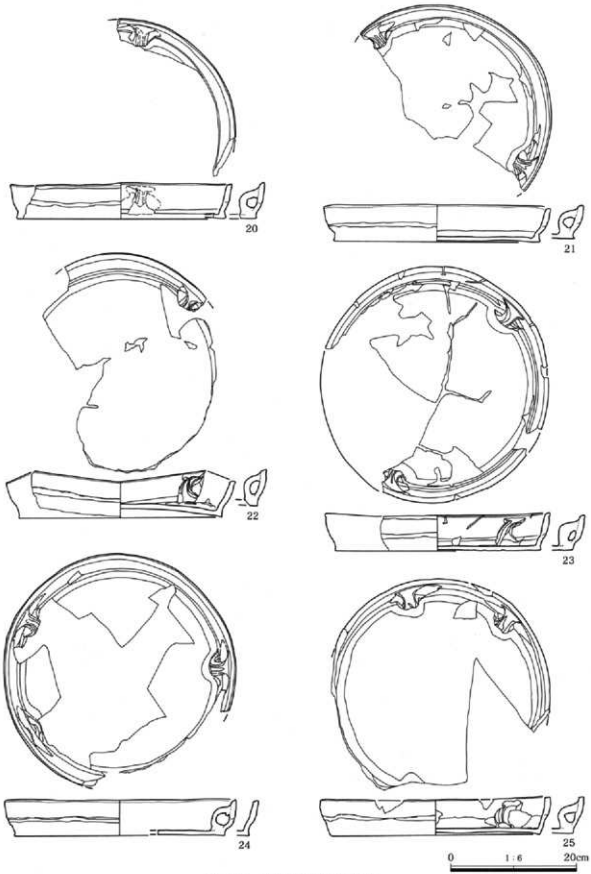




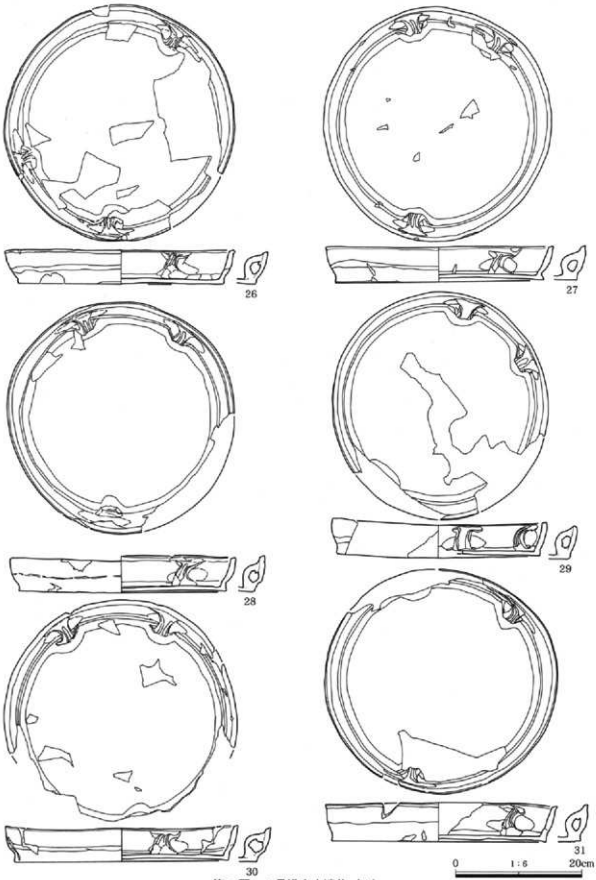
第57図　７号溝断面図、出土遺物（１）



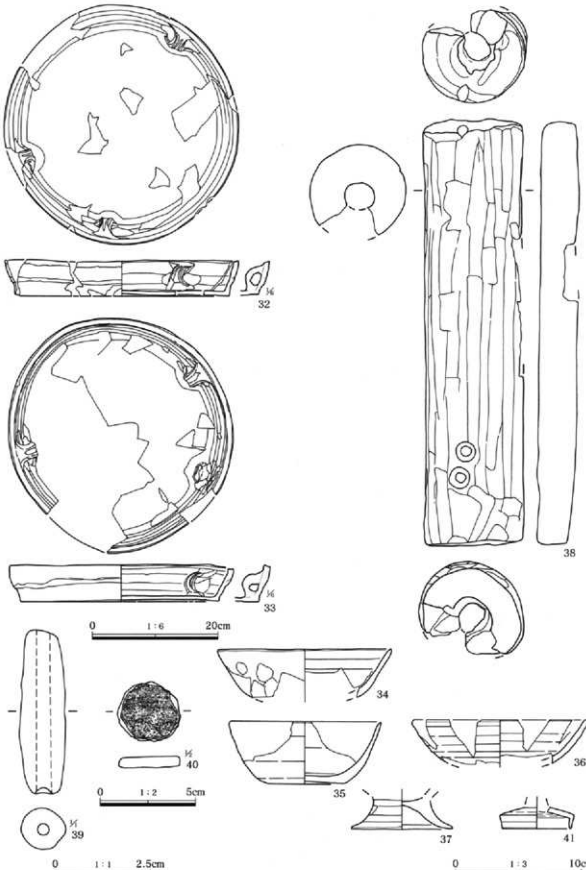
第58図　7号溝出土遺物（2）



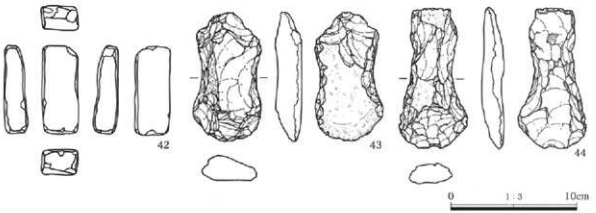
第59図　７号溝出土遺物（３）



第60図　7号溝出土遺物（4）



第61図　７号溝出土遺物（５）



第62図　7号溝出土遺物（6）

8号溝（付図2・第63図、第4表、PL.22・37）

1区西部の北東と3区の西部にまたがっている南北方向の溝である。

位置　X＝29715～747、Y＝－42586～594

重複遺構　北端部で5号・9号溝と、中央部で14号溝と、南端近くで5号・12号溝、41号・45号土坑、3号井戸と重複する。本溝は5号溝、41号土坑よりも古く、9号・14号溝、45号土坑、3号井戸よりも新しい。12号溝との新旧関係は不明である。

形態　南北両端が調査区外となる。北端は1区北壁で、そこから西にわずかに湾曲しながら南へのび、中央付近から南側はほぼ直線的になる。断面は下部が逆台形であり、上部は途中から傾斜が緩やかとなり大きく広がっている。

走向　南半部はN－8°－Wであり、それより北はさらに西を向いてN－14°－Wとなり、1区にはいると逆に東に向きを変え、N－6°－Eとなる。

規模　調査できたのは北端から南端まで直線で測って32m分である。幅・深さは確認面の深さに違いがあるので一定ではなく、幅1.16～2.50m、深さ50～80cmであり、ちょうどセクション図をあげた部分が幅・深さ共に最も大きくなる。

埋土の状態　粘性のある暗褐色ないし暗灰褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　比較的多く出土している。報告できるのは、土師器坏・甕、須恵器坏・高台付埦・長頸瓶と縄文土器片である。その他、土師器・須恵器の破片が多数出土している。近世と思われる焙烙片なども少数見られるが、周囲の溝と比較して非常に少ないので、これらは混入の可能性がある。

所見　焙烙片などが混入であれば、古代に遡る可能性がある溝である。深くしっかりとした溝であるが、水が流れた形跡はなく、用途不明である。

9号溝（付図2・第63図、第4表、PL.22・37）

1区から3区にかけて8号溝の東にある溝である。北部は8溝にほぼ並行するが、南にいくに従って徐々に東に向きを変え、大きく離れるようになる。

位置　X＝29714～747、Y＝－42573～592

重複遺構　北端で8号溝と、中央付近で2号井戸と、南端近くで40号土坑、5号・11号溝と重複する。本溝は5号・8号溝、2号井戸よりも古く、40号土坑、11号溝よりも新しい。

形態　両端が調査区外となる。調査区内では全体に大きく湾曲している。断面は逆台形である。

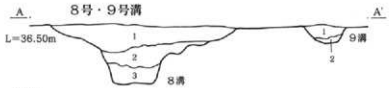
走向　北端はN－1～19°－Wで蛇行し、その南ではN－16°－Wとなり、さらに大きく曲がって南端近くではN－62°－Wとなる。

規模　調査できたのは北端から南端まで直線で測って37m分である。幅は北端近くが広く1.23m、その南では幅が狭くなり、30～75cmとなる。深さも場所によって大きく異なり6～26cmである。

埋土の状態　粘性のある灰褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　報告できるのは土師器坏１点のみである。ほかの遺物は非常に少なく、土師器片１点があるのみである。

所見　出土遺物は少ないが、古代にまで遡る可能性がある溝である。

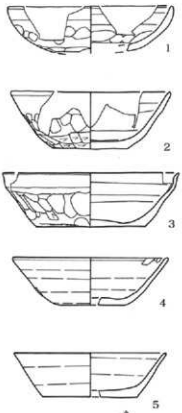


8号溝
1　暗褐色土　白色軽石を含む。しまりなし。
2　暗褐色土　白色軽石を含む。砂粒少し含む。粘性あり。
3　暗灰褐色土　砂粒を多く含む。ロームブロック混じる。粘性あり。
4　暗褐色土　砂粒・ロームブロックを含む。粘性あり。

9号溝
1　灰褐色土　白色軽石を少し含む。粘性あり。
2　灰褐色土　1層より粘性強い。

0　1:50　2m

8号溝遺物



9号溝遺物

0　1:3　10cm

第63図　8号・9号溝断面図、出土遺物

10号溝（付図2・第64図、第4表、ＰＬ.23・38）

１区東部と３区北部とにまたがり、ほぼ直角に曲がる溝である。５号溝の内側に平行している。

位置　Ｘ＝29729～747、Ｙ＝－42560～582

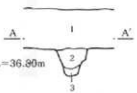
重複遺構　南北方向の部分で16号土坑、11号溝と、東西方向の部分で２号・３号掘立柱建物、48号土坑、７号溝と重複する。本溝が最も新しい。

形態　北端は１区北壁中央から始まり、直線的に南下して３区に入ったあたりでほぼ直角に東に折れ、直線的に東にのびる。断面は大体逆台形状であり、幅に比して深い。

走向　南北方向の部分はＮ－13°－Ｅ、東西方向の部分はＮ－74°－Ｗであり、その間の角は87°である。

規模　調査できたのは、南北方向部分で11ｍ、東西方向部分で22.5ｍである。幅は40～75㎝、深さは35～55㎝である。

埋土の状態　粘性のある黒褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

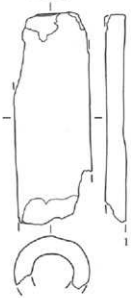


10号溝
1　耕作土　Ａｓ－Ａ（径２～３㎜）を少量含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土（2.5YR3/1）　ローム粒少ない。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土（2.5YR3/1）　ローム粒多い。粘性・しまりあり。

0　1:50　2m

遺物　図示したのは用途不明の土製品である。その他、焙烙片や近現代の陶磁器数多くが出土している。

所見　５号溝の内側に平行するような位置にあるが、本溝は近現代のものと思われるので、埋没年代にはやや隔たりがあり、同時存在していた可能性は低い。この方向が近世以来の区画方向を反映しているものと思われる。



0　1:3　10cm

第64図　10号溝断面図、出土遺物

11号溝（付図2、第65図、ＰＬ.23）

１区東部と３区の中央部を南北方向に横断する溝である。

位置　Ｘ＝29714～745、Ｙ＝－42575～580

重複遺構　北端で10号溝、３区に入って13号住居、47号土坑、10号・５号・９号・13号溝と重複する。本溝はいずれの遺構よりも古い。

形態　ごくゆるやかに東側に湾曲しながら南北方向に伸びている。北側は10号溝の北側に見えないので、端部はこの付近と考えられ、南側は調査区外へ続いている。幅は狭く、断面は逆台形である。

走向　北端部の走向はＮ－17°－Ｗ、南端部はＮ－16°－Ｅであり、その間は徐々に変化する。

規模　調査できたのは、北端から南端まで直線で測って31ｍである。幅は南端部の断面で見ると87㎝、深さは55㎝である。この部分で見ると、調査区内

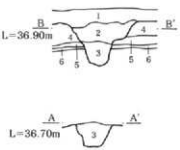
では表土除去の際に上面をかなり削平してしまったらしい。

埋土の状態　粘性のある黒褐色土ないし黒色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　遺物の出土は少なく、土師器の小破片が1点出土したのみである。

所見　遺物がほとんど出土しないので時期を確定できないが、13号住居に壊されているため、9世紀後半以前に遡ることは明らかである。

11号溝



11号溝
1　耕作土　褐灰色土（10YR4/1）。灰色軽石（径2～4㎜）を少量含む。粘性・しまり弱い。
2　黒褐色土（10YR3/1）　白色粒をまばらに含む。明茶色土ブロック（径1～3㎝）が多い。粘性・しまりあり。
3　黒色土（10YR2/1）　ローム粒を微量含む。粘性・しまりやや強い。
4　黒褐色土（10YR3/1）　粘性・しまりあり。
5　黒褐色土（10YR3/2）　黄色粒を微量含む。粘性・しまりあり。
6　褐灰色土（10YR4/1）　灰色土粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。

0　1:50　2m

第65図　11号溝断面図

12号溝（付図2、PL.24）

3区の南西部にある溝である。

位置　X＝29715～722、Y＝－42585～590

重複遺構　8号溝と大きく重複するほか、北端は5号溝と重複する。その他、41号・45号土坑、3号井戸と重複する。本溝は土坑よりも新しく、その他の遺構よりは古い。

形態　他の遺構に大きく破壊されていて全形は不明である。北端は5号溝に破壊され、どこから始まるのか分からない。その南では南北方向に3m進み、その後大きく東に屈曲して調査区南壁に達する。断面形はやや不整な逆台形である。

走向　北半部は大体N－12°－Wで、南半部はN－48°－Wだが、南端ではさらに南向きに大きく方向を変えているように見える。

規模　調査できたのは直線で測って7.5m分だけである。幅は、南端近くの他の遺構との重複のない部分で40～45㎝、深さは20㎝である。

埋土の状態　上面を多くの遺構で削平されているが、底面近くは黒褐色土1層で埋没していた。流水のあった形跡はない。

遺物　遺物は土師器小破片1点のみある。

所見　わずかな長さの調査であり、遺物もほとんどないので、詳細は不明である。8号溝よりも遡るので、古代に遡る可能性が高い。

13号溝（付図2、第66図、PL.24）

3区南部の中央にある溝である。5溝の北側部分が東に行くに従って北に離れるものであり、その平面形が5号溝とかなり違うので、違う溝として調査した。しかし5号溝北側と別の溝であるという確証は得られておらず、本来は同時存在で一体のものであったものと思われる。

位置　X＝29718～724、Y＝－42569～580

重複遺構　11号溝と重複する。本溝が新しい。

形態　5号溝から北に離れ、北側に緩やかに湾曲しながら東に向かい、さらに大きく北に屈曲する。断面形は逆台形であるが、セクション図（A－A'）を取った部分は上面が大きく削平されて底部しか残っていなかった。

走向　西端部はN－79°－Eで、東に行くに従って湾曲する。東半部は向きを大きく変え、N－29°－Eである。

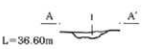
規模　西半部は8m、東半部は5.5mである。幅は

他の遺構との重複がない部分で見ると、西半部で75～90cm、東半部で34～58cmであり、西半部の方が広い傾向にあるが、後世の削平の影響も考えられる。同様に、深さも西半部で24cm、東半部は8～14cmであり、やはり西半部の方が深い。

埋土の状態　粘性のある灰黄褐色土で埋没している。5号溝同様、流水のあった形跡はない。

遺物　5号溝と同様に焼塩片などが出土しているが、図示できる遺物はない。

所見　5号溝から北側に離れていく溝である。出土遺物もほぼ共通しており、本来は同時存在で一連のものであったと思われる。5号溝には複数の時期があるので、その一時期にはこの13号溝がその一部であったことになる。



13号溝
1　灰黄褐色土（10YR4/2）　灰色軽石（径1～2mm）をまばらに含む。ローム粒と焼土粒を少量含む。粘性・しまりあり。

第66図　13号溝断面図

14号溝（付図2、第67図、P L.24）

3区の南西隅近くにある南北方向の溝である。

位置　X＝29715～730、Y＝－42590～594

重複遺構　北端部で8号溝、中央部で5号溝と重複する。本溝はこの2本の溝よりも古い。

形態　全体に西側に緩やかに湾曲する。南端部で30cmほど途切れるところがある。北側は8号溝に切られ、その北側には現れないので、この付近から始まっていると思われる。南側はさらに調査区外へのびている。断面形状は逆台形である。

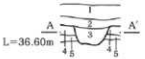
走向　5号溝以北はN－14～29°－E、以南はN－0°で、全体では西側に緩やかに湾曲している。

規模　調査できたのは直線で測って14.5m分である。幅は30～43cmであるが、調査区南壁の断面で見ると48cmある。深さは、同じく南壁で測ると25cmある。

埋土の状態　粘性のある黒色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　非常に少なく、時期不明の土器小片が出土しているのみである。

所見　出土遺物は少ないが、8号溝よりも古いので、それが古代のものであれば、さらに遡る時期のものである。近い時期のものには11号溝があり、形態が類似している。



14号溝
1　耕作土　褐灰色土（10YR4/1）。　灰色軽石（径2～4mm）を少量含む。粘性・しまり弱い。
2　黒褐色土（10YR3/1）　粘性・しまりあり。
3　黒褐色土（10YR3/1）　微量の白色粒・ロームブロック（径1cm）、少量のローム粒を含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土（10YR3/2）　黄色粒を微量含む。粘性・しまりあり。
5　褐灰色土（10YR4/1）　灰色土粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。

第67図　14号溝断面図

15号溝（付図2、第68図、P L.21）

3区の東側にある南北方向の溝である。7号溝が東に大きく蛇行する部分で西側に現れる。

位置　X＝29723～729、Y＝－42561～565

重複遺構　南北両端が7号溝と重複する。そのため、この溝の南北方向の延長部が不明であるが、7号溝の断面を見ると、北半部（7号溝A－A'セクション図参照）では2つの溝が重複していることが分かるので、あるいはこのうちの古い方の溝が15号溝の北延長部であるかもしれない。南側延長部は不明である。

形態　わずかな面積しかないので全体の形状は不明

だが、調査した部分では西側にわずかに湾曲している。断面形状は逆台形で壁の傾斜はきつい。

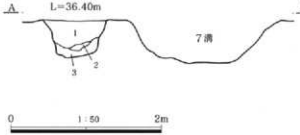
走向　Ｎ－０°～42°－Ｅで、全体に緩やかに湾曲している。

規模　調査できたのは4.5ｍ分だけである。幅は85㎝、深さは48㎝である。

埋土の状態　粘性のある黒色土ないし褐灰色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器・須恵器・埴輪の小破片が出土しているが、図示できるものはない。

所見　７号溝に多く含まれる焼塔などが出土しないため、それを遡る時期のものである。



15号溝
1　黒色土（10YR2/1）　白色粒・ローム粒を少量、ロームブロック（径5～10㎜）をまばらに含む。粘性・しまりあり。
2　褐灰色土（10YR4/1）　粗砂粒多い。ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。
3　黒色土（10YR2/1）　炭化粒（径2～3㎜）を少量、ローム粒・ロームブロック（径5～20㎜）を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。

第68図　15号溝断面図

16号溝（付図２、第69図、ＰＬ.24）

３区の北東部にある東西方向の溝である。

位置　Ｘ＝29727～730、Ｙ＝－42563～572

重複遺構　２号掘立柱の柱穴（Ｐ５）と重複する。本溝が新しい。

形態　東西両端が調査区内に収まる短い溝で、ほぼ直線的にのびている。断面は逆台形であるが、底面には凹凸がある。

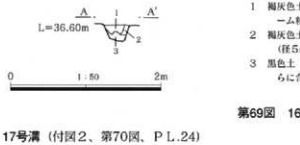
走向　Ｎ－72°－Ｗである。

規模　全長8.5ｍ。幅は25～47㎝で狭い。深さは凹凸があり12～23㎝である。

埋土の状態　粘性のある褐灰色土・黒色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　近現代の陶磁器まで、各時代の遺物が出土しているが、いずれも小破片であり図示できない。

所見　全長8.5ｍの短い溝である。北側の10号溝と並行しており、同時存在かごく近い時期のものと思われる。



16号溝
1　褐灰色土（10YR4/1）　灰白色軽石（径1㎜）をまばらに、ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
2　褐灰色土（10YR4/1）　ローム粒をまばらに、ロームブロック（径5㎜）を少量含む。粘性・しまりあり。
3　黒色土（7.5YR2/1）　ロームブロック（径1～2㎝）をまばらに含む。粘性あり。しまり弱い。

第69図　16号溝断面図

17号溝（付図２、第70図、ＰＬ.24）

３区の南東隅にある溝である。

位置　Ｘ＝29713～716、Ｙ＝－42566～569

重複遺構　５号溝、７号溝が重複する箇所の南東側にあり、両溝よりも古い。本溝は両溝と大きく重複し、破壊されているものと思われ、西側がどのようであったのかは不明である。

形態　わずかな長さの調査なので全体は不明であるが、調査した範囲内では緩やかに蛇行しているものの、全体としてはほぼ直線的にのびている。断面は逆台形である。第70図の断面図は斜めに切った面でとっているため、皿状に見えている。

走向　Ｎ－50°－Ｗである。

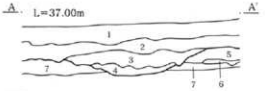
規模　調査できたのはわずかに２ｍだけである。西側は５号７号溝以西に現れないため、この付近に端部があるものと思われる。東は調査区外にのび

ている。幅は28～38cmである。深さは南壁の断面図の場所で測ると33cmある。

埋土の状態　粘性のある黒褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　遺物は全く出土していない。

所見　調査できた長さが短く、遺物も出土していないので、詳細不明の溝である。5号・7号溝よりも古いので、少なくとも近世以前のものである。



17号溝
1　褐灰色土（10YR4/1）　耕作土。白色軽石（As－A・径2～4mm）をまばらに含む。粘性あり。しまり弱い。
2　黒褐色土（10YR3/2）　耕作土。白色軽石（As－A・径2～4mm）を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。
3　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒（径2～3mm）を含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土（10YR3/1）　ロームブロック（径5mm）を少量、ローム粒（径2～3mm）をまばらに含む。粘性・しまりあり。
5　黒色土（10YR2/1）　粘性・しまりあり。
6　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒を少量含む。ロームブロック（径2～4cm）をまばらに含む。粘性あり。しまり強い。ローム漸移層。
7　明黄褐色ローム（10YR7/6）　粘性あり。しまり強い。

0　1:50　2m

第70図　17号溝断面図

18号溝（第71図）

2区の北東隅にわずかに現れる溝である。

位置　X＝29736～739、Y＝－42451～455

重複遺構　なし。

形態　両端が調査区外となるため全形は不明である。調査区内では直線的にのびている。断面は逆台形である。

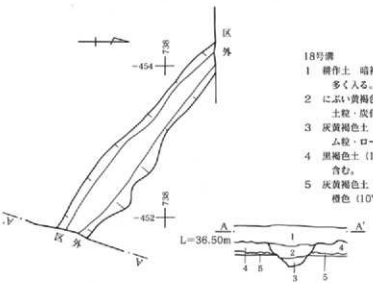
走向　N－51°－W

規模　調査できたのは3m分だけである。幅は34～67cmである。深さは東壁の断面で26cmである。

埋土の状態　粘性のある黄褐色土・灰黄褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　全く出土していない。

所見　調査区内に3mだけ現れるだけであり、遺物も出土していないので詳細は不明である。



18号溝
1　耕作土　暗褐色土（10YR3/4）。砂質でやわらかい。草の根が多く入る。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　全体に粘土質でしまりあり。焼土粒・炭化物は含まない。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）　全体に粘土質で、しまりあり。ローム粒・ロームブロック（10mm前後）を少量含む。
4　黒褐色土（10YR2/3）　ややしまりあり。ローム粒をごく少量含む。
5　灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム への漸移層。下部はにぶい黄橙色（10YR7/4）のローム へと続く。かたくしまりあり。

0　1:50　2m

第71図　18号溝平・断面図

19号溝（第72図、第４表、ＰＬ.25・38）

５区の北壁際にある東西方向の溝である。

位置　X＝29716～720、Y＝－42458～482

重複遺構　東端近くで21号溝と重複する。本溝が新しい。

形態　途中に溝の端部のような部分があり、少なくとも３本の溝が連続するような形状をしている。全体はほぼ直線的にのび、東西両端は調査区外へ続いている。断面は逆台形である。

走向　N－84°－W

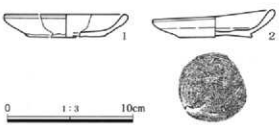
規模　調査できたのは23.5m分である。幅は、北側の一部が調査区外となる部分が多いが、計測できる部分は80cm前後である。深さは28～51cmであり、西側が深い。

埋土の状態　黒褐色土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　報告できるのはかわらけ２点のみだが、その他、土師器や焙烙の小破片、近・現代の陶磁器片が多数出土している。

所見　何本かの溝が連続した形態である。時期は近現代であり、何らかの区画溝だと思われる。

19号溝遺物



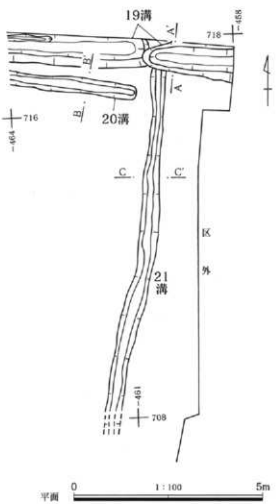
20号溝（第72図、ＰＬ.25）

５区の北壁に沿った東西方向の溝で、19号の南に平行する。

位置　X＝29716～719、Y＝－42460～482

重複遺構　50号土坑と重複する。本溝が新しい。19号溝とは一部接する部分がある。

形態　東端は５区北東隅近くにある。走向はほぼ直



第72図　19号～21号溝平・断面図、出土遺物

線であり、西端は調査区外にのびる。断面形は椀状ないし逆台形であり、比較的浅い。

走向　N－84°－W

規模　調査できたのは21m分である。幅は27～38cm、深さは3～13cmであり、浅い部分が多い。

埋土の状態　浅いこともあり、暗褐色土1層で埋没している。緻密な土質である。

遺物　近世の磁器・土器の小破片が出土している。

所見　近世以降の溝であり、19号溝同様、何らかの区画溝だと考えられる。

21号溝（第72図、PL.25）

5区の東壁に沿った南北方向の溝である。

位置　X＝29707～719、Y＝－42459～462

重複遺構　北端部で19号溝と重複する。本溝が古い。

形態　中央付近で緩やかに曲がるが、それ以外は直線的にのびている。南端部は削平されて不明瞭となる。断面形はごく浅い皿状である。

走向　北半はN－7°－E、南半はN－15°－E。

規模　調査できたのは9m分である。幅は29～54cm、深さは3～4cm程度の浅い部分が多い。

埋土の状態　浅いこともあり、暗褐色土1層で埋没している。緻密な土質であり、20号溝に似ている。

遺物　土師器の小破片がごく少数出土している。

所見　ごく浅く、出土遺物もほとんどないので詳細は不明である。

22号溝（第73図、PL.25）

6区の北東隅にある東西方向の溝である。

位置　X＝29716～719、Y＝－42529～545

重複遺構　なし。

形態　調査区の隅を東西に直線的に横断する。西側にある3区にはこの溝の延長部が現れないので、その手前で途切れるか、あるいは南北に曲がるものと考えられる。断面は薬研状で底面が狭く深い。

走向　N－82°－W

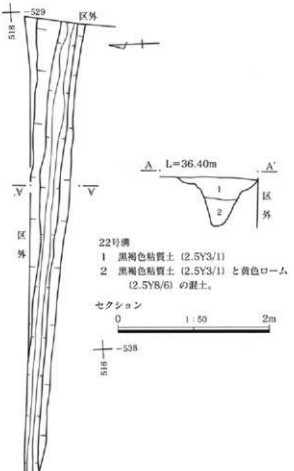
規模　調査できたのは15m分である。幅は100～128cm、深さは48～72cmである。

埋土の状態　黒褐色粘質土で埋没する。下層にはロームブロックを含む。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器・須恵器や焼塔の破片が多数出土しているが、いずれも小破片である。

所見　出土遺物から近世以降のものである。直線的にのび、走向が5号・10号溝に近いので、これらは近世以降の区画方向に沿ったものと思われる。

22号溝



第73図　22号溝平・断面図

23号溝（第79図、ＰＬ.25）

６区の中央部にある東西方向の溝である。調査では独立した溝として扱われたが、28号溝の東側延長線上にあり、おそらく同一の溝であると考えられる。

位置　Ｘ＝29715～717、Ｙ＝－42542～544

重複遺構　26号溝の東端部と重複するが、新旧関係は不明である。

形態　東西方向にのびるが、28号溝の延長部であるとすれば、さらに西側から直線的にのびていることになる。断面は浅い逆台形である。

走向　Ｎ－90°

規模　調査できたのはわずか1.8ｍ分であり、さらにそのうちの西端部はトレンチによって破壊してしまった。幅はそのトレンチの西側断面（Ａ－Ａ'）でみて80㎝、深さは17㎝である。

埋土の状態　浅いこともあり、黒褐色粘質土１層で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器・須恵器・焙烙などの小破片がわずかに出土しているのみである。

所見　28号溝の東端部と考えられる溝である。わずかな長さのみの調査であり、遺物も少なく詳細は不明である。

25号溝（第74図、ＰＬ.25）

６区の中央やや東よりにある南北方向の溝である。北側は未発掘部分（既存の電柱のため）にあたり、発掘できなかった。

位置　Ｘ＝29710～715、Ｙ＝－42539～541

重複遺構　56～58号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

形態　調査した範囲では直線的にのびている。北端は未調査部分にかかり、それよりも北側では現れないので、この部分で途切れているものと思われる。断面は深い逆台形である。

走向　Ｎ－6°－Ｅ

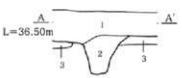
規模　調査できたのは3.2ｍのみである。幅は46～58㎝、深さは調査区南壁の断面で測って50㎝である。

埋土の状態　黒褐色粘質土とロームとの混土によって埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　土器・陶器の小破片がわずかに出土しているのみである。

所見　直線的にのび、深くしっかりした溝であるが、出土遺物がほとんどなく、時期などの詳細は不明である。

25号溝



25号溝
1　表土　オリーブ黒色土（5Y3/1）。焼土・Ａｓ－Ｂを含む。
2　黒褐色粘質土（2.5Y3/1）と黄色ローム（2.5Y8/6）の混土。
3　黒褐色土（2.5Y3/1）　（68号土坑）
4　黄色ローム（2.5Y8/6）

第74図　25号溝平・断面図

24号溝（第75図、ＰＬ.25）

６区の南東隅にある溝である。

位置　X＝29711～713、Y＝－42533～535

重複遺構　東端が66号土坑と重複する。本溝が古い。

形態　緩やかに蛇行している。断面は逆台形ないし箱形である。

走向　両端を結んだ走向はN－51°－Eである。

規模　調査できたのはわずかに0.9mであり、東端は破壊されている。幅は13～18cm、深さは７～８cmである。

遺物　出土していない。

所見　ごく短い溝であるが、断面が逆台形ないし箱形で、明瞭な溝である。出土遺物がなく、時期は特定できない。

27号溝（第75図、ＰＬ.25）

６区の南東隅にある溝である。

位置　X＝29710～715、Y＝－42530～536

重複遺構　66号・67号・115号土坑と重複する。本溝はいずれの土坑よりも古い。

形態　南西－北東方向にほぼ一直線にのび、両端は調査区外となる。断面は逆台形である。

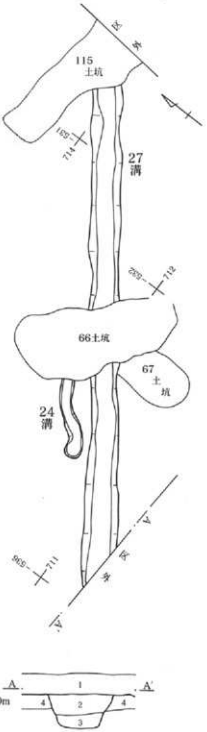
走向　N－55°－E

規模　調査できたのは6.4m分である。幅は34－45cm、深さは調査区南壁の断面で測って45cmである。

埋土の状態　下層は黒褐色土が堆積している。この層は砂を含み、ラミナ状堆積が見られるので、流水があったらしい。その上層はやわらかい黒褐色粘質土で埋没している。

遺物　遺物は出土していない。

所見　直線的にのび、また断面も逆台形でしっかりとした溝であるが、出土遺物がなく時期などの詳細は不明である。埋土には流水のあった痕跡が残るが、明らかに流水の痕跡がある溝はこれのみである。



第75図　24・27号溝平・断面図

26号溝（第79図、ＰＬ.25）

６区の南西部にある溝である。

位置　X＝29711～716、Y＝－42542～552

重複遺構　23号・28号・30号溝、98号土坑と重複する。本溝は98号土坑よりも古いが、他の溝との新旧関係は不明である。

形態　西端は28号溝と重複し、そこから東へ東西方向にのびるが、東端部で短く北に折れ曲がる。西端部は底面が南に曲がっているように見えるので、ここで28溝と同じ方向に折れている可能性もあるが、南壁の断面には現れないので断定できない。断面は浅い皿状である。

走向　東西方向にのびる部分はＮ－89°－Ｗで、東端部はＮ－47°－Ｅに折れる。

規模　東西方向部分は7.5ｍ、その後北に折れる部分は２ｍである。

埋土の状態　浅いこともあり黒褐色土１層で埋没する。流水のあった形跡はない。

遺物　土師器や近世土器（焙烙か）の小破片が出土しているのみである。

所見　近世以降の溝と思われるが、出土遺物が少なく、確定できない。

28号溝（第76・79図、第４表、ＰＬ.25・38）

６区の西部にある溝である。23号溝はこの溝の東延長部である可能性がある。

位置　X＝29711～717、Y＝－42544～553

重複遺構　97号・102号土坑、26号・30号溝と重複する。本溝との新旧関係は不明である。

形態　西側は南北方向で、それがほぼ直角に折れ曲がり東西方向となる。東端付近は攪乱や未調査部分があり不明瞭となるが、23号溝はこの溝の延長部分であると思われ、とすれば、ここで途切れることになる。断面は逆台形であるが、南端近くでは東側に浅い部分がつく。

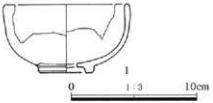
走向　南北方向部分はＮ－８°－Ｅ、東西方向部分はＮ－88°－Ｗであり、その間の角度は96°である。

規模　調査できたのは、南北方向が4.7ｍ、東西方向部分は23号溝まで含めて10ｍである。

埋土の状態　黒褐色粘質土で埋没している。Ａｓ－Ｂを含む。流水のあった形跡はない。

遺物　１の陶器塊のほか、近世の陶磁器や、土器（焙烙・内耳鍋など）の破片が多数出土している。

所見　埋土にＡｓ－Ｂを含むが、遺物は近世のものが多く、近世以降の溝と考えられる。



第76図　28号溝出土遺物

29号溝（第77・79図、第４表、ＰＬ.25・38）

６区の西部にある南北方向の溝である。

位置　X＝29711～717、Y＝－42552～555

重複遺構　北端に31号溝、中央部に100号土坑が重複する。本溝との新旧関係は不明である。

形態　ほぼ直線的にのびる。南端は調査区外にのびるが、北側は31号溝以北で確認できなくなる。断面は逆三角形状で底面は丸い。

走向　Ｎ－８°－Ｅで、28号溝と同じである。

規模　調査できたのは5.5ｍ分である。幅は44～74㎝、深さは調査区南壁の断面で測って53㎝である。

埋土の状態　Ａｓ－Ｂを含む。流水の形跡はない。

遺物　１の陶器灯明皿のほか、近世の陶磁器・土器が出土している。

所見　近世以降の溝である。方向が28号溝と同じであり、この地点の区画方向を示しているらしい。

第77図　29号溝出土遺物

30号溝（第79図、ＰＬ.25）

６区の西部にある南北方向の溝である。調査時は31号溝とは別の遺構としたが、北端が31号溝の東端と接合し、新旧関係が把握できなかったので、本来は同一のものである可能性が高いものと考えられる。

位置　Ｘ＝29712～718、Ｙ＝－42547～549

重複遺構　26号・28号溝と重複するほか、南端近くには75号土坑が重複しているが、新旧関係は不明である。さらに南には84・86号土坑があり、それとも重複するはずであるが、その部分には攪乱があって本溝が不明瞭となったため、重複関係は把握できない。調査区南壁の断面には86号土坑しか現れないので、重複関係にあるとすれば本溝が古いものと思われる。

形態　ほぼ直線的にのびている。南端部は攪乱によって破壊されている。

走向　Ｎ－7°－Ｗ

規模　調査できたのは3.6m分である。幅は47cm～58cmであり、深さは5～20cmである。

遺物　土師器・須恵器・近世の土器・陶器などの小破片が出土している。

所見　遺物から近世以降の溝であり、31号溝と一連の可能性が高いものと思われる。

31号溝（第78・79図、第４表、ＰＬ.25・38）

６区の西部にある溝である。

位置　Ｘ＝29713～718、Ｙ＝－42548～559

重複遺構　中央部に29号溝、東端部に30号溝が重複する。新旧関係は不明である。前述のように、両者とは同時存在である可能性がある。特に30号溝とは本来一連であった可能性が強い。

形態　西端は調査区外となるが、そこから大きく北に湾曲しながら東にのび、東端付近は直線的となる。西端部がやや広がる形状となるが、わずかな部分しか調査できていないので、その要因は不明である。断面は逆台形である。

走向　西端付近はＮ－39°－Ｅ、東端付近はＮ－84°－Ｗである。

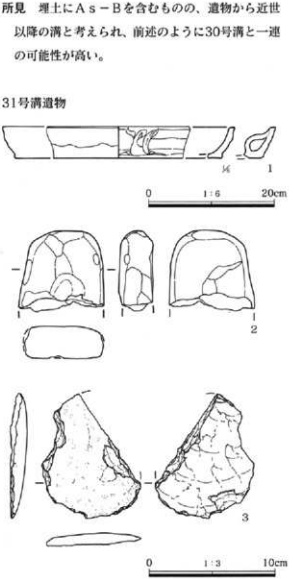
規模　調査できたのは、西端から東端まで直線で測って10.5m分である。幅は46～80cm、深さは26～40cmである。

埋土の状態　Ａｓ－Ｂを含む黒褐色粘質土で埋没している。流水のあった形跡はない。

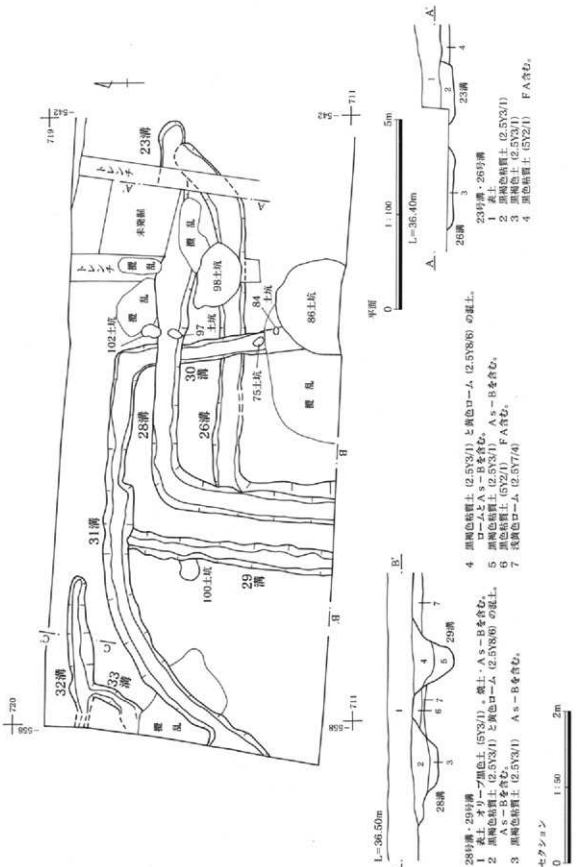
遺物　１は焼塔、２は性格不明土製品、３は石斧である。その他、近世の土器片が多数出土している。

所見　埋土にＡｓ－Ｂを含むものの、遺物から近世以降の溝と考えられ、前述のように30号溝と一連の可能性が高い。

31号溝遺物



第78図　31号溝出土遺物



第79図　6区西半部溝平・断面図

32号溝（第79・80図、ＰＬ.25）

６区の北西隅近くにある東西方向の溝である。

位置　X＝29717～719、Y＝－42554～559

重複遺構　33号溝と重複する。新旧関係は不明である。

形態　西端は調査区外となるらしいが、この部分には攪乱が入っていたため、不明瞭になっている。東に直線的にのびるが、すぐに途切れてしまう。

走向　N－88°－E

規模　調査できたのは調査区西端から４ｍ分である。幅は39～67cm、深さは12～18cmである。

埋土の状態　黒褐色粘質土で埋没している。流水のあった形跡はない。

遺物　近世のものと思われる土器の小破片が２点出土しているのみである。

所見　調査できた長さが短く、詳細不明である。遺物は少ないが、近世以降の溝であると思われる。

33号溝（第79図、ＰＬ.25）

６区の北西隅近くにある溝である。

位置　X＝29716～718、Y＝－42556～558

重複遺構　北端が32号溝と重複する。新旧関係は不明である。その北側には見えないので、ここで途切れるか、あるいは32号溝と同時存在かもしれない。

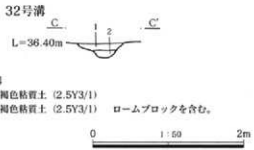
形態　西端部が攪乱のために不明瞭であるが、大きく湾曲しながら北に延びている。

走向　丸く湾曲し、N－0°～29°－E。

規模　調査できたのはわずかに１ｍである。幅は29～49cm、深さは５～11cmである。

遺物　出土していない。

所見　ごく短い溝であり、詳細不明である。遺物は出土していないが、周辺の溝から見て近世以降のものである可能性が強いものと思われる。



第80図　32号溝断面図

第６節　井戸

１号井戸（第81・82図、第４表、ＰＬ.27・38）

１区南西隅付近にある。

位置　Ｘ＝29723　Ｙ＝－42624

重複遺構　なし

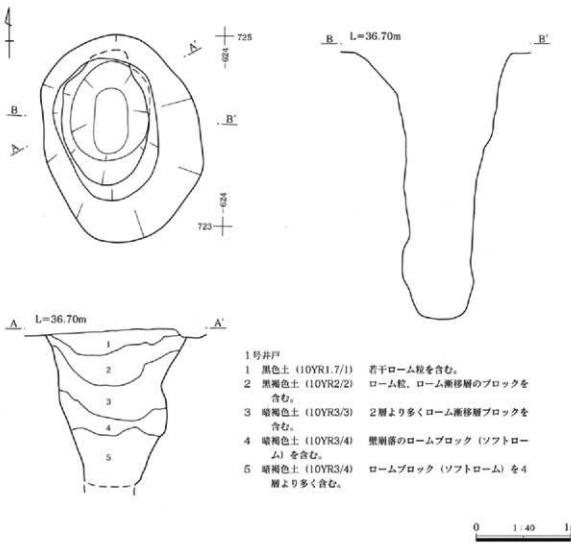
形態　確認面における平面形は、南北方向に長軸をとる楕円形であり、その形を大体維持したまま底面まで掘られている。上部50cm前後までは壁が崩壊して広くなっているが、それ以下はほぼ垂直に掘っている。

規模　長軸2.18m、短軸1.55m、深さ2.8m、底面レベル33.80m

埋土の状態　黒色土・黒褐色土・暗褐色土などで埋没している。人為的に埋め戻したものと思われる。

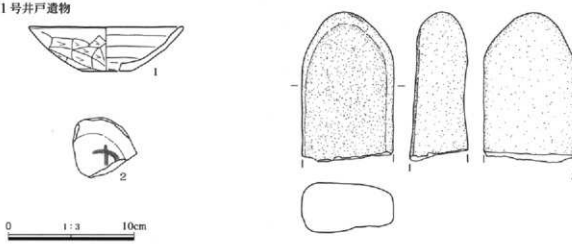
遺物　１・２は土師器坏、３は磨石である。２には墨書があるが判読不能である。そのほか土師器・須恵器の破片が出土しているが、明確な中近世以降の遺物は出土していない。

所見　中近世以降の遺物が出土していないので、古代に遡る可能性がある井戸である。底面レベルは比較的浅い。



第81図　１号井戸平・断面図

1号井戸遺物



第82図　1号井戸出土遺物

2号井戸（第83図、第4表、PL.27）

3区西部の中央付近にある。非常に深く、崩壊の可能性があるため底面までは調査できなかった。

位置　X＝29731　Y＝－42587

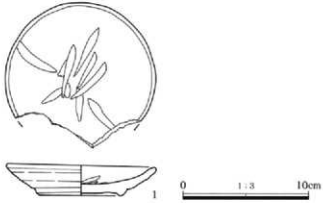
重複遺構　9号溝と重複する。この井戸が新しい。

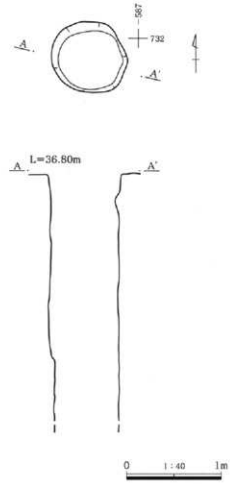
形態　ほぼ正円形であり、そのままの形で垂直に掘っている。

規模　長軸0.79m、短軸0.73m、深さ2.6m以上、底面レベル不明。

遺物　1は陶器皿である。その他、焙烙などの土器片が多数出土している。

所見　遺物から近世以降の井戸である。深く垂直に掘られていて、1号・3号井戸とは形態が異なる。





第83図　2号井戸平・断面図、出土遺物

３号井戸（第84図、ＰＬ.28）

３区南西隅付近にある。

位置　X＝29717　Y＝－42598

重複遺構　８号・12号溝、41号土坑と重複する。この井戸は12号溝よりも新しく、８号溝・41号土坑よりも古い。

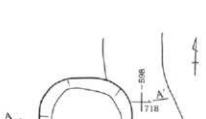
形態　ほぼ正円形。そのままの形で垂直に掘る。

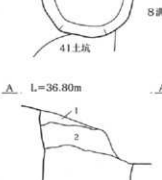
規模　長軸1.0m、短軸0.92m、深さ2.15m、底面レベル34.47m

埋土の状態　底面から1.8mまでは同一の土で埋没しているので、人為的に一気に埋め戻されたものと思われる。

遺物　遺物の出土はきわめて少なく、土師器・須恵器の小破片が1点ずつあるに過ぎない。

所見　８号溝よりも古いので、古代に遡る可能性が強い井戸である。底面レベルが浅い。





３号井戸

1　黒褐色土（7.5YR3/1）　ローム粒をまばらに含む。黒色粒・黒色土ブロック（径１～２cm）・ロームブロック（径２～５mm）を少量含む。粘性・しまりあり。人為埋戻。

2　浅黄色土（2.5YR7/4）　ロームブロック（径１～２cm）多い。黒色土ブロック（径１cm）とローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。

3　淡黄色土（2.5YR8/4）　ロームブロック（径１～５cm）多い。黒色土ブロック（径２～３cm）を微量含む。粘性やや強い。しまり強い。人為埋戻。

第84図　３号井戸平・断面図

第７節　ピット

ピットは全域で16基調査した。６区には見られないが、これは平成17年度調査においては、通常「ピット」と呼んで調査するような遺構も一律に「土坑」と呼称したことによる。そのため、６区については土坑の項で取り上げた。これについては不統一の誹りを免れないが、今後の混乱を避けるためにこのような体裁とした。これらのピットは調査区内に散在していて配置に規則性がなく、どのような性格のものか明らかではない。また、遺物もほとんど出土しておらず、時期を特定できるものはない。

以下、ピットの計測値を第３表にあげる。各ピットの位置・平面図は付図を参照していただきたい。

第３表　ピット一覧表

	調査区	位置	大きさ（m）		
			長軸	短軸	深さ
1	1区	718-617	1.11	0.90	0.80
2	1区	732-604	0.60	0.54	0.24
3	1区	736-604	0.59	0.52	0.37
4	1区	735-601	0.54	0.54	0.36
5	3区	716-583	0.50	0.33	0.29
6	3区	715-582	0.48	0.36	0.33
7	3区	724-555	0.31	0.20	0.19
8	3区	725-556	0.48	0.44	0.30
9	3区	727-568	0.37	0.34	0.28
10	2区	726-476	0.49	0.34	0.37
11	2区	725-462	0.52	0.46	0.19
12	5区	714-481	0.28	0.21	0.11
13	5区	715-478	0.30	0.27	0.23
14	5区	712-478	0.24	0.24	0.12
15	5区	709-480	0.30	0.26	0.42
16	5区	707-480	0.18	0.17	0.28

第８節　旧石器時代の調査

福沢新田遺跡は全域が台地上に位置するので旧石器の出土が予想された。そのため、各調査区で試掘調査を行ったところ、３カ所で旧石器が各１点ずつ出土した。それぞれの地点については、周囲に範囲を広げて調査したが、いずれからもその他の遺物は出土しなかった。

ロームはⅠ区が最も良好に堆積していたので、ここを基本土層として各区の土層を注記することにした。その基本土層は以下の通りである。

Ⅰ　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　いわゆるローム漸移層。しまりなく比較的やわらかい。

Ⅱ　黄褐色土（10YR5/6）　いわゆるソフトローム層。部分的に固くしまったハードロームが見られる。２～３㎜の白色粒が若干含まれる。浅間白糸軽石（Ａｓ－ＳＰ）か。

Ⅲ　褐色土（10YR4/6）　灰黄褐色（10YR5/2）の細かい砂粒状の固まりと非常に固くしまったブロックを含む。ＢＰ相当層と思われる。

Ⅳ　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　若干ＢＰを含む。やや粘性あり。下部はにぶい黄褐色（10YR4/3）に漸移変化する。

Ⅴ　暗褐色土（10YR4/3）　いわゆる暗色帯。粘性が強い。

Ⅵ　明黄褐色粘質土（10YR6/6）　粘性が強い。土の密度は高い。

これらの土層は、遺跡東側に行くにつれて地下水の影響を受けて変質していく。各区の土層が基本土層と異なる場合には、図の中に基本土層との異同を記述することにした。

Ⅰ区では13カ所のトレンチで試掘調査を行い、そのうち２カ所で遺物が出土した（第85図）。それぞれ出土したトレンチを拡張して調査を行ったが、いずれも他に遺物は出土しなかった。

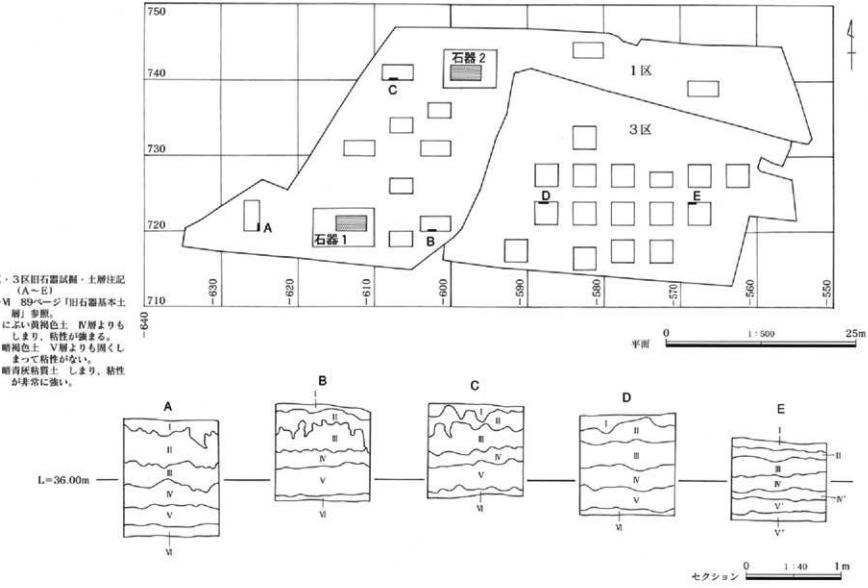
石器１（第87図、ＰＬ.38）は黒色頁岩製の縦長剥片である。Ⅲ層下部から出土した。断面三角形で厚手であり、右側縁に帯状に自然面を残している。打面は剥離面である。左右の縁辺部に光沢痕があり、使用によるものと思われる。長さ10.5㎝、幅3.1㎝、厚さ1.6㎝、重さ63.8ｇ。

石器２（第88図上、ＰＬ.38）はチャート製のやや不整形な縦長剥片である。Ⅲ層下部から出土した。断面は剥離面で調整されている。右側縁下半に微細な剥離痕があり、使用によるものと思われる。長さ3.3㎝、幅1.3㎝、厚さ0.65㎝、重さ3.3ｇ。

２区では５カ所の試掘調査を行い、１カ所から石器（石器３）が出土した（第86図）。ここも拡張調査を行ったが、その他の遺物は出土しなかった。

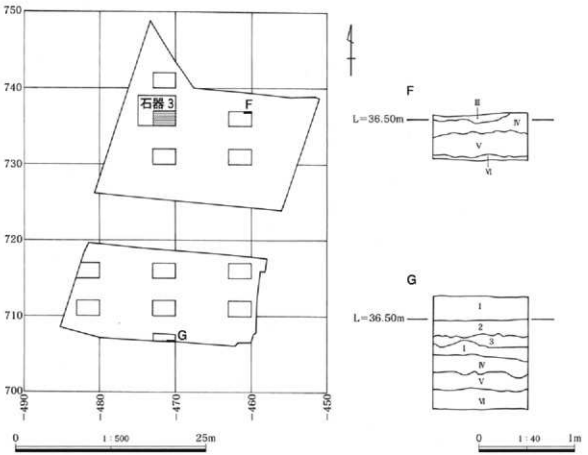
石器３（第88図下、ＰＬ.38）は黒曜石製の縦長剥片である。Ⅲ層とⅣ層との境界付近から出土した。下部が欠損している。打面は剥離面である。縦断面を見ると、打点側は薄く、下端が厚くなっている。左側縁下半に微細な剥離痕がある。ただし実測図に記入したものはガジリ痕である。長さ5.4㎝、幅2.3㎝、厚さ0.95㎝、重さ11.1ｇ。

３区では16カ所、５区では６カ所の試掘調査をおこなった。５区ではその他土層の確認のために調査区南壁中央に深掘りを入れたが、いずれからも遺物の出土はなかった。この地区はやや低地に位置しているらしく、ロームにも地下水の影響が見られた。石器の出土が見られないのは、それも要因の一つであると思われる。



1区・3区旧石器試掘・土層注記（A～E）
Ⅰ～Ⅵ 89ページ「旧石器基本土層」参照。
Ⅳ′ にぶい黄褐色土 Ⅳ層よりもしまり、粘性が強まる。
Ⅴ′ 暗褐色土 Ⅴ層よりも固くしまって粘性がない。
Ⅴ″ 暗青灰粘質土 しまり、粘性が非常に強い。

第85図 1区・3区旧石器試掘トレンチ配置図・土層柱状図



2区旧石器試掘土層注記（F）

Ⅲ　黄褐色土（10YR5/6）　軽石（白色）のような粒子を多量に含む。YPに相当するか、ハードロームブロック（BP）を含むものにあたるらしい。緻密な堆積である。

Ⅳ　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　白色粒子を少量含む。きわめて粘性の強い強堅な堆積のローム土。

Ⅴ　褐色土（10YR4/6）　黄褐色粒子を含む。チャート小礫を全体に含み、暗色帯相当と考えられる。

Ⅵ　黄褐色土（10YR2/3）　白色粒子を少量含む。粘性の強いローム土。堆積は強堅である。

5区旧石器試掘土層注記（G）

1　表土

2　黒褐色土（10YR2/3）　旧耕作土。わずかな白色軽石と少量のローム粒を含む。堆積は緻密である。

3　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒をごくわずかに含む黒ボク土。堆積は緻密である。

Ⅰ　暗褐色土（10YR3/4）　3層の土と下層のローム土（にぶい黄褐色10YR5/4）が混入する土層。（漸移層）

Ⅳ　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　にぶい黄褐色（10YR5/4）ローム土層に灰白色（10YR7/1）の粘性のあるローム土のブロックが混入する層、堆積は極く緻密で粘性が強い。

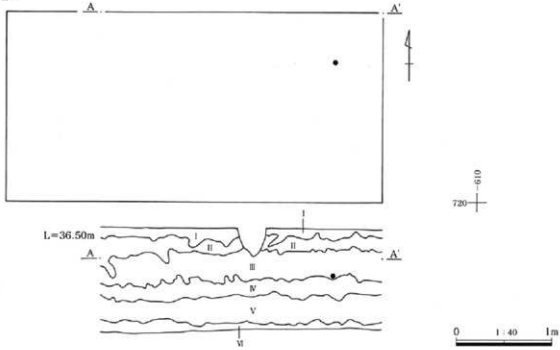
Ⅴ　にぶい黄褐色土（10YR5/3）黄色（黄褐色10YR5/8）ローム粒を1％ほど含む。所々暗色（10YR5/4）を呈する所がある。チャートの細片が、この層の中にまんべんなく含まれる。（チャートの存在により暗色帯に相当すると考えられる）

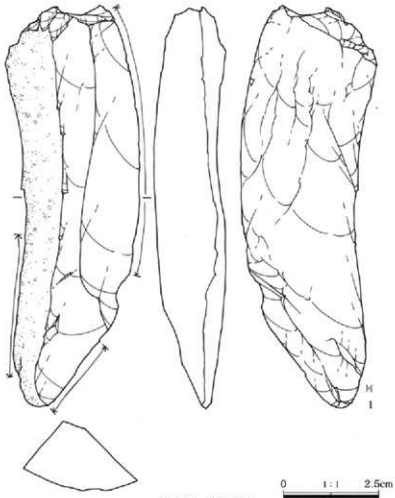
Ⅵ　黄褐色土（10YR5/8）　粘性の強いローム土。にぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する部分がある。

※Ⅳ～Ⅵ　地下水位が高く、地下水の影響を受けて、台地のローム土と様子が異なる。マンガン凝集が全体にみられる。

第86図　2区・5区旧石器試掘トレンチ配置図・土層柱状図

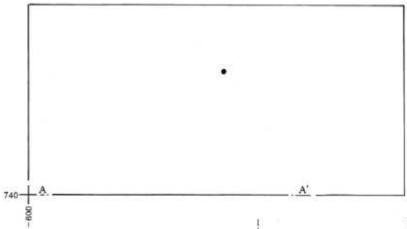
旧石器１

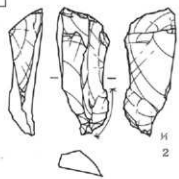




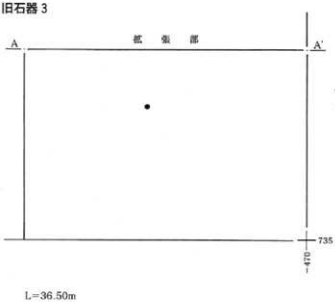
第87図　旧石器１

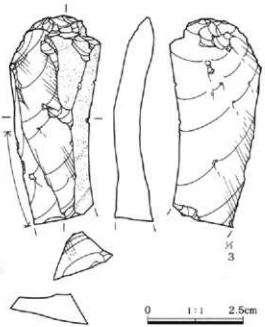
旧石器２





旧石器３





旧石器３出土地点土層

Ⅲ　黄褐色土（10YR5/6）　軽石（白色）のような粒子を多量に含む。ＹＰに相当するか、ハードロームブロック（ＢＰ）を含むものにあたるらしい。緻密な堆積。

Ⅳ　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　白色粒子を少量含む。きわめて粘性の強い強堅な堆積のローム土。

Ⅴ　褐色土（10YR4/6）　黄褐色粒子を含む。チャート小礫を全体に含み、暗色帯相当と考えられる。

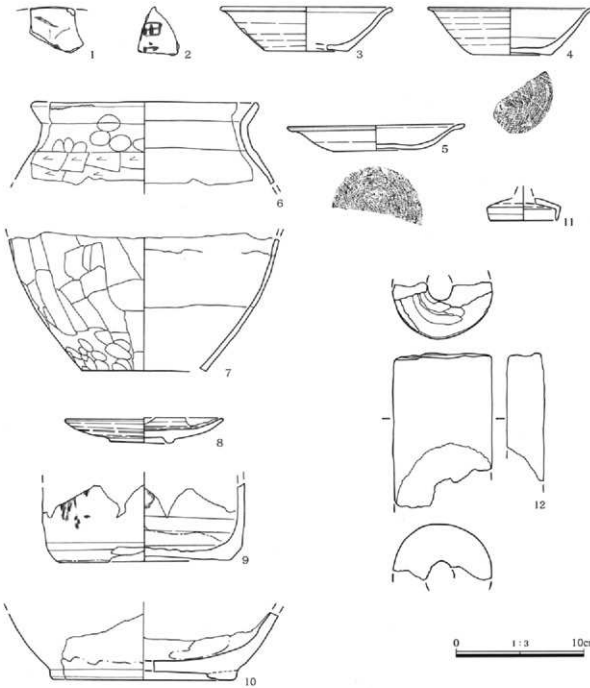
Ⅵ　黄褐色土（10YR2/3）　白色粒子を少量含む。粘性の強いローム土。堆積は強堅である。

第88図　旧石器２・３

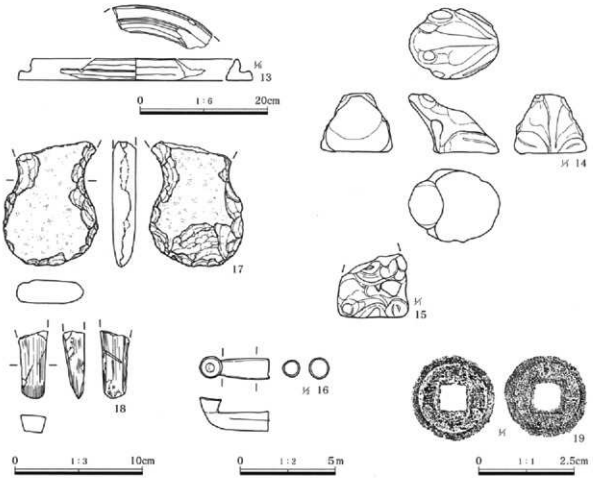
第９節　遺構外出土の遺物

遺構面が比較的浅く、多くの攪乱が見られたため、表土にも多くの遺物が含まれていた。以下、それらの遺物を報告する。

１～７・11の遺物は古代の集落に関わるものである。１・２は墨書土器である。いずれも残画であるが、１は「足」の下半分、２は「田ヽ」であり、ウ冠の下は欠損している。11はごく小破片であるが、須恵器小壺の蓋であると思われる。酷似したものが



第89図　遺構外出土の遺物（１）



第90図　遺構外出土の遺物（2）

7号溝から出土しており（7号溝の41・第61図）、おそらく同一個体と思われる。

8～10・12～16・18・19は近世以降の遺物である。本遺跡からはこの時期の溝が数多く見られるので、それに関わるものであろう。12の土製品は用途不明であるが、7号溝、11号溝から類似したものが出土している。14・15は土人形である。14はカエルで、きわめて写実的な作りである。背面に緑の塗料が塗られた痕跡があり、アマガエルを意図したものであろう。15は大黒様で、薄い作りである。いずれも型を用いて作られていると思われる。19の銅銭は、錆のため左右の「通宝」以外の銭文が判読できない。

第4表　福沢新田遺跡遺物観察表（出土位置の＋○○は床面からの高さを表す）

1号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第7図 P L.31	1	土師器 坏	＋4～8 底部のみ	口径　－ 底径　6.0 高さ　(2.5)	①砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	底部・体部外面篦削有。底部・体部内面撫で。底部内面、体部外面に墨書。いずれも判読不能。	
第7図 P L.31	2	須恵器 高台付壺	南東隅床面 体部1/4～底部1/2	口径　－ 底径　(7.11) 高さ　4.6	①やや粗い砂粒を含む ② ③にぶい黄橙	轆轤成形。高台が剥離、欠損。内面体部に墨書。判読不能。	9世紀前半
第7図 P L.31	3	土製品 土錘	＋18 ほぼ完形	長さ　4.8 径1.4×1.5 重さ	①細砂粒を少量含む。 ②やや軟質 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	手捏ねで指頭痕がみられる。粘土の接合痕が表面で観察できる。	

2号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第9図 P L.31	1	土師器 坏	＋2 ほぼ完形	口径　12.2 底径　6.9 高さ　4.1	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③明赤褐(5YR5/6)	外面底部～胴下半篦削り。体部中位指頭押さえ。口縁部～内面底部撫で。内面全体と外面口縁部付近に炭化物が付着	
第9図 P L.31	2	須恵器 高台付壺	＋9 口縁部1/8～底部1/8	口径　(12.5) 底径　(6.0) 高さ　5.6	①細砂粒 ②還元堅 ③灰(5Y6/1)	轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。	
第9図 P L.31	3	須恵器 皿	＋4 口縁部1/2～底部1/2	口径　(14.6) 底径　(7.0) 高さ　2.2	①粗砂粒・白色小礫を含む ②還元堅 ③灰(5Y5/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。	
第10図 P L.31	4	土師器 甕	＋4～6 口縁部～底部1/2	口径　19.6 底径　(3.6) 高さ　16.8	①細砂粒を含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	外面底部～胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。胴部～底部指撫で。	
第10図 P L.31	5	土師器 甕	＋22 口縁部1/2～胴上部1/2	口径　(21.0) 底径　－ 高さ　(16.2)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5 YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部に胴部篦削り時の篦の当たりがみられる。指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。胴部指撫で。	
第10図 P L.31	6	土師器 甕	竈＋10 口縁部1/3～胴上部1/6	口径　(20.0) 底径　－ 高さ　(9.0)	①細砂粒・赤色粒を含む ②良好 ③橙(7.5YR7/6)	外面胴部篦削り。外面頸部指頭押さえ後撫で。外面口縁部～内面頸部撫で。	
第10図 P L.31	7	土師器 甕	＋2～11 口縁部1/2～胴上部1/4	口径　(20.0) 底径　－ 高さ　(8.2)	①細砂粒を含む ②良好 ③橙(5 YR6/6)	外面胴部篦削り。一部篦削り時に指頭が残る。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面胴部撫で。	
第10図 P L.31	8	土師器 甕	＋5 口縁部1/4～胴上部1/8	口径　(21.0) 底径　－ 高さ　(10.3)	①細砂粒を含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面胴部撫で。	
第10図 P L.31	9	土師器 甕	竈北＋13 口縁部1/4～胴部上半1/4	口径　(20.4) 底径　－ 高さ　7.2	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部内外面撫で。内面胴部篦撫で。	
第10図 P L.31	10	土師器 甕	竈＋26～29 口縁部1/4～頸部1/4	口径　(18.0) 底径　－ 高さ　3.5	①細砂粒をやや多く含む。 ②良好 ③橙7.5YR6/6	頸部内外面共撫で。頸部外面の一部に胴部の篦削り時の篦削りの痕跡。	
第10図 P L.31	11	土師器 甕	竈土 胴下半1/4～底部1/2	口径　－ 底径　(3.4) 高さ　(4.8)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③にぶい黄橙(7.5YR6/6)	外面底部～胴部篦削り。内面胴部篦撫で。	
第10図 P L.31	12	土師器 小型甕	＋7～17 口縁部1/4～胴部1/4	口径　(12.4) 底径　－ 高さ　(9.2)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。内面胴部指撫で	
第10図 P L.31	13	縄文土器 深鉢	竈北＋10 胴部破片	残存高　6.1 厚さ　0.8	①やや粗い砂粒を多く含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)		中期後半。
第10図 P L.31	14	縄文土器 深鉢	竈土 胴部破片	残存高　4.4 厚さ　0.9	①やや粗い砂粒を含む。 ②良好 ③黄橙(10YR7/6)	棒状工具による沈線区画。区画内縄文を施文。縦方向に1条隆帯を貼り付け。隆帯上に列点文を施す。	後期称名寺。

3号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第13図 P L.32	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/2～ 底部1/3	口径 12.0 底径 (7.0) 高さ (3.7)	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	底部は丸底気味。外面底部篦削り。胴部指頭押さえ。口縁部から内面底部撫で。	
第13図 P L.32	2	土師器 坏	東壁 口縁部1/4～ 底部1/4	口径 (12.0) 底径 (7.0) 高さ (3.4)	①細砂粒を少量含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	外面胴下部～底部篦削り。胴中央指頭押さえ。口縁部～内面底部まで撫で。	
第13図 P L.32	3	土師器 坏	＋18 口縁部1/4～ 底部1/4	口径 (11.5) 底径 (7.8) 高さ 3.0	①細砂粒 ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	外面底部篦削り。胴部指頭押さえ。口縁部～底部内面指撫で。内面胴部指頭押さえ後指撫で。	
第13図 P L.32	4	須恵器 坏	＋5 口縁部1/8～ 底部2/3	口径 (13.4) 底径 5.5 高さ 3.5	①やや粗い砂粒を含む ②還元焔 ③灰(5Y6/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。	
第13図 P L.32	5	須恵器 坏	P 1・北壁 ほぼ完形	口径 12.4 底径 6.0 高さ 3.5	①粗砂粒を含む ②還元焔 ③灰(N5/)	轆轤右回転。底部回転糸切り。	
第13図 P L.32	6	土師器 甕	掘方・北壁 口縁部1/3～ 胴上部1/4	口径 (19.2) 底径 － 高さ (6.9)	①細砂粒を含む ②良好 ③明赤褐色(5YR5/6)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面胴部撫で。	
第14図 P L.32	7	土師器 甕	東壁＋2～9 口縁部～胴 下部	口径 19.6 底径 － 高さ 23.3	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR7/6)	外面胴部篦削り。頸部～内面胴部撫で。	
第14図 P L.32	8	土師器 甕	東壁＋9 口縁部～胴 部	口径 19.9 底径 － 高さ (21.4)	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR7/4)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面胴部撫で。	
第14図 P L.32	9	土師器 甕	南壁際＋7～ 13、東壁＋7 ～18 口縁部7/8～ 胴上部3/4	口径 19.0 底径 － 高さ (21.8)	①細砂粒含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。胴部頸部直下指頭押さえ後撫で。胴部篦撫で・指撫で。	
第14図 P L.32	10	土師器 甕	＋13～15 胴下半1/8～ 底部	口径 － 底径 3.6 高さ (5.5)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5.5YR6/6)	外面底部～胴下部篦削り。内面胴部に一部篦撫での痕跡がみられる。	
第14図 P L.32	11	土師器 甕	P 4 胴下部1/2～ 底部	口径 － 底径 (4.5) 高さ (8.1)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③外-灰黄褐色(10YR4/2) 内-にぶい黄橙(10YR6/3)	外面底部～胴下部篦削り。内面胴部篦撫で・指撫で	
第13図 P L.32	12	土師器 台付甕	＋3～13 口縁部1/3～ 胴下部	口径 (11.2) 底径 － 高さ (16.2)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	脚部内外面雑な撫で。胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。胴部指撫で。	
第14図 P L.32	13	須恵器 甕	＋25 底部2/3	口径 － 底径 (13.0) 高さ (4.3)	①やや粗い砂粒 ②還元焔 ③内-灰黄褐(10YR4/2) 外-黄灰(2.5Y6/1)	輪積成形。底部切り離し後高台貼り付け。外面に自然釉がゆかる。	
第14図 P L.32	14	石製品 砥石	東壁掘方 両端欠	長さ (6.4) 幅 3.5 厚さ 2.7	砥沢石	4面とも使用。	

4号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第16図 P L.33	1	土師器 甕	北西隅床面 口縁部1/6～ 胴上部1/6	口径 (16.0) 底径 － 高さ (8.9)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	外面胴部篦削り。頸部内外面指頭押さえ後撫で。口縁部内外面撫で。胴部内面指撫で。	
第16図 P L.33	2	土師器 甕	竈 口縁部～頸 部1/8	口径 (18.4) 底径 － 高さ 4.0	①細砂粒を含む ②良好 ③明赤褐(5YR5/6)	頸部外面胴部篦削り時の渦のあたり。内外面とも撫で。	

4号住居（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第16図 PL.33	3	土師器 甕	埋土・竈・ 胴下部1/4～ 底部1/2	口径　－ 底径　(4.0) 高さ　(5.2)	①細砂粒を含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面底部～胴部篦削り。内面胴部～底部篦撫で・指撫で。	

5号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第17図 PL.33	1	土師器 甕	竈 胴部1/2～底 部1/2	口径　－ 底径　(4.4) 高さ　(4.8)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③明赤褐(5YR5/8)	外面底部～胴部下半不明瞭な篦削り。内面胴部整形不明。	
第17図 PL.33	2	須恵器 蓋	埋土 口縁部1/8～ 胴部1/8	口径　18.0 底径　－ 高さ　(2.6)	①やや粗い砂粒 ②やや酸化焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤右回転。返り部分を折り返す。	
第17図 PL.33	3	石製品 砥石	北壁際＋2 上端欠	長さ　(4.7) 幅　4.1 厚さ　2.3	延沢石	5面とも使用。上端に穿孔がある。	

8号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第21図 PL.33	1	土師器 坏	北壁際周講 内 口縁部～底 部1/2	口径　(11.7) 底径　(7.0) 高さ　3.8	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい赤褐(5YR4/4)	二次被熱で一部脆い。口縁部外面から内面底部まで撫で。外面胴部指頭押さえ。外面底部篦削り。	
第21図 PL.33	2	土師器 坏	覆土 口縁部1/8～ 底部1/4	口径　(13.0) 底径　(9.0) 高さ　2.5	①細砂粒を少量含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	外面底部篦削り。胴部指頭押さえ。外面口縁～内面底部撫で。	
第21図 PL.33	3	鉄製品 鉄斧	北壁際 ほぼ完形	長さ　(10.0) 刃部幅　(5.1) 〃　厚さ0.9		袋状鉄斧。基部幅3.7cm、同厚さ1.9cm。刃先を欠損。	

9号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第22図 PL.33	1	土師器 坏	竈北床面 口縁部3/4～ 底部	口径　11.9 底径　6.9 高さ　4.1	①細砂粒を含む ②良好 ③明赤褐(2.5YR5/6)	外面体部下半～底部篦削り。体部中央指頭押さえ。口縁部内外面撫で。体部～底部指撫で。	
第22図 PL.33	2	須恵器 坏	北壁際＋1 ほぼ完形	口径　13.2 底径　6.0 高さ　4.5	①細砂粒を含む ②酸化焔 ③内-橙(5YR6/6) 外-黄褐(10YR4/2)	底部回転糸切り。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	
第22図 PL.33	3	須恵器 坏	覆土 口縁部1/8～ 底部	口径　(13.4) 底径　5.6 高さ　3.6	①やや粗い砂粒を含む ②還元焔 ③黄灰(2.5Y5/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁は外反する。	
第22図 PL.33	4	須恵器 坏	掘方 口縁部1/4～ 底部1/4	口径　(13.0) 底径　(6.2) 高さ　3.7	①やや粗い砂粒を少量含む ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。口唇部が水平近く外反する。	
第22図 PL.33	5	須恵器 坏	西壁側床面 口縁部1/4～ 底部1/3	口径　(12.8) 底径　(6.6) 高さ　3.6	①細砂粒・白色粒を含む ②還元焔 ③灰(10Y4/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁部は外反しない。	
第22図 PL.33	6	須恵器 坏	竈北床面 口縁部1/2～ 胴部1/2	口径　(13.0) 底径　－ 高さ　(3.5)	①細砂粒・白色粒を含む ②還元焔 ③灰(10Y5/2)	轆轤右回転。体部はわずかに丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。	
第24図 PL.33	7	須恵器 皿	南壁際＋3 口縁部1/4～ 底部1/2	口径　(15.1) 底径　6.7 高さ　2.5	①粗砂粒・白色小礫含む ②還元焔 ③灰(7.5Y5/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。	

9号住居（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第24図 P L.33	8	須恵器 皿	北東隅+1 口縁部1/3～ 底部3/4	口径 (14.7) 底径 7.0 高さ 2.1	①やや粗い砂粒を含む ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。口縁が片口状に歪むところがある。	
第24図 P L.33	9	土師器 坏	覆土 底部小破片	口径 － 底径 － 高さ －	①砂粒・赤色粒子含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面底部篦削り。内面底部撫で。内面に墨書。判読不能。「奉」の略字か。	
第24図 P L.33	10	土師器 小型甕	覆土 口縁部1/4～ 胴上部1/4	口径 (13.4) 底径 － 高さ (5.0)	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	外面胴部篦削り。頸部撫で後胴部篦削り時のあたり。口縁部～頸部内面撫で。胴部指撫で。	
第24図 P L.33	11	土師器 甕	覆土 口縁部1/8～ 胴部上半1/8	口径 (17.4) 底径 － 高さ (11.8)	①やや粗い砂粒を多く含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。内面胴部篦撫で。	
第24図 P L.33	12	土製品 羽口	竈前+3 両端欠	長さ (11.6) 径 8.7 孔径 2.0	①粗砂・小礫を多く含む ②二次被熱で脆い ③にぶい黄橙(10YR6/3)	両端が欠。先端側には鉄分が付着。	

10号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第25図 P L.33	1	土師器 小型甕	覆土 口縁部小破片	口径 (9.0) 底径 － 高さ (2.1)	①細砂粒を含む ②良好 ③灰褐(7.5YR4/2)	口縁部内外面とも撫で。	

11号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第26図 P L.33	1	須恵器 坏	P1 口縁部1/8～ 底部1/2	口径 (12.8) 底径 (7.0) 高さ 3.6	①細砂粒を含む ②一部酸化焔 ③灰(10Y6/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁部は外反しない。	

12号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第27図 P L.34	1	須恵器 坏	覆土 口縁部1/6～ 底部1/6	口径 (12.0) 底径 (6.2) 高さ 3.4	①細砂粒を含む ②還元焔 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤成形。底部回転糸切り後外周篦整形。体部はわずかに丸みをもち、口縁部は外反しない。	

13号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第28図 P L.34	1	須恵器 坏	竈床面 口縁部1/2～ 体部1/2	口径 (13.4) 底径 － 高さ (3.5)	①やや粗い砂粒を含む ②酸化焔 ③にぶい橙(7.5YR5/4)	轆轤右回転。口唇部が水平近くまで外反する。土師器的な様相。	
第28図 P L.34	2	須恵器 坏	床下1土坑 口縁部1/2～ 底部1/2	口径 12.2 底径 6.4 高さ 3.5	①砂粒・白色粒子を含む ②還元焔 ③(7.5Y5/1)	轆轤右回転。回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁部は外反しない。	
第28図 P L.34	3	土師器 皿	掘方 口縁部1/2～ 胴部1/2	口径 (13.2) 底径 － 高さ (2.0)	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③にぶい橙 (7.5YR5/4)	底部は丸底。外面底部篦削り。外面口縁部～内面撫で。	
第28図 P L.34	4	須恵器 皿	ピット内 口縁部1/3欠損	口径 14.2 底径 7.2 高さ 2.9	①3mm前後の小石含む ②還元焔 ③黄灰(2.5YR6/1)	底部回転糸切り後高台貼り付け。	
第28図 P L.34	5	土師器 甕	埋土・掘方 口縁部7/8～ 胴上部3/4	口径 19.0 底径 － 高さ 12.3	①細かい砂粒を含む ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。内面胴部篦撫で。	
第28図 P L.34	6	土師器 台付甕	竈掘方 台部1/3のみ残存	口径 － 底径 (9.0) 高さ (2.1)	①細砂粒を含む ②良好 ③明赤褐(2.5YR5/8)	外面指頭押さえ後撫で。内面撫で。	

14号住居

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第30図 PL.34	1	土師器 小型甕	竈 口縁部1/4～ 胴上部1/4	口径 (12.0) 底径 － 高さ (6.2)	①粗砂粒を含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面胴部篦削り。内外面口縁部～頸部撫で。 外面頸部と胴部境界明瞭に区別。	

7号土坑

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第36図 PL.34	1	焙烙	埋土 口縁部1/8～ 体部1/8	口径 (38.0) 底径 (34.0) 高さ 5.3	①細砂粒を含む。 ②やや軟質 ③黄灰(2.5Y4/1)	底部～体部下位型作り。体部上位～口縁部紐作り。耳は小片のため不明	
第36図 PL.34	2	縄文土器 深鉢	埋土 胴部破片	残存高 (3.2) 厚さ 0.6	①粗砂粒を多く含む。 ②良好 ③明黄褐(10YR6/6)	棒状工具で沈線の渦巻き。区画内に縄文を充填。	縄文時代後期初頭

16号土坑

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第38図 PL.34	1	土師器 台付甕	埋土 台部のみ1/2	口径 － 底径 (9.6) 高さ (4.5)	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	内外面とも指撫で。	

48号土坑

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第45図 PL.34	1	かわらけ 皿	埋土 口縁部2/3～ 底部1/3	口径 9.8 底径 6.0 高さ 1.9	①細砂粒を含む ②やや軟質 ③にぶい褐(7.5YR6/3)	轆轤成形。やや厚手の作り。内面にすす付着。 灯明皿として使用。	

86号土坑

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第47図 PL.34	1	陶器 皿	埋土 底部のみ	口径 － 底径 6.8 高さ (1.5)	①細砂粒含む ②良好 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤成形。高台は削り出しか。	
第47図 PL.34	2	軟質陶器 火鉢	埋土 口縁部1/5	口径 (23.8) 底径 － 高さ (6.6)	①砂粒含む ②やや軟質 ③褐灰(10YR4/1)	平行する沈線の間に波状文を施す。内面は横撫で。	

114号土坑

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第49図 PL.34	1	軟質陶器 内耳鍋	埋土 口縁・体部 1/8～底部わ ずかに残存	口径 (32.0) 底径 (24.8) 高さ 7.3	①砂粒やや多い ②やや軟質 ③黄灰(2.5Y5/1)	器壁厚い。体部は紐作りか。	

2号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第52図 PL.34	1	須恵器 坏	埋土 底部・体部 小破片	口径 － 底径 (6.0) 高さ 1.7	①砂粒・白色粒含む ②還元炮 ③にぶい黄(2.5Y6/3)	轆轤成形。底部回転糸切り。底部外面に墨書あり。判読不能。	
第52図 PL.34	2	土製品 土製円板	埋土	長径 3.4 短径 3.3 厚さ 0.6	①細砂粒を少量含む ②良好 ③灰褐(7.5YR4/2)	近世土器焙烙の底部破片を使用。	

2号溝（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第52図 PL.34	3	土製品 土製円板	埋土	長径　3.3 短径　3.2 厚さ　0.7	①細砂粒を少量含む ②良好 ③黒褐(2.5Y3/1)	近世土器焙烙の底部破片を使用。	
第52図 PL.34	4	土製品 土製円板	埋土	口径　3.3 短径　3.1 厚さ　0.7	①細砂粒を少量含む ②良好 ③灰褐(7.5YR4/2)	近世土器焙烙の底部破片を使用。	

5号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第54図 PL.35	1	かわらけ 皿	7号溝交差 付近埋土 口縁部1/3～ 底部1/3	口径　(9.0) 底径　(6.8) 高さ　2.0	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/4)	輪轆成形。底部回転糸切り。底部から口縁部は肉厚である。	
第54図 PL.35	2	陶器 壺	8号溝交差 付近埋土 口縁部1/4～ 体部～底部	口径　(9.7) 底径　(4.8) 高さ　6.0		底部～体部下半が轆轤。体部上部～口縁部～内面長石釉。高台付。	
第54図 PL.35	3	近世土器 擂鉢	7号溝交差 付近埋土 口縁部1/16 ～胴部1/8	口径　－ 底径　－ 高さ　(11.8)	①細砂粒・赤色粒を含む。 ②やや軟質 ③明赤褐（5YR5/6)	輪轆成形。内面に5＋α条の卸目。	
第54図 PL.35	4	焼塩	7号溝交差 付近埋土 口縁部1/8～ 体部1/8	口径　(34.0) 底径　(31.6) 高さ　5.5	①細かい砂粒を含む。 ②良好 ③黒(7.5YR2/1)	底部～体部下位型作り・輪轆調整。体部上位紐作り。体部内面に耳の痕跡確認。内外面横し。	
第54図 PL.35	5	焼塩 小片	埋土	口径　(36.7) 底径　(32.0) 高さ　5.5	①やや粗砂粒を多く含む ②やや軟質 ③暗灰黄(2.5Y5/2)	底部～体部下位型作り・輪轆調整。口縁部～体部上位紐作り。	
第54図 PL.35	6	焼塩	7号溝交差 付近埋土 口縁部1/4～ 底部わずか 残存	口径　(35.6) 底径　(32.8) 高さ　5.8	①やや粗い砂粒を含む。 ②良好 ③オリーブ黒(5Y3/1)	底部～体部下位型作り。体部上位～口縁部紐作り。耳2点。内外面横し。	
第54図 PL.35	7	須恵器 坏	720-595G 埋土 口縁部1/5～ 底部1/3	口径　(13.0) 底径　(7.2) 高さ　3.4	①細砂粒を含む ②還元硬 ③灰オリーブ(5Y5/2)	輪轆右回転。底部回転糸切り。体部はわずかに丸みをもち、口縁は外反しない。	
第54図 PL.35	8	土製品 不明	715-575G 埋土 片側欠	長さ　(18.8) 最大幅　7.2 最大厚　4.2	①粗砂粒含む ②良好 ③灰黄(2.5Y6/2)	やや扁平な棒状の土製品。表面は指撫で調整。	
第54図 PL.35	9	土製品 土錘	720-585G 埋土 はぼ完形	長さ　3.3 径1.0×0.9	①細砂粒を含む ②やや軟質 ③浅黄(2.5Y7/3)	手捏ねで指頭痕がみられる。	
第54図 PL.35	10	縄文土器 深鉢	埋土 口縁部破片	残存高 (3.8) 厚さ　0.6	①粗い砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/4)	波状口縁。棒状工具による沈線区画。区画内縄文を充填。	縄文時代後期初頭
第54図 PL.35	11	石器 石鏃	埋土 完形	長さ　2.6 幅　1.5 厚さ　0.5	チャート	小型の有脚石鏃。	

7号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第57図 PL.35	1	擂鉢	遺物集中部 南側 口縁部3/4～ 底部完存	口径　26.8 底径　14.3 高さ　12.1	①細砂粒を含む ②やや軟質 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	片口の注口。内面底部・体部に5＋α条の卸目。輪轆調整。	

７号溝（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第57図 ＰＬ.35	2	焙烙	遺物集中部 北側 口縁部～底部1/2	口径　29.0 底径　(26.4) 高さ　5.7	①細砂粒を含む ②良好 ③暗オリーブ褐(2.5Y3/3)	型作り・輪鐶整形。体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面焼し。耳なし。	
第57図 ＰＬ.35	3	焙烙	遺物集中部 中央～南側 口縁部1/5～体部1/5	口径　(33.2) 底径　(30.0) 高さ　5.8	①やや粗い砂粒を含む ②やや軟質 ③灰黄褐(10YR4/2)	体部下位～底部型作り・輪鐶調整。体部上位紐作り。体部内面に耳貼り付けの痕跡がわずかに確認。	
第57図 ＰＬ.35	4	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部1/8～底部わずか	口径　(35.8) 底径　(33.0) 高さ　5.6	①細砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(5Y3/1) 内外面焼し。	型作り。体部～底部型作り。体部中位～口縁部紐作り、輪鐶整形。耳１点痕跡を確認。小片のため他不明。	
第57図 ＰＬ.35	5	焙烙	720-560Ｇ 埋土 口縁部1/6～底部1/6	口径　(36.8) 底径　(33.0) 高さ　5.4	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③オリーブ黒(10Y3/1)	底部～体部下位型作り・輪鐶調整。内外面焼し。耳は現存部分では確認できない。	
第57図 ＰＬ.35	6	焙烙	遺物集中部 中央 口縁部1/4～体部1/4、底部わずか残存	口径　(37.1) 底径　(33.0) 高さ　5.1	①細砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐(10YR5/2)	底部～体部下位型作り。体部上位～口縁部紐作り。破片のため耳不明。	
第57図 ＰＬ.35	7	焙烙	遺物集中部 北側 口縁部1/8～底部1/8	口径　(35.4) 底径　(32.0) 高さ　5.5	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③暗灰黄(2.5Y5/2)	型作り・輪鐶整形。体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面焼し。	
第57図 ＰＬ.35	8	焙烙	遺物集中部 北側 口縁部・体部完形、底部1/3欠	口径　36.6 底径　32.6 高さ　5.4	①やや細かい砂粒を含む ②良好 ③灰オリーブ(5Y5/2)	型作り・輪鐶調整。体部外面下位型作り痕。体部内外面紐作り痕。耳無。内外面に焼し。	
第57図 ＰＬ.35	9	焙烙	遺物集中部 中央 口縁部1/8～体部1/8。底部はわずかに残存	口径　(32.0) 底径　(27.8) 高さ　5.5	①細砂粒を含む ②良好 ③灰褐(5YR5/2)	底部～体部下位型作り・輪鐶調整。体部上位紐作り。耳１点残存。	
第57図 ＰＬ.35	10	焙烙	遺物集中部 中央 口縁部1/8～体部1/8	口径　(34.8) 底径　(32.0) 高さ　5.6	①細砂粒を含む ②やや軟質 ③灰黄褐(10YR4/2)	底部～体部下位型作り。体部上位紐作り。耳１点残存。他不明。	
第58図 ＰＬ.35	11	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部1/8～底部わずか	口径　(36.7) 底径　(33.3) 高さ　5.9	①細砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(7.5Y3/1)	底部～体部下位型作り・輪鐶調整。内外面焼し。耳１点残存。	
第58図 ＰＬ.35	12	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部1/4～体部1/4	口径　(33.6) 底径　(32.0) 高さ　5.8	①細砂粒を含む ②良好 ③黒褐(2.5Y3/1)	底部～体部下位型作り。体部上位紐作り。耳１点残存。内外面焼し。	
第58図 ＰＬ.35	13	焙烙	埋土 口縁部1/6～体部1/6。底部わずか残存	口径　(36.8) 底径　(34.2) 高さ　5.6	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/3)	底部～体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面焼し。耳１点残存。他不明。	

7号溝（つづき）

棟図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第58図 ＰＬ.35	14	土師	遺物集中部 中央 口縁部1/3～ 底部こくわずか残存	口径 (37.0) 底径 (32.0) 高さ 5.5	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	底部～体部下位型作り・輪積調整。耳１点残存。	
第58図 ＰＬ.35	15	土師	遺物集中部 中央 口縁部1/8～ 体部1/8	口径 (33.8) 底径 (31.0) 高さ 5.4	①細砂粒を含む ②良好 ③灰黄褐(10YR4/2)	底部～体部下位型作り。体部上位紐作り。耳１点。	
第58図 ＰＬ.36	16	土師	遺物集中部 中央～北側 口縁部1/4～ 体部1/4～底部1/4	口径 (35.0) 底径 (32.0) 高さ 5.6	①細砂粒を含む ②良好 ③黒(7.5Y2/1)	底部～体部下位型作り・輪積調整。耳１点。耳の接合部分の体部が窪む。内外面横し。	
第58図 ＰＬ.36	17	土師	遺物集中部 中央 口縁部1/6～ 底部わずか	口径 (33.6) 底径 (32.0) 高さ 5.5	①細砂粒を含む ②良好 ③黄灰(2.5Y5/1)	底部～体部下位型作り・輪積調整。体部上位紐作り。耳１点残存。	
第58図 ＰＬ.36	18	土師	遺物集中部 中央 口縁部1/4～ 底部1/8	口径 (36.8) 底径 (33.4) 高さ 5.7	①細砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(7.5Y2/2)	底部～体部下位型作り・輪積調整。体部上位紐作り。内外面横し。耳１点で他不明。	
第58図 ＰＬ.36	19	土師	遺物集中部 中央 口縁部2/3～ 体部2/3底部1/4	口径 (34.8) 底径 (31.3) 高さ 11.2	①細砂粒・粗砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(5Y3/2)	底部～体部下位型作り・輪積成形。体部上位～口縁部紐作り。耳３点。底部外面に調整がみられる。器高が他の焼造に比べ高い。	
第59図 ＰＬ.36	20	土師	遺物集中部 中央～南側 口縁部1/4～ 体部1/4	口径 (35.2) 底径 (32.8) 高さ 5.6	①細砂粒を含む ②良好 ③暗オリーブ灰(2.5GY3/1)	底部～体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面横し。耳１点残存。	
第59図 ＰＬ.36	21	土師	遺物集中部 北側 口縁部1/3～ 底部1/3	口径 (36.0) 底径 (32.6) 高さ 5.7	①細砂粒を含む ②良好 ③黒褐(2.5Y3/1)	底部～体部下位型作り・輪積整形。体部上位紐作り。内外面横し。耳２点でもう１点は欠損部分と思われる。	
第59図 ＰＬ.36	22	土師	遺物集中部 南側 口縁部1/4～ 底部3/4	口径 (36.3) 底径 (32.2) 高さ 5.6	①やや細かい砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(5Y3/1)	型作り・輪積調整。体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面横し。耳１点残存。封面に２点存在したが欠損。底部が変形する。	
第59図 ＰＬ.36	23	土師	遺物集中部 中央 口縁部3/4～ 底部3/4	口径 35.8 底径 32.7 高さ 5.9	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/3)	底部～体部下位型作り・輪積調整。耳は２点現存。１点は欠損部分にある可能性。	
第59図 ＰＬ.36	24	土師	遺物集中部 中央 口縁部3/4～ 底部1/2	口径 36.6 底径 33.4 高さ 5.6	①細砂粒を含む ②良好 ③黒褐(2.5Y1/3)	底部～体部下位型作り・輪積調整。内外面に横し。耳３点。内１点は欠損。	
第59図 ＰＬ.36	25	土師	遺物集中部 南側 口縁部1/2～ 底部3/4	口径 (36.3) 底径 (33.0) 高さ 5.7	①細砂粒を含む ②良好 ③オリーブ黒(5Y1/3)	型作り・輪積成形。体部下位型作り。体部上位紐作り。内外面横し。底部の痕跡から耳３点。	
第60図 ＰＬ.36	26	土師	遺物集中部 南側 口縁部7/8～ 体部7/8～3/4	口径 36.5 底径 32.8 高さ 5.4	①細砂粒を含む ②良好 ③外-黒褐(2.5Y3/4) 内-にぶい黄褐(10YR6/3)	底部～体部下位型作り・輪積調整。体部上位紐作り。耳３点。内外面に横し。	

７号溝（つづき）

掲図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第60図 ＰＬ.36	27	焙烙	遺物集中部 中央～北側 ほぼ完形	口径　36.2 底径　33.0 高さ　5.7	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③灰白(5Y7/2)	型作り・轆轤調整。体部外面下位型作り痕。 体部中位紐作り痕。３点耳有り。	
第60図 ＰＬ.36	28	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部3/4～ 底部	口径　36.0 底径　33.0 高さ　5.7	①やや粗い砂粒を多く含む ②良好 ③黒褐(2.5Y3/1)	底部～体部下位型作り・轆轤調整。体部上位紐作り。内外面に煤し。耳３点。耳と体部の間は体部内面が少し窪む。	
第60図 ＰＬ.36	29	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部3/4～ 底部3/4	口径　34.0 底径　32.3 高さ　5.7	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③褐灰(10YR5/1)	型作り・轆轤整形。体部下位型作り。体部上位紐作り。耳２点残存、１点は底部に痕跡で計３点が確認。	
第60図 ＰＬ.36	30	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部2/3～ 体部2/3～底部	口径　36.8 底径　33.8 高さ　5.2	①細砂粒・粗砂粒を含む ②良好 ③外-オリーブ黒(5Y3/1) 内-オリーブ黒(5Y2/2)	底部～体部下位型作り・轆轤調整。体部上位紐作り。耳２点残存。他１点は底部に痕跡あり。内外面煤し。	
第60図 ＰＬ.36	31	焙烙	遺物集中部 北側 口縁部3/4～ 底部3/4	口径　36.7 底径　34.0 高さ　6.1	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい橙(7.5YR6/3)	型作り・轆轤調整。外面体部に型作り痕。体部上位紐作り痕。耳２点であるが、底部の欠損部分に耳の痕跡あり、計３点	
第61図 ＰＬ.37	32	焙烙	遺物集中部 中央～北側 ほぼ完形	口径　37.3 底径　34.2 高さ　5.7	①細砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄褐(10YR5/4)	底部～体部下位型作り・轆轤調整。耳３点。	
第61図 ＰＬ.37	33	焙烙	遺物集中部 南側 口縁部3/4～ 体部3/4～底部2/3	口径　35.6 底径　31.7 高さ　5.8	①細砂粒・粗砂粒を含む ②良好 ③外-にぶい黄褐(10YR5/3) 内-黒褐(10YR3/1)	底部～体部下位型作り・轆轤調整。体部上位紐作り。耳３点。平面形はやや不正形な円。外面体部上位～内面煤し。	
第61図 ＰＬ.37	34	土師器 坏	725-585Ｇ 口縁部1/4～ 体部1/4	口径　(13.8) 底径　－ 高さ　(3.8)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	外面体下半部篦削り、上半部指頭押さえ。口縁部内外面撫で。内面体部指撫で。	
第61図 ＰＬ.37	35	須恵器 坏	720-565Ｇ 口縁部1/16 ～底部完存	口径　(12.0) 底径　6.2 高さ　4.9	①細砂粒を含む ②酸化焔 ③橙(5YR6/8)	轆轤成形。回転方向不明。底部回転糸切り。やや深い器形。体部は下部にわずかに丸みをもち、口縁は外反しない。	
第61図 ＰＬ.37	36	須恵器 坏	725-585Ｇ 口縁部～体部1/3	口径　(13.8) 底径　－ 高さ　(4.4)	①細砂粒やや多くを含む ②還元焔 ③暗青灰(5PB4/1)	轆轤右回転。体部は丸みをもち、口縁は外反しない。	
第61図 ＰＬ.37	37	土師器 台付甕	遺物集中部 北側 台部のみ1/3	口径　－ 底径　(8.0) 高さ　(2.5)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	内外面とも撫で。	
第61図 ＰＬ.36	38	土製品 不明	遺物集中部 北側 2/3	長さ　33.2 径　7.9×7.6 孔径2.7×2.1	①砂粒・白・赤色粒含む ②やや軟質 ③褐灰(10YR4/1)	筒状の土製品。用途不明。	
第61図 ＰＬ.36	39	土製品 土錘	埋土 完形	長さ　4.3 径1.1×1.0 重さ	①細砂粒を含む。 ②やや軟質 ③にぶい黄橙(10YR7/3)	手捏ねであるが指頭痕はみられない。部分的に篦撫でを施す。	
第61図 ＰＬ.37	40	土製品 土製円板	715-565Ｇ	長径　3.3 短径　3.1 厚さ　0.6	①細砂粒を少量含む ②良好 ③黄灰(2.5Y4/1)	近世土器焙烙の底部破片を使用。	
第61図	41	須恵器 蓋	720-560Ｇ 1/8残存	口径　(5.3) 最大径 (5.8) 高さ　(1.7)	①細砂粒を少量含む ②還元焔 ③灰(5Y5/1)	小壺の蓋。轆轤成形。摘みは欠損。上面に自然釉。	１区表土８と同一個体か
第62図 ＰＬ.37	42	石製品 砥石	埋土 完形	長さ　6.9 幅　2.3 厚さ　1.8	硅沢石	４面使用。	

7号溝（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第62図 ＰＬ.37	43	石器 打製石斧	720-560G 完形	長さ　10.2 最大幅　5.5 厚さ　2.1	砂岩	重さ133.9ｇ。	
第62図 ＰＬ.37	44	石器 打製石斧	725-560G 完形	長さ　11.2 最大幅　5.4 厚さ　1.4	砂岩	重さ99.1ｇ。	

8号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第63図 ＰＬ.37	1	土師器 坏	715-585G 口縁部1/4～ 体部1/4底部 わずかに残 存	口径　(13.8) 底径　－ 高さ　(3.5)	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	外面底部～胴下部篦削り。胴上部指頭押さえ。口縁部内外面撫で。胴部～底部指撫で。	
第63図 ＰＬ.37	2	土師器 坏	715-585G 口縁部1/4～ 底部1/2	口径　(12.4) 底径　(5.6) 高さ　4.0	①細砂粒を含む ②良好 ③橙(5YR6/8)	外面底部～体下部篦削り。体中央部指頭押さえ。口縁部～内面指撫で。	
第63図 ＰＬ.37	3	土師器 坏	715-585G 口縁部1/4～ 底部1/3	口径　(13.8) 底径　(8.6) 高さ　4.2	①細砂粒を多く含む ②良好 ③明黄褐(10YR7/6)	外面底部篦削り。胴部指頭押さえ。口縁部～底部内面指撫で。	
第63図 ＰＬ.37	4	須恵器 坏	725-585G、 735-590G 口縁部1/2～ 底部1/2	口径　(12.2) 底径　(6.0) 高さ　3.7	①やや粗い砂粒を含む ②酸化焔 ③橙(7.5YR6/6)	轆轤右回転。底部回転糸切り。内面黒色処理(赤黒2.5YR1.7/1)。	
第63図 ＰＬ.37	5	須恵器 坏	730-590G 口縁部1/4～ 底部1/2	口径　(11.8) 底径　(7.4) 高さ　3.5	①細砂粒を含む ②やや酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	轆轤右回転。底部回転糸切り後、外周篦削り。体部がほぼ直線に外傾。口縁部は外反しない。	
第63図 ＰＬ.37	6	須恵器 坏	730-590G 口縁部1/4～ 底部 1/2	口径　(13.8) 底径　(6.2) 高さ　3.4	①やや粗い砂粒を含む ②還元焔 ③灰(7.5Y5/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。	
第63図 ＰＬ.37	7	須恵器 高台付椀	埋土 口縁部1/4～ 底部1/4	口径　(14.0) 底径　(5.6) 高さ　5.6	①細砂粒を少量含む ②酸化焔 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	轆轤右回転。底部切り離し後高台貼り付け。	
第63図 ＰＬ.37	8	土師器 甕	715-585G 口縁部1/4～ 胴部上半1/4	口径　(18.4) 底径　－ 高さ　(6.8)	①やや粗い砂粒を多く含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面胴部篦削り。頸部～口縁部指頭押さえ後撫で。内面口縁部～頸部撫で。胴部指撫で。	
第63図 ＰＬ.37	9	須恵器 壺	730-590G 頸部1/3～胴 部1/3	最大径18.2 高さ　(17.8)	①粗砂粒を含む ②還元焔 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤右回転。胴部成形後口縁部を付け足す。	
第63図 ＰＬ.37	10	縄文土器 深鉢	715-585G 胴部破片	残存高 (3.8) 厚さ　1.2	①細砂粒を含む ②良好 ③淡黄(2.5Y8/3)	棒状工具による沈線文。	縄文時代中期 加曽利E

9号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第63図 ＰＬ.37	1	土師器 坏	埋土 口縁部1/4～ 底部わずか	口径　(12.2) 底径　－ 高さ　3.7	①細砂粒をやや多く含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	底部丸底。器面ヨリ摩滅し整形不明瞭。底部外面篦削り。口縁部内外面と底部内面撫で。	

10号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第64図 PL.38	1	土製品 不明	730-565G 破片　残存 度不明	長さ　(16.5) 径　5.9 孔径　3.3	①砂粒含む ②良好 ③灰(5Y4/1)	筒形の土製品。用途不明。棒状のものに巻き付けて成形か。内面一部撫で。外面は表面摩滅。	

19号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第72図 PL.38	1	かわらけ 皿	理土 口縁部1/8～ 底部1/2	口径　(9.8) 底径　(6.4) 高さ　1.8	①細かい砂粒を含む。 ②良好 ③灰白(10YR8/2)	輪積整形。底部回転糸切り。	
第72図 PL.38	2	かわらけ 皿	理土 口縁部1/2～ 底部完存	口径　9.4 底径　5.8 高さ　2.1	①細かい砂粒を含む。 ②良好 ③浅黄橙(10YR8/3)	輪積成形。底部回転糸切り	

28号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第76図 PL.38	1	陶器 碗	理土 口縁部1/5～ 底部1/3	口径　(9.6) 底径　(4.1) 高さ　5.4	①緻密 ②良好 ③灰白(2.5Y8/1)	高台部を除いた全面に透明釉を掛ける。	

29号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第77図 PL.38	1	陶器 灯明皿	理土 体部1/2～底 部2/3	口径　－ 底径　4.0 高さ　(1.7)	①細砂粒・黒色粒含む ②良好 ③浅黄橙(10YR8/4)	内面全体と外面体部上半に釉(暗赤褐・5YR 3/4)を掛ける。	

31号溝

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第78図 PL.38	1	焙烙	理土 口縁部1/6～ 底部わずか に残存	口径　(35.4) 底径　(32.6) 高さ　5.1	①砂粒・赤色粒やや多い ②良好 ③灰黄(2.5Y4/1)	体部外面下半指押さえ。口縁部外面～内面横撫で。内面耳貼付。	
第78図 PL.38	2	土製品 不明	理土 破片　残存 度不明	長さ　(6.3) 幅　(6.7) 厚さ　2.6	①砂粒やや多い ②やや軟質 ③灰黄(2.5Y7/3)	表面は粗い撫で。用途不明。	
第78図 PL.38	3	石器 打製石斧	理土 2/3	長さ　(9.8) 幅　(7.4) 厚さ　1.4	ホルンフェルス	重さ87.8g。	

1号井戸

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第82図 PL.38	1	土師器 坏	理土 口縁部～底 部小破片	口径　(12.2) 底径　(3.8) 高さ　3.5	①少量細かい砂粒 ②良好 ③にぶい黄橙(10YR7/2)	外面底部～胴部篦削り。口縁部～内面底部撫で。	
第82図 PL.38	2	土師器 坏	理土 底部小破片	口径　－ 底径　－ 高さ　－	①砂粒含む ②良好 ③橙(5YR6/6)	外面底部～体部下端篦削り。内面撫で。内面に墨書。判読不能。	
第82図 PL.38	3	石製品 磨石	理土 残存度不明	長さ　(11.5) 幅　7.3 厚さ　3.8	変質安山岩	重さ638.9g。表面が磨面。先端に敲打痕がある。	

2号井戸

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第83図 PL.38	1	陶器 皿	埋土 口縁部2/3～ 底部完存	口径　12.8 底径　7.7 高さ　2.7	①砂粒を含む ②やや軟質 ③灰白(2.5Y8/1)	削り出し高台。高台内を除いて全面に透明釉。内面に鉄絵の蘭竹文。	

遺構外出土遺物

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第89図 PL.39	1	土師器 坏	1区表土 口縁部小破 片	口径　－ 底径　－ 高さ　－	①砂粒やや多い ②良好 ③橙(7.5YR6/6)	内外面とも撫で。外面に墨書。「足」の下半分か。	
第89図 PL.39	2	須恵器 坏	1区表土 底部小破片	口径　－ 底径　－ 高さ　－	①砂粒・赤色粒含む ②酸化焼 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	底部回転糸切り。外面に墨書。「田ヽ」。ウ冠の下は欠損。	
第89図 PL.39	3	須恵器 坏	1区表土 口縁部1/4～ 底部1/3	口径　(13.6) 底径　(6.6) 高さ　3.5	①粗砂粒を少量含む ②還元焼 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤右回転。底部回転糸切り。口唇部が外反する。	
第89図 PL.39	4	須恵器 坏	1区表土 口縁部1/4～ 底部1/4	口径　(13.0) 底径　(6.3) 高さ　3.7	①やや粗い砂粒含む ②還元焼 ③黄灰(2.5Y6/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り。口唇部が水平近くまで外反する。	
第89図 PL.39	5	須恵器 皿	3区表土 口縁部1/8～ 底部1/4	口径　(13.8) 底径　(6.6) 高さ　2.0	①やや粗い砂粒 ②還元焼 ③灰(5Y5/1)	轆轤右回転。底部回転糸切り後、底部の一部を篦で整形。	
第89図 PL.39	6	土師器 甕	720-575G 口縁部1/4～ 胴上部1/4	口径　(18.0) 底径　－ 高さ　(6.4)	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③明赤褐(5YR5/6)	外面胴下部指頭押さえ後撫で。口縁部～内面頸部撫で。胴部内面撫で。	
第89図 PL.39	7	土師器 甕	1区表土 胴下部1/3～ 底部1/3	口径　－ 底径　(10.0) 高さ　(10.5)	①やや粗い砂粒を含む ②良好 ③明褐(7.5YR5/6)	外面胴下部指頭押さえと篦削り。胴部篦削り。内面胴部篦・指撫で。	
第89図 PL.39	8	陶器 皿	2区表土 口縁部一部 欠	口径　12.5 底径　5.0 高さ　2.1	①細砂粒含む ②良好 ③灰白(10YR8/2)	底部削り出し高台。高台底を除いて施釉(浅黄5Y7/3)、淘巻き状。内面に三叉トチンの跡。	
第89図 PL.39	9	陶器 甕	1区表土 底部1/2～胴 下半の一部	口径　－ 底径　13.4 高さ　6.0	①細砂粒含む ②良好 ③灰黄(2.5Y7/2)	轆轤右回転成形。底部外周篦整形。内外面に施釉(暗褐・7.5YR3/4)。	
第89図 PL.39	10	陶器 鉢	2区表土 底部1/2のみ	口径　－ 底径　14.8 高さ　5.4	①細砂粒含む ②良好 ③灰白(2.5Y8/2)	底部外面は高台貼付後、回転削り。体部外面と内面に厚い灰釉(灰白・7.5YR7/2)。	
第89図 PL.39	11	須恵器 蓋	1区表土 1/8残存	口径　(5.1) 最大径 (5.7) 高さ　(1.7)	①細砂粒を少量含む ②還元焼 ③黄灰(2.5Y5/1)	小壺の蓋。轆轤成形。上面に自然釉。摘みが付く可能性。	7講41と同一個体か。
第89図 PL.39	12	土製品 不明	1区表土 残存度不明	長さ　(11.9) 径　7.9 孔径　1.9	①砂粒含む ②良好 ③褐灰(10YR4/1)	筒状の土製品。用途不明。外面撫で。	
第90図 PL.39	13	土製品 竈枠	2区表土 1/8残存	口径 (37.0) 底径 (37.0) 高さ　3.4	①細かい砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄橙(10YR6/3)	轆轤調整。二次被熱で黒色化している部分がある。	
第90図 PL.39	14	土製品 人形	2区表土 ほぼ完形	長さ　2.3 幅　1.9 高さ　1.5	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい橙(5YR6/4)	蛙の土人形。写実的な形態。型作りか。背面に緑の塗料を塗った痕跡がある。	
第90図 PL.39	15	土製品 人形	1区表土 2/3	長さ　(1.7) 幅　1.8 厚さ　0.5	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい褐(7.5YR5/4)	大黒様の泥人形。型作り。	
第90図 PL.39	16	銅製品 キセル	5区表土 雁首	長さ　3.7 高さ　2.8 径　1.1			
第90図 PL.39	17	石器 打製石斧	2区表土 2/3	長さ　(9.8) 幅　7.4 厚さ　1.8	溶結凝灰岩	分銅形の打製石斧。重さ203.5ｇ。	

遺構外出土遺物（つづき）

挿図番号 図版番号	番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成③色調	器形・技法等の特徴	備　考
第90図 ＰＬ.39	18	石製品 砥石	6区715-550 G 片側欠損。 残存度不明	長さ　(5.3) 幅　2.2 厚さ　1.5	変質デイサイト	４面使用。	
第90図 ＰＬ.39	19	銅製品 銅銭	３区表土 完形	径　2.2		表面さびのため銭文判読不能。「□□通宝」。	

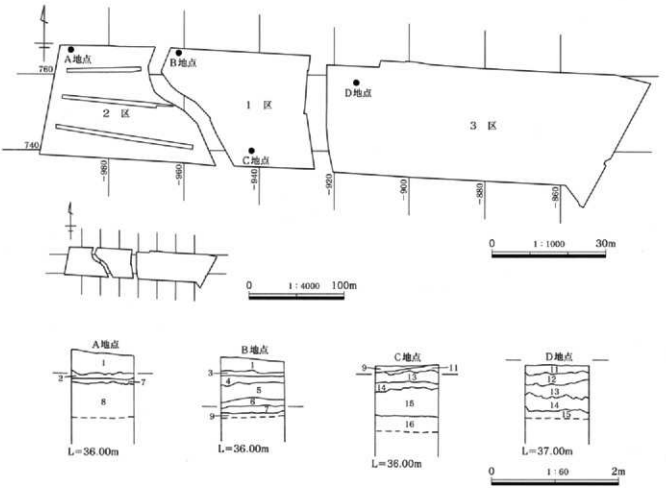
第４章　細谷合ノ谷遺跡

第１節　遺跡の概要

細谷合ノ谷遺跡は西から２区、１区、３区とつながり、西側が低地で東側がローム台地である。西側は２区低地がさらに細谷南遺跡Ｅ区低地に続く。３区はローム台地で、東側は道路を挟んで細谷八幡遺跡に続く。１区は２区と３区に挟まれ、ローム台地から低地への変換点にあたる。

発掘調査は用地の取得状況などにより、平成15年度と16年度の２回に分けて実施された。平成15年度は、１区南側半分と２区の調査を行った。２区は東西に３本のトレンチと北西隅に基本土層用のトレンチを設置し、確認調査を実施した。当初Ａｓ－Ｂ層が残存し、Ａｓ－Ｂ下の水田調査を想定したが、Ａｓ－Ｂは確認されず、トレンチ設定図と土層断面図を作成し、調査を終了した。１区南側半分で溝１条、竪穴住居１軒、土坑23基、ピット56基の調査を行った。１区は東側から西側に傾斜し、ローム台地から低地に変換する地点である。この低地に変換する地点、１号溝の西側からは大量の縄文土器が出土し、包含層調査を行った。縄文時代中期末から後期前葉の土器が主体を占めた。また、旧石器時代の調査を実施し、石核、ナイフ型石器が出土した。以上が平成15年度調査の概要である。

平成16年度は１区北側半分と３区の調査を行った。１区北側半分で溝１条、土坑39基、ピット46



第91図　土層柱状図、土層柱状図作成位置図

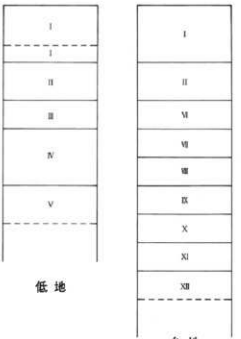
基を調査した。前年度調査と同様に西側に厚く縄文包含層が堆積し、包含層調査を行った。出土した縄文土器は中期末～後期前葉が主体である。さらに旧石器時代の試掘調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

３区で、溝８条、竪穴住居６軒（内古代の竪穴住居２軒）、竪穴状遺構１基、土坑51基、ピット70基を調査した。１区とは異なり、３区では縄文包含層が薄く、縄文土器の出土量も１区のように多くない。さらに旧石器時代の試掘調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

第91図はそれぞれの調査区の土層柱状図と土層柱状図作成位置図である。Ａ・Ｂ地点は低地の土層柱状図で、１層は現在の水田耕作土、２層は現在の水田の床土である。１・２層で現在の水田耕作土（Ⅰ層）である。

３層は１区で確認できた層で、Ａｓ－Ａを少量含む層で、近世～現代の耕作土（Ⅱ層）と思われる。４層も１区で確認できた層で、Ｈｒ－ＦＡと思われる軽石を含む層で（Ⅲ層）、４層下面で古墳時代～古代の遺構が確認できる。５・６層も１区で確認できた層（Ⅳ層）で、７層は１区と２区で確認できた層（Ⅳ層）で縄文時代の土器・石器を含む層である。特に５層からの出土が多い。２区は現在の水田を造成するにあたって６層までを削平していると思われる。８・９層は１・２区で確認され、非常に粘性の強い土（Ⅴ層）である。

Ｃ・Ｄ地点は台地の土層柱状図である。１層は現在の畑の耕作土　（Ⅰ層）。２層はＡｓ－Ａを含む近世～現代の耕作土。３層はＨｒ－ＦＡを含む（Ⅲ層）。５層は礫含み縄文包含層（Ⅳ層）。10層はローム漸移層である。第91図では示せなかったが１・３区の遺構の土層図で部分的に確認できた。11層からは旧石器時代の試掘トレンチの土層断面の観察による。11層はＡｓ－ＹＰでブロック状に含む（Ⅶ層）。13層はＡｓ－ＢＰ（Ⅸ層）である。下部に室田軽石層（Ａｓ－ＭＰ）を確認できる。14層は暗色帯の漸移層（Ⅸ層）で、15は暗色帯（ＸⅠ層）である。ＡＴの層位は明確に確認できなかった。16は非常に粘性が強い。黄色、灰白色、黒色でラミナ状に堆積（ＸⅡ層）する。以上を基に第92図の基本土層模式図を作成した。



第92図　基本土層模式図

基本土層注

1　黒褐色土　現代の耕作土。（基本土層Ⅰ）
2　暗灰色土　白色軽石（Ａｓ－Ａ）を多く含む。鉄分を含み赤味を帯びる。現水田の床土。（基本土層Ⅰ）
3　黒褐色土　Ａｓ－Ａと思われる軽石を極く少量含む。近・現代の耕作土。（基本土層Ⅱ）
4　黒褐色土　Ｈｒ－ＦＡと思われる軽石、ローム粒を極く少量含む。（基本土層Ⅲ）
5　黒褐色土　ローム粒を極く少量含む。遺物が最も多く含まれる層。縄文包含層。（基本土層Ⅳ）
6　黒褐色土　４層とほぼ同様の土であるが、より堆積は緻密で粘性が強い。縄文包含層。（基本土層Ⅳ）
7　黒色土　ローム粒を極く少量含む。粘性が強い。縄文包含層。（基本土層Ⅳ）
8　黄灰色粘質土　白色軽石をわずかに含む。非常に粘性が強い。（基本土層Ⅴ）
9　黄褐色土　水性堆積ローム。（基本土層Ⅴ）
10　暗褐色土　ローム漸移層　（基本土層Ⅵ）
11　褐色土　Ａｓ－ＹＰを含む。（基本土層Ⅶ）
12　褐色土　軽石を含まない。（基本土層Ⅶ）
13　灰褐色土　Ａｓ－ＢＰで下部にＡｓ－ＭＰが確認できる。（基本土層Ⅸ）
14　にぶい褐色土　暗色帯への漸移層。（基本土層Ⅹ）
15　暗褐色土　暗色帯（基本土層ＸⅠ）
16　黄色粘質土　（基本土層ＸⅡ）

第2節　竪穴住居跡

1区1号住居（第93・94図、PL42・78）

位置　X＝29738～745、Y＝－42925～931

重複遺構　1区7号土坑、1区7・20・59・60・61号ピットと重複し、住居との関係は不明。

形態　東側半分が調査区外になる。柄鏡型の可能性も考えられるが、ピットの配置などから円形と推定される。

方位　N－25°－W

規模　6.46m×（4.82m）

面積　（99.074㎡）

壁高　壁は確認できない。

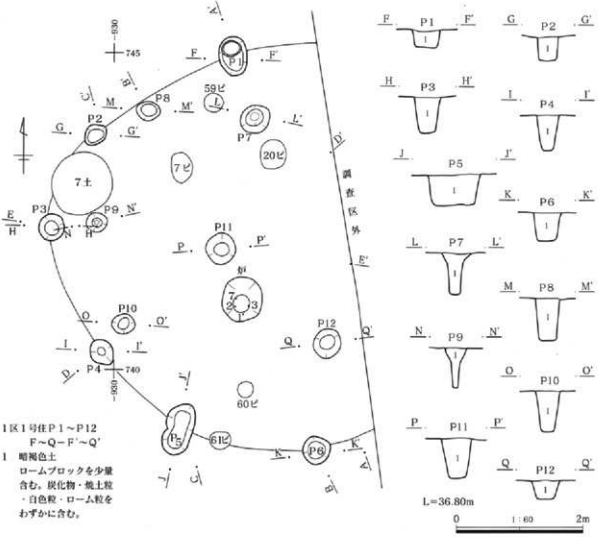
床面　確認できない。

ピット・柱穴　ピットは12基確認された。P1～P6は主柱穴と考えられる。P1・P12が29cmで、他は38～66cmである。

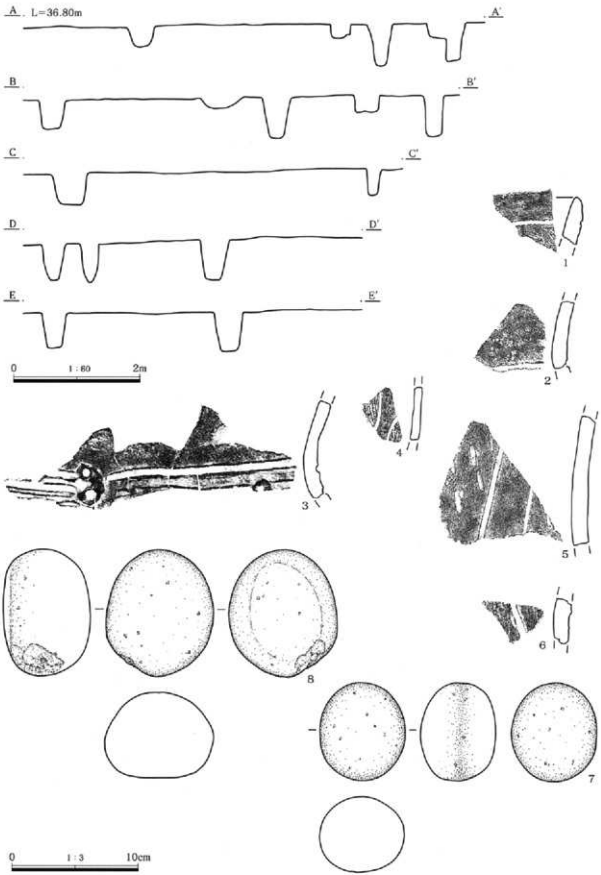
炉　住居の中央やや西寄りで確認された。平面形は楕円形である。

遺物　1～3・7は炉から出土。4～6・8は住居内のピットから出土である。1・4～6は沈線区画に縄文、刺突文を施文し、称名寺式である。2・3は8の字状の貼付文と沈線で堀之内式である。7・8は磨石で一部敲痕がみられる。

所見　炉から出土した遺物などから縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。



第93図　1区1号住居



第94図　1区1号住居・出土遺物

3区1号住居　(第95・96図、PL43・78)

位置　X＝29739～743、Y＝－42909～914

重複遺構　なし。

形態　長方形で南側に張り出し部を有する。

方位　N－5°－E

規模　2.84m×5.06m

面積　60.776㎡

壁高　21～35cm

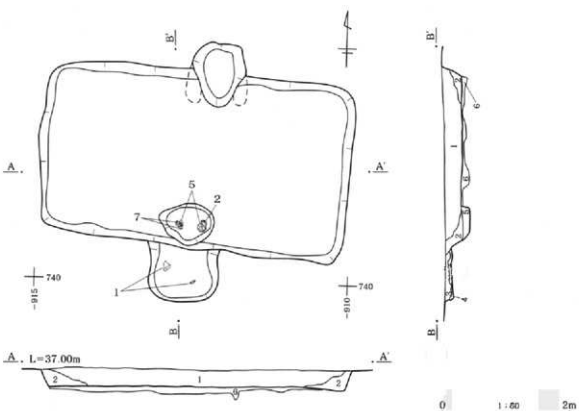
床面　ロームと黒色土の混土で貼床。張出部と床面との段差は15cmを測る。張出部に接する位置に貯蔵穴と思われる土坑が確認され、2・5・7が出土した。

ピット・柱穴　確認できなかった。

竈　北壁でやや東寄りに設置。両袖は壊され不明瞭であった。

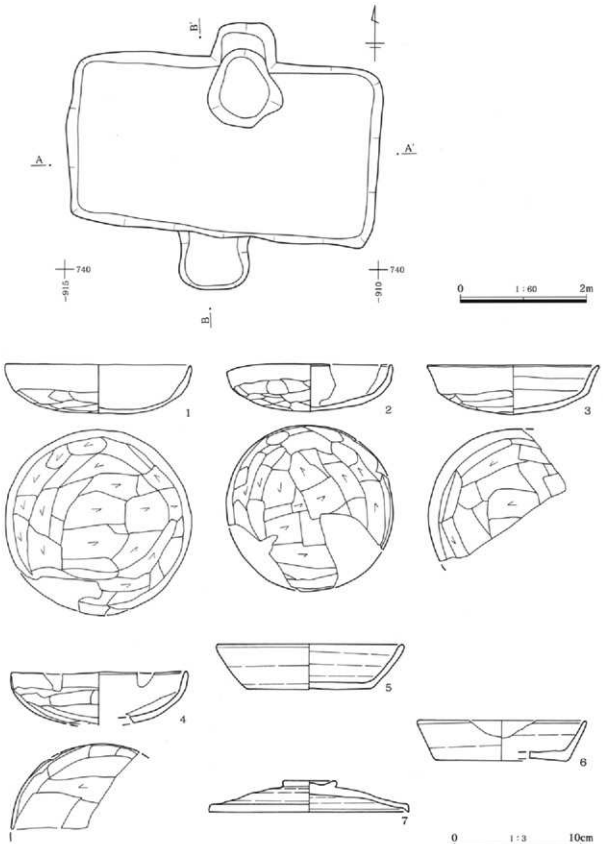
遺物　1～4は土師器坏、5・6は須恵器坏、7は須恵器蓋である。3は底部と体部の境界に弱い稜が作り出され、他の遺物よりやや古い様相が窺える。6は体部が直線的に外傾することから、5よりやや古い様相が窺える。図示した遺物以外に土師器坏4点、土師器甕5点、須恵器坏2点、縄文土器片139点、石5点が出土した。

所見　出土遺物等から8世紀前半と考えられる。



3区1号住居　A－A'・B－B'
1　黒褐色土　ローム粒、礫を少量含む。
2　黒褐色土　1層よりローム粒が少なく、緻密な堆積である。
3　黒褐色土　ローム粒、礫を少量含む。
4　黒褐色土　1層よりローム粒が少なく、緻密な堆積である。
5　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。堆積は脆弱である。
(掘方)
6　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。

第95図　3区1号住居



第96図　３区１号住居堀方・出土遺物

3区2号住居・36号土坑(第97・98図、PL44・78)

位置　X＝29732～735、Y＝－42850～853

重複遺構　3区36号土坑と北壁で重複する。2号住居は36号土坑より古い。

形態　方形であるが南東の隅がやや不整形。

方位　N－69°－W

規模　2.96m×2.94m

面積　35.258㎡

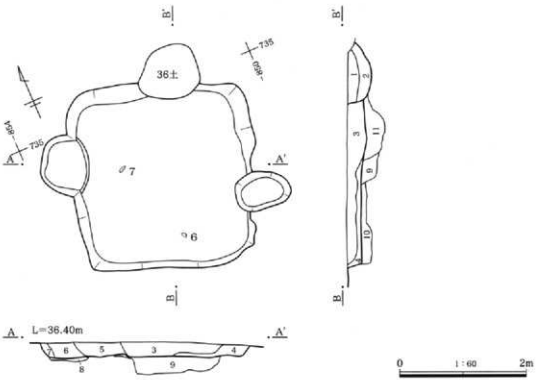
壁高　13～29cm

床面　ロームと黒褐色土の混土で貼床。掘方調査で住居中央から北東隅にかけて不整形な落ち込みが、南東隅で長楕円形の土坑状の落ち込みが確認できた。

ピット・柱穴　確認できなかった。

竈　北壁と南壁の2カ所で確認できた。同時に使用していたと考えられる。

遺物　住居南東部からの出土が多い。1・2は土師器甕で同一個体の可能性が考えられる。1は口縁部から頸部破片。2は底部から胴下部破片である。3は土師台付甕の台部。4は須恵器坏。体部が強く外傾する。5は内面底部に墨書。墨書は「得」と思われる。6は縄文土器で底部に網代痕。縄文時代後期と思われる。7は石製品で紡錘車。裏面



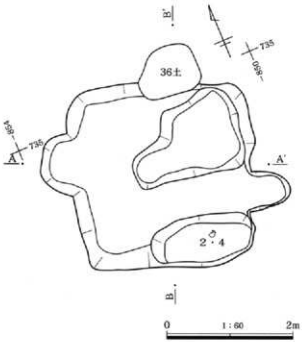
3区2号住居　A－A'・B－B'
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。住居の埋土よりもきめが粗い。(36土)
2　暗褐色土　1層よりもロームブロック多く含む。粘性やや強い。(36土)
3　黒褐色土　ロームブロック、焼土粒まばらに含む、炭化物を含む。
4　暗褐色土　1層に比べてローム粒、ロームブロックを多く含む。
5　黒褐色土　焼土・ローム粒・ロームブロックを均一に多く含む。2層に近い層。(竈理土)
6　黒褐色土　ロームブロックを多く、下部に焼土を多く含む。(竈理土)
7　暗褐色土　4層よりもロームブロック多く含む。(竈理土)
8　にぶい黄褐色土　焼土、炭粒、にぶい色のロームブロックを多く含む。(竈理土)
(掘方)
9　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒と黒ボク土の混土層。焼土塊を含む。
10　黄褐色土　ロームブロックを主体とした層。
11　黒褐色土　ローム粒を少量含む。

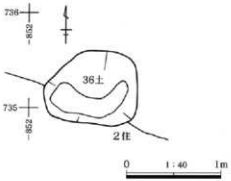
第97図　3区2号住居

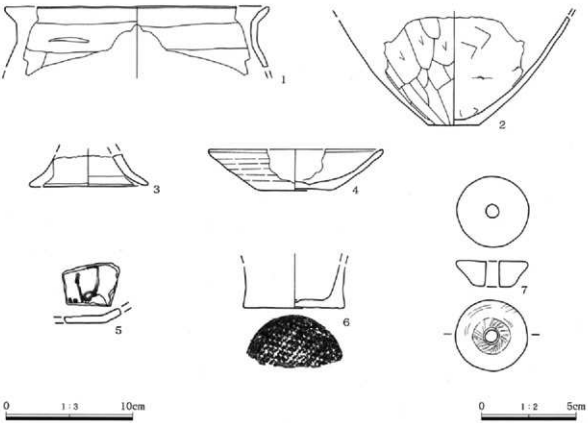
に擦痕が目立つ。６以外は住居に伴う遺物と考える。図示した遺物以外に土師器甕99点、土師器坏26点、須恵器坏11点、縄文土器31点が出土した。

所見　出土遺物等から９世紀中頃と考えられる。

36号土坑　北側で３区６号溝、南側で２号住居と重複する。平面の確認、土層断面の観察により、６号溝より古く、２号住より新しい。平面の形状は不整形である。壁は丸味を帯び、緩やかに立ち上がる。出土遺物はなかった。土坑の時期は９世紀～近世と考えられる。







第98図　３区２号住居掘方・出土遺物

3区3号住居（第99・100図、PL45・78）

位置　X＝29755～760、Y＝－42912～916

重複遺構　3区4号住、3区8・26号土坑、3区2・3号ピットと重複。新旧は不明であるが、出土遺物から4号住居とほぼ同時期で、26号土坑より古い。

形態　ほぼ円形と推定される。柄鏡型住居の可能性も考えられる。

方位　N－28°－W

規模　4.58m×4.56m

面積　65.477㎡

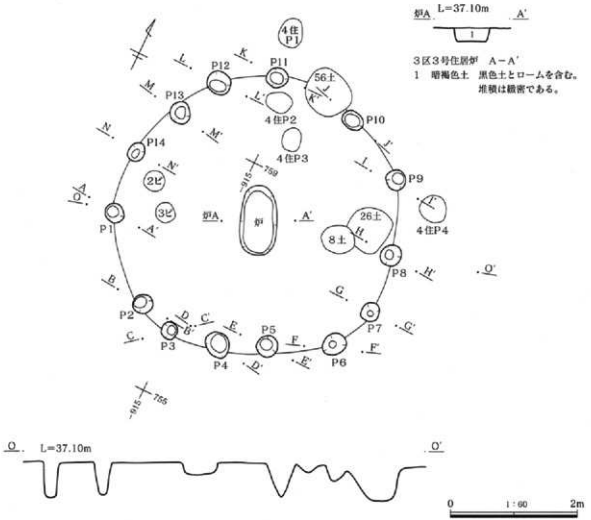
壁高　確認できない。

床面　確認できない。

ピット・柱穴　主柱穴と思われるピット14基が円形に全周する。P1・4・6・11が50cm以上の深さである。

炉　住居ほぼ中央に位置する。平面形は楕円形で、北側でさらに円形の彫り込みが施され、1段深くなる。

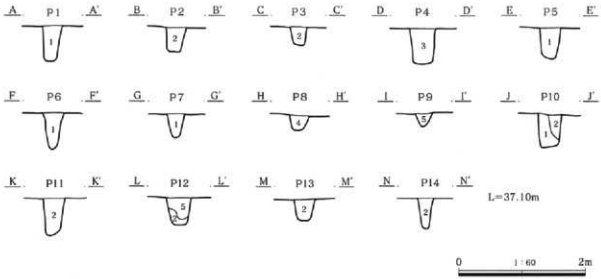
遺物　1・2は縄文土器である。1は炉の埋土中の出土で、沈線で区画、区画内に縄文施文。称名寺式である。2は胴部片で指撫での痕跡が目立つ。称名寺式併行と思われる。3は削器で横長の剥片を使用している。4はP6から出土した。耳栓である。断面形は中央部が細く、上下に広がる。中央部の最小径は4.5cmである。下面より上面の径がやや大きい。上下面とも平坦で、やや内側寄り



第99図　3区3号住居

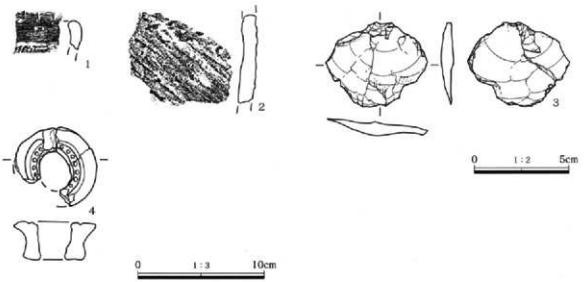
に沈線を１条巡らせ、さらに内側に円形刺突文が連続して巡る。沈線と円形刺突文は先端部がやや尖った工具を使用している。３区22号土坑出土の２と接合した。22号土坑２は上面に小突起を有する。22号土坑２以外に出土した遺物は、称名寺式土器の深鉢の胴部破片である。22号土坑は３号住居Ｐ６より13m程南東に位置する。３号住居から図示した遺物以外に縄文土器片21点、石８点が出土した。

所見　３号住居は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考える。22号土坑と時期も一致し何らかの関係があったものと考えられる。



３区３住Ｐ１～Ｐ14　Ａ～Ｎ－Ａ'～Ｎ'

1　暗褐色土　ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　ローム粒、炭化物含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまっている。
4　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。
5　暗褐色土　１～２mmの炭化物、ローム粒、白色粒、焼土粒、３～４cmのロームブロックを含む。



第100図　３区３号住居・出土遺物

3区4号住居　(第101・102図、PL45・78)

位置　X＝29759～761、Y＝－42912～916

重複遺構　3区3号住、3区53・54・55・56・64号土坑、3区69・86・88号ピットと重複する。出土遺物などから3号住居とほぼ同時期と考えられる。

形態　北側半分が調査区外に続き、また柄鏡型の可能性も検討したが、円形と推定される。

方位　N－4°－E

規模　(2.90m)×5.02m

面積　(47.930㎡) 北側調査区外のため

壁高　壁は確認できない。

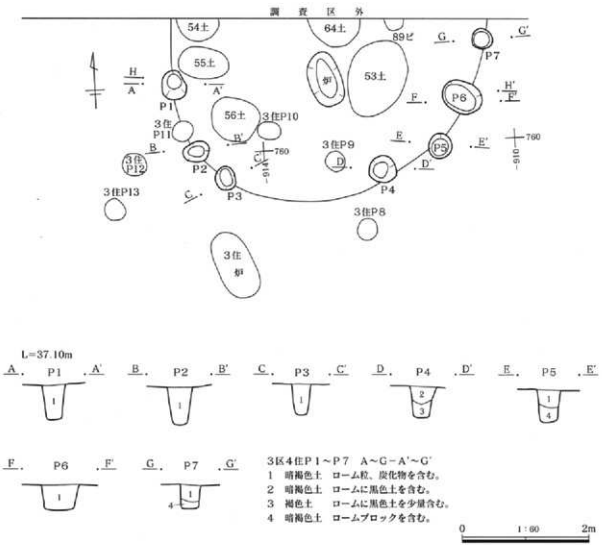
床面　確認できない。

ピット・柱穴　主柱穴と思われるピット7基が半円形状に並ぶ。深さは38～60cmである。P4から1が、P6から2・5が出土した。

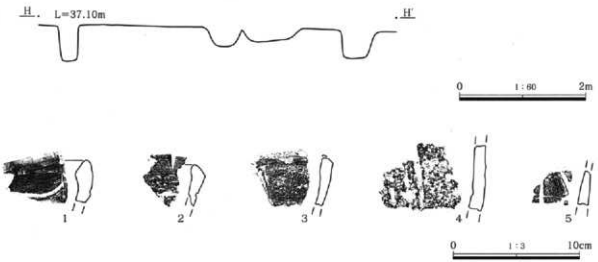
炉　住居中央やや南よりに位置し、平面形は楕円形である。1・4が出土した。

遺物　1～5で縄文土器である。1～3は口縁部片で、1は称名寺式、2・3は口唇部の形状などから堀之内式と推定される。4・5は胴部片で、沈線で区画。称名寺式であろう。図示した遺物以外に縄文土器片28点、石3点が出土した。

所見　出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



第101図　3区4号住居



第102図　３区４号住居・出土遺物

３区５号住居（第103～107図、ＰＬ46・79～81）

位置　Ｘ＝29743～749、Ｙ＝－42899～906

重複遺構　３区１・３号溝と重複し、１・３号溝が新しい。３区41・44・45・50・52・55・56号ピットと重複。住居との関係は不明。住居に伴う可能性も考えられる。

形態　南東側に３区57・58・59・65号ピットと３区20号土坑を含めた範囲で柄鏡型の可能性も考えられるが、円形と判断した。

方位　Ｎ－45°－Ｗ

規模　6.44ｍ×6.44ｍ

面積　135.018㎡

壁高　壁は確認できなかった。

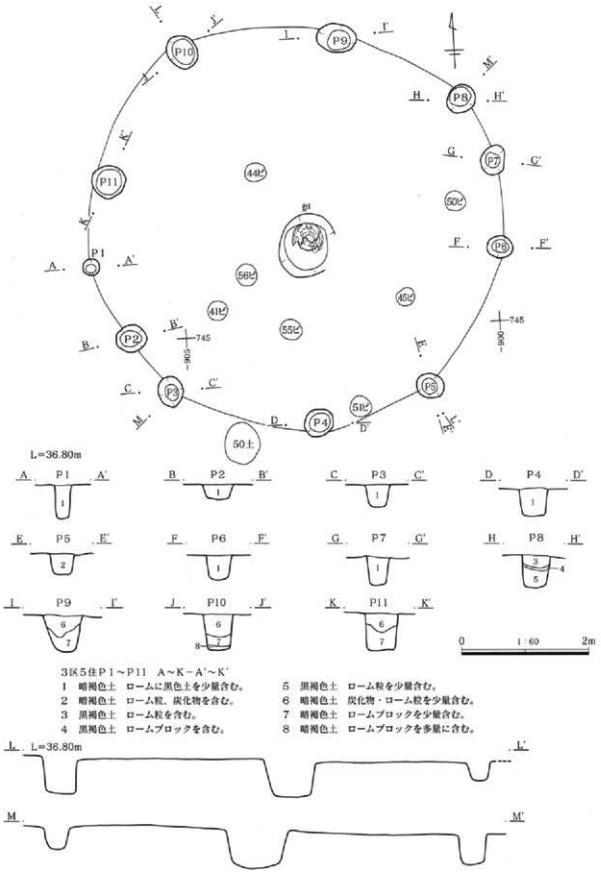
床面　確認できなかった。

ピット・柱穴　主柱穴と思われるピット11基がほぼ円形に巡る。深さ25～53㎝である。

炉　住居中央に位置し、平面形は円形である。大型の深鉢型土器、９・10を炉体土器として埋設し、使用。２～５・８～23が出土した。

遺物　１～22は縄文土器で、23は磨石である。出土遺物の大半が炉から出土。９・10は炉体土器で、９は胴上部の大型破片、10は胴中央部から胴下部の大型破片で同一個体である。直線的な沈線を左右斜位に施し、格子目状をなす。９・10・14・15・17・18も９・10の炉体土器と沈線の施文方法等から同一個体と思われる。１～８・11・12・16は称名寺式と思われる。１・２は沈線で区画し、区画内に刺突文を施文。１・２は同一個体と思われる。５・11・12・16は器面が摩滅し、沈線区画に列点状の刺突文を施文。同一個体の可能性が考えられる。３・６・７・13は沈線で区画。４は沈線区画に縄文施文。１～８・11・12・16は称名寺式である。19は注口土器の口縁部から注口部である。20は８の字状の貼付文。21・22は口縁部内側に２条の沈線が巡る。９・10の炉体土器は称名寺式に併行するものと思われる。図示した遺物以外に縄文土器片155点、石３点が出土した。

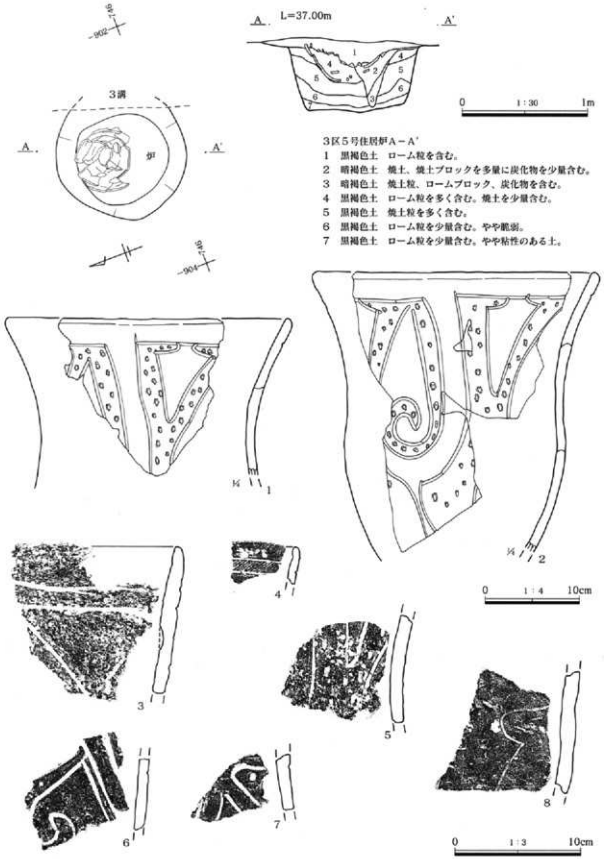
所見　出土遺物等から住居の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。



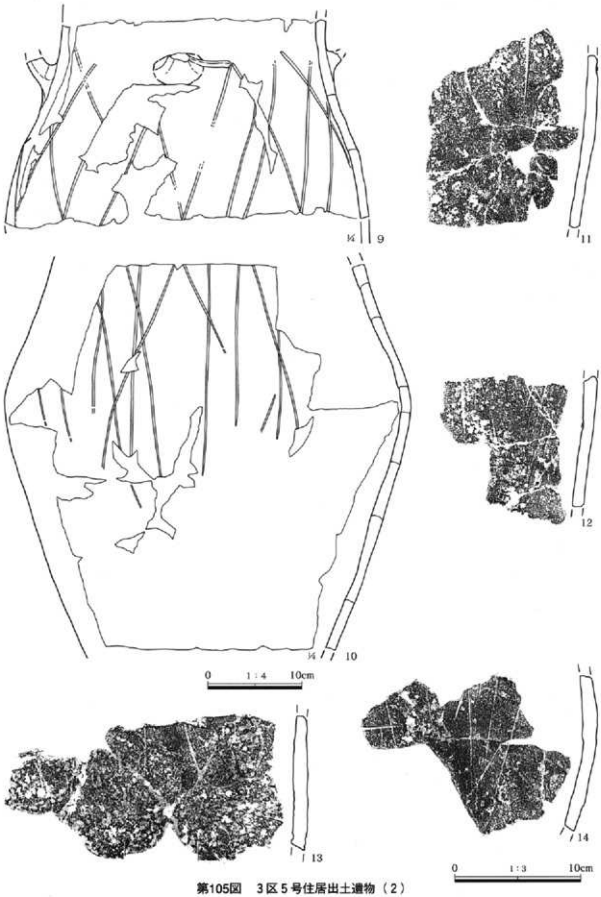
3区5住P1～P11　A～K－A'～K'

1　暗褐色土　ロームに黒色土を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒、炭化物を含む。
3　黒褐色土　ローム粒を含む。
4　黒褐色土　ロームブロックを含む。
5　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6　暗褐色土　炭化物・ローム粒を少量含む。
7　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
8　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

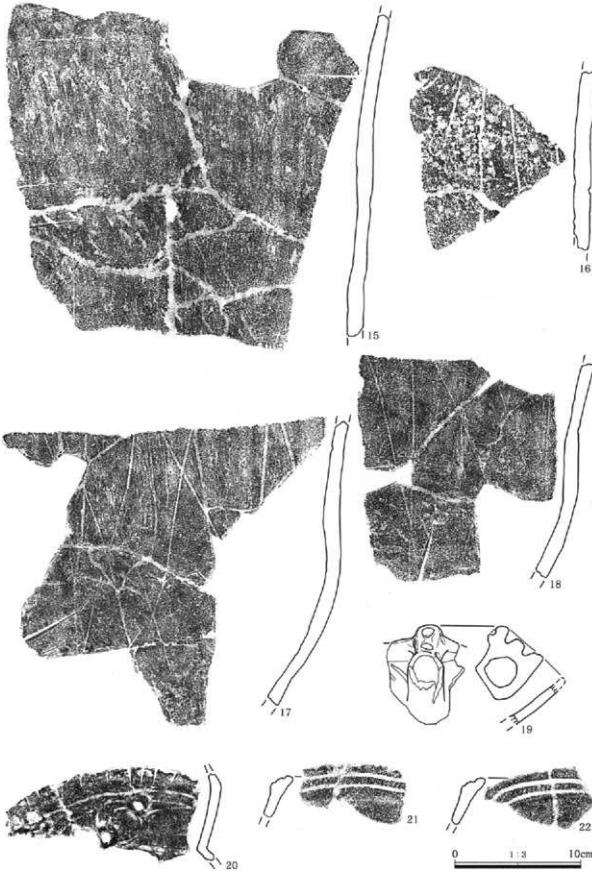
第103図　3区5号住居



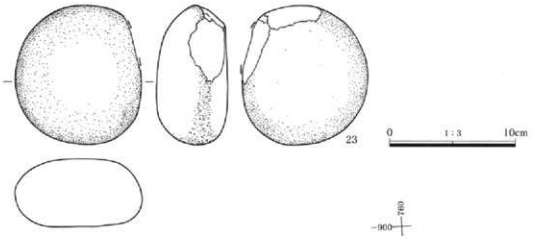
第104図　３区５号住居炉、５号住居出土遺物（１）



第105図　３区５号住居出土遺物（２）



第106図　3区5号住居出土遺物（3）



３区６号住居

(第107～109図、ＰＬ46・81)

位置　Ｘ＝29758～762、
Ｙ＝－42901～909

重複遺構　３区72・94・95・96号ピットと重複。住居に伴う可能性も考えられる。新旧関係は不明である。

形態　住居の南の33・34号土坑、71・72号ピットを含めた範囲で柄鏡型の可能性も考えられるが、柱穴の並びから方形と推定する。

方位　Ｎ－２°－Ｗ

規模　(3.04m)　×5.42m

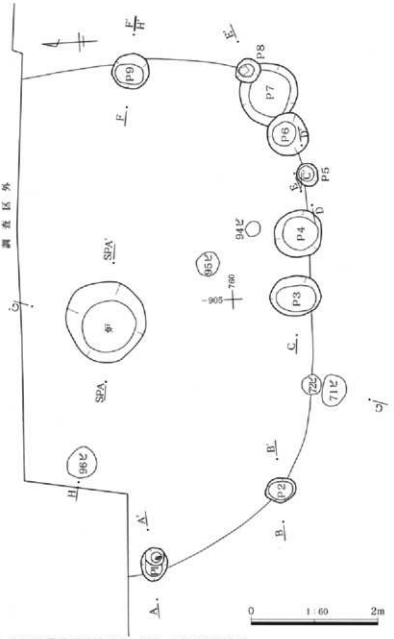
面積　(14.388㎡)

壁高　壁は確認できなかった。

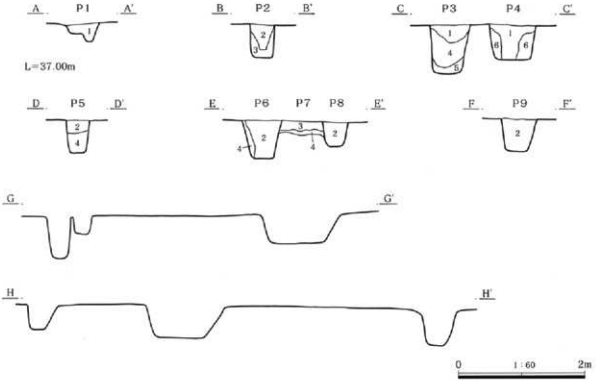
床面　確認できなかった。

ピット　住居南東部にピットが多く確認された。Ｐ７はピットというより土坑と考えた方が良いと思われる。

炉　住居の中央に位置する。平面形はほぼ円形で、１～４・20が出土した。

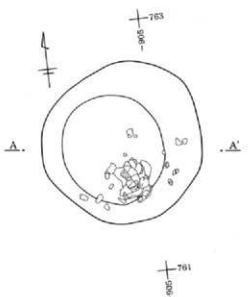


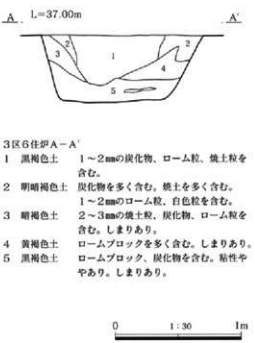
第107図　３区５号住居出土遺物（４）、３区６号住居



3区6住P１～P９　A～E－A'～E'

1　暗褐色土　　１～２mmの炭化物、ローム粒、白色粒含む。
2　暗褐色土　　ローム粒、炭化物を含む。
3　暗褐色土　　ローム粒を含む。
4　暗褐色土　　３～４cmのロームブロックを含む。
5　暗褐色土　　炭化物を含む。やや粘性あり。
6　褐色土　　１層よりもローム粒・炭化物の量が少ない。





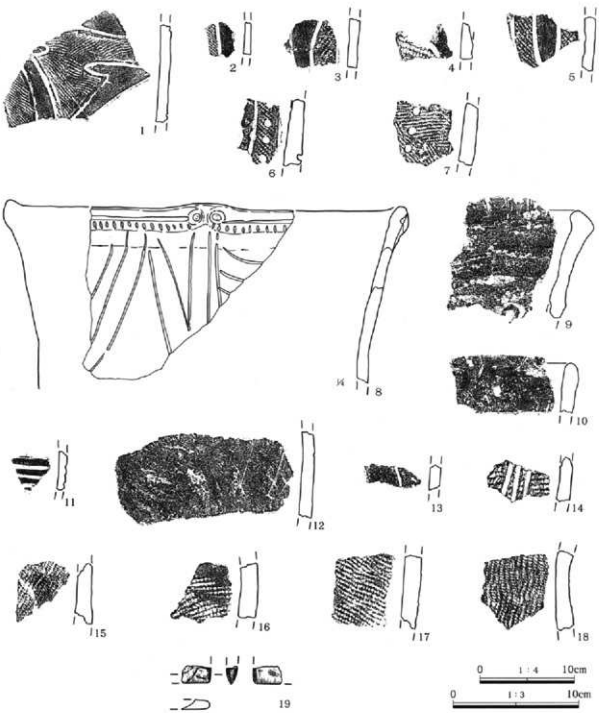
3区6住炉A－A'

1　黒褐色土　　１～２mmの炭化物、ローム粒、焼土粒を含む。
2　明暗褐色土　炭化物を多く含む。焼土を多く含む。１～２mmのローム粒、白色粒を含む。
3　暗褐色土　　２～３mmの焼土粒、炭化物、ローム粒を含む。しまりあり。
4　黄褐色土　　ロームブロックを多く含む。しまりあり。
5　黒褐色土　　ロームブロック、炭化物を含む。粘性ややあり。しまりあり。

第108図　３区６号住居・炉

遺物　1～18は縄文土器で、19は磨製石斧の刃部である。1～7は沈線で区画し、区画内に縄文施文。6・7は縄文施文後円形の刺突文を施文する。称名寺式である。8～14は堀之内式である。8は口縁部に連続する刺突文を施し、胴部は沈線で施文。14は地文に縄文施文後、沈線を施文する。15～18は地文に縄文を施文する。明確ではないが後期の所産であろう。図示した遺物以外に縄文土器片144点、石1点が出土した。

所見　炉出土遺物から縄文時代後期前葉である。



第109図　3区6号住居出土遺物

３区１号竪穴状遺構（第110図、ＰＬ47・81）

位置　Ｘ＝29735～739、Ｙ＝－42911～913

重複遺構　南壁に土坑が１基重複する。新旧関係は不明である。

形態　隅丸長方形で、北壁に張出部が確認された。張出部の平面形は隅丸方形である。

方位　張出部の軸方位に平行する方位を本遺構の方位として計測した。Ｎ－２°－Ｗであった。

規模　2.11ｍ×2.68ｍ、張出部は0.59ｍ×0.49ｍであった。

面積　5.738㎡

壁高　14～16㎝

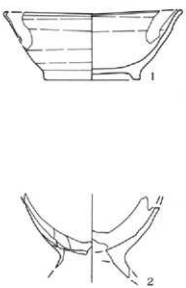
床面　明確な床面は確認できなかったが、１層下面を床面と判断した。掘方調査で、遺構中央で円形の土坑、南東隅で方形の土坑に楕円形のピット状の掘り込みが重複して確認された。床下の施設と考えられる。

ピット・柱穴　確認できなかった。

竈　確認できなかった。

遺物　出土遺物は１・２である。１は須恵器椀で高台が付く。２は土師器台付甕の台部から胴下部の破片である。図示した遺物以外に土師器坏３点、土師器甕２点、縄文土器片165点が出土した。

所見　竈が確認できなかったことから竪穴住居と区別して報告したが、竪穴住居の可能性が高いと思われる。本遺構の時期は、出土遺物から９世紀後半と考えられる。



３区１号竪穴状遺構　Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　炭化物を少量含み、礫を含む。
(掘方)
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　ロームブロック、焼土粒を含む。
4　黒褐色土　白色粘土をブロック状に含む。

第110図　３区１号竪穴状遺構・出土遺物

第３節　土坑

１区で58基、３区で51基、計109基の土坑を確認した。１区では調査区東側に集中し、３区では西側から西北側に集中する。平面の形状は円形、楕円形、隅丸長方形。平面の形状で円形のものに、断面の形状が袋状、フラスコ状のものが確認できる。本節の最後に土坑一覧表を掲載した。

１区１号土坑（第111図、ＰＬ48・81）

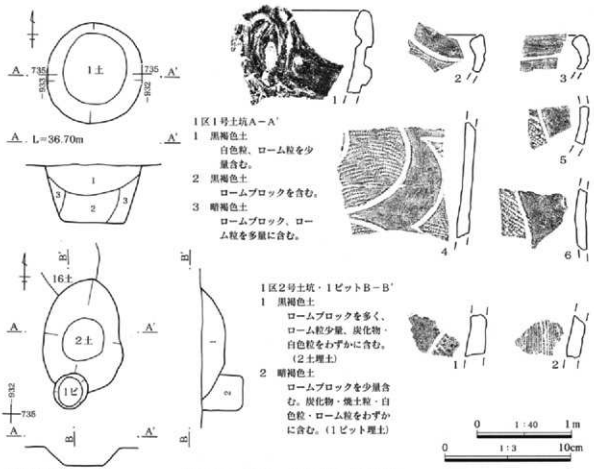
１区南東部調査区境(730－930G)で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。断面の形状は逆台形で、壁は直線的に外に開き立ち上がる。出土遺物は１～６で縄文土器である。１は若干古い様相が窺えるが、１～６は称名寺式である。図示した以外に縄文土器片21片が出土している。出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

１区２号土坑・１号ピット

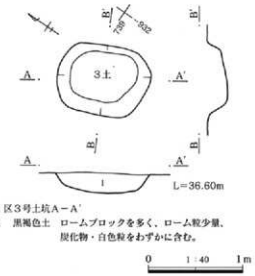
（第111図、ＰＬ48・81）

１区南東部735－930Gで確認された。１区16土坑と１区１号ピットと重複する。16号土坑との新旧関係は不明である。１号ピットは２号土坑より古い。平面の形状は楕円形で、底面は狭く平坦である。断面の形状は擂鉢型である。出土遺物は１・２の２点で縄文土器である。図示した以外に縄文土器３片、石１点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

１号ピットは２号土坑の南で重複する。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はわずかに外に開き立ち上がる。断面の形状はコップ型である。出土遺物はなかった。



第111図　１区１・２号土坑・出土遺物

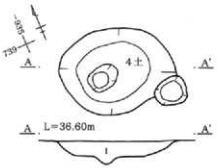


１区３号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ロームブロックを多く、ローム粒少量、炭化物・白色粒をわずかに含む。

第112図　１区３号土坑

１区４号土坑（第113図、ＰＬ48・81）

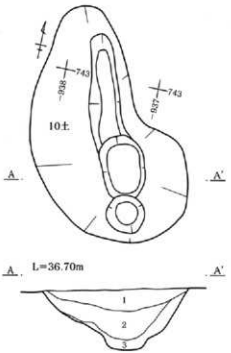
１区南東部（735－930Ｇ）で確認された。平面の形状は楕円形で、底面にピット状の掘り込みがある。断面の形状は皿型。長軸方向の東側の上端付近でピット状の遺構が確認された。土坑の一部か別の遺構かは不明。出土遺物は１・２で縄文土器で後期称名寺。図示した遺物以外に縄文土器15片が出土している。土坑の時期は不明瞭であるが、出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



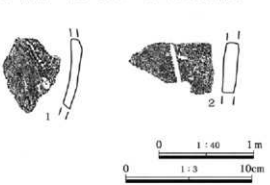
１区４号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ロームブロックを多く、ローム粒少量、炭化物・白色粒をわずかに含む。

１区10号土坑（第113図、ＰＬ50・83）

１区南東部（740－935Ｇ）で、１区21号土坑、１区50・56号ピットに近接して確認された。平面形は不整形な楕円形で、壁は外に開き緩やかに立ち上がる。南側に円形の落ち込みがあり、ピットと重複していた可能性が考えられる。出土遺物は１・２で縄文土器深鉢の胴部片で、１は微隆起帯で区画する。図示した遺物以外に縄文土器片14点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代中期末から後期初頭と考えられる。



１区10号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　径１～２mmの白色粒・炭化物をわずかに含む。
2　黒褐色土　径１～２mmの白色粒・炭化物をわずかに含む。径３～４cmのロームブロックを少量含む。
3　褐色土　径３～４cmのロームブロックを少量含む。



第113図　１区４・10号土坑・出土遺物

1区5号土坑（第114図、PL49・82）

1区南東部（740－930G）で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。断面の形状は、南北方向は上端から下端はほぼ垂直で、東西方向は上端から20cm付近まで狭くなり、底面に近づくにしたがい広がるフラスコ型である。南東側で25号ピットと重複。新旧関係は不明。出土遺物は1～11の11点で縄文土器である。1・2は後期か。3～11は称名寺である。図示した遺物以外に縄文土器片75点が出土している。土坑の時期は不明瞭であるが縄文時代後期初頭と考えられる。

1区6号土坑（第114図、PL49・82）

1区南東部（740－930G）で確認された。平面の形状は円形もしくは隅丸方形である。南側で14号土坑と西側で15号土坑と重複する。新旧関係は不明。断面の形状は皿型で、さらに南側に径75cm程の円形で、深さ70cm程の掘り込みを有す。埋没土は黒褐色土でロームブロックの混入状態で4層に分層される。出土遺物は1～4の4点で縄文土器深鉢である。1は地文に縄文施文。2は沈線を施文。3は縄文施文後、沈線施文。堀之内式と思われる。4は沈線施文、沈線の上部に条線を施文。図示した遺物以外に縄文土器片25点、石3点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

1区14号土坑（第114図、PL51・84）

1区南東部（740－930G）で確認された。平面の形状は円形で、掘り込みは浅く、断面の形状は皿型である。出土遺物は1・2で縄文土器で、後期堀之内である。図示した遺物以外に縄文土器片2点が出土している。土坑の時期は不明瞭であるが、縄文時代後期前葉と考えられる。

1区7号土坑（第115図、PL49・82）

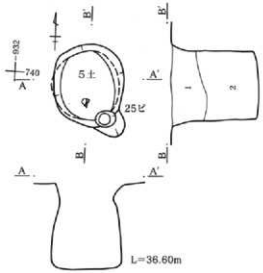
1区南東部（740－930G）で1区1号住居と重複して確認された。1号住との新旧関係は不明である。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。出土遺物は1～10で、縄文土器である。1～4は沈線区画、縄文施文。5は指撫での痕跡が明瞭。6・9は地文に縄文施文後沈線で区画。7・8は地文に縄文施文。10は無文である。図示した遺物以外に縄文土器片32点、石2点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から後期初頭と考えられる。

1区8号土坑（第115図、PL49・50・82）

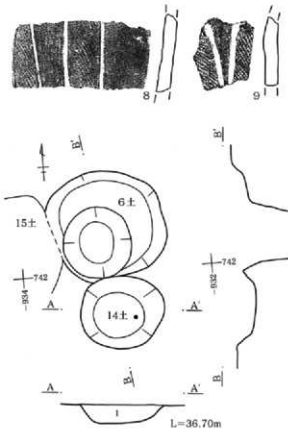
1区南東部（740－930G）で、1区11・19号土坑に近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。断面形は袋状で、底面から中程が袋状に広がる。中程ですぼまり、上端にかけて広がり立ち上がる。出土遺物は1～9で縄文土器深鉢である。1は微隆起帯で区画し、縄文施文。やや古い様相が窺える。後期加曽利E式系統と思われる。2～5、7・8は沈線区画後、縄文を施文。5は沈線で区画。9は地文に縄文を施す。図示した遺物以外に縄文土器片95点、石2点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

1区9号土坑（第116図、PL50・82・83）

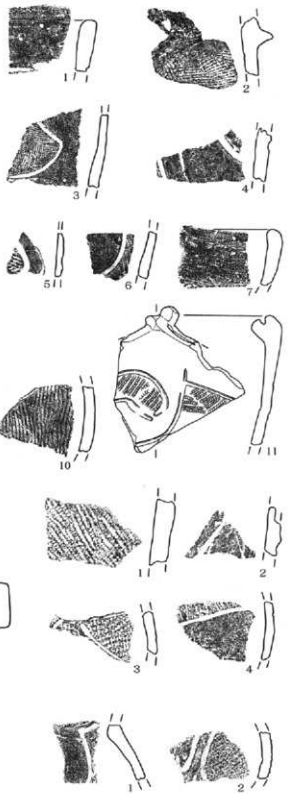
1区南東部（745－935G）で、1区67・68・69号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、底面はわずかに凹凸がみられる。断面形はフラスコ型で、底面付近が最大巾で上端よりやや中程が最小巾で、上端にかけて広がり立ち上がる。出土遺物は1～21が縄文土器で、22が打製石斧である。1は横状の把手、2は微隆起帯を施文。1・2とも中期加曽利E式の様相が窺えるが、後期に下る可能性が考えられる。3～15は沈線で区画、縄文施文。4は王冠状の把手で、沈線の区画内に円形の連続する刺突文を施文。19～21は底部片。図示した以外に縄文土器片84点、石2点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考える。



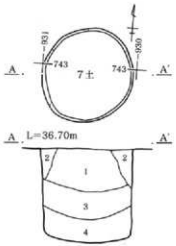
1区5号土坑B－B'
1　黒褐色土　径2～3cmのロームブロックを多く、ローム粒少量、径1～2mmの炭化物・白色粒をわずかに含む。
2　黒褐色土　ローム粒少量、径1～2mmの炭化物わずかに含む。



1区14号土坑A－A'
1　暗褐色土　径3～4cmのロームブロック、径1～2mmの炭化物・ローム粒・白色粒を少量含む。



第114図　1区5・6・14号土坑・出土遺物



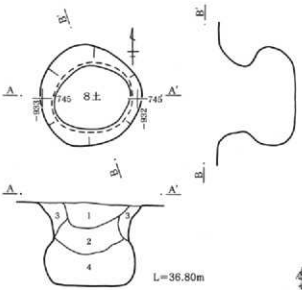
1区7号土坑A－A'

1　黒褐色土　径2～3cmのロームブロックを多く含む。径1～2mmの炭化物・白色粒・ローム粒をわずかに含む。

2　暗褐色土　1層より径2～3cmのロームブロックを多量に含む。

3　黒褐色土　1層より径2～3cmのロームブロックを多量に含む。1層よりしまりがない。

4　黒褐色土　径2～3cmのロームブロックを少量含む。



1区8号土坑A－A'

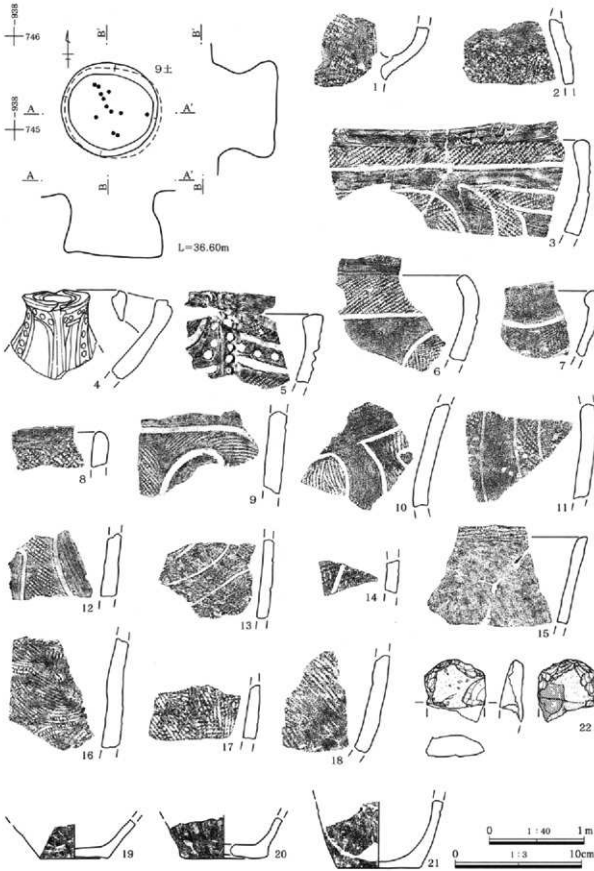
1　黒褐色土　径1～2mmの炭化物、径1～2mmの白色粒、径1～2mmローム粒少量含む。

2　暗褐色土　径2～3cmのロームブロックを多く含む。

3　にぶい黄褐色土　2層より多くロームブロックを含む。

4　黒褐色土　2層より少量のロームブロックを含む。

第115図　1区7・8号土坑・出土遺物



第116図　1区9号土坑・出土遺物

1区11号土坑（第117図、PL50・83）

1区南東部（745−930G）で、1区8・12・19・20・60号土坑に近接して確認された。平面形は、やや不整形な円形である。底面は凹凸があり、断面形はフラスコ型で、底面近くに最大径がある。中程が最小径で、上端にかけて外に開き立ち上がる。出土遺物は1〜15で縄文土器である。1は微隆起帯により区画。2〜4は隅丸長方形の横状把手が付く。中期加曽利E式の様相が強く窺えるが、後期称名寺式土器に共判する例があり、本土坑もこの1例と考えられる。8・9・12号土坑も同様と考えられる。5〜9は沈線で区画し、区画内に縄文施文。10・11は地文に条線を施す。12は隆帯状に円形の刺突文を施す。13は沈線と縄文で施文。14は縄文施文後沈線で区画する。図示した遺物以外に縄文土器片64点、石3点が出土した。土坑の時期は出土土器等から縄文時代後期初頭と考えられる。

1区12号土坑・43号ピット

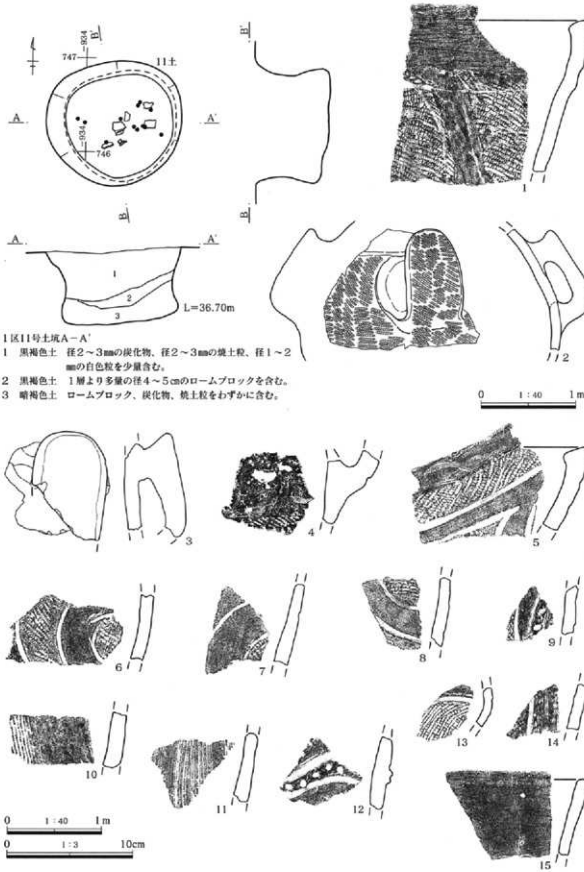
（第118・119図、PL51・83・84）

1区南東部（745−930G）で、1区43ピットと重複し、1区11号土坑、1区42・44号ピットに近接して確認された。43号ピットとの新旧関係は不明である。43号ピットは12号土坑の南で重複し、北側半分が12号土坑により壊される。平面は円形と推定され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。43号ピットから明確に出土した遺物はなかった。

12号土坑は平面形がやや不整形であるが、円形である。底面は凹凸がみられ、断面形はフラスコ型である。底面近くに最大径が、中程に最小径で、上端にかけて外に開き立ち上がる。出土遺物は1〜22である。1〜4は深鉢の口縁部で、1は口縁部下に沈線が巡る。2〜4は口縁部下に微隆起帯が巡る。4は微隆起帯上に円形刺突文が連続する。5は微隆起帯が懸垂し、縄文施文。中期加曽利E式の様相が窺える。6〜10は沈線で区画し、縄文施文。11は注口土器の注口部。14〜19は胴部片で地文に縄文。19・20は底部片。21は打製石斧。22は砥石で、石材は砂岩である。右側面に溝状になった磨痕がみられる。図示した遺物以外に縄文土器162点、石1点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

1区13号土坑（第119図、PL51・84）

1区南東部（740−930G）で確認された。近接して、15・16・19・20号土坑が確認されている。平面形は東側が緩い弧状で、他の3方向が直線的で隅丸方形である。断面形は皿型で、底面は平坦である。西よりに30cm×25cmの楕円形で深さ25cm程の掘り込み。出土遺物は1で縄文土器で後期称名寺式の深鉢型土器の胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片5点が出土している。土坑の時期は出土遺物が少量で小片のため不明瞭であるが、縄文時代後期初頭と考える。



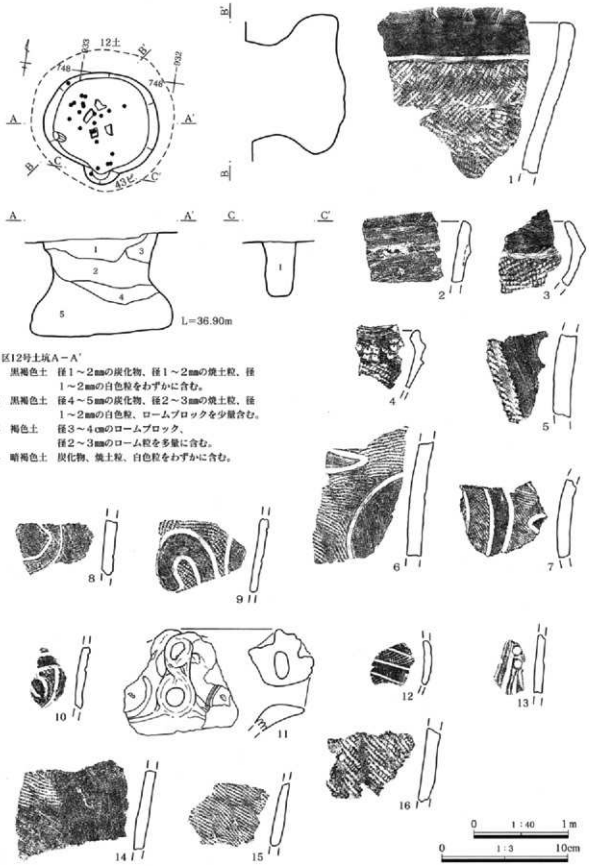
1区11号土坑A－A'

1　黒褐色土　径２～３mmの炭化物、径２～３mmの焼土粒、径１～２mmの白色粒を少量含む。

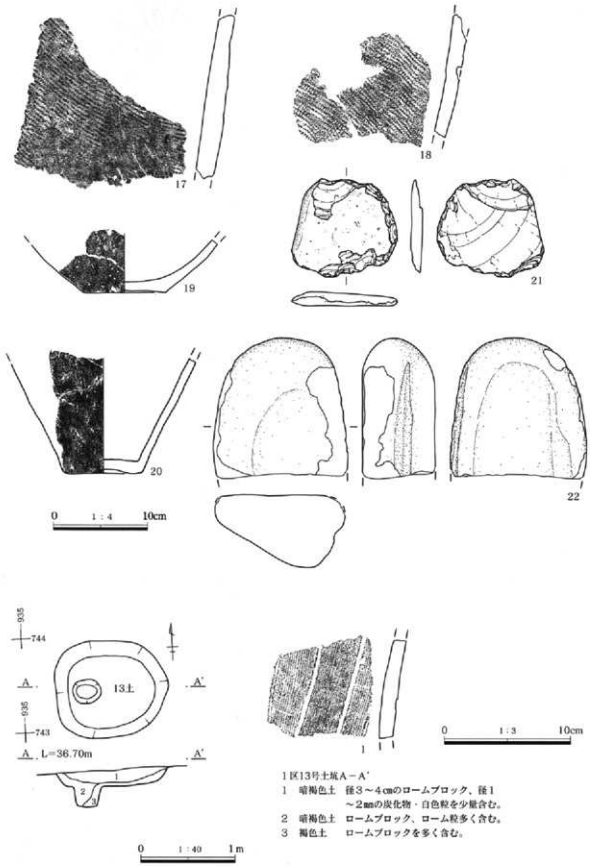
2　黒褐色土　１層より多量の径４～５cmのロームブロックを含む。

3　暗褐色土　ロームブロック、炭化物、焼土粒をわずかに含む。

第117図　１区11号土坑・出土遺物



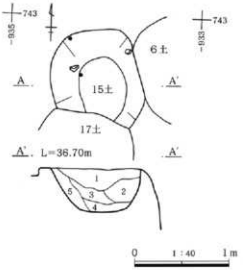
第118図　1区12号土坑・出土遺物（1）



第119図　１区12号土坑出土遺物（２）、１区13号土坑・出土遺物

1区15号土坑（第120図、PL51・84）

1区南東部（740−930G）で、1区1住、10・13・14号土坑に近接し、6・17号土坑と重複して確認された。平面形は楕円形、埋没土に焼土や炭化物が含まれる。周辺の土坑やピットを含め住居の可能性も想定され、炉と考えられるが、土坑として報告する。出土遺物は1〜7が縄文土器である。1・2は加曽利E式の様相が窺える。3・4は沈線で区画。5は8の字状の貼付文。7は縄文施文後沈線区画。6は指撫での痕跡が明瞭。8・9は石器である。9は軽石製で下半部を欠損する。上部穿孔で、垂飾の可能性。8は打製石斧である。図示した遺物以外に縄文土器片103点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期前葉と考える。



1区15号土坑A−A'

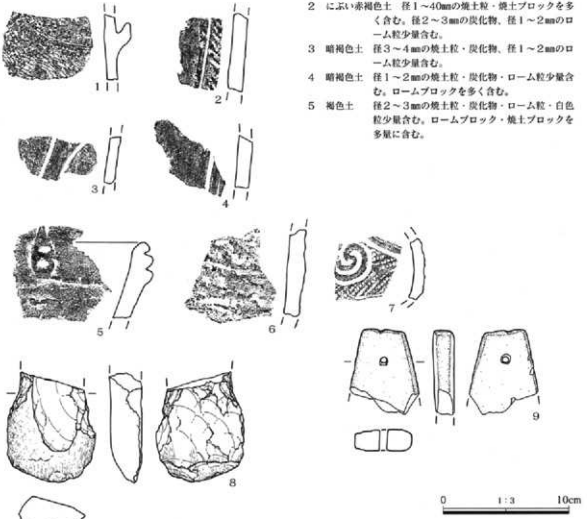
1　黒褐色土　径2〜3mmの炭化物、焼土粒、白色粒、ローム粒を少量含む。

2　にぶい赤褐色土　径1〜40mmの焼土粒・焼土ブロックを多く含む。径2〜3mmの炭化物、径1〜2mmのローム粒少量含む。

3　暗褐色土　径3〜4mmの焼土粒・炭化物、径1〜2mmのローム粒少量含む。

4　暗褐色土　径1〜2mmの焼土粒・炭化物・ローム粒少量含む。ロームブロックを多く含む。

5　褐色土　径2〜3mmの焼土粒・炭化物・ローム粒・白色粒少量含む。ロームブロック・焼土ブロックを多量に含む。



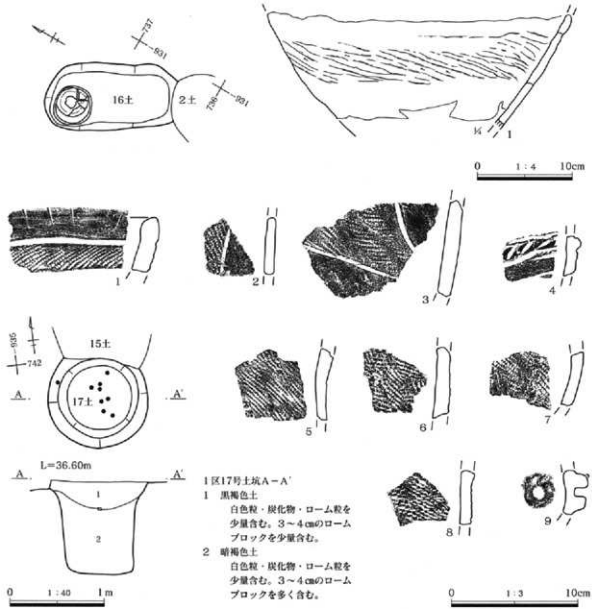
第120図　1区15号土坑・出土遺物

1区16号土坑（第121図、PL51・84）

1区南東部（735−930G）で、1・3・4・5号土坑に近接して確認された。南側で2号土坑と重複する。2号土坑との新旧関係は不明。平面形は楕円形かあるいは隅丸方形である。土坑の北側から大型深鉢型土器の胴下部1が出土した。1は指撫での痕跡が明瞭である。図示した遺物以外に縄文土器片2点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期初頭〜前葉と考えられる。

1区17号土坑（第121図、PL52・84）

1区南東部（740−930G）で、1区15号土坑と重複し、6・14号土坑に近接して確認された。15号土坑との新旧関係は不明。平面形は、北側を15号土坑により壊されているが、円形と推定される。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に直線的に立ち上がる。出土遺物は1〜9で縄文土器である。1〜3は沈線区画に縄文施文。4は横位隆帯に刻目を施す。5〜8は地文に縄文を施文。9は円形の貼付文、貼付文の中央に円形の刺突文。図示した遺物以外に縄文土器片28点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から後期前葉と考えられる。



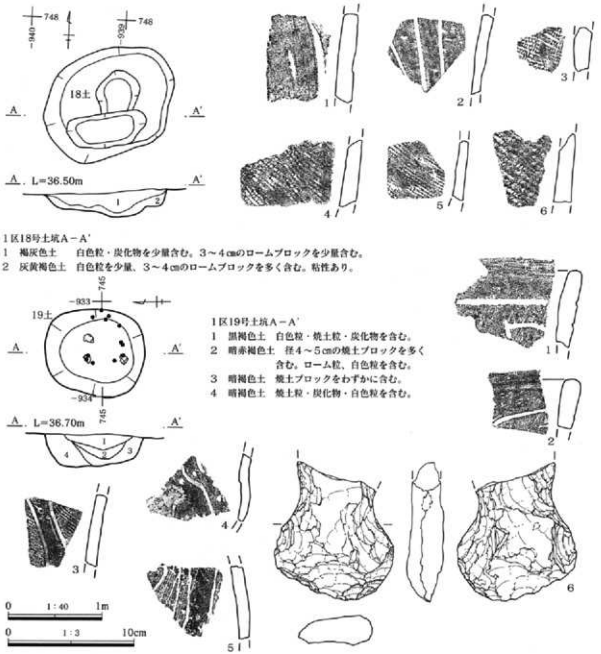
第121図　1区16・17号土坑・出土遺物

1区18号土坑（第122図、PL52・85）

1区中央やや南よりで、24ピット、9号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な隅丸方形で、底面は凹凸である。出土遺物は1～6で縄文土器深鉢の胴部破片である。1は沈線区画に刺突文、2は沈線区画。3～6は縄文施文。1は称名寺式で、2～6は後期の所産であろう。図示した遺物以外に縄文土器片7点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

1区19号土坑（第122図、PL52・85）

1区南東部（740－930G）で、8・11・13・20号土坑に近接して確認された。平面形は隅丸方形で、底面は凸凹である。出土遺物は1～5で縄文土器。沈線区画で、区画内に3は縄文、4は刺突文、5は条線。6は打製石斧で基部を欠損。図示した遺物以外に縄文土器片43点、石3点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

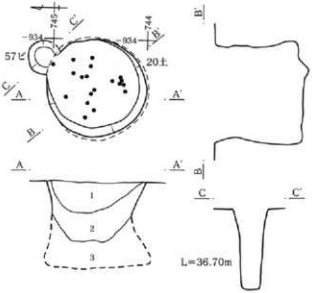


第122図　1区18・19号土坑・出土遺物

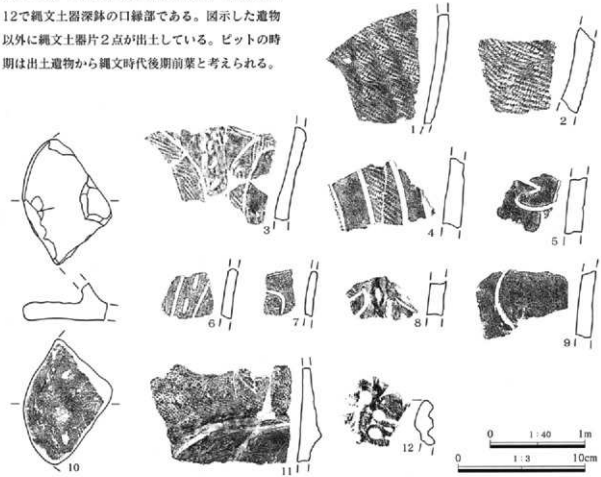
１区20号土坑・57号ピット（第123図、ＰＬ52・85）

１区南東部（740－930Ｇ）で、13・19号土坑、46・47号ピットに近接して確認した。20号土坑の北東で57号ピットと重複する。土坑とピットとの関係は出土遺物により57号ピットが新しく、20号土坑が古いと推定される。平面形は円形で、底面は凸凹である。断面形は上端よりわずかに下端付近が広がるフラスコ型である。土層断面の作成は２層を除去時のため、Ｂ－Ｂ′断面と不整合が生じ、報告書作成時に下層部分を加えた。土層３はロームブロックを多量に含む層と推定される。出土遺物は１～11で縄文土器である。３～８は称名寺式の深鉢。10は蓋。図示した遺物以外に縄文土器片70点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

57号ピットは深さ84cmと深い。20号土坑で壊されているが平面形は円形と推定される。出土遺物は12で縄文土器深鉢の口縁部である。図示した遺物以外に縄文土器片２点が出土している。ピットの時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



１区20号土坑Ａ－Ａ′
1　黒褐色土　径１～２mmの白色粒、径１～５mmのローム粒、径１～２mmの焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土　径１～２mmの白色粒、径１～２mmの炭化物を少量含む。



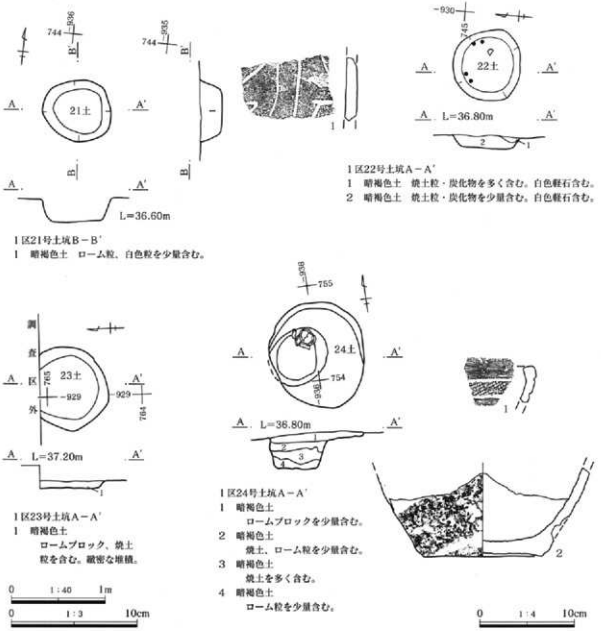
第123図　１区20号土坑・57号ピット・出土遺物

1区21号土坑（第124図、PL85）

1区南東部（740−930G）で10・13・15・17号土坑、47・68号ピットに近接して確認された。平面形は不整形であるが円形と考える。底面は平坦で、壁は西壁が丸味を帯び、他方向の壁は直線的に外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器の胴部破片である。沈線で区画する。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

1区24号土坑（第124図、PL53・85）

1区東側（750−935G）で、26・29・38・40号土坑に近接して確認された。平面形は円形で、1段浅い皿状の掘り込みで、さらに西側の壁に沿って、深さ30cm、径60cm程の円形に掘り込む。埋没土に焼土を含む。出土遺物は1・2で、縄文土器。1は口縁部で、称名寺式。2は深鉢型土器の底部で、2段目の掘り込みから2が出土した。図示した遺物以外に縄文土器片11点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



1区21号土坑B−B'
1　暗褐色土　ローム粒、白色粒を少量含む。

1区22号土坑A−A'
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物を多く含む。白色軽石含む。
2　暗褐色土　焼土粒・炭化物を少量含む。白色軽石含む。

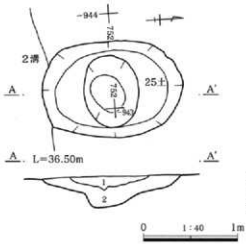
1区23号土坑A−A'
1　暗褐色土
ロームブロック、焼土粒を含む。緻密な堆積。

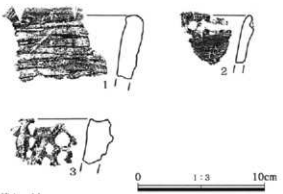
1区24号土坑A−A'
1　暗褐色土
ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土
焼土、ローム粒を少量含む。
3　暗褐色土
焼土を多く含む。
4　暗褐色土
ローム粒を少量含む。

第124図　1区21・24号土坑・出土遺物、22・23号土坑

１区25号土坑（第125図、ＰＬ53・85）

１区中央部（750－940Ｇ）で確認された。２号溝と重複し、２号溝より古い。平面形は楕円形で、南側の土端付近を２号溝により壊されている。掘り込みは浅く、断面の形状は皿状で、中央部付近で１段深く掘り込まれている。出土遺物は１～３で、縄文土器深鉢型土器の口縁部片で、１は指擦での痕跡が明瞭。２は８の字状の貼付文。３は波頂部から隆帯が垂下。隆帯に刺突文。図示した遺物以外に縄文土器片14点が出土した。





１区25号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。

第125図　１区25号土坑・出土遺物

１区26号土坑（第126図、ＰＬ53・85・86）

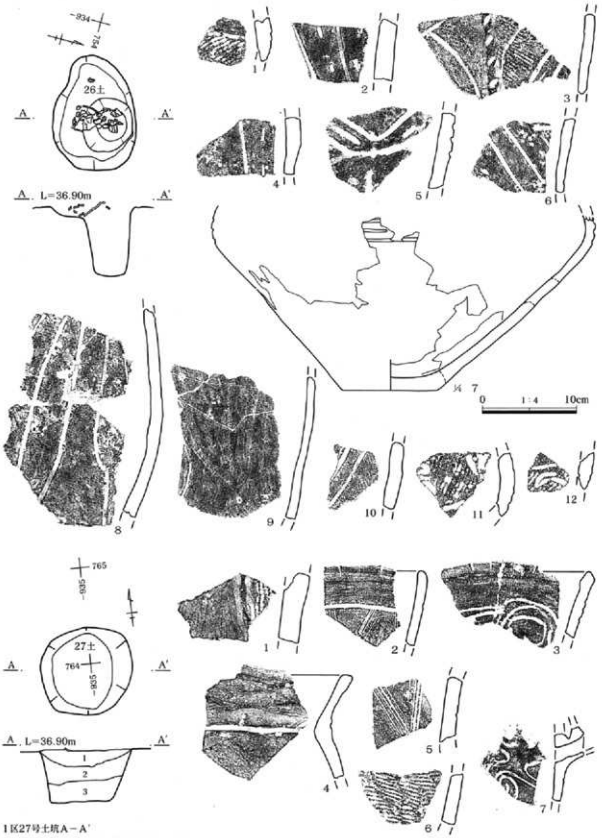
１区東部（750－930Ｇ）で、１区２号溝の北側で確認された。平面形は不整形な楕円形である。東側にピット状で円形に落ち込む。ピットと重複していた可能性も考えられる。ピット状の落ち込みはわずかに外に開き立ち上がる。土坑は皿状の断面形と推定される。７が土坑の底面近くから出土した。出土遺物は１～12で縄文土器である。１は、口縁下に沈線が横位に巡る。２～５は沈線区画に縄文や刺突文を施文。６・８・10は沈線区画。11・12は縄文施文後沈線区画である。図示した遺物以外に縄文土器片53点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

１区27号土坑（第126図、ＰＬ54・86）

１区北東部（760－930Ｇ）で、１区42号土坑に近接して確認された。平面形は、不整形な円形で、底面は平坦である。壁は西壁が直線的でわずかに、東壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１～７で縄文土器である。１は微隆起帯で区画。２・５は条線を施文。３は沈線による渦巻き文を施文。４は頸部で屈曲し、１条沈線が巡る。７は注口土器の注口部。図示した遺物以外に縄文土器56点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

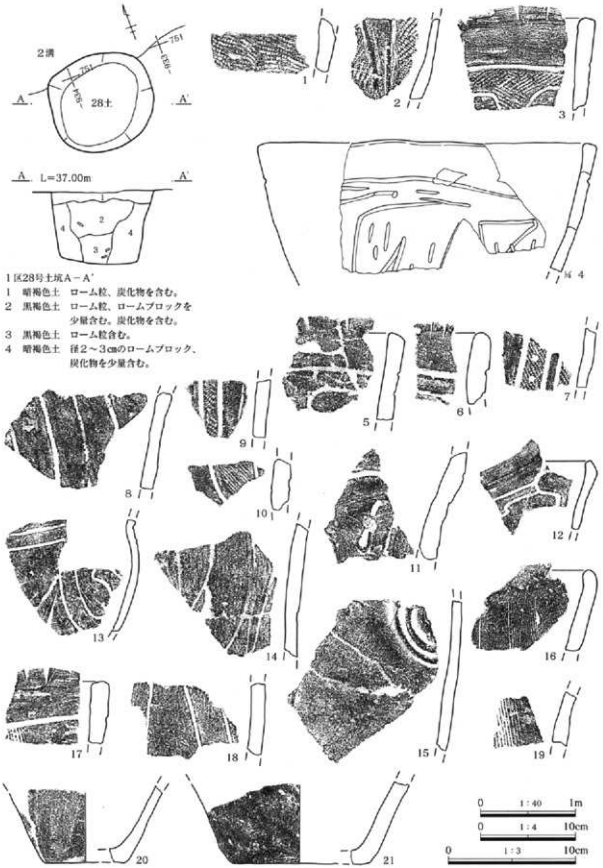
１区28号土坑（第127図、ＰＬ54・86）

１区東部（750－930Ｇ）で、１区２号溝と重複し、49号土坑に近接して確認された。重複関係は28号土坑より２号溝が新しい。平面形は不整形な円形で、底面はやや東に傾斜する。壁は西壁がわずかに外に開き直線的に立ち上がる。東壁は中程で外に開く。出土遺物は１～21で、縄文土器である。２は微隆起帯で区画。３～11は沈線で区画し、縄文、刺突文を施文。16～20は沈線に条線を施文。図示した遺物以外に縄文土器129点、石３点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



1区27号土坑A－A'
1　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒を少量含む。
3　暗褐色土　ローム土粒を少量含む。

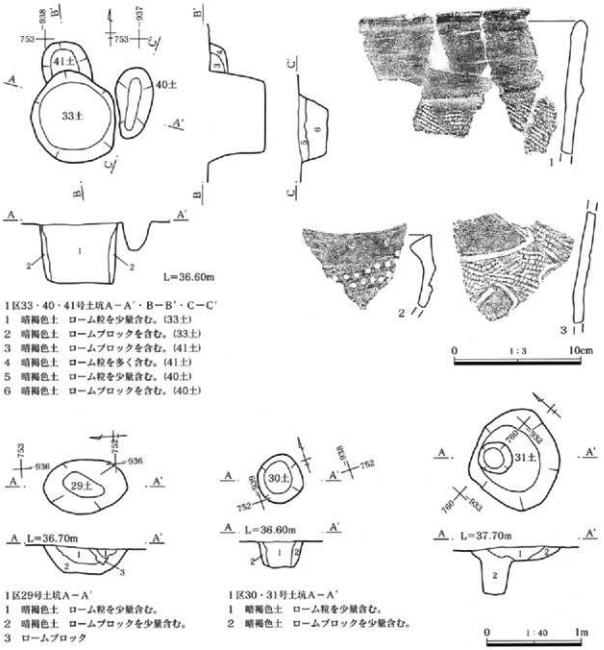
第126図　1区26・27号土坑・出土遺物



第127図　１区28号土坑・出土遺物

1区33・40・41号土坑（第128図、PL55・86）

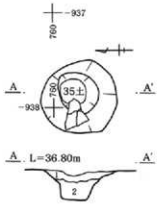
1区中央東側（750－935G）で、29・30号土坑、2号溝に近接して確認された。33号土坑の北側で41号土坑と重複する。33号土坑と41号土坑の新旧関係は不明である。平面形は33号土坑が円形、40号土坑が楕円形、41号土坑が33号土坑で半分近くが壊されているが楕円形と推定される。33号土坑はほぼ垂直に壁が立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は1～3が33号土坑出土遺物である。1・2は口縁部下に微隆起帯を有し、加曽利E の様相が窺える。3は沈線区画に縄文施文で、称名寺式と考える。図示した遺物以外に33号土坑では、縄文土器片15点が出土した。40・41号土坑は出土遺物はなかった。33号土坑は縄文時代後期初頭と考える。



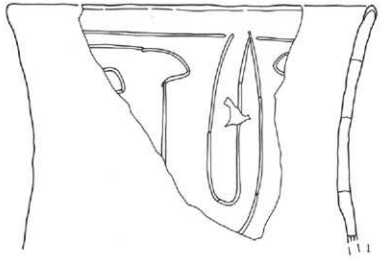
第128図　1区33号土坑・出土遺物、29・30・31・40・41号土坑

１区35号土坑（第129図、ＰＬ56・87）

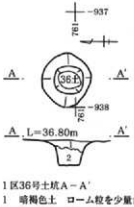
１区北東部（755－935Ｇ）で、１区36号土坑の南側で確認された。平面形は不整形な円形で、漏斗状の断面形である。土坑の中央やや南側で１点出土した。縄文土器の深鉢の口縁部破片である。図示した遺物以外に縄文土器片４点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



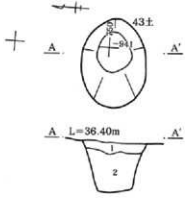
１区35号土坑Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒をやや多く含む。



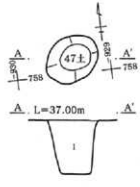
0　1:4　10cm



１区36号土坑Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む
2　暗褐色土　ローム粒、焼土を少量含む。



１区43号土坑Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒を極く少量含む。



１区47号土坑Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　ローム粒を含む。

0　1:40　1m

第129図　１区35号土坑・出土遺物、32・44・36・43・47号土坑

1区34・37・38号土坑（第130図、PL55・87）

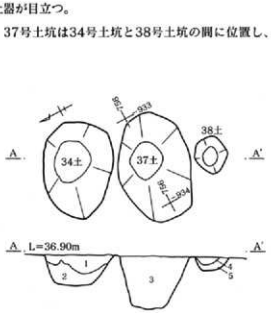
1区北東部（755－930G）で確認された。土坑は重複はなく、それぞれ単独で確認された。

34号土坑は37号土坑の北に位置し、不整形な楕円形である。底面は平坦で、壁は外に開き緩やかに立ち上がる。出土遺物は調査時のミスで34・37・38号土坑の出土遺物が混じってしまった。図示し得なかったが34・37・38号土坑は縄文土器片24点が出土した。微隆起帯を有する加曽利E式の様相が窺えるもの、沈線区画に縄文を施文する称名寺式土器が目立つ。

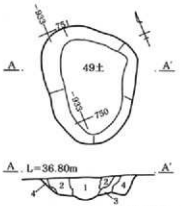
37号土坑は34号土坑と38号土坑の間に位置し、平面形は不整形な楕円形である。底面にやや凹凸がみられ、壁は外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は1～3で縄文土器である。1・2は微隆起帯を有し、3は沈線が垂下し、加曽利E式の様相が窺える。図示した遺物以外に縄文土器片37点、石2点が出土した。

38号土坑は37号土坑の南に位置し、やや不整形な円形である。底面は丸味を帯び、壁はなだらかに立ち上がる。

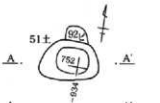
34・37・38号土坑の時期はいずれも縄文時代後期初頭と考えられる。



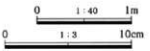
1区34・37・38号土坑A－A'
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。(34土)
2　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。(34土)
3　暗褐色土　ローム粒を極く少量含む。(37土)
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む。(38土)



1区49号土坑A－A'
1　黒褐色土
　　炭化物、ローム粒含む。
2　暗褐色土
　　焼土ブロック、焼土粒、
　　炭化物を多く含む。
3　暗褐色土
　　ローム粒含む。
4　褐色土
　　ロームブロック、ローム
　　粒多く含む。



1区51号土坑A－A'
1　暗褐色土　ロームブロック、
　　白色粒を含む。
　　しまりあり。



第130図　1区34・37・38号土坑・出土遺物、49・51号土坑

1区42号土坑（第131図、PL56・87）

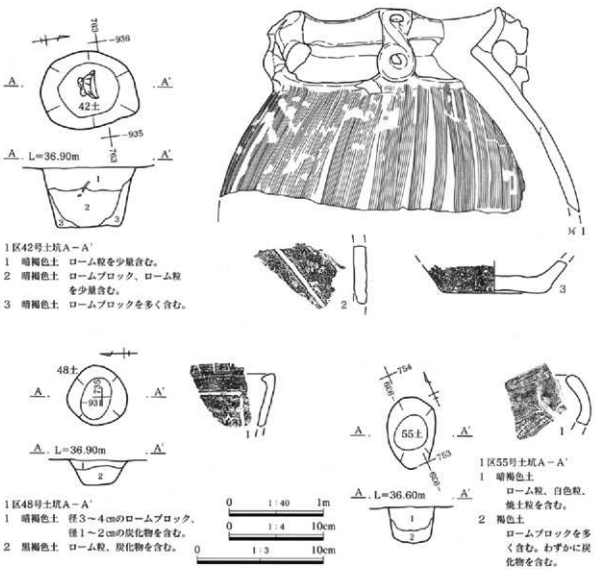
1区北東部（760－760G）で、27号土坑に近接して確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁はやや開き直線的に立ち上がる。土坑中央で横たわった状況で1が出土した。1は注口土器の口縁部～胴上部である。2は胴部片、3は底部片である。図示した遺物以外に縄文土器片25点、石1点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

1区48号土坑（第131図、PL57・87）

1区東側（750－930G）、1区2号溝の北側で確認された。平面形は不整形な円形で、底面は平坦である。壁は外側に開き立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の口縁部片である。図示した遺物以外に縄文土器片14点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉である。

1区55号土坑（第131図、PL59・88）

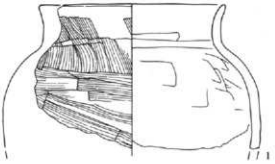
1区中央やや東より（750－935G）で確認された。平面形は楕円形で、底面は凸凹で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の口縁部片である。図示した遺物以外に縄文土器片3点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

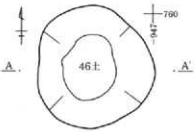


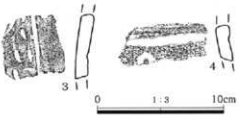
第131図　1区42・48・55号土坑・出土遺物

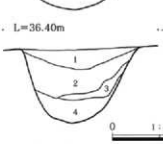
1区46号土坑（第132図、PL56・87）

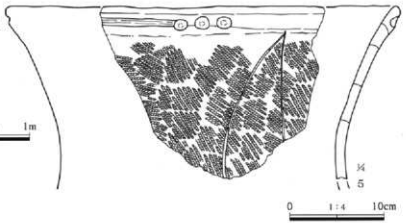
1区中央北より（755－945G）で確認された。平面の形状は楕円形で底面は丸味を帯びる。出土遺物は1～5である。1・2は土師器甕・器台である。3～5は縄文土器で、3は称名寺式、4・5は堀之内式である。図示した遺物以外に縄文土器片22点、土師器甕4点、石1点が出土した。土坑の時期は出土遺物から5世紀前半と考える。











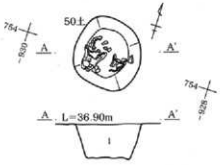
1区46号土坑A－A'
1　黒褐色土　やや粘性が強い。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　ローム粒、ロームブロックを少量含む。
4　黒褐色土　ローム粒、ロームブロックを多量に含む。

第132図　1区46号土坑・出土遺物

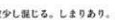
1区50号土坑

（第133・134図、PL57・87・88）

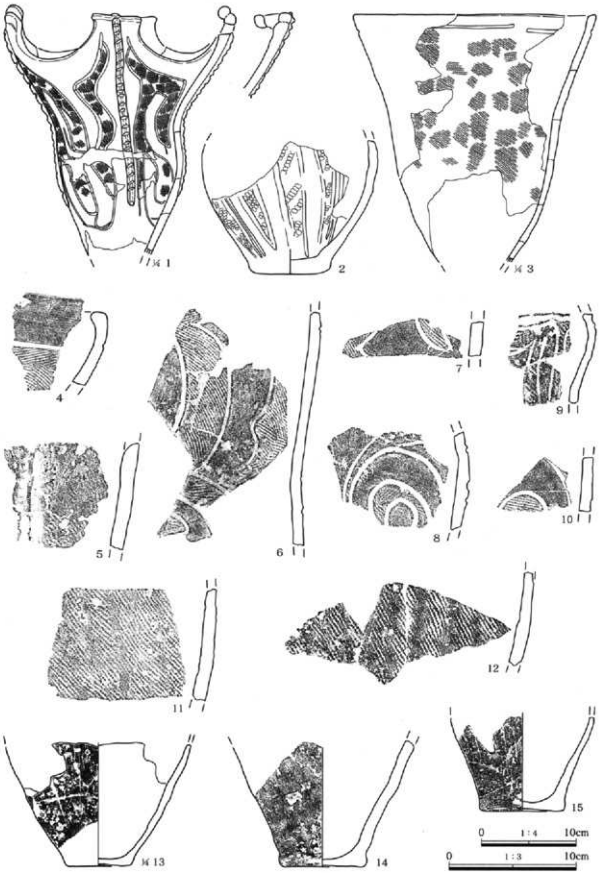
1区東側（750－925G）で、2号溝、48号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、底面は凸凹で、壁は外側に開き直線的に立ち上がる。西側で1が、東側で3が横たわる状況で出土した。出土遺物は1～15で縄文土器。1は4単位の波状口縁で波頂部に把手。把手から陸帯が懸垂する。称名寺式の深鉢型土器である。2・3～5は加曽利E式である。3・5は加曽利E式的様相が窺えるが後期の所産と思われる。図示した遺物以外に縄文土器片58点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。



1区50号土坑A－A'
1　暗褐色土　炭化物、ローム粒少し混じる。しまりあり。径1～2mmの焼土粒わずかに含む。



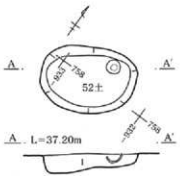
第133図　1区50号土坑



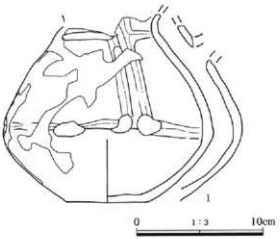
第134図　1区50号土坑出土遺物

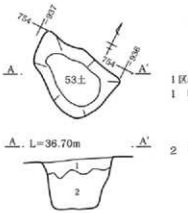
1区52号土坑（第135図、P L.58・88）

1区北東部（755−930G）で31・34号土坑、3号埋甕に近接して確認された。平面形は楕円形で、底面は北東〜南西に傾斜している。土坑の北側で1が正位の状態で出土した。1は注口土器で、口縁部を欠損する。図示した遺物以外に同一個体と思われる破片4点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

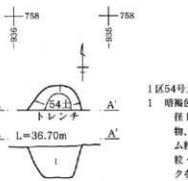


1区52号土坑A−A'
1　暗褐色土
径3〜4cm大のロームブロックを多く含む。わずかに炭化物を含む。

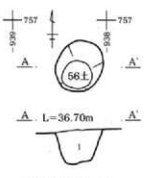




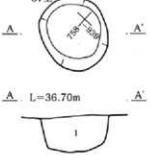
1区53号土坑A−A'
1　暗褐色土
ロームブロックを少量含む。ローム粒、白色粒を含む。
2　褐色土
ロームブロックを多く含む。わずかに炭化物を含む。



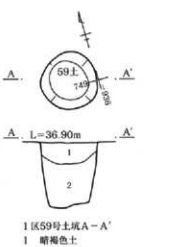
1区54号土坑A−A'
1　暗褐色土
径1〜2mmの炭化物、白色粒、ローム粒を含む。焼土粒・ロームブロックを少量含む。



1区56号土坑A−A'
1　暗褐色土
径1〜2mmのローム粒、炭化物、ロームブロックを含む。



1区57号土坑A−A'
1　暗褐色土
径1〜2mmのローム粒、白色粒、炭化物を均一に含む。しまりあり。

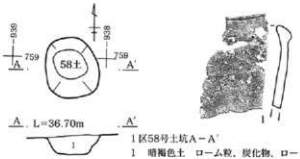


1区59号土坑A−A'
1　暗褐色土
ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土
1層に似るがやや粘性が強く、色調が暗い。

第135図　1区52号土坑・出土遺物、53・54・56・57・59号土坑

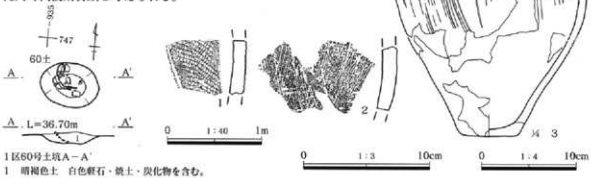
1区58号土坑（第136図、PL59・88）

1区北東部（755−935G）で確認された。平面形は隅丸長方形で、底面は平坦で、壁は外側に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢の口縁部片である。後期堀之内式。図示した遺物以外に縄文土器片3点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考える。



1区60号土坑（第136図、PL60・88）

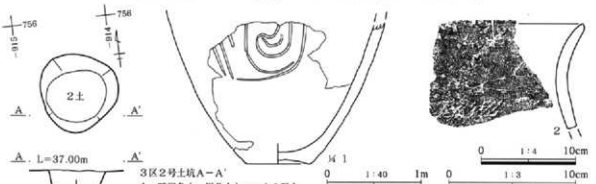
1区南東部（745−930G）で、9・11・20号土坑、24・45・46号ピットに近接して確認された。平面の形状は楕円形で、掘り込みも浅く、皿状である。土坑中央から北側で3が横たわった状態で出土した。出土遺物は1〜3で、2と3は同一個体で、櫛歯状工具による条線を地文にする。図示した以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



第136図　1区58・60号土坑・出土遺物

3区2号土坑（第137図、PL60・88）

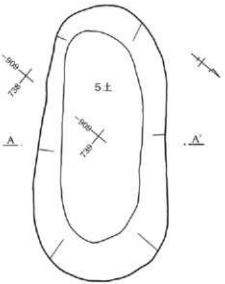
3区北西部（755−910G）で確認された。平面形は不整形な円形で、底面は平坦で、壁は外側に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢である。1は後期の所産と思われ、2は称名寺式である。図示した遺物以外に縄文土器片9点、石1点が出土した。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。



第137図　3区2号土坑・出土遺物

3区5号土坑（第138図、PL60・88）

3区南西部（735－905G）で、1号住居、1号竪穴状遺構に近接して確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦で、壁は外側に開き立ち上がる。出土遺物は、1で縄文土器深鉢の口縁部片である。後期堀之内式と思われる。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

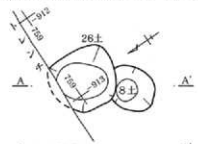


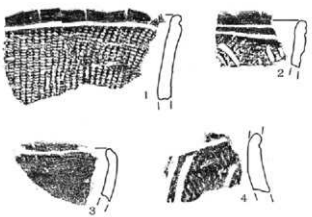
3区5号土坑A－A'
1　暗褐色土　黒色土とロームの混土。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。

第138図　3区5号土坑・出土遺物

3区8・26号土坑（第139図、PL60・91）

3区北西部（755－910G）で、3区3号住居と重複して確認された。3号住居との新旧関係は不明で、住居に伴わないと判断した。8号土坑と26号土坑の関係は、8号土坑が26号土坑より古い。8号土坑の平面形は楕円形で、壁は外に開き、丸味を帯びて立ち上がる。26号土坑の平面形は、北側が3号住居調査時のサブトレンチで壊されてしまったが不整形な楕円形と推定される。8号土坑の出土遺物はなかった。26号土坑の出土遺物は1～4で縄文土器である。1・2・4は地文に縄文施文後沈線を施文。図示した以外に出土遺物はなかった。26号土坑は出土遺物から縄文時代後期前葉である。8号土坑は26号土坑との関係から縄文時代後期前葉以前である。





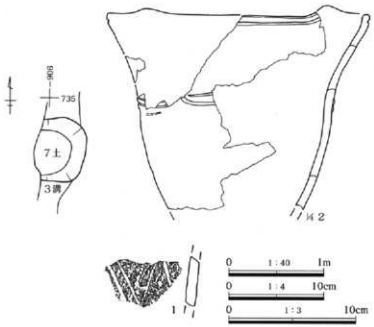
3区8・26号土坑A－A'
1　暗褐色土　径3～4cmのロームブロック含む、ローム粒、炭化物を含む。(26土)
2　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。堆積は緻密である。(8土)

0　1:40　1m
0　1:3　10cm

第139図　3区8号土坑、26号土坑・出土遺物

3区7号土坑（第140図、PL89）

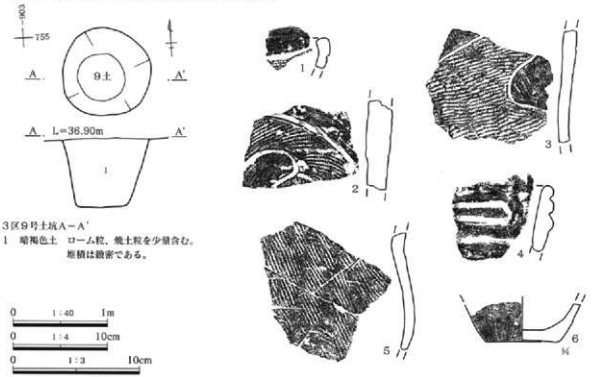
3区南西部（730−905G）で、3区3号溝と重複して確認された。7号土坑は3号溝より古い。溝により西側が壊されているが、平面形は隅丸方形と推定される。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。1は土坑の東側に集中して出土した。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



第140図　3区7号土坑・出土遺物

3区9号土坑（第141図、PL61・89）

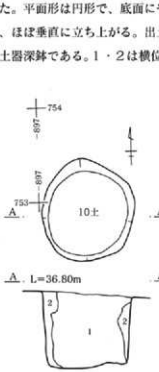
3区北西部（750−900G）で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁は外側に開き立ち上がる。出土遺物は1〜6で、縄文土器深鉢である。1〜3は沈線区画に縄文施文。3の縄文は無節である。4は口縁部下に横位沈線で施文する。図示した遺物以外に縄文土器片41点、石2点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



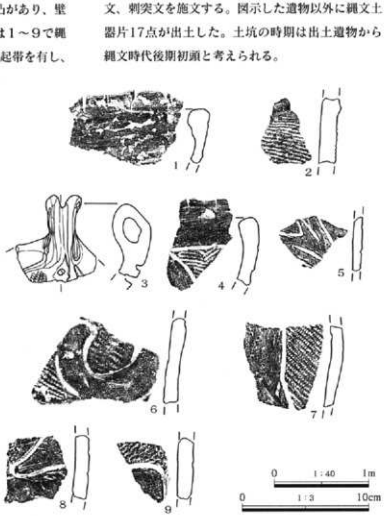
第141図　3区9号土坑・出土遺物

3区10号土坑（第142図、ＰＬ61・89）

３区中央やや北西寄り（895－750Ｇ）で確認された。平面形は円形で、底面にやや凹凸があり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は１～９で縄文土器深鉢である。１・２は横位に微隆起帯を有し、加曽利Ｅ式の様相が窺える。３～９は沈線区画に縄文、刺突文を施文する。図示した遺物以外に縄文土器片17点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



3区10号土坑Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。堆積は緻密である。
2　褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。粘性ややあり。



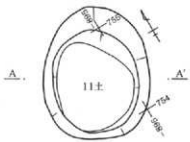
第142図　３区10号土坑・出土遺物

3区11号土坑（第143図、ＰＬ61・89）

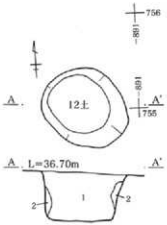
３区中央やや北西寄り（755－890Ｇ）で、12・13・21号土坑に近接して確認された。平面形は楕円形で、壁は中段までほぼ垂直に立ち上がり、中段から上端はやや外側に開き立ち上がる。出土遺物は１～９で縄文土器深鉢である。１～３は微隆起帯を有し、加曽利Ｅ式の様相が窺える。４～７は沈線区画に縄文施文。４は縄文施文後円形の刺突文を施文。８・９は地文に縄文を施文。図示した遺物以外に縄文土器片72点、石２点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考える。

3区12号土坑（第143図、ＰＬ61・89）

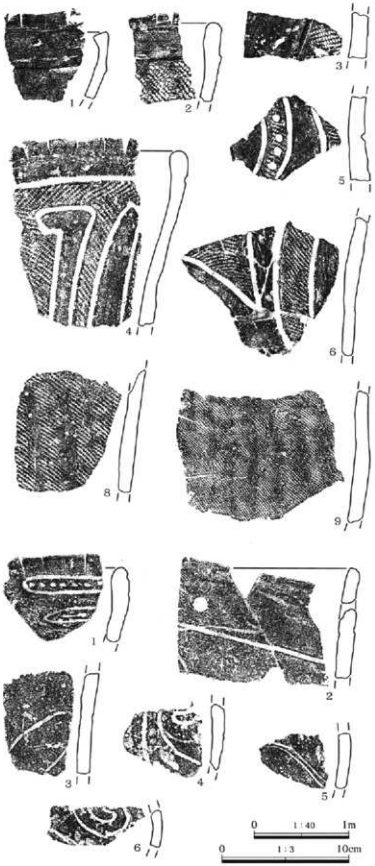
３区中央やや北西寄り（750－890Ｇ）で11・13号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な楕円形で、底面は平坦で、壁はやや外に開き気味に直線的に立ち上がる。出土遺物は１～６で、縄文土器深鉢である。１は沈線区画内に刺突文を施文。２は口縁部片で補修孔。３～６は沈線で区画。６は胴部の丸味がやや強い。図示した遺物以外に縄文土器片63点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考える。



3区11号土坑A－A'
1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　黒褐色土　ロームブロック、ローム粒を含む。
3　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
4　黒褐色土　ロームを多量に含む。
5　褐色土　ロームブロックを多く含む。
粘性ややあり。



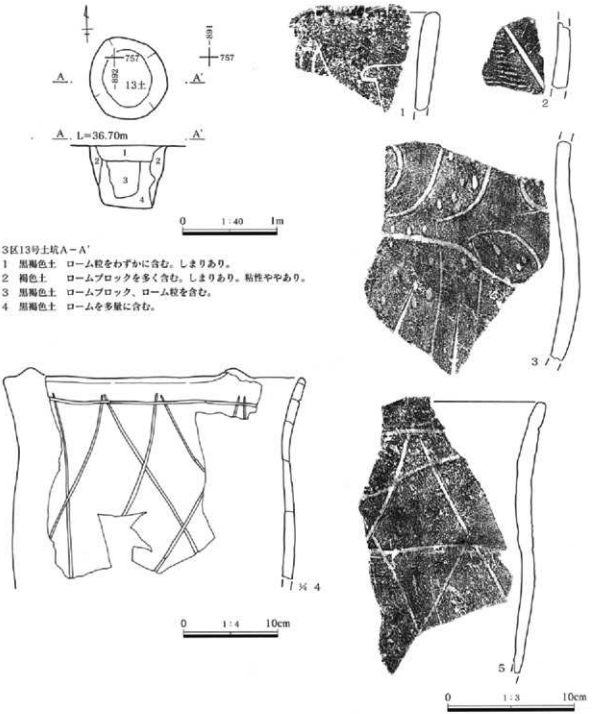
3区12号土坑A－A'
1　黒褐色土　ローム粒わずかに含む。
2　褐色土　ロームブロックを多く含む。
粘性ややあり。



第143図　３区11・12号土坑・出土遺物

3区13号土坑（第144図、ＰＬ62・90）

３区中央やや北西寄り（755－890Ｇ）で、11・12号土坑に近接して確認された。平面形はほぼ円形で、底面は東側がやや低い。壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１～５で縄文土器深鉢である。１～３は沈線区画。２は区画内に縄文施文。３は区画内に刺突文を施文。４・５は沈線を左右斜位に施し、菱形状の格子目文様を描く。４・５は同一個体の可能性が考えられる。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



3区13号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
2　褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりあり。粘性ややあり。
3　黒褐色土　ロームブロック、ローム粒を含む。
4　黒褐色土　ロームを多量に含む。

第144図　３区13号土坑・出土遺物

3区14号土坑（第145図、PL62・90）

3区中央やや北西寄り（755−885G）で、15・66号土坑、15・80号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁は外に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は1～3で縄文土器深鉢の胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片19点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

3区15号土坑

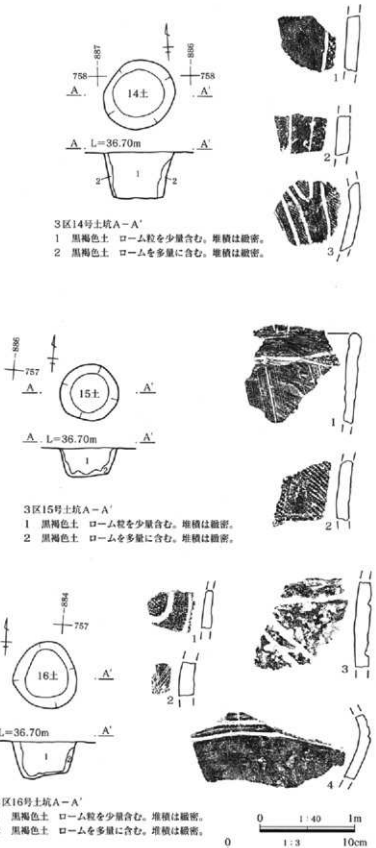
（第145図、PL62・90）

3区やや中央やや北西寄り（755−885G）で、14・16・66号土坑に近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はやや外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢である。1は地文に櫛歯状工具による条線が施される。図示した遺物以外に縄文土器片23点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

3区16号土坑

（第145図、PL62・90）

3区中央北側（755−880G）で、15・17号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、底面は西側が深くなる。壁は外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片13点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期中葉と考える。



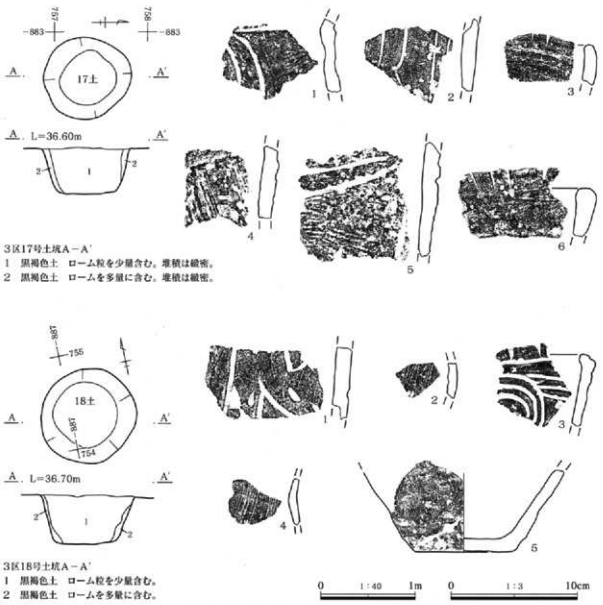
第145図　3区14・15・16号土坑・出土遺物

3区17号土坑（第146図、ＰＬ63・90）

３区中央北側（755－880Ｇ）で、８号溝の西側、16号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、底面は平坦である。底面から壁の立ち上がり部は丸味を帯び、壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１～６で縄文土器深鉢である。１・２は沈線で区画。３は指掘での痕跡が明瞭。４は微隆起帯を有す。３・４は加曽利Ｅ式系統の土器である。５は縄文施文後沈線を施文。図示した遺物以外に縄文土器片53点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

3区18号土坑（第146図、ＰＬ63・90）

３区中央北側（750－885Ｇ）で、19号土坑、14号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。底面から壁の立ち上がり部は丸味を帯び、壁は外にに開き直線的に立ち上がる。出土遺物は１～５で縄文土器である。１は沈線区画で、刺突文を施文。２・４は地文に条線施文。３は沈線により施文。５は底部片で後期である。図示した遺物以外に縄文土器片54点、土師器坏１点が出土した。土坑の時期は出土遺物の大半が縄文土器であることから縄文時代後期前葉と考えられる。



第146図　３区17・18号土坑・出土遺物

3区19号土坑（第147図、PL63・90）

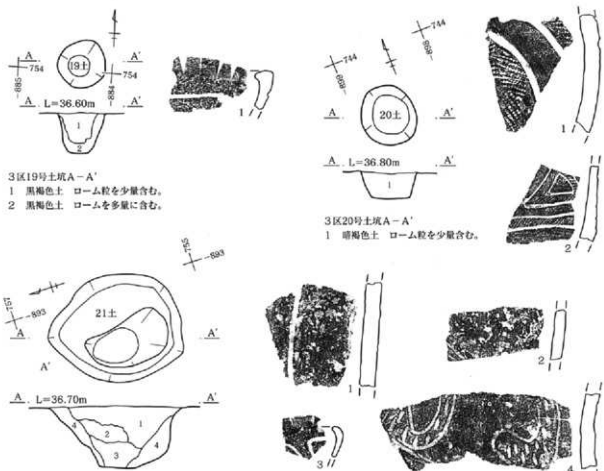
3区中央北側（750－880G）で、18号土坑の西側で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。底面と壁の立ち上がり部は丸味を帯び、壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の口縁部片である。図示した遺物以外に縄文土器片1点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

3区20号土坑（第147図、PL63・90）

3区南西部（740－895G）で、5号住の東側で確認された。平面形は円形で、底面は平坦で、壁は外に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は1～2で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

3区21号土坑（第147図、PL64・91）

3区中央やや北西寄り（750－890G）で、3区10・11号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な楕円形で、北壁は外に開き直線的に、南壁の中段付近はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は1～4で縄文土器である。3・4は沈線で区画。4は区画内に刺突文を施文。図示した遺物以外に縄文土器片26点、石3点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



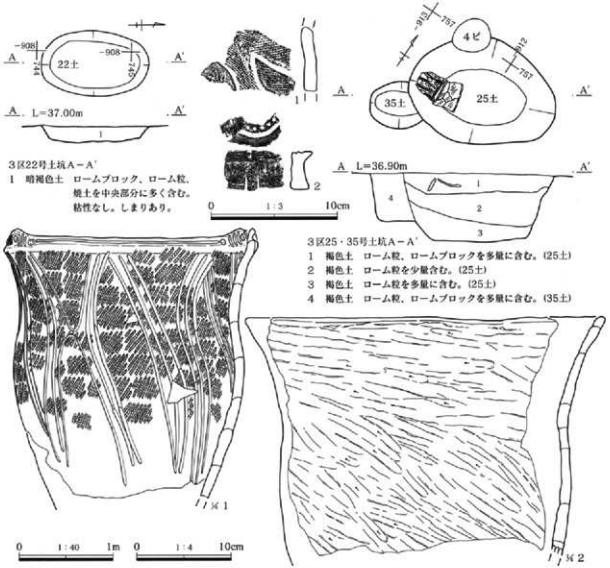
第147図　3区19・20・21号土坑・出土遺物

3区22号土坑（第148図、PL64・90）

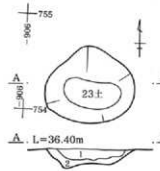
3区南西部（740−905G）で、3区1号住と5号住の間で確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は1・2である。1は縄文土器深鉢。2は耳栓で上面に沈線が1条巡り、沈線の内側を円形刺突文が巡る。3区3住出土の4と接合した。図示した遺物以外に縄文土器片15点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭である。

3区25・35号土坑（第148図、PL65・91）

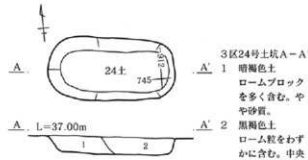
3区北西部（755−910G）で、3区3号住と25号土坑が重複して確認された。25号土坑は35土坑と重複する。25号土坑は平面形が楕円形で、西壁は丸味を帯び、東壁は外に開き直線的に立ち上がる。土層断面の観察により25号土坑は35号土坑より新しい。25号土坑の西側上層より1・2が出土した。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片8点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。35号土坑は東側を25号土坑に壊されている。平面の形状は楕円形と推定される。底面は平坦で、壁はわずかに外に開き直線的に立ち上がる。縄文土器片4点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期前葉以前と考えられる。



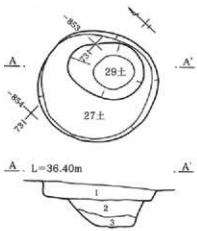
第148図　3区22・25号土坑・出土遺物、35号土坑



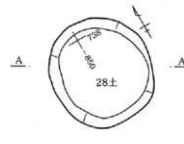
3区23号土坑A－A'
1　黒褐色土　自色粒子を少量含む。ローム粒含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。



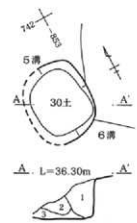
3区24号土坑A－A'
1　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。やや砂質。
2　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。中央付近に白色粒子含む。炭化物を含む。やや砂質。



3区27・29号土坑A－A'
1　黒褐色土　しまりあり。(27土)
2　暗褐色土　黒色土をブロック状に含む。しまりあり。やや粘性あり。(29土)
3　褐色土　黒色土をブロック状に少量含む。しまり強く、やや粘性あり。(29土)

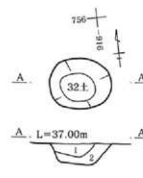


3区28号土坑A－A'
1　黒褐色土　しまりあり。



3区30号土坑A－A'
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒を均一に含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを含む。

3区31号土坑A－A'
1　暗褐色土　白色粒子を含む。
2　黒褐色土　白色粒子を含む。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。



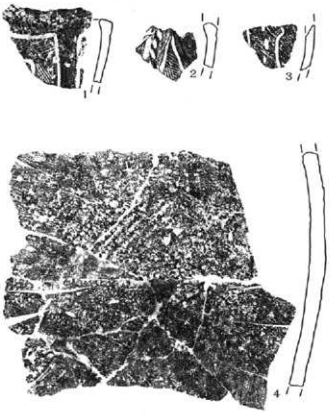
3区32号土坑A－A'
1　暗褐色土　ローム粒、ロームブロック、炭化物を含む。しまりあり。
2　暗褐色土　1層により炭化物少ない。しまりあり。

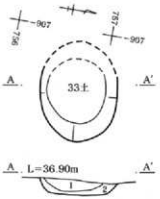
0　1:40　1m

第149図　3区23・24・27～32号土坑

3区33号土坑（第150図、ＰＬ65・91）

３区北西部（755－905Ｇ）で、３区２号溝の北、３区５住の南で確認された。土坑の西側が不明瞭であるが、平面形は楕円形と推定される。底面は平坦で、断面形は皿状である。出土遺物は１～４で縄文土器深鉢である。１～３は沈線で区画。１は縄文施文。２は隆帯を貼付。３は刺突文。４は地文に縄文施文。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

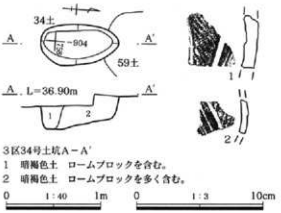




３区33号土坑Ａ－Ａ'
1　黒褐色土　ローム粒と径３～４㎝のロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロック多く含む。

3区34号土坑（第150図、ＰＬ66・91）

３区北西部（755－900Ｇ）で、３区５住の南で、59号土坑と重複して確認された。34号土坑は59号土坑より新しい。平面の形状は楕円形で、底面は南側が深く、壁はわずかに外に開き立ち上がる。出土遺物は１・２で縄文土器深鉢で、縄文施文後沈線を施文。土坑の時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

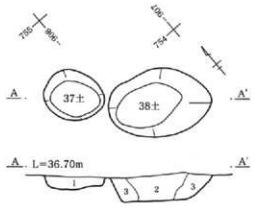


第150図　３区33・34号土坑・出土遺物

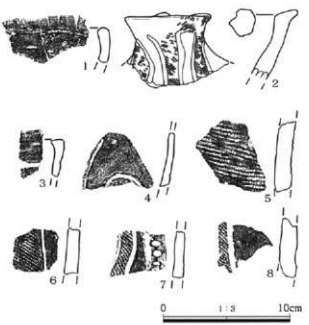
3区37・38号土坑（第151図、ＰＬ66・91）

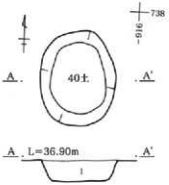
３区西部（750－905Ｇ）で、３区２号溝の南で確認された。37号土坑と38号土坑は重複はしていないが、近接している。37号土坑は２号溝とわずかに重複する。平面形は不整形な楕円形で、底面は凹凸がある。出土遺物は１で縄文土器深鉢の口縁部である。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

38号土坑は、平面形が楕円形で、東壁がなだらかに立ち上がり、西壁が直線的に立ち上がる。出土遺物は２～８で縄文土器深鉢である。２は王冠状把手である。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

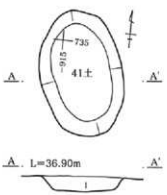


3区37・38号土坑A－A'
1　褐色土　ロームブロックを含む。(37土)
2　褐色土　ロームブロックを少量含む。(38土)
3　褐色土　ロームブロックを含み、ローム粒を多量に含む。(38土)

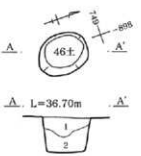




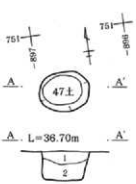
3区40号土坑A－A'
1　褐色土　焼土粒を少量含む。



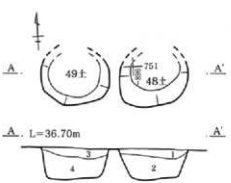
3区41号土坑A－A'
1　褐色土　黒褐色土とローム粒混土。



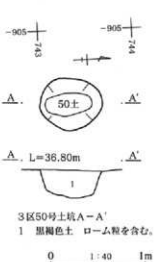
3区46号土坑A－A'
1　黒褐色土　ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　ローム粒を含む。



3区47号土坑A－A'
1　褐色土　ロームを多量に含む。
2　褐色土　ロームを多量に含み、炭化物を含む。

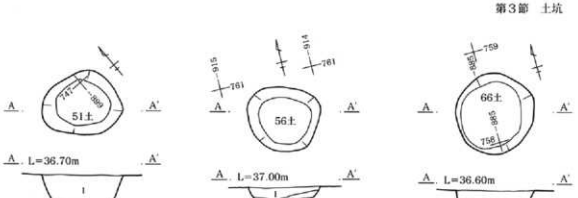


3区48・49号土坑A－A'
1　褐色土　ロームを多量に含む。(48土)
2　褐色土　ロームを多量に、炭化物を含む。(48土)
3　褐色土　ロームを多量に含む。(49土埋土)
4　褐色土　ロームを多量に、炭化物を含む。(49土)



3区50号土坑A－A'
1　黒褐色土　ローム粒を含む。

第151図　3区37・38号土坑・出土遺物、40・41・46～50号土坑



3区51号土坑A－A'
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。

3区56号土坑A－A'
1　黒褐色土　径1～2mmの炭化物、白色粒、焼土粒とロームブロックを含む。
2　黒褐色土　1層に比べて、炭化物、白色粒、焼土粒の混じり少ない。

3区66号土坑A－A'
1　黒褐色土　径1～2mmの炭化物、ローム粒を均一に含む。

第152図　3区51・56・66号土坑

3区53号土坑（第153図、P L68・92）

3区北西部（760－910G）で、3区4号住居と重複して確認された。53号土坑と4号住居はほぼ同時期で新旧関係は不明である。住居に伴う土坑の可能性も考えられる。平面形は不整形な楕円形で、底面はやや凹凸がある。壁はやや外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢胴部片である。沈線で区画し、区画内に縄文を施文。区画はJ字状文。称名寺式と考えられる。図示した遺物以外に縄文土器片6点、石1点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

3区54号土坑（第153図、P L68・92）

3区北西部（760－910G）で、3区4号住居と重複して確認された。54号土坑と4号住居はほぼ同時期で新旧関係は不明である。住居に伴う土坑の可能性も考えられる。北側が調査区外に続くが、平面形は楕円形と推定される。底面は平坦で壁はやや外に開き立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の胴部片である。地文に縄文施文後沈線を施文する。堰之内式である。図示した遺物以外に縄文土器片2点が出土した。土坑の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

3区55号土坑（第153図、P L69・92）

3区北西部（760－910G）で、3区4号住居と重複して確認された。55号土坑と4号住居はほぼ同時期で新旧関係は不明である。住居に伴う土坑の可能性も考えられる。平面形は楕円形で、底面は東側に傾斜している。出土遺物は1・2で縄文土器深鉢で、沈線で区画し、2は区画内に縄文施文。図示した遺物以外に縄文土器片14点が出土した。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

3区63号土坑（第154図、P L69・92）

3区北西部（760－900G）で、3区1号溝と3区6号住居の間で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はわずかに外側に開き立ち上がる。出土遺物は1・2で、縄文土器深鉢の胴部片である。1は沈線区画に刺突文施文。2は地文に縄文を施文。図示した遺物以外に縄文土器片2点が出土している。

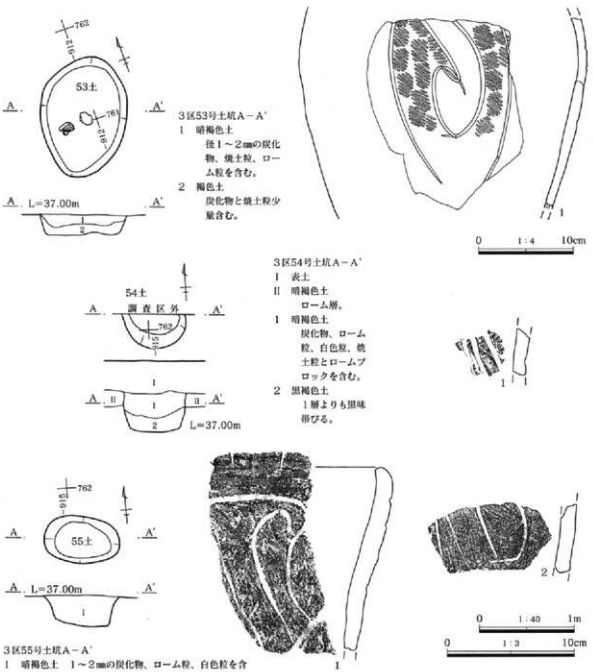
3区64号土坑（第154図、P L69・92）

3区北西部（760－910G）で、3区4号住居と重複して確認された。64号土坑と4号住居の新旧関係は不明である。住居に伴う土坑の可能性も考えられる。北側が調査区外に続くが、平面形は楕円形と推定される。底面は平坦で、壁はやや外に開き立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の胴部であ

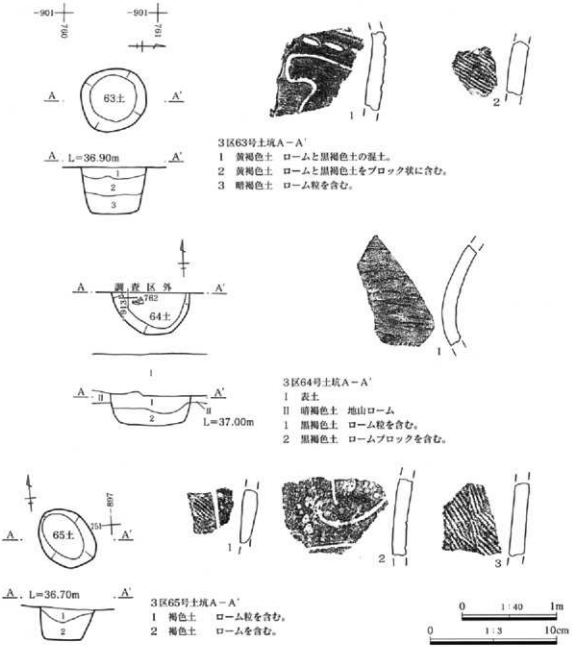
る。指撫での痕跡が目立つ。称名寺式に併行すると思われる。図示した以外に出土遺物はなかった。土坑の時期は後期初頭と考えられる。

３区65号土坑（第154図、ＰＬ70・92）

３区北西部（750－895Ｇ）で、47・49号土坑、66号ピットに近接して確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁は直線的に立ち上がる。東壁は西壁に比べゆるやかに立ち上がる。出土遺物は１～３で、縄文土器深鉢である。１・２は沈線区画。３は地文に縄文を施文。図示した遺物以外に縄文土器片37点、石１点が出土している。土坑の時期は出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。



第153図　３区53～55号土坑・出土遺物



第154図　3区63～65号土坑・出土遺物

土坑一覧表（1）

遺構番号	位置	形態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
1－1土	X=29734 Y=－42932	円形	N－ 8°－E	106	100	62	縄文27	
1－2土	X=29735 Y=－42930	楕円形	N－ 2°－E	119	84	24	縄文5石1	16土坑・1ピットと重複
1－3土	X=29738 Y=－42932	隅丸長方形	N－48°－E	88	82	20	縄文3石1	
1－4土	X=29737 Y=－42933	楕円形	N－63°－W	125	92	46	縄文17	東端部にピットと重複
1－5土	X=29739 Y=－42930	円形	N－ 7°－W	92	76	94	縄文86	断面フラスコ形
1－6土	X=29741 Y=－42932	隅丸方形	N－82°－E	(116)	112	90	縄文29石3	14・15土坑と重複
1－7土	X=29742 Y=－42930	円形	N－29°－E	104	85	100	縄文42石2	1号住居と重複
1－8土	X=29744 Y=－42931	円形	N－78°－E	107	106	88	縄文104石2	断面フラスコ形
1－9土	X=29744 Y=－42936	円形	N－40°－E	102	102	74	縄文105石3	断面フラスコ形
1－10土	X=29741 Y=－42936	不整形な楕円形	N－22°－W	242	152	66	縄文16	
1－11土	X=29745 Y=－42932	円形	N－52°－E	144	134	76	縄文79石3	断面フラスコ形

土坑一覧表（2）

遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
1－12土	X=29746 Y=－42931	円形	N－79°－E	122	106	103	縄文182石3	断面フラスコ形、43ピと重複
1－13土	X=29742 Y=－42933	隅丸方形	N－87°－E	118	104	40	縄文6	
1－14土	X=29741 Y=－42932	円形	N－71°－E	88	80	20	縄文4	6土坑と重複
1－15土	X=29741 Y=－42933	楕円形	N－15°－E	(124)	104	46	縄文110石2	6・17土坑と重複
1－16土	X=29736 Y=－42931	楕円形	N－47°－W	144	74	9	縄文3	2土坑と重複
1－17土	X=29741 Y=－42933	円形	N－50°－W	108	96	96	縄文37	15土坑と重複
1－18土	X=29746 Y=－42938	隅丸方形	N－67°－E	148	110	30	縄文13	
1－19土	X=29744 Y=－42933	隅丸方形	N－44°－E	110	98	34	縄文48石4	
1－20土	X=29743 Y=－42933	円形	N－14°－E	109	104	90	縄文81	断面フラスコ形、57ピと重複
1－21土	X=29742 Y=－42935	円形	N－67°－W	74	68	28	縄文1	
1－22土	X=29744 Y=－42930	円形	N－30°－E	76	74	14	縄文8	
1－23土	X=29764 Y=－42928	円形	N－58°－E	88	(82)	8		北側一部調査区外
1－24土	X=29753 Y=－42935	円形	N－12°－W	114	102	38	縄文13	
1－25土	X=29751 Y=－42942	楕円形	N－ 0°	150	102	32	縄文17	2溝と重複、2溝より新しい
1－26土	X=29753 Y=－42932	不整形な楕円形	N－67°－E	122	90	70	縄文65	
1－27土	X=29763 Y=－42934	円形	N－48°－E	106	94	56	縄文63	
1－28土	X=29750 Y=－42933	円形	N－61°－E	116	116	78	縄文150石3	2溝と重複、2溝より古い
1－29土	X=29751 Y=－42935	楕円形	N－ 0°	88	58	27	石1	
1－30土	X=29751 Y=－42938	円形	N－12°－W	48	48	27		
1－31土	X=29759 Y=－42931	不整形な円形	N－44°－E	106	96	48	縄文5	
1－32土	X=29750 Y=－42935	楕円形	N－37°－W	142	68	14	縄文3	44土坑と重複
1－33土	X=29751 Y=－42937	円形	N－17°－W	98	88	64	縄文18	41土坑と重複
1－34土	X=29756 Y=－42932	楕円形	N－67°－W	102	74	32	縄文1	
1－35土	X=29759 Y=－42937	円形	N－38°－W	80	78	28	縄文5	
1－36土	X=29760 Y=－42937	円形	N－90°－W	58	52	27		
1－37土	X=29754 Y=－42933	楕円形	N－68°－W	116	76	56	縄文40石2	
1－38土	X=29754 Y=－42933	円形	N－71°－W	40	35	14		
1－39土	欠番　　風倒木							
1－40土	X=29751 Y=－42936	楕円形	N－10°－E	76	36	32		
1－41土	X=29752 Y=－42937	楕円形	N－81°－E	(50)	32	19		33土坑と重複
1－42土	X=29762 Y=－42935	楕円形	N－27°－E	106	86	62	縄文28石1	
1－43土	X=29749 Y=－42940	楕円形	N－90°－W	94	70	53	縄文2	
1－44土	X=29750 Y=－42936	長方形	N－13°－W	162	132	50		32土坑と重複
1－45土	欠番　　29土坑と同じ							
1－46土	X=29758 Y=－42946	楕円形	N－ 2°－W	130	124	78	縄文25 土師6石1	
1－47土	X=29757 Y=－42929	楕円形	N－62°－E	60	48	47		
1－48土	X=29752 Y=－42930	円形	N－34°－E	62	60	26	縄文15	
1－49土	X=29749 Y=－42932	不整形な楕円形	N－ 3°－W	126	100	24		
1－50土	X=29753 Y=－42928	円形	N－31°－W	81	74	37	縄文73 近世1	
1－51土	X=29751 Y=－42933	不整形な楕円形	N－67°－E	62	44	34	縄文6	92ピットと重複
1－52土	X=29757 Y=－42932	楕円形	N－47°－W	105	72	20	縄文5	4埋甕→52土坑
1－53土	X=29753 Y=－42935	不整形な楕円形	N－53°－W	98	62	53	縄文2	
1－54土	X=29757 Y=－42935	楕円形	N－ 5°－E	(26)	58	33	縄文4	旧石器調査中断面で確認
1－55土	X=29753 Y=－42938	楕円形	N－29°－E	75	51	39	縄文4	
1－56土	X=29756 Y=－42938	円形	N－25°－E	55	48	36	縄文1	
1－57土	X=29757 Y=－42938	円形	N－ 0°	79	71	38	縄文6	
1－58土	X=29758 Y=－42938	隅丸長方形	N－ 4°－W	64	59	20	縄文4	
1－59土	X=29748 Y=－42938	円形	N－31°－E	62	61	69	縄文5	70ピット→59土坑
1－60土	X=29746 Y=－42934	楕円形	N－86°－W	64	46	10	縄文3	1区2土器集中→60土坑
3－1土	欠番　　3住居炉							
3－2土	X=29754 Y=－42913	円形	N－59°－E	83	82	26	縄文11石1	
3－3土	欠番　　1竪穴状遺構に変更							
3－4土	欠番　　1竪穴状遺構に変更							
3－5土	X=29737 Y=－42907	楕円形	N－54°－E	290	142	43	縄文1	
3－6土	欠番　　5住居（炉）							
3－7土	X=29734 Y=－42905	隅丸方形	N－88°－W	(54)	67	34	縄文2	3溝と重複
3－8土	X=29758 Y=－42913	楕円形	N－81°－E	55	45	51		3住居内、26土坑と重複

土坑一覧表（3）

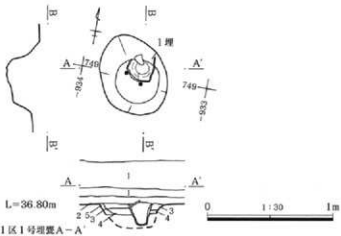
遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
3－9土	X=29754 Y=－42901	円形	N－88°－W	94	92	72	縄文47石2	
3－10土	X=29752 Y=－42895	円形	N－ 1°－W	108	98	80	縄文26	
3－11土	X=29753 Y=－42894	楕円形	N－36°－E	139	113	96	縄文81石2	
3－12土	X=29745 Y=－42891	楕円形	N－47°－W	92	79	51	縄文69	
3－13土	X=29756 Y=－42891	円形	N－34°－W	89	80	66	縄文5	
3－14土	X=29757 Y=－42886	円形	N－24°－E	78	69	48	縄文22	
3－15土	X=29756 Y=－42884	円形	N－13°－W	63	61	30	縄文25	
3－16土	X=29756 Y=－42883	円形	N－ 1°－W	70	68	38	縄文17	
3－17土	X=29756 Y=－42882	円形	N－ 2°－W	94	87	48	縄文59	
3－18土	X=29753 Y=－42886	円形	N－81°－W	102	100	52	縄文59 土師1	
3－19土	X=29753 Y=－42884	円形	N－89°－E	51	50	43	縄文2	
3－20土	X=29742 Y=－42898	円形	N－18°－E	62	59	25	縄文2	
3－21土	X=29755 Y=－42892	不整形な楕円形	N－22°－E	144	114	64	縄文30石1	
3－22土	X=29744 Y=－42907	楕円形	N－ 2°－E	115	69	18	縄文17	
3－23土	X=29753 Y=－42904	不整形な楕円形	N－88°－W	95	81	20	縄文7	
3－24土	X=29744 Y=－42911	隅丸長方形	N－84°－W	135	66	18	縄文4 土師3	
3－25土	X=29755 Y=－42911	楕円形	N－67°－E	159	113	72	縄文10	35土坑・4ピットと重複
3－26土	X=29758 Y=－42912	不整形な楕円形	N－28°－E	74	72	48	縄文4	3住居内、8土坑と重複
3－27土	X=29730 Y=－42852	円形	N－52°－W	129	118	18		29土と重複、29土より新しい
3－28土	X=29737 Y=－42849	円形	N－33°－E	116	111	19		
3－29土	X=29730 Y=－42852	楕円形	N－34°－W	82	60	(43)		27土と重複、27土より古い
3－30土	X=29740 Y=－42852	隅丸方形	N－ 0°	84	(70)	35		5・6調と重複
3－31土	X=29742 Y=－42852	円形	N－54°－W	34	31	30	縄文1	
3－32土	X=29755 Y=－42915	楕円形	N－80°－W	66	54	22	石2	
3－33土	X=29756 Y=－42905	楕円形	N－83°－E	(105)	82	17	縄文9石1	
3－34土	X=29757 Y=－42903	楕円形	N－ 3°－W	83	42	36	縄文20	59土と重複、59土より新しい
3－35土	X=29755 Y=－42912	楕円形	N－59°－E	(54)	49	50	縄文4	25土と重複、25土より古い
3－36土	X=29735 Y=－42850	不整形	N－88°－E	99	78	38		2住居と重複、2住居より新しい
3－37土	X=29753 Y=－42907	楕円形	N－47°－W	64	53	16	縄文3	
3－38土	X=29753 Y=－42908	楕円形	N－47°－W	109	72	28	縄文14	
3－39土	欠番							
3－40土	X=29736 Y=－42916	楕円形	N－ 1°－W	100	81	21		
3－41土	X=29734 Y=－42914	楕円形	N－17°－W	133	88	16	縄文1	
3－42土	欠番　5住居P10							
3－43土	欠番　5住居P11							
3－44土	欠番　5住居P9							
3－45土	欠番　5住居P8							
3－46土	X=29748 Y=－42897	楕円形	N－24°－W	55	43	37		
3－47土	X=29750 Y=－42896	楕円形	N－76°－E	54	42	31	縄文7	
3－48土	X=29750 Y=－42895	楕円形	N－66°－E	78	(66)	33		
3－49土	X=29750 Y=－42896	楕円形	N－70°－W	75	(58)	34	縄文8須恵1	
3－50土	X=29742 Y=－42903	楕円形	N－ 2°－E	66	56	30		5住居と重複
3－51土	X=29746 Y=－42898	不整形な楕円形	N－50°－W	86	68	34	縄文1	
3－52土	欠番　6住居（炉）							
3－53土	X=29760 Y=－42911	楕円形	N－29°－E	128	92	22	縄文7石1	4住居と重複
3－54土	X=29761 Y=－42914	楕円形	N－26°－W	(38)	68	42	縄文3	4住居と重複
3－55土	X=29761 Y=－42914	楕円形	N－85°－W	80	50	33	縄文16	4住居と重複
3－56土	X=29760 Y=－42914	隅丸方形	N－65°－W	78	68	19		3・4住居と重複
3－57土	欠番　6住居P1							
3－58土	欠番　6住居P3							
3－59土	欠番　6住居P4							
3－60土	欠番　6住居P6							
3－61土	欠番　6住居P7							
3－62土	欠番　6住居P9							
3－63土	X=29760 Y=－42899	円形	N－60°－W	70	68	49	縄文4	
3－64土	X=29761 Y=－42912	楕円形	N－22°－W	(48)	72	31	縄文1	4住居と重複
3－65土	X=29750 Y=－42897	楕円形	N－48°－W	70	54	34	縄文40石1	
3－66土	X=29757 Y=－42884	円形	N－ 9°－E	86	83	34		

第４節　埋甕・土器集中

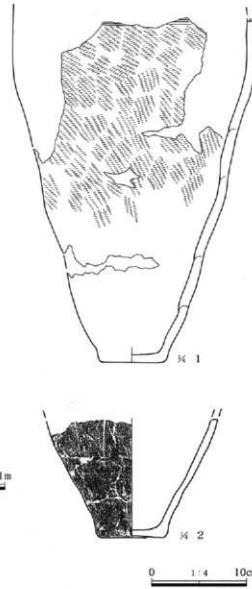
１区の東側で３基の埋甕が確認された。ここでは、土坑に土器を埋設したと考えられるものを埋甕として報告する。土坑やその他の遺構の可能性を考えて調査を行ったが掘り込みが確認できなかったもので、多量の土器が出土した地点を土器集中として報告する。１区南東部で１基を確認した。

１区１号埋甕（第155図、ＰＬ70・92）

１区東部中央（745－930Ｇ）で、１区２号溝の南で、１区28・49号土坑に近接して、確認された。１号埋甕の位置は１区南半分の調査区の北端にあたる地点である。平面形は上端で楕円形、底面で円形である。北側の壁がやや外に開く。底面に凹凸がみられる。１が北側に正位に埋設されていた。口縁部を欠損。出土遺物は１・２で縄文土器深鉢である。２は埋土中の出土である。図示した遺物以外に縄文土器片19点が出土した。埋甕の時期は縄文時代後期初頭と考える。



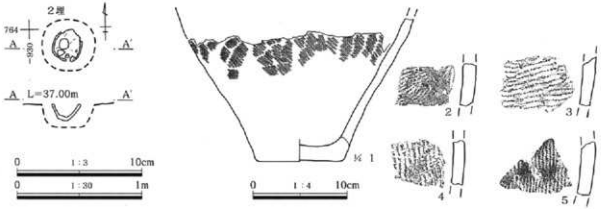
１区１号埋甕Ａ－Ａ'
1　表土
1　暗褐色土　白色軽石を少し含む。
2　暗褐色土　白色軽石をわずかに含む。
3　褐色土　白色軽石をわずかに、ローム粒を含む。
4　褐色土　ローム粒を多く含む。
5　褐色土　白色軽石を多く、ローム粒を含む。



第155図　１区１号埋甕・出土遺物

１区２号埋甕（第156図、ＰＬ92）

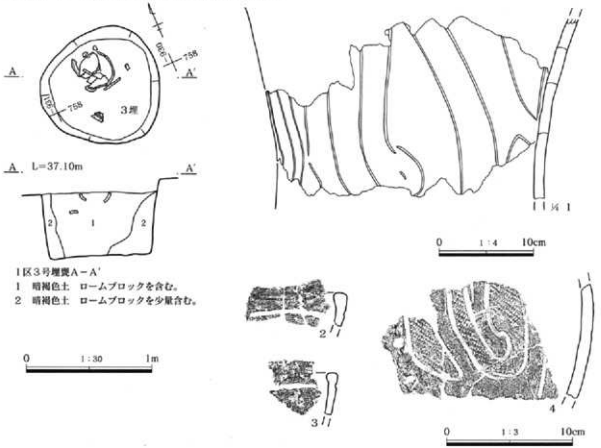
１区北東部（760－925Ｇ）で、１区23号土坑に近接して確認された。掘り込みが不明瞭であったが、平面形は円形と推定される。１が掘り込みの中央に正位に埋設されていたと推定される。縄文土器深鉢で底部から胴下部である。胴中位から口縁部を欠損する。２～５は縄文土器深鉢の胴部片である。２は沈線で区画後縄文施文。３～５は地文に縄文を施文。図示した遺物以外に縄文土器片２点が出土した。埋甕の時期は縄文時代後期初頭と考える。



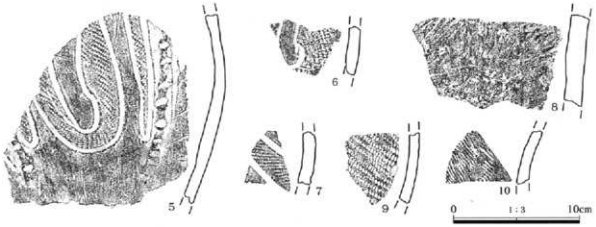
第156図　1区2号埋甕・出土遺物

1区3号埋甕（第157・158図、PL70・92・93）

1区北東部（755－930G）で、1区47・52号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形である。底面は平坦で、壁ははぼ垂直に立ち上がる。埋没土上層で北側に寄ったところで、1が出土した。1が埋設土器と思われる。1の他に2～10が出土した。いずれも縄文土器深鉢である。1～7は沈線で区画。2・3は口縁部片で区画内に縄文施文。4・5は胴部片で隆帯が懸垂し、隆帯上に刺突文を施す。6・7は区画内に縄文施文。8～10は地文に縄文施文。10は無節縄文である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。埋甕より土坑の可能性が高いと思われる。埋甕の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。



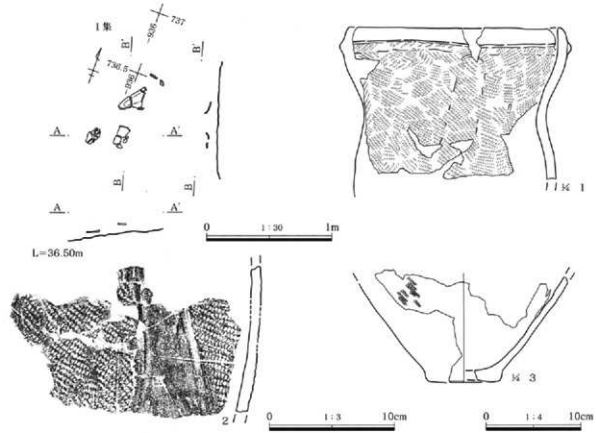
第157図　1区3号埋甕・出土遺物（1）



第158図　１区３号埋甕出土遺物（２）

１区１号土器集中（第159図、ＰＬ71・93）

１区南東部（735－935Ｇ）で、１区30・31号ピットに近接して確認されている。徐々に精査しながら掘り下げて確認したが掘り込みは確認できなかった。１～３は縄文土器深鉢である。１は口縁部下に１条微隆起帯が横位に巡る。地文に無節縄文を施す。２は胴部片で微隆起帯により区画される。１・２とも加曽利Ｅ式の様相が窺えるが、後期に下ると考えられる。３は底部から胴下部で、わずかに縄文が施文されている。図示した遺物以外に縄文土器片５点が出土した。



第159図　１区１号土器集中遺物出土状況・出土遺物

第5節　柱穴・ピット

1区東側から3区西側にかけてピットが多く確認された。住居や掘立柱建物等の可能性を考慮し、検討を加えた。住居・掘立柱建物・柵列等に該当しないピットを本節で扱う。1区で113基が確認された。1区南東部に集中する傾向である。3区では69基が確認され北西部に集中する傾向にある。土層は整理作業時に整理担当者が検討を加え4層に分層した。土層注記は本項に掲載し、その都度掲載していない。本節の最後に計測値等の一覧表を掲載した。

ピット土層注
1．暗褐色土　ロームブロック、炭化物、焼土粒を少量含む。
2．暗褐色土　ロームブロック、炭化物、焼土粒を多く含む。
3．暗褐色土　ローム粒、炭化物、焼土粒を少量含む。
4．暗褐色土　ローム粒、炭化物、焼土粒を多く含む。

1区9号ピット（第160図、PL93）

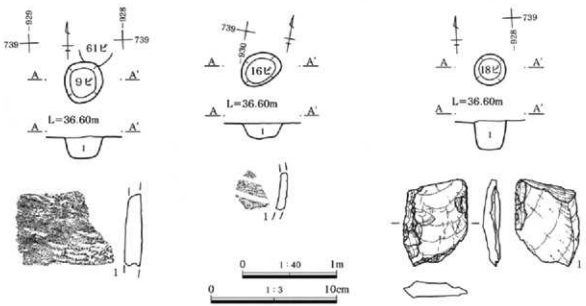
1区南東部（735−925G）で、1区1号住とわずかに重複して確認された。1号住の柱穴の可能性も考えられる。平面形は不整形な円形で、底面は平坦である。壁はやや外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢の胴部破片である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

1区16号ピット（第160図、PL93）

1区南東部（735−925G）で、1区1号住、17・18ピットに近接して確認された。平面形は不整形な楕円形で、南東側が直線的で、北西側が丸味が強い。壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の胴部片である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

1区18号ピット（第160図、PL93）

1区南東部（735−925G）で、1区1号住、9・16・17号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はわずかに外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、黒色頁岩製の剥片である。図示した遺物以外に縄文土器片1点が出土した。ピットの時期は出土遺物や周辺の遺構の状況から縄文時代後期の可能性が高い。



第160図　1区9・16・18号ピット・出土遺物

１区22号ピット（第161図、ＰＬ93）

１区南東部（735－930Ｇ）で、４号土坑の南で確認された。平面形は不整形な楕円形で、西側が直線的で、東側が丸味が強い。底面は平坦で、壁はわずかに開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は１・２で縄文土器深鉢である。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

１区24号ピット（第161図、ＰＬ93）

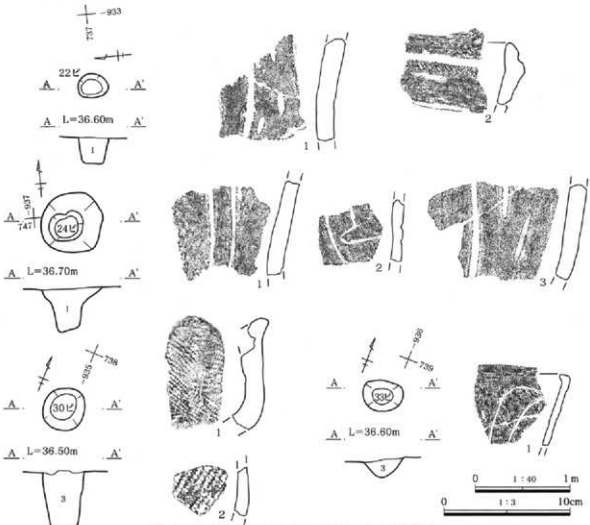
１区南東部（745－935Ｇ）で確認された。平面形は不整形な円形である。断面の形状は漏斗型である。東側の上段の壁はゆるやかに立ち上がる。出土遺物は１～３で縄文土器深鉢の胴部片で、沈線で区画される。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

１区30号ピット（第161図、ＰＬ93）

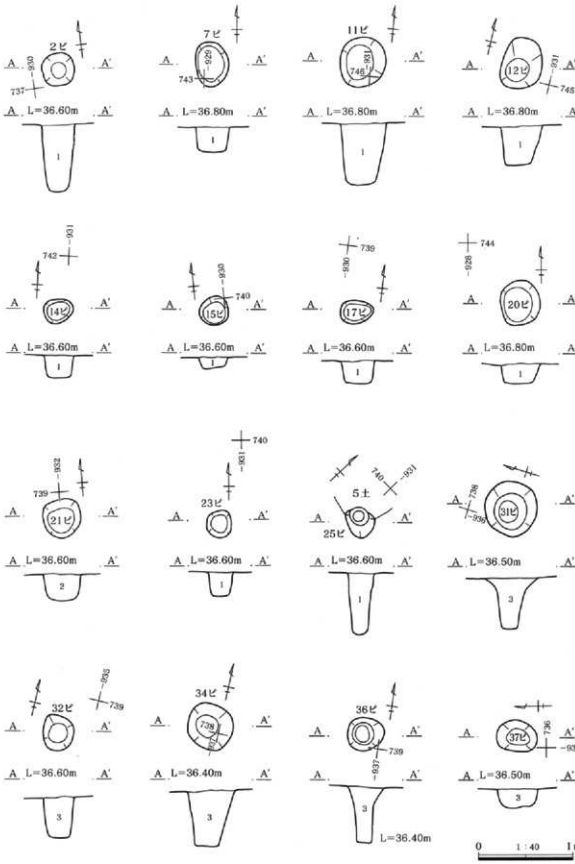
１区南東部（735－935Ｇ）で、31号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、北側がやや角張る。底面は平坦で、壁はやや外に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は１・２で、縄文土器深鉢である。１は横状把手。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代中期末と考えられる。

１区33号ピット（第161図、ＰＬ93）

１区南東部（735－935Ｇ）で、31・32・34・52号ピットに近接して確認された。平面形は不整形な楕円形で、底面は丸味を帯びる。出土遺物は１で、縄文土器深鉢口縁部片である。ピットの時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。



第161図　１区22・24・30・33号ピット・出土遺物



第162図　1区2・7・11・12・14・15・17・20・21・23・25・31・32・34・36・37号ピット

１区35号ピット（第163図、ＰＬ93）

１区南東部（735－935Ｇ）で確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。西壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は１で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片３点が出土している。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

１区38号ピット（第163図、ＰＬ93）

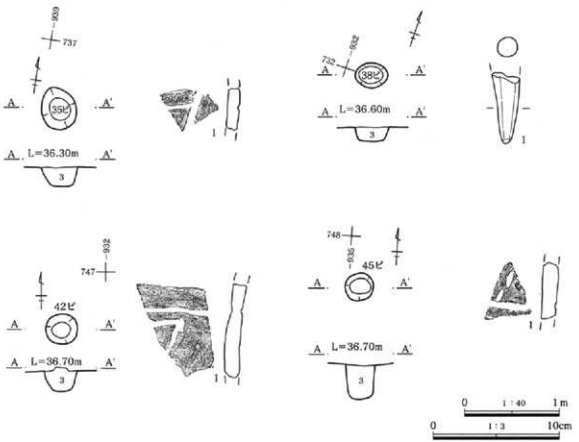
１区南東部（735－930Ｇ）で、１区１号住の南西で確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁はわずかに外に開き立ち上がる。出土遺物は１で、土製品で、上半分を欠損。徐々に細くなる。類例が遺構外出土遺物にあり、上部に孔が貫通し、垂飾と考えられる。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は縄文時代後期の可能性が考えられる。

１区42号ピット（第163図、ＰＬ93）

１区南東部（745－930Ｇ）で、８・11・12号土坑に近接して確認された。平面形は円形で、底面は丸味を帯び、壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１で縄文土器深鉢の胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片３点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

１区45号ピット（第163図、ＰＬ93）

１区南東部（745－930Ｇ）で、１区11号土坑に近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は縄文土器深鉢の胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片１点が出土した。ピットの時期は縄文時代後期と考えられる



第163図　１区35・38・42・45号ピット・出土遺物

１区47号ピット（第164図、ＰＬ93）

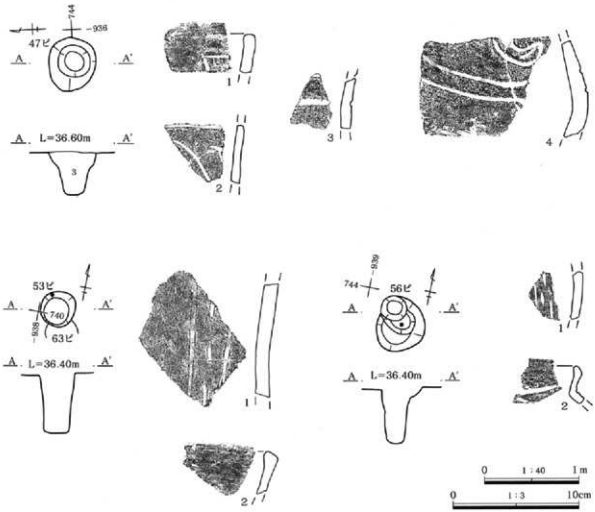
１区南東部（740－935Ｇ）で、13・20・21号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、西側がやや張り出す。断面形は漏斗型である。出土遺物は１～４で、縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器６点、石１点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

１区53号ピット（第164図、ＰＬ94）

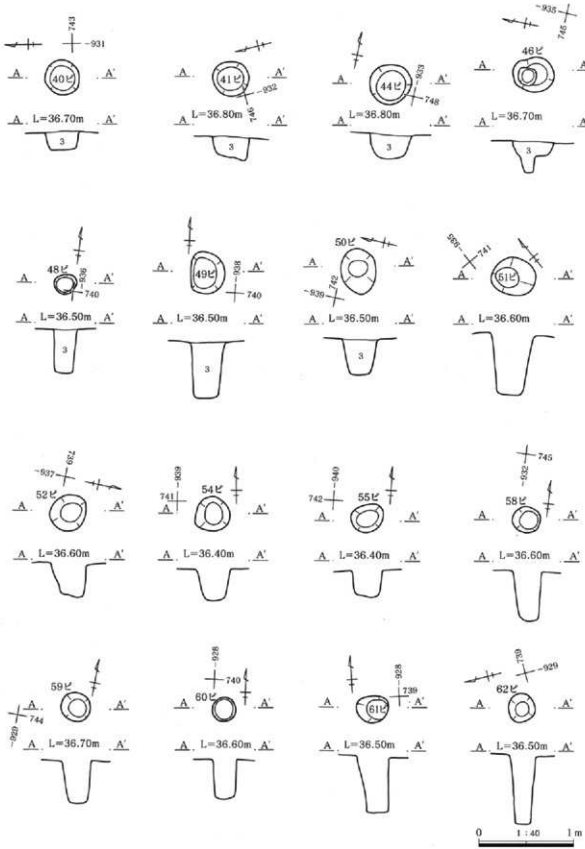
１区南東部（740－935Ｇ）で、63号ピットと重複して確認された。63号ピットとの新旧関係は不明。平面形は円形で、底面は平坦で、壁はわずかに外に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は１・２で縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片２点が出土している。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

１区56号ピット（第164図、ＰＬ94）

１区南東部（740－935Ｇ）で、10号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、北壁はわずかに外に開き立ち上がる。東から南壁は３段階に立ち上がる。ピットが重複していた可能性も考えられる。出土遺物は１・２で縄文土器である。１は深鉢の胴部片、２は注口土器の口縁部である。図示した遺物以外に縄文土器片12点が出土している。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。



第164図　１区47・53・56号ピット・出土遺物



第165図　1区40・41・44・46・48～52・54・55・58～62号ピット

1区65号ピット（第166図、PL94）

1区南東部（725−940G）で確認された。平面形は楕円形で、底面は丸味を帯び、壁はわずかに外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器深鉢の胴部片である。爪形の刺突文が施される。図示した遺物以外に縄文土器片3点が出土した。ピットの時期は縄文時代と考えられる。

1区66号ピット（第166図、PL94）

1区南東部（725−940G）で確認された。平面形は円形で、壁は外に開き、緩やかに立ち上がる。底面は小さい。出土遺物は1で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片5点が出土している。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

1区75号ピット（第166図、PL94）

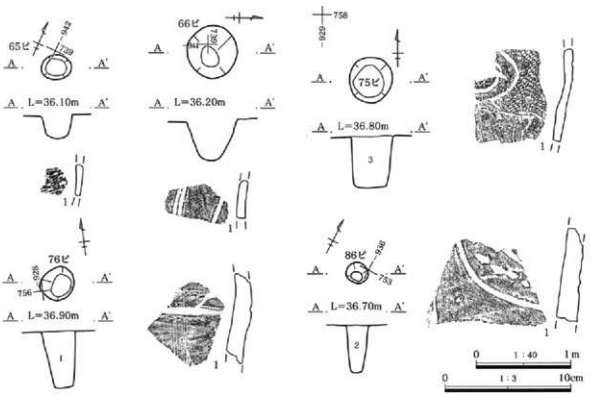
1区北東部（755−925G）で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁は直線的でほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢胴部破片である。図示した遺物以外に縄文土器片3点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

1区76号ピット（第166図、PL94）

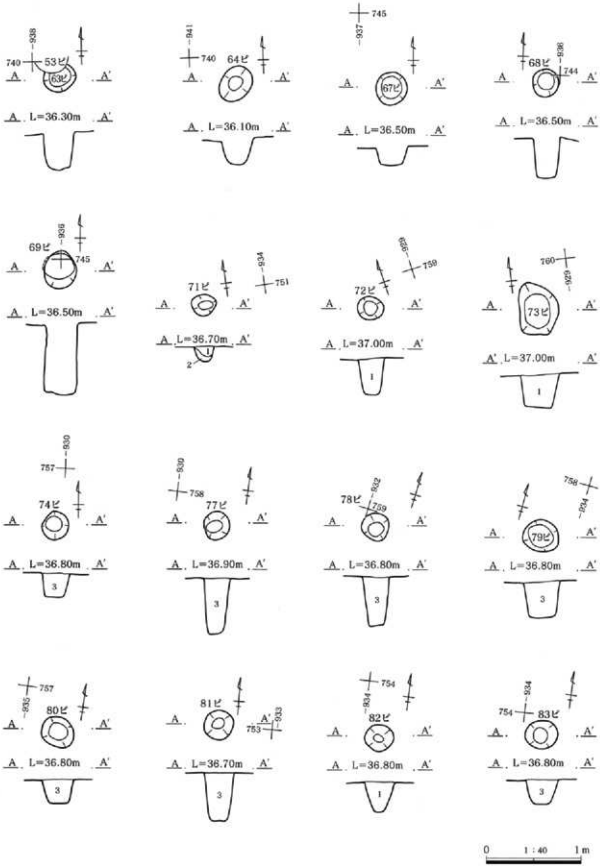
1区北東部（755−925G）で確認された。平面形は不整形な円形で、西側がやや張り出す。底面は平坦で、東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片3点が出土している。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

1区86号ピット（第166図、PL94）

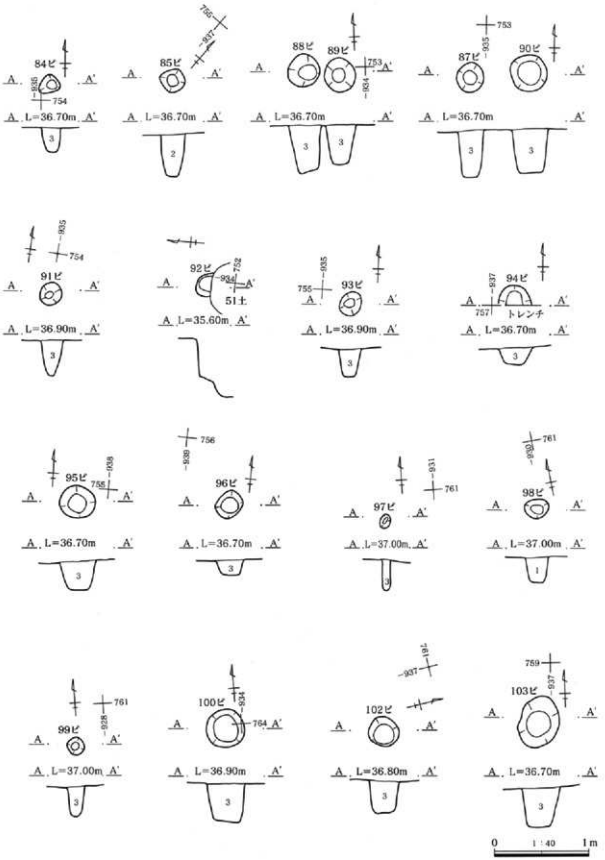
1区東部（750−935G）で、1区2号溝の北側で確認された。平面形は円形で、わずかに外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片1点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。



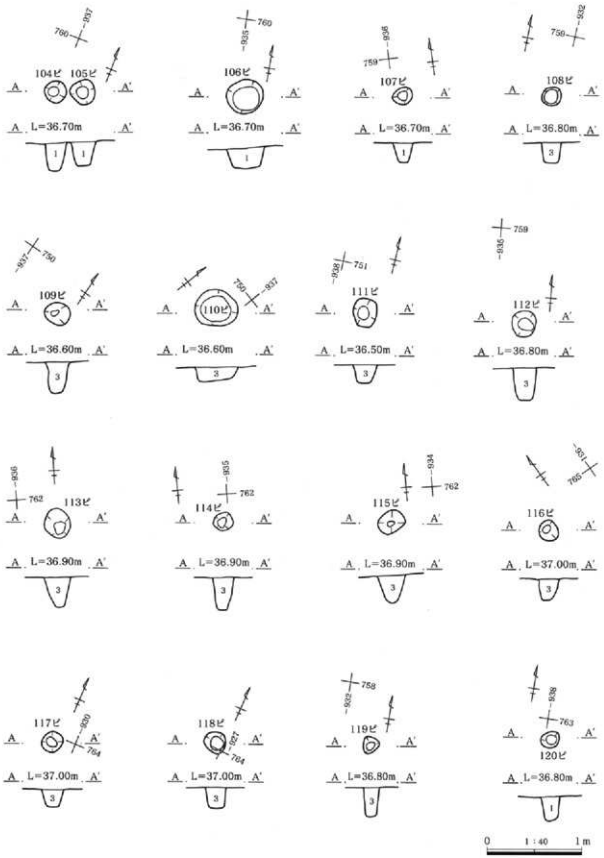
第166図　1区65・66・75・76・86号ピット・出土遺物



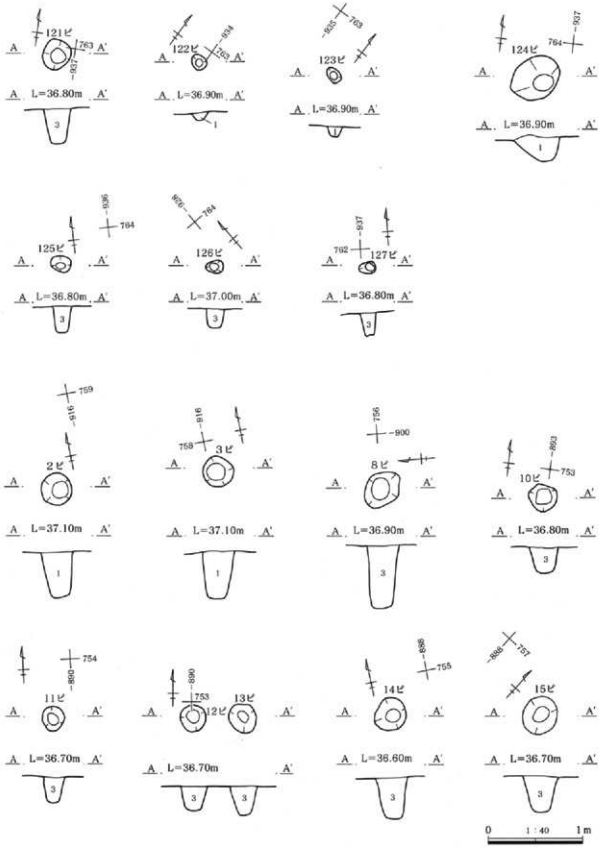
第167図　1区63・64・67～69・71～74・77～83号ピット



第168図　1区84・85・87～100・102・103号ピット



第169図　1区104～120号ピット



第170図　1区121～127号ピット、3区2・3・8・10～15号ピット

1区101号ピット（第171図、ＰＬ94）

1区北東部（760－935G）で確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢である。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期初頭と考えられる。

3区9号ピット（第171図、ＰＬ94）

3区北西部（755－900G）で、9号土坑の東側で確認された。平面形は円形で、壁は外に開き立ち上がる。底部が小さい。出土遺物は1で、縄文土器深鉢の突起である。ピットの時期は出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

3区24号ピット（第171図、ＰＬ94）

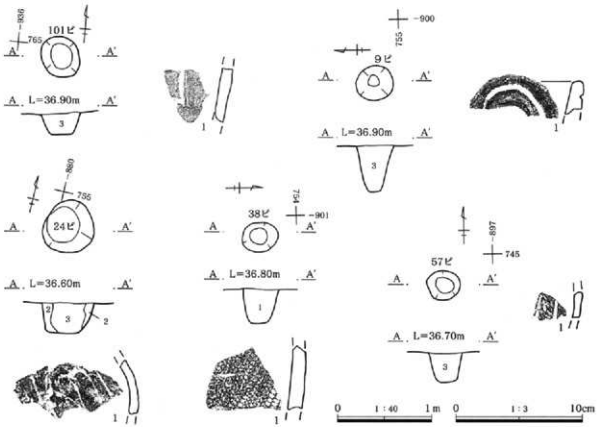
3区中央北側（750－875G）で、3区8号溝の南東で確認された。平面形は不整形な円形で、西側がやや直線的である。底面は平坦で、西壁は直線的に立ち上がり、東壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器鉢胴部片である。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

3区38号ピット（第171図、ＰＬ94）

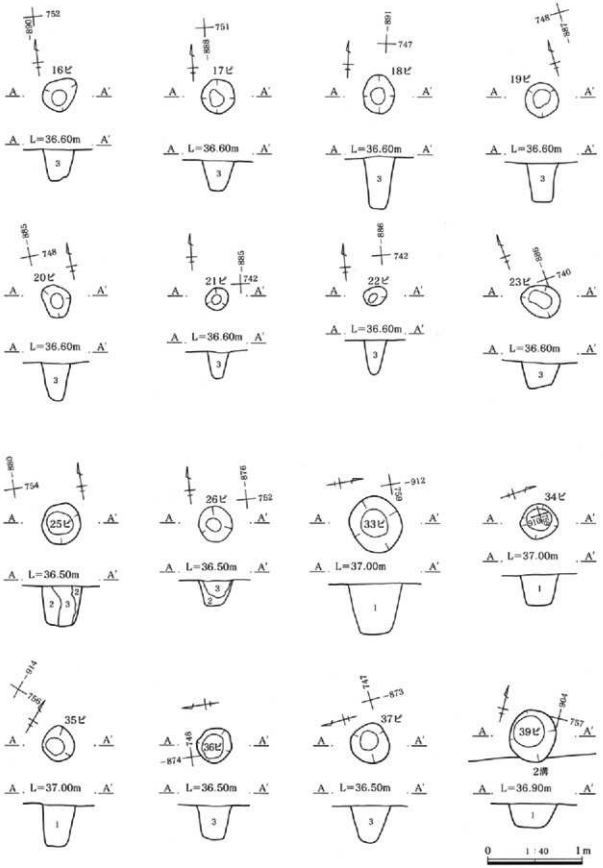
3区北西部（750－900G）で、3区1・3号溝の西側で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁の下部はやや丸味を帯び、外に開き立ち上がる。出土遺物は1で、縄文土器深鉢胴部片である。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

3区57号ピット（第171図、ＰＬ94）

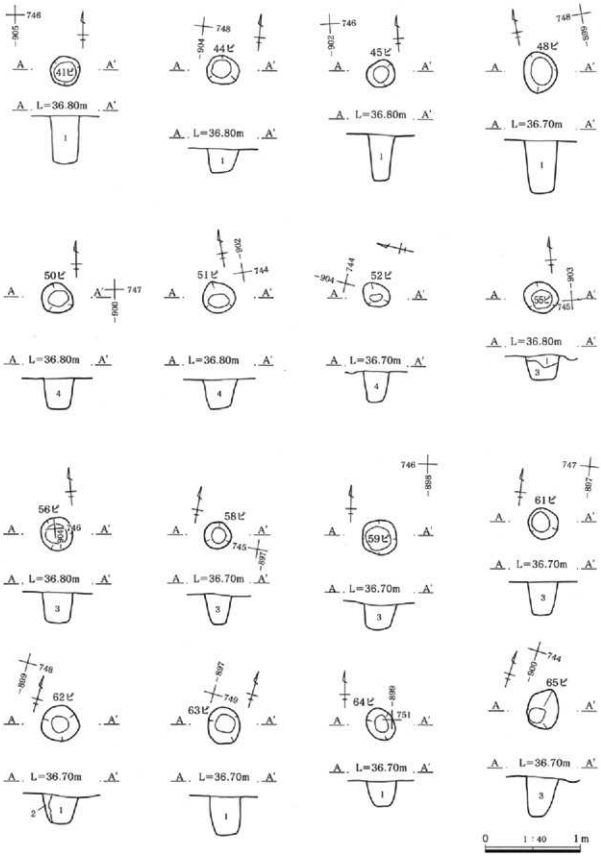
3区南西部（740－895G）で、3区5号住の東側で確認された。平面形は円形で、底面はやや丸味を帯び、東壁はわずかに外に開き、西壁はやや緩やかに立ち上がる。出土遺物は1で縄文土器鉢の胴部片である。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考える。



第171図　1区101号ピット・3区9・24・38・57号ピット・出土遺物



第172図　3区16～23・25・26・33～37・39号ピット



第173図　3区41・44・45・48・50～52・55・56・58・59・61～65号ピット

3区60号ピット（第174図、ＰＬ94）

３区南西部（740－895Ｇ）で、３区５号住の東で確認された。平面形は円形で、底面は西側に傾斜する。西壁は直線的でほぼ垂直に、東壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１・２で、縄文土器深鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片１点が出土した。ピットの時期は出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

3区73号ピット（第174図、ＰＬ94）

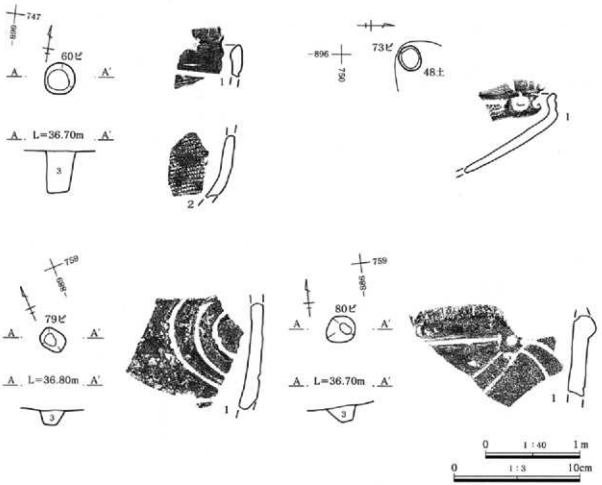
３区北西部（750－895Ｇ）、３区１・３号溝の東で、48号土坑と重複して確認された。48号土坑との新旧関係は不明である。平面形は円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は１で、縄文土器浅鉢である。図示した遺物以外に縄文土器片５点が出土している。

3区79号ピット（第174図、ＰＬ94）

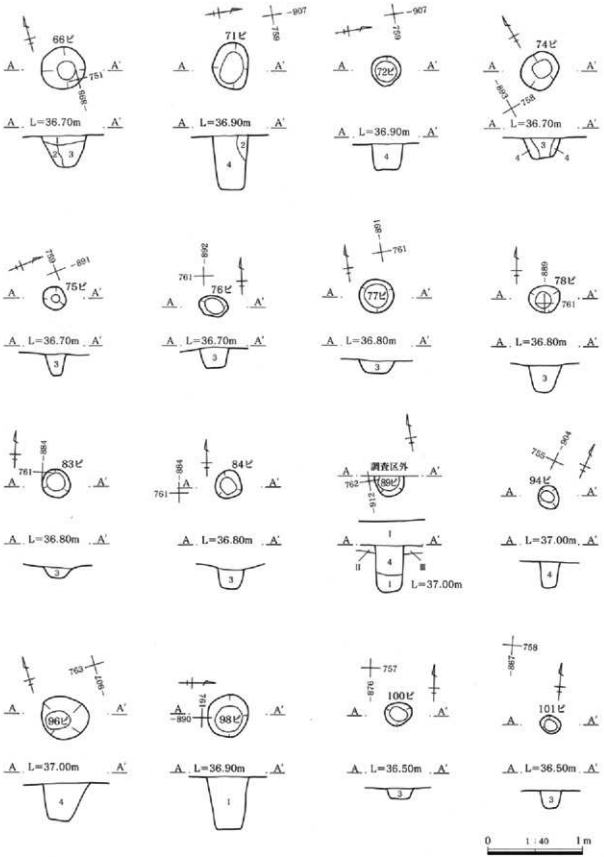
３区中央北側（755－885Ｇ）で確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁は外に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は１で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片１点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。

3区80号ピット（第174図、ＰＬ94）

３区中央北側（755－885Ｇ）で、14・66号土坑に近接して確認された。平面形は不整形な円形で、西壁は外に開き緩やかに立ち上がる。出土遺物は１で、縄文土器深鉢の口縁部である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期前葉と考えられる。



第174図　３区60・73・79・80号ピット・出土遺物



第175図　3区66・71・72・74～78・83・84・89・94・96・98・100・101号ピット

3区81号ピット（第176図、ＰＬ94）

３区中央北側（755－885Ｇ）で、66号土坑、82号ピットに近接して確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁は外に開き立ち上がる。出土遺物は１で縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は、出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。

3区82号ピット（第176図、ＰＬ94）

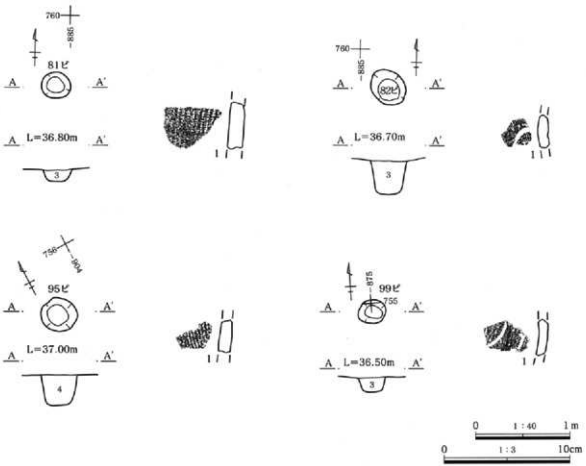
３区中央北側（755－880Ｇ）で、66号土坑、81号ピットに近接して確認された。平面形は楕円形で、底面は平坦である。壁はわずかに外に開き、直線的に立ち上がる。出土遺物は１で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片１点、石１点が出土した。ピットの時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

3区95号ピット（第176図、ＰＬ94）

３区北西部（760－905Ｇ）で、３区６号住と重複して確認された。住居との新旧関係は不明。住居に伴う可能性も考えられる。平面形は円形で、壁はわずかに外に開き立ち上がる。出土遺物は１で、縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。ピットの時期は出土遺物が小片のため不明瞭であるが、縄文時代後期と考えられる。

3区99号ピット（第176図、ＰＬ94）

３区中央北側（755－870Ｇ）で確認された。平面形は円形で、底面は平坦である。壁は外側に開き直線的に立ち上がる。出土遺物は１で縄文土器深鉢胴部片である。図示した遺物以外に縄文土器片２点が出土した。ピットの時期は出土遺物等から縄文時代後期と考えられる。



第176図　３区81・82・95・99号ピット・出土遺物

ピット一覧表（1）

遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
1－1P	X=29735 Y=－42931							2土坑と重複
1－2P	X=29737 Y=－42929	円形	N－32°－E	34	38	69	縄文1	
1－3P		欠番　1住居P6						
1－4P		欠番　1住居P5						
1－5P		欠番　1住居P5						
1－6P		欠番　1住居P10						
1－7P	X=29742 Y=－42928	楕円形	N－ 5°－W	48	36	26	縄文2	1住居と重複
1－8P		欠番　1住居P7						
1－9P	X=29738 Y=－42928	不整形な円形	N－25°－E	46	41	23	縄文1	
1－10P		欠番　1住居P1						
1－11P	X=29745 Y=－42930	楕円形	N－28°－E	64	50	64	縄文6石3	
1－12P	X=29744 Y=－42931	楕円形	N－26°－E	57	46	40	縄文8	
1－13P		欠番　1住居P3						
1－14P	X=29741 Y=－42930	楕円形	N－67°－E	32	26	24		
1－15P	X=29739 Y=－42929	円形	N－24°－E	32	32	12	縄文3	
1－16P	X=29738 Y=－42929	不整形な楕円形	N－61°－E	45	34	16	縄文1	
1－17P	X=29738 Y=－42929	楕円形	N－76°－E	36	25	24		
1－18P	X=29738 Y=－42929	円形	N－59°－E	35	33	30	縄文1石1	
1－19P		欠番　1住居P12						
1－20P	X=29743 Y=－42927	楕円形	N－27°－E	49	45	22		1住居と重複
1－21P	X=29738 Y=－42931	円形	N－39°－E	44	42	28		
1－22P	X=29736 Y=－42933	不整形な楕円形	N－12°－E	33	27	26	縄文2	
1－23P	X=29738 Y=－42931	円形	N－35°－E	30	28	25	縄文2	
1－24P	X=29746 Y=－42936	不整形な円形	N－71°－E	68	64	45	縄文6	
1－25P	X=29739 Y=－42930		N－51°－W	33	29	62		5土坑と重複
1－26P		欠番　1住居P4						
1－27P		欠番　1住居P11						
1－28P		欠番　1住居P8						
1－29P		欠番　1住居P2						
1－30P	X=29737 Y=－42934	円形	N－24°－E	50	45	61	縄文9	
1－31P	X=29737 Y=－42935	円形	N－70°－E	60	56	53	縄文9	
1－32P	X=29738 Y=－72935	不整形な円形	N－43°－W	39	36	43	縄文2石1	
1－33P	X=29738 Y=－72935	不整形な楕円形	N－84°－W	43	35	21	縄文2	
1－34P	X=29737 Y=－72936	円形	N－28°－W	54	49	59		
1－35P	X=29736 Y=－72938	楕円形	N－32°－W	46	38	20	縄文4	
1－36P	X=29738 Y=－72936	円形	N－63°－E	41	37	58		
1－37P	X=29735 Y=－72933	楕円形	N－18°－E	44	34	20		
1－38P	X=29737 Y=－72931	楕円形	N－71°－E	36	27	15	垂飾1	
1－39P		欠番　1住居P9						
1－40P	X=29742 Y=－72931	円形	N－50°－E	38	36	19	縄文2	
1－41P	X=29745 Y=－72931	円形	N－11°－E	40	38	24	縄文3石1	
1－42P	X=29746 Y=－72932	円形	N－58°－E	35	33	25	縄文4	
1－43P	X=29746 Y=－72932	円形	N－88°－W	36	(10)	58		12土坑と重複
1－44P	X=29747 Y=－72933	円形	N－66°－E	44	42	25	縄文3石1	
1－45P	X=29747 Y=－72934	円形	N－25°－E	31	30	36	縄文2	
1－46P	X=29744 Y=－72935	不整形な楕円形	N－ 3°－E	45	38	34		
1－47P	X=29743 Y=－72935	不整形な円形	N－66°－W	56	52	54	縄文10石1	
1－48P	X=29739 Y=－72935	円形	N－50°－E	25	22	45		
1－49P	X=29739 Y=－72938	楕円形	N－10°－W	46	38	58	縄文4	
1－50P	X=29741 Y=－72938	楕円形	N－67°－E	49	40	36	縄文1	
1－51P	X=29740 Y=－72934	楕円形	N－57°－W	48	41	64		
1－52P	X=29738 Y=－72936	円形	N－51°－W	42	39	34	縄文1	
1－53P	X=29739 Y=－72937	円形	N－38°－E	40	38	62	縄文4	63ピットと重複
1－54P	X=29740 Y=－72938	円形	N－59°－E	40	38	33	縄文10	
1－55P	X=29741 Y=－72939	楕円形	N－52°－E	36	30	28	縄文3	
1－56P	X=29743 Y=－72938	不整形な円形	N－38°－E	60	55	57	縄文14	
1－57P	X=29744 Y=－72934	円形	N－61°－W	36	(27)	84	縄文3	20土坑と重複
1－58P	X=29744 Y=－72931	円形	N－74°－E	31	28	52		

ピット一覧表（2）

遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
1－59P	X=29744 Y=－72928	円形	N－51°－W	33	30	45	縄文2	1住居と重複
1－60P	X=29739 Y=－72927	円形	N－73°－E	27	26	42		1住居と重複
1－61P	X=29738 Y=－72928	楕円形	N－83°－W	38	30	61	縄文1	1住居と重複
1－62P	X=29738 Y=－72929	円形	N－55°－W	30	28	74	縄文1	
1－63P	X=29739 Y=－72937	円形	N－76°－E	36	20	38	縄文2	53ピットと重複
1－64P	X=29739 Y=－72940	楕円形	N－45°－E	40	32	27	縄文8	1溝と重複
1－65P	X=29738 Y=－72941	楕円形	N－65°－E	33	27	24	縄文4	
1－66P	X=29738 Y=－72943	円形	N－77°－E	56	55	41	縄文6	
1－67P	X=29744 Y=－72936	円形	N－13°－E	36	34	20		
1－68P	X=29743 Y=－72935	円形	N－18°－E	30	29	42	縄文1	
1－69P	X=29744 Y=－72935	円形	N－13°－E	41	36	74		
1－70P	欠番　1住居P7							
1－71P	X=29750 Y=－72934	不整形な楕円形	N－77°－E	25	22	16	縄文3	
1－72P	X=29758 Y=－72929	円形	N－63°－W	28	25	38		
1－73P	X=29759 Y=－72929	隅丸長方形	N－18°－W	58	45	36		
1－74P	X=29756 Y=－72929	円形	N－ 9°－W	30	28	24		
1－75P	X=29757 Y=－72928	円形	N－30°－W	48	47	54	縄文4	
1－76P	X=29755 Y=－72927	不整形な円形	N－10°－E	37	36	59	縄文4	
1－77P	X=29757 Y=－72929	円形	N－22°－E	30	28	60		
1－78P	X=29758 Y=－72931	円形	N－34°－W	30	29	54		
1－79P	X=29757 Y=－72934	円形	N－60°－E	38	34	39		
1－80P	X=29756 Y=－72934	楕円形	N－58°－W	36	31	26		
1－81P	X=29752 Y=－72933	円形	N－66°－E	33	31	50		
1－82P	X=29753 Y=－72933	円形	N－76°－E	31	27	31	縄文2	
1－83P	X=29753 Y=－72933	円形	N－82°－E	35	30	26		
1－84P	X=29754 Y=－72934	不整形な円形	N－58°－E	22	19	26		
1－85P	X=29754 Y=－72936	隅丸方形	N－62°－E	27	25	44	縄文3	
1－86P	X=29752 Y=－72935	円形	N－45°－E	23	22	50	縄文2	
1－87P	X=29752 Y=－72935	円形	N－ 6°－E	32	29	49	縄文1	
1－88P	X=29752 Y=－72934	円形	N－73°－E	35	34	51		
1－89P	X=29752 Y=－72934	円形	N－13°－W	36	33	41		
1－90P	X=29752 Y=－72934	円形	N－67°－W	40	39	46		
1－91P	X=29753 Y=－72934	円形	N－33°－E	24	23	35		
1－92P	X=29752 Y=－72933	隅丸方形	N－62°－W	28	17	44		51土坑と重複
1－93P	X=29754 Y=－72934	円形	N－18°－E	26	22	28		
1－94P	X=29757 Y=－72936	楕円形	N－ 1°－W	36	21	18	縄文1	
1－95P	X=29754 Y=－72937	円形	N－73°－E	38	34	30		
1－96P	X=29755 Y=－72938	隅丸長方形	N－50°－E	30	26	25		
1－97P	X=29760 Y=－72931	楕円形	N－28°－E	15	11	37		
1－98P	X=29760 Y=－72929	不整形な円形	N－80°－E	26	20	26		
1－99P	X=29760 Y=－72928	円形	N－66°－W	19	18	31		
1－100P	X=29763 Y=－72933	円形	N－17°－E	41	41	41		
1－101P	X=29764 Y=－72935	楕円形	N－46°－W	46	40	33	縄文4	
1－102P	X=29760 Y=－72936	円形	N－16°－E	32	31	34		
1－103P	X=29758 Y=－72936	楕円形	N－23°－E	56	41	42		
1－104P	X=29759 Y=－72936	円形	N－40°－W	23	22	29		
1－105P	X=29759 Y=－72936	円形	N－82°－E	27	26	25		
1－106P	X=29759 Y=－72934	円形	N－72°－E	39	36	21		
1－107P	X=29758 Y=－72935	円形	N－77°－E	22	18	20		
1－108P	X=29758 Y=－72932	円形	N－31°－E	21	20	22		
1－109P	X=29749 Y=－72936	楕円形	N－57°－E	28	24	34	縄文1	
1－110P	X=29749 Y=－72936	楕円形	N－41°－E	45	38	16		
1－111P	X=29750 Y=－72937	楕円形	N－34°－W	31	27	19		
1－112P	X=29757 Y=－72934	円形	N－29°－E	28	26	33		
1－113P	X=29761 Y=－72935	円形	N－15°－W	31	28	31		
1－114P	X=29761 Y=－72934	円形	N－89°－E	22	20	34		
1－115P	X=29761 Y=－72934	楕円形	N－87°－E	30	24	28	縄文4	
1－116P	X=29764 Y=－72931	円形	N－ 7°－W	22	20	22	縄文2	

ピット一覧表（3）

遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
1－117P	X=29763 Y=－72930	円形	N－47°－E	24	21	18		
1－118P	X=29763 Y=－72926	円形	N－46°－W	24	22	21		
1－119P	X=29757 Y=－72931	不整形な円形	N－18°－E	18	17	31		
1－120P	X=29762 Y=－72937	円形	N－29°－E	20	18	26		
1－121P	X=29762 Y=－72937	円形	N－ 6°－W	33	30	36	縄文2	
1－122P	X=29762 Y=－72933	楕円形	N－77°－W	18	15	10		
1－123P	X=29762 Y=－72934	楕円形	N－76°－W	18	12	11		
1－124P	X=29763 Y=－72937	楕円形	N－60°－E	56	43	30	縄文3	
1－125P	X=29763 Y=－72936	楕円形	N－65°－W	22	16	28		
1－126P	X=29763 Y=－72928	楕円形	N－50°－W	18	14	20		
1－127P	X=29761 Y=－72936	楕円形	N－85°－E	17	12	24	縄文1	
3－1P	欠番　3住居P1							
3－2P	X=29757 Y=－72916	円形	N－60°－W	34	32	48		3住居と重複
3－3P	X=29757 Y=－72916	円形	N－16°－W	34	33	50		3住居と重複
3－4P	欠番　3住居P6・25土坑と重複							
3－5P	欠番　3住居P7							
3－6P	欠番　3住居P5							
3－7P	欠番　3住居P8							
3－8P	X=29755 Y=－72900	楕円形	N－46°－W	44	36	66	近世2	
3－9P	X=29755 Y=－72900	円形	N－49°－W	40	38	49	縄文4	
3－10P	X=29752 Y=－72892	円形	N－23°－W	30	30	27	縄文1	
3－11P	X=29753 Y=－72890	円形	N－ 5°－W	26	22	28		
3－12P	X=29752 Y=－72889	円形	N－ 0°	28	28	26		
3－13P	X=29752 Y=－72889	楕円形	N－31°－W	32	29	31		
3－14P	X=29754 Y=－72888	円形	N－37°－E	36	32	43		
3－15P	X=29756 Y=－72887	円形	N－28°－W	42	38	40	縄文1	
3－16P	X=29750 Y=－72889	不整形な楕円形	N－57°－E	40	33	32	縄文3	
3－17P	X=29750 Y=－72887	円形	N－57°－E	36	33	33		
3－18P	X=29746 Y=－72890	楕円形	N－15°－W	40	34	54		
3－19P	X=29746 Y=－72887	円形	N－15°－E	36	35	40		
3－20P	X=29747 Y=－72884	不整形な楕円形	N－19°－W	36	28	38		
3－21P	X=29741 Y=－72885	円形	N－44°－E	26	22	28		
3－22P	X=29741 Y=－72885	楕円形	N－58°－E	24	20	36	縄文2	
3－23P	X=29739 Y=－72885	楕円形	N－44°－W	41	34	28		
3－24P	X=29754 Y=－72879	不整形な円形	N－18°－E	58	52	33	縄文9	
3－25P	X=29753 Y=－72879	円形	N－31°－E	44	40	43	縄文1	
3－26P	X=29751 Y=－72876	円形	N－ 7°－W	36	36	28	縄文2	
3－27P	欠番　3住居P4							
3－28P	欠番　3住居P3							
3－29P	欠番　3住居P2							
3－30P	欠番　3住居P14							
3－31P	欠番　3住居P13							
3－32P	欠番　4住居P3							
3－33P	X=29758 Y=－72911	円形	N－21°－E	58	58	54		
3－34P	X=29758 Y=－72909	円形	N－22°－E	40	38	32	縄文5	
3－35P	X=29755 Y=－72913	円形	N－30°－W	36	34	44		
3－36P	X=29747 Y=－72873	円形	N－43°－W	38	34	36		
3－37P	X=29746 Y=－72873	円形	N－57°－W	42	42	39		
3－38P	X=29753 Y=－72900	円形	N－ 8°－W	38	32	36	縄文3	
3－39P	X=29756 Y=－72903	円形	N－33°－E	54	52	26		2溝と重複
3－40P	欠番　5住居P3							
3－41P	X=29745 Y=－72904	円形	N－45°－E	33	31	50		5住居と重複
3－42P	欠番　5住居P1							
3－43P	欠番　5住居P2							
3－44P	X=29747 Y=－72903	円形	N－84°－E	35	30	26		5住居と重複
3－45P	X=29745 Y=－72901	円形	N－19°－E	30	30	50		5住居と重複
3－46P	欠番　5住居P4							
3－47P	欠番　5住居P7							

ピット一覧表（4）

遺構番号	位　置	形　態	長軸方向	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備　考
3－48P	X=29747 Y=－72899	楕円形	N－18°－W	42	36	55		
3－49P	欠番　5住居P6							
3－50P	X=29746 Y=－72900	円形	N－64°－W	33	31	32		5住居と重複
3－51P	X=29743 Y=－72902	楕円形	N－63°－W	35	32	32		5住居と重複
3－52P	X=29743 Y=－72900	楕円形	N－15°－E	30	24	33		
3－53P	欠番　5住居P5							
3－54P	欠番							
3－55P	X=29744 Y=－72903	円形	N－70°－W	36	31	27		5住居と重複
3－56P	X=29745 Y=－72903	円形	N－24°－W	35	33	33		5住居と重複
3－57P	X=29744 Y=－72897	円形	N－75°－W	36	32	31	縄文2	
3－58P	X=29744 Y=－72897	円形	N－72°－W	28	28	34		
3－59P	X=29745 Y=－72988	円形	N－58°－W	38	36	28		
3－60P	X=29746 Y=－72898	円形	N－51°－E	36	34	44	縄文3	
3－61P	X=29746 Y=－72897	円形	N－28°－W	34	32	36		
3－62P	X=29747 Y=－72898	円形	N－72°－E	42	38	31		
3－63P	X=29748 Y=－72896	楕円形	N－20°－W	40	32	40	縄文2	
3－64P	X=29750 Y=－72899	楕円形	N－25°－W	35	28	27		
3－65P	X=29743 Y=－72899	楕円形	N－13°－E	42	34	42		
3－66P	X=29750 Y=－72897	円形	N－49°－W	46	46	33		
3－67P	欠番　6住居P8							
3－68P	欠番　3住居P12							
3－69P	欠番　3住居P9							
3－70P	欠番　4住居P4							
3－71P	X=29758 Y=－72906	楕円形	N－76°－E	50	42	57		
3－72P	X=29758 Y=－72906	円形	N－74°－W	32	31	28		6住居と重複
3－73P	X=29750 Y=－72895	円形	N－62°－E	20	14	50	縄文6	48土坑と重複
3－74P	X=29758 Y=－72892	円形	N－57°－E	42	37	23	縄文2	
3－75P	X=29758 Y=－72891	円形	N－19°－W	26	23	24		
3－76P	X=29760 Y=－72891	楕円形	N－72°－W	30	24	22		
3－77P	X=29760 Y=－72890	円形	N－73°－W	36	35	14		
3－78P	X=29760 Y=－72888	楕円形	N－54°－E	34	30	28		
3－79P	X=29758 Y=－72889	楕円形	N－37°－W	28	20	16	縄文2	
3－80P	X=29758 Y=－72886	不整形な円形	N－70°－E	32	30	18	縄文1	
3－81P	X=29759 Y=－72884	円形	N－58°－W	30	28	12	縄文1	
3－82P	X=29759 Y=－72884	楕円形	N－43°－W	42	34	36	縄文2石1	
3－83P	X=29760 Y=－72883	円形	N－55°－W	32	30	12		
3－84P	X=29760 Y=－72883	円形	N－44°－W	30	30	20	縄文1	
3－85P	欠番　4住居P1							
3－86P	欠番　3住居P11							
3－87P	欠番　4住居P2							
3－88P	欠番　3住居P10							
3－89P	X=29761 Y=－72911	円形	N－10°－W	(21)	30	49		4住居と重複
3－90P	欠番　4住居P5							
3－91P	欠番　4住居P6							
3－92P	欠番　4住居P7							
3－93P	欠番　6住居P2							
3－94P	X=29759 Y=－72903	隅丸方形	N－60°－W	35	22	28		6住居と重複
3－95P	X=29760 Y=－72904	円形	N－45°－W	35	34	31	縄文1	6住居と重複
3－96P	X=29762 Y=－72907	楕円形	N－48°－W	50	44	40		6住居と重複
3－97P	欠番　6住居と重複							
3－98P	X=29761 Y=－72899	円形	N－70°－W	46	42	46	縄文1	
3－99P	X=29754 Y=－72874	円形	N－62°－E	30	26	16	縄文3	
3－100P	X=29756 Y=－72875	円形	N－70°－E	28	23	11		
3－101P	X=29757 Y=－72866	円形	N－83°－W	22	18	20		

第６節　溝

１区１号溝（第177～179図、ＰＬ71・94・95）

位置　１区Ｘ＝29735～748　Ｙ＝－42927～949
１区中央、南側に位置する。

重複遺構　１区64号ピットと重複。64号ピットより新しい。

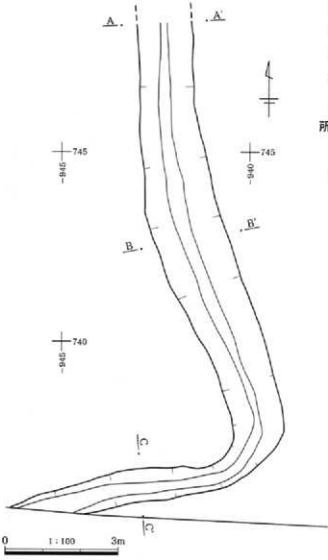
走向　北から南の走向で、735－935Ｇ付近でほぼ直角に曲がり東西走向。

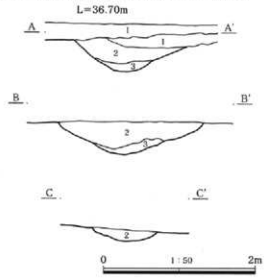
形態　２年度にまたがり発掘調査を実施したため、北側半分の調査区では確認されていない。北側はさらに北に伸びていた可能性がある。南側は調査区外に延びる。断面形は緩やかな法面をもつ逆台形または皿形である。

規模　検出全長17.28m　上幅　1.90～0.62m
底幅　0.12～0.50m　深さ0.09～0.45m

遺物　縄文包含層を掘り抜いて作られているため出土遺物に縄文土器が多い。溝底部付近から小片ではあるが磁器が出土した。整理担当者のミスで、他の遺物と紛れ不明である。出土遺物は１～47が縄文土器。１～16は称名寺式と思われる。沈線で区画。区画内に点線状の刺突文、縄文、縄文施文後円形刺突文、条線が施される。17～21は指撫で槇、条線が施され、称名寺式併行と考えられる。22～43は堀之内式と考えられる。44～47は後期と思われる。48は打製石斧で基部を欠損。49は磨製石斧で刃部のみである。図示した遺物以外に縄文土器468点、土師器坏３点、須恵器坏３点、須恵器甕３点、磁器３点、石６点が出土した。

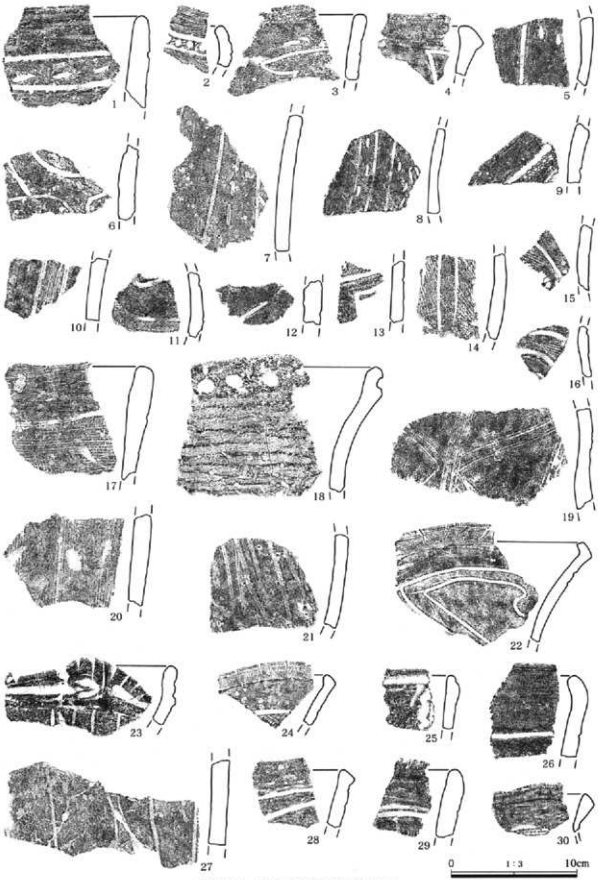
所見　溝の時期は溝底面から出土した磁器と埋没土から近世～近代と考えられる。多量に出土した縄文土器は縄文包含層からの流れ込みと考える。



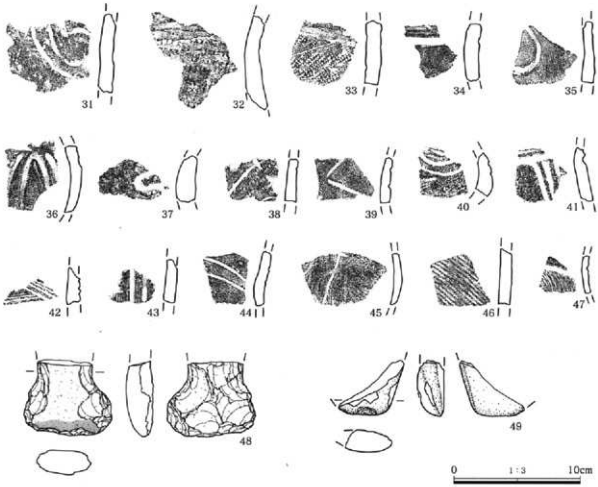


１区１号溝Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'・Ｃ－Ｃ'
1　耕作土
1　暗灰色土　Ａｓ－Ａと思われる白色軽石を多く含む。
2　暗灰色土　Ａｓ－Ａと思われる白色軽石を含む。
3　暗褐色土　Ａｓ－Ａと思われる白色軽石を少し含む。

第177図　１区１号溝



第178図　1区1号溝出土遺物（1）



第179図　１区１号溝出土遺物（２）

１区２号溝（第180～183図、ＰＬ72・95・96）

位置　１区Ｘ＝29750～752　Ｙ＝－42927～949
調査区中央に位置する。

重複遺構　１区25・28・32・44号土坑と重複する。重複する遺構の中で２号溝が最も新しい。

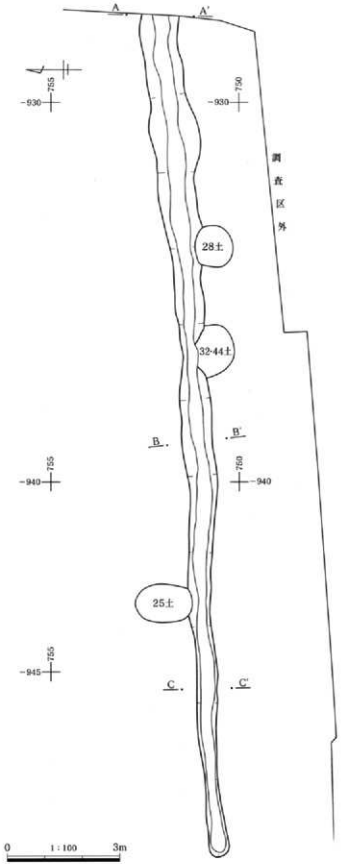
走向　東から西への走向で西側で途切れる。東側は調査区外の市道を挟んで３区２号溝に続くと推定される。３区２号溝と同一の溝と推定される。

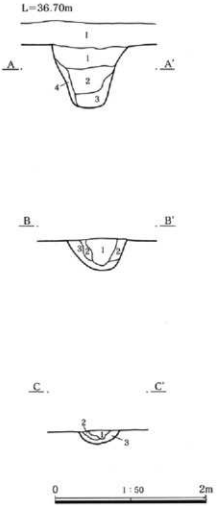
形態　直線的で、深く急な法面で箱形の形状から徐々に西に行くにしたがい浅く逆台形状の形状となる。

規模　検出全長　22.34m　上幅　0.34～0.97m
底幅　0.21～0.44m　深さ　0.06～0.67m

遺物　１区１号溝同様に縄文包含層を掘り抜いて作られているために、縄文包含層からの流れ込みと考えられる縄文土器、石器が出土している。１～55は縄文土器である。１・２は沈線が施され、加曽利Ｅ式の様相が窺える。２～16は沈線で区画。区画内に縄文、点線状刺突文、条線を施文。称名寺式である。17～41は堀之内式である。42・43は指撫で痕で称名寺式併行。44～46は加曽利Ｂ式と思われる。49～55は後期の所産と考えられる。56・57は石皿で多孔石としても使用されている。58は土製品で、先端部をわずかに欠損する。上端部に斜めに穿孔する。垂飾と思われる。図示した遺物以外に縄文土器611点、土師器坏12点、土師器甕７点、須恵器蓋１点、石26点が出土した。

所見　１区２号溝出土遺物の大半は縄文土器であるが、３区２号溝の出土遺物等から溝の時期は８世紀と考えられる。





1区2号溝A－A'・B－B'・C－C'

1　耕作土

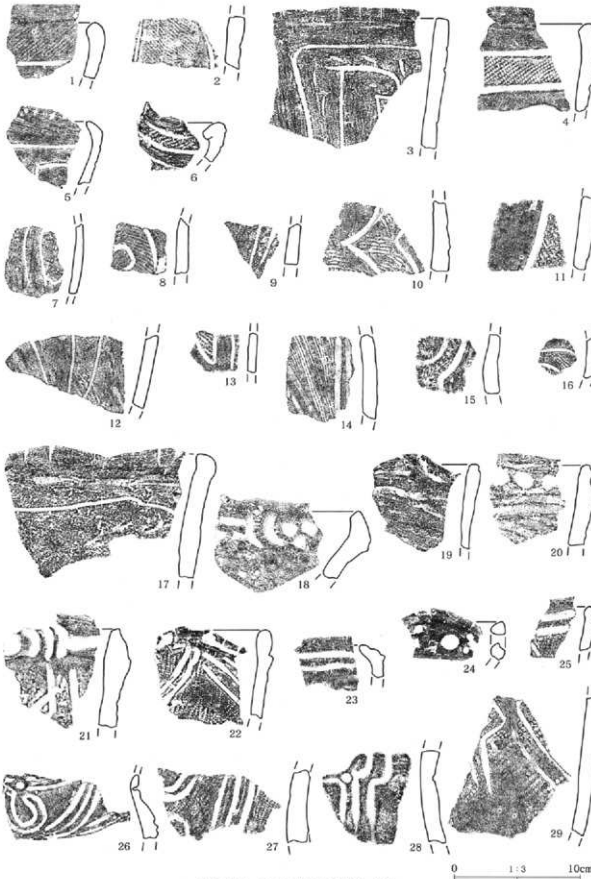
1　暗褐色土　炭化物、ローム粒、ローム
　　ブロック含む。しまりあり。

2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。

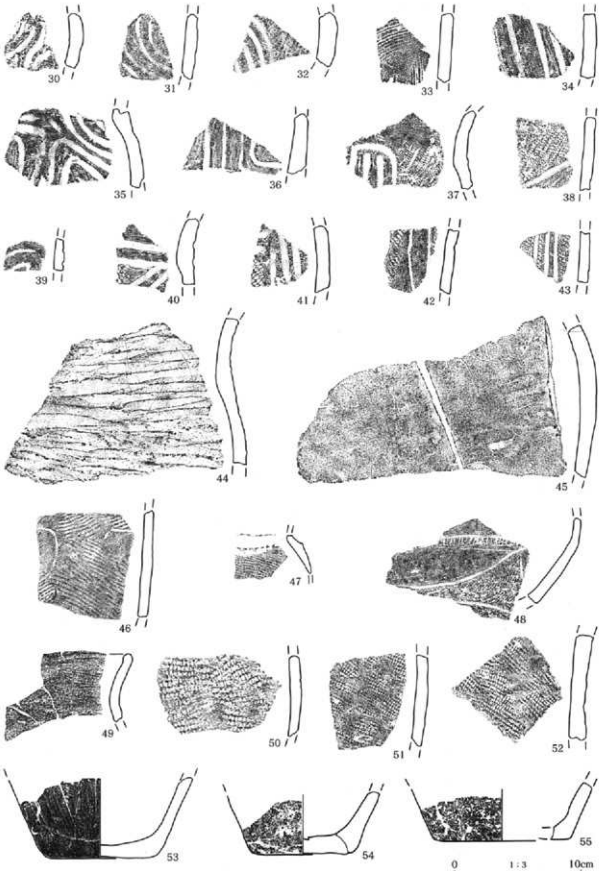
3　黒褐色土　ローム粒、ロームブロックを
　　少量含む。

4　暗褐色土　径2～3cm代のロームブロッ
　　ク多く含む。

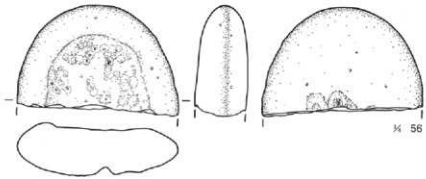
第180図　1区2号溝

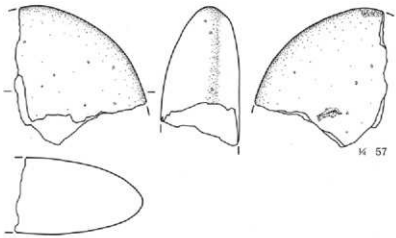


第181図　１区２号溝出土遺物（１）



第182図　1区2号溝出土遺物（2）





第183図　１区２号溝出土遺物（３）

３区２号溝(第184・186～188図、ＰＬ73・97・98)

位置　３区Ｘ＝29752～763、Ｙ＝－42898～902
３区北西部に位置する。

重複遺構　３区１・３号溝、３区37号土坑、３区39号ピットと重複。37土坑、39号ピットより新しく、１号溝より古い。３号溝との関係は同時期か、わずかに新しい。

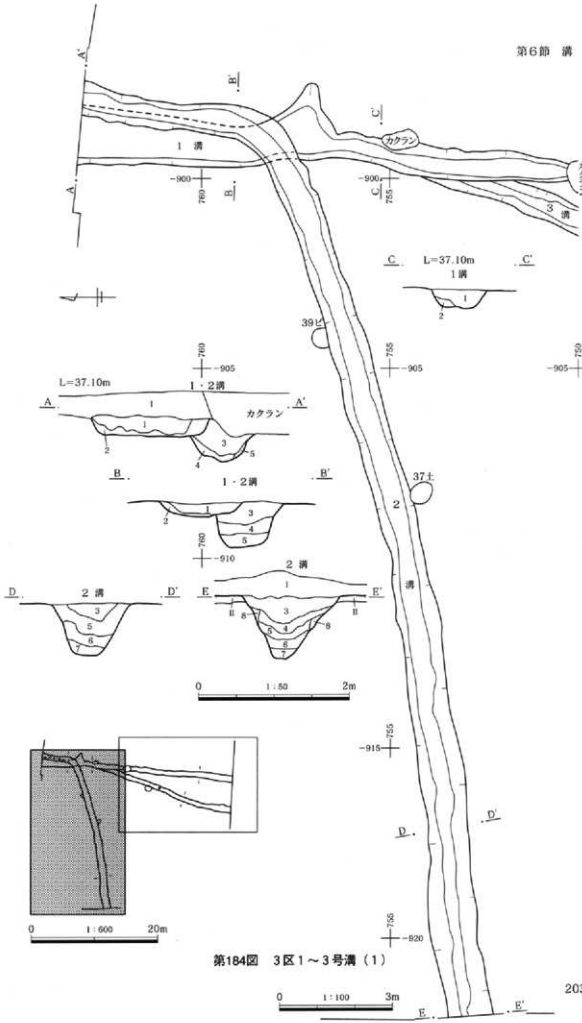
走向　南北の走向で、１号溝と重複する部分でほぼ直角に曲がり東西の走向となる。

形態　直線的で、深く急な法面で箱形の形状。

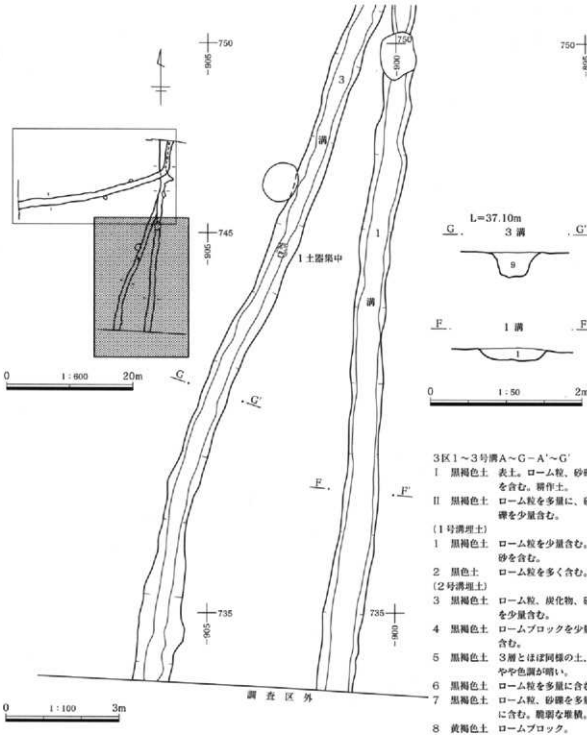
規模　検出全長　28.82m　上幅　0.82～1.30m
底幅　0.24～0.69m　深さ0.21～0.73m

遺物　縄文土器や石器が多く出土しているが、周辺に縄文時代の住居および土坑等があることから、これらの遺構からの流れ込みと考えられる。１は須恵器坏でほぼ完形である。８世紀と考えられる。２～34は縄文土器で、２～22は沈線で区画され、区画内に縄文、刺突文を施文。24～27は沈線を施文。23・29・30は指撫での痕跡。35～37は石鏃。38～42は磨石で、凹石・敲石としても使用されている。43・44は石皿で多孔石として使用されている。図示した遺物以外に土師器坏２点、須恵器坏３点、縄文土器片253点、石２点が出土した。

所見　１区２号溝と同一の溝と考える。溝の時期は埋没土中であるが１が出土したことから８世紀と考える。



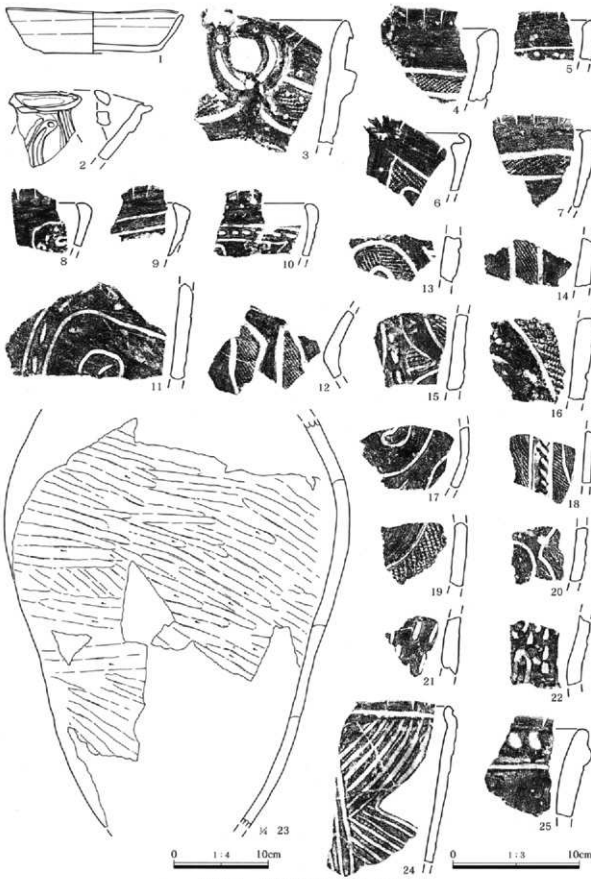
第184図　3区1～3号溝（1）



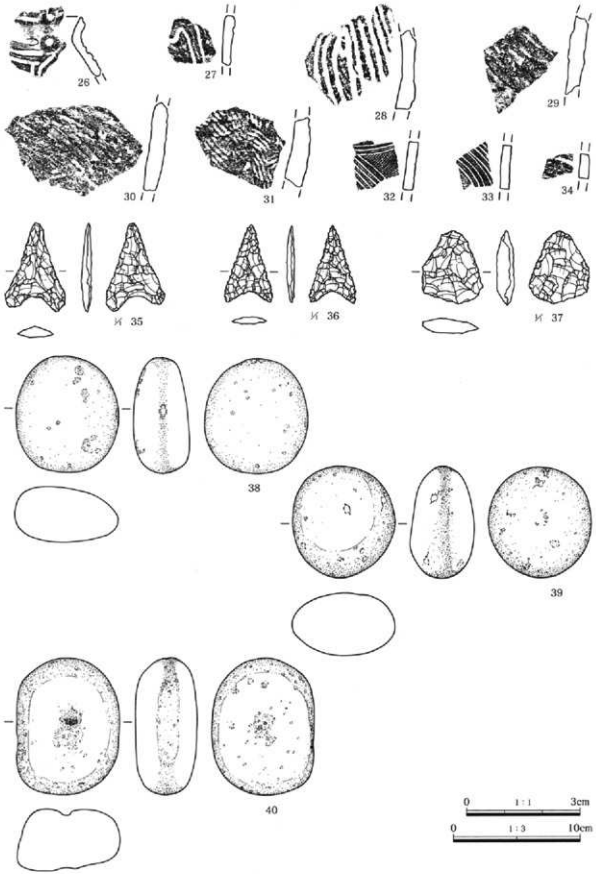
3区1～3号溝A～G－A'～G'

Ⅰ	黒褐色土	表土。ローム粒、砂礫を含む。耕作土。
Ⅱ	黒褐色土	ローム粒を多量に、砂礫を少量含む。
(1号溝埋土)		
1	黒褐色土	ローム粒を少量含む。砂を含む。
2	黒色土	ローム粒を多く含む。
(2号溝埋土)		
3	黒褐色土	ローム粒、炭化物、砂を少量含む。
4	黒褐色土	ロームブロックを少量含む。
5	黒褐色土	3層とほぼ同様の土。やや色調が明い。
6	黒褐色土	ローム粒を多量に含む。
7	黒褐色土	ローム粒、砂礫を多量に含む。脆弱な堆積。
8	黄褐色土	ロームブロック。
(3号溝埋土)		
9	黒褐色土	ローム粒を少量含む。1層に比べて緻密な堆積である。

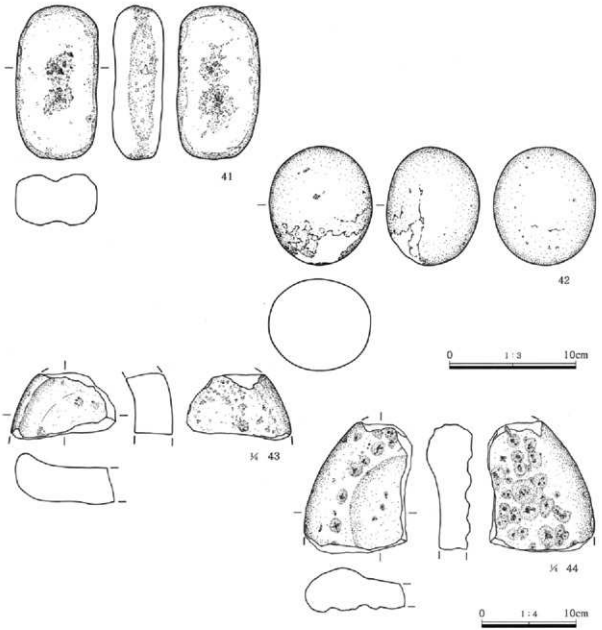
第185図　3区1～3号溝（2）



第186図　3区2号溝出土遺物（1）



第187図　3区2号溝出土遺物（2）



第188図　3区2号溝出土遺物（3）

3区1号溝(第184・185・189図、PL72・73・97)

位置　3区X＝29732～763、Y＝－42898～763
3区西側に位置する。

重複遺構　3区5号住、3区2・3号溝、3区52号ピットと重複する。遺構平面と土層断面観察により、重複する他の遺構より、1号溝は新しい。

走向　南北の走向である。

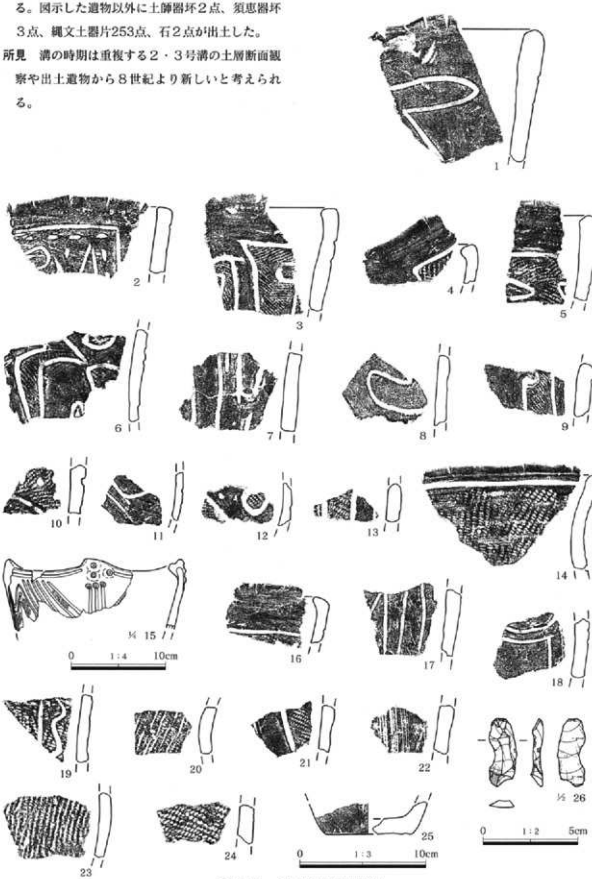
形態　ほぼ直線的で、断面形は浅い逆台形状または皿型である。

規模　検出全長　30.78m　上幅　0.44～2.02m
底幅　0.20～1.26m　深さ　0.05～0.25m

遺物　遺物の大半は縄文土器であるが、3区5号住と重複し、周辺に縄文時代の遺構が多く存在することから、縄文土器の多くは流れ込みと考えられる。1～25は縄文土器である。1～13は称名寺式。14～22は堀之内式である。23～25は後期。26は使用痕のある剥片で、石材はチャートであ

る。図示した遺物以外に土師器坏２点、須恵器坏３点、縄文土器片253点、石２点が出土した。

所見　溝の時期は重複する２・３号溝の土層断面観察や出土遺物から８世紀より新しいと考えられる。



第189図　３区１号溝出土遺物

3区3号溝

(第184・185・190・191図、PL72・73・98・99)

位置　3区X＝29733～763、Y＝－42897～922
3区西側に位置する。

重複遺構　3区5号住、3区7・50号土坑、3区1・2号溝と重複する。平面確認と土層断面の観察から5号住、7・50号土坑より新しく、1号溝より古い。2号溝と同時期かわずかに古い。

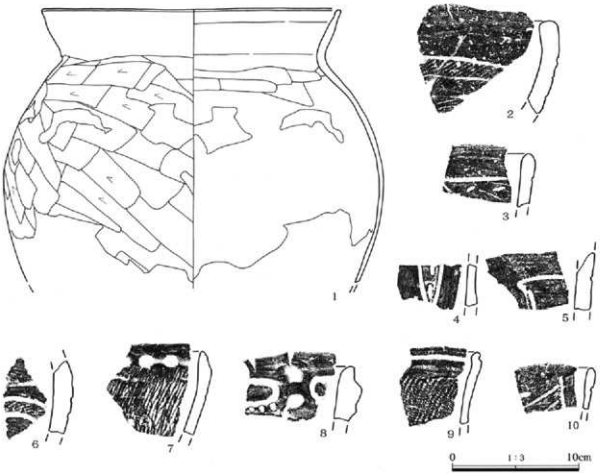
走向　北側は直線的で南北の走向、南側は緩やかに東側に曲がる。

形態　断面の形状は浅い逆台形である。

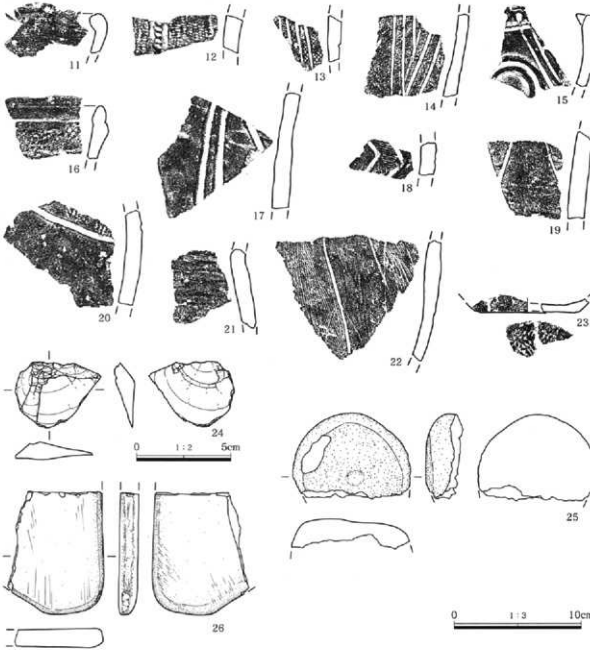
規模　検出全長　31.20m　上幅　0.62～1.24m
底幅　0.14～0.50m　深さ　0.30～0.49m

遺物　5号住と重複する部分で1が出土した。土師器甕で、底部を欠損する。頸部は「く」の字状で、胴部がやや張る器形である。8世紀前半と考えられる。2～23は縄文土器である。2～6は沈線で区画し、区画内に縄文・刺突文を施文。称名寺式である。7～18は、地文に縄文施文後に沈線を施文。11は隆帯と沈線で施文。14は沈線で区画後区画内に縄文を施文。19～22は後期の所産と考えられる。22は地文に条線を施文後、沈線を施文。23は底部に網代痕。24は剥片で石材は黒色頁岩。25は凹石で、下半部および裏面を欠損。26は砥石で扁平である。図示した遺物以外に土師器坏1点、土師器甕95点、縄文土器片50点、石1点が出土した。

所見　溝の時期は1が出土したことから8世紀と考えられる。



第190図　3区3号溝出土遺物（1）



第191図　3区3号溝出土遺物（2）

3区4号溝（第192～194図、PL74・99）

位置　3区X＝29743～760　Y＝－42843～854
3区北東部に位置する。

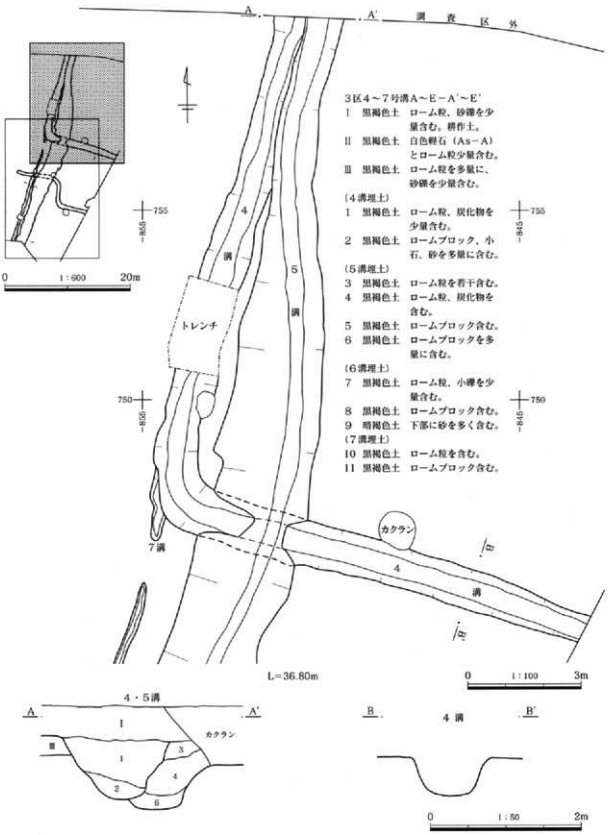
重複遺構　3区5・7溝と重複する。平面と土層断面観察により、4号溝は5・7号溝より新しい。

走向　ほぼ南北の走向であるが、745－850Gではぼ直角に東側に曲がり、東西走向。

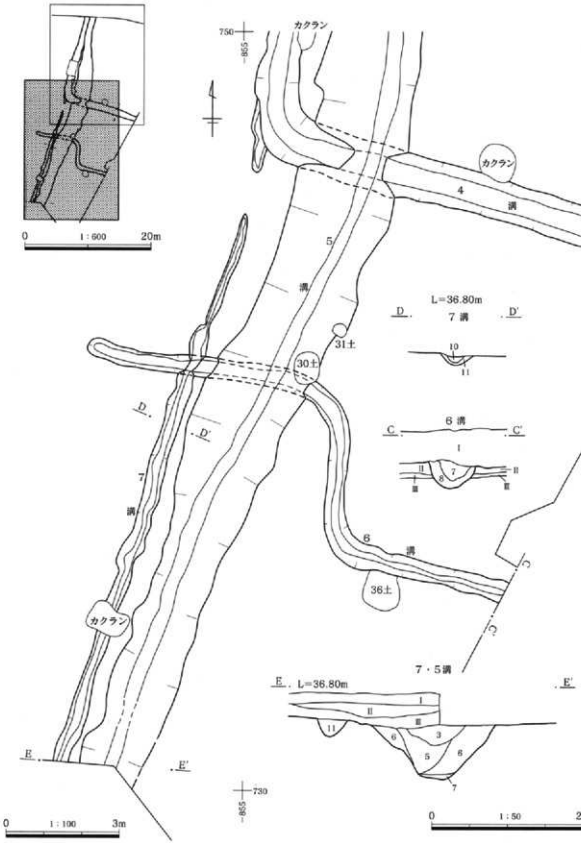
形態　直線的で、ほぼ直角に曲がる。断面の形状は法面が急な逆台形状である。

規模　検出全長　24.10m　上幅　0.76～1.36m
底幅　0.20～0.64m　深さ　0.59～0.76m

遺物　1・2は縄文土器深鉢である。1は口縁部片で、沈線で区画し、区画内に縄文を施文。称名寺式である。2は胴部片で、沈線を左右斜位に施す。称名寺併行と考えられる。図示した遺物以外に土師器坏7点、土師器甕1点、縄文土器片31点、磁器2点、瓦2点が出土した。

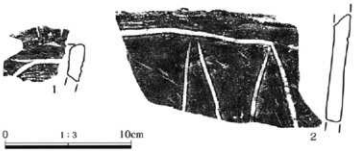


第192図　3区4～7号溝（1）



第193図　３区４～７号溝（２）

所見　溝の時期は土層や出土遺物から近世と考えられる。



第194図　3区4号溝出土遺物

3区5号溝（第192・193・195図、PL99）

位置　3区X＝29729～760　Y＝－42849～859
3区東部に位置する。

重複遺構　3区30・31号土坑、3区4・6号溝と重複する。平面確認と土層断面観察により、5号溝は30・31号土坑より新しく、4・6号溝より古い。

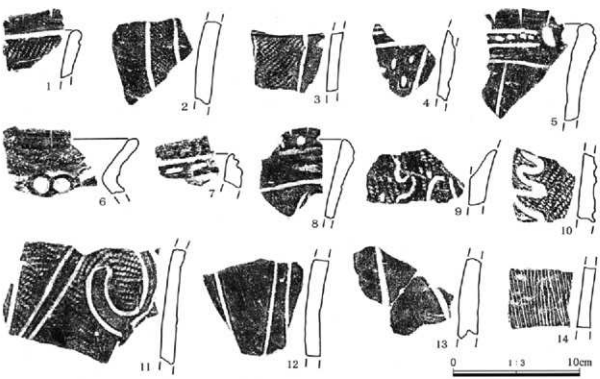
走向　ほぼ南北の走向。

形態　緩い弧状で、わずかに東側に張り出す。断面形は逆台形で、急な法面で深さがある。

規模　検出全長　30.8m　上幅　0.84～2.70m
底幅　0.24～0.54m　深さ　0.59～0.76m

遺物　1～14は縄文土器深鉢である。1～4は沈線で区画。区画内に縄文、刺突文を施文する。称名寺式である。5～11は堀之内式である。12～13は後期と思われる。図示した遺物以外に、土師器甕9点、土師器坏13点、須恵器坏7点、須恵器甕3点、縄文土器片228点、近世土器2点が出土した。

所見　出土遺物は大半が縄文土器であるが、周辺の遺構からの流れ込みの可能性が考えられる。土層や出土遺物から近世と考えられる。



第195図　3区5号溝出土遺物

3区6号溝（第192・193・196図、PL74・75・99）

位置　3区X＝29734～741　Y＝－42847～859
3区南東部に位置する。

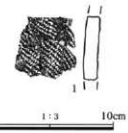
重複遺構　3区30・36号土坑、3区5・7号溝と重複する。6号溝は重複する遺構の中で最も新しい。

走向　東側は調査区外に伸び、東西走向で、735－850Cでほぼ直角にクランク状に曲がり、南北走向、さらに東西走向となる。

形態　断面形は底面が丸味を帯びる。

規模　検出全長　14.8m　上幅　0.44～0.72m
底幅　0.08～0.38m　深さ　0.03～0.18m

遺物　出土遺物は1で縄文土器深鉢の胴部片で、地文に縄文を施文。不明瞭であるが後期と思われる。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。



第196図
3区6号溝出土遺物

所見　溝の時期は土層断面や他の遺構との重複関係から近世～近現代と推定される。

3区7号溝（第192・193図、PL75）

位置　3区X＝29730～748　Y＝－42854～859
3区東部に位置する。

重複遺構　3区4・6号溝と重複する。重複する遺構の中で最も古い。

走向　ほぼ南北の走向。

形態　直線的で、急な法面で、U字型の断面。

規模　検出全長　15.12m　上幅　0.06～0.60m
底幅　0.02～0.28m　深さ　0.09～0.18m

遺物　図示し得なかったが、土師器甕1点、縄文土器片3点が出土した。

所見　土層や重複する他の遺構から、7号溝の時期は近世と考えられる。

3区8号溝（第197図、PL75）

位置　1区X＝29754～761　Y＝－42879～882
3区中央部北側に位置する。

重複遺構　なし。

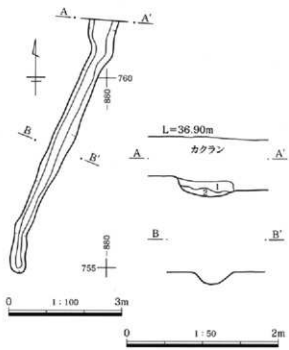
走向　ほぼ南北の走向で、南端で緩やかに東に曲がる。北側は調査区外に伸びる。

形態　断面の形状は浅く皿型である。

規模　検出全長　7.00m　上幅　0.30～0.74m
底幅　0.04～0.49m　深さ　0.09～0.18m

遺物　出土遺物はなかった。

所見　溝の時期は、出土遺物がなかったため不明瞭であるが、周辺の遺構との関係等から近世の可能性が高い。



3区8号溝A－A'
1　黒褐色土　径1～2mmのローム粒を多く含む。
2　褐色土　径3～4cmのロームブロックを多く含む。

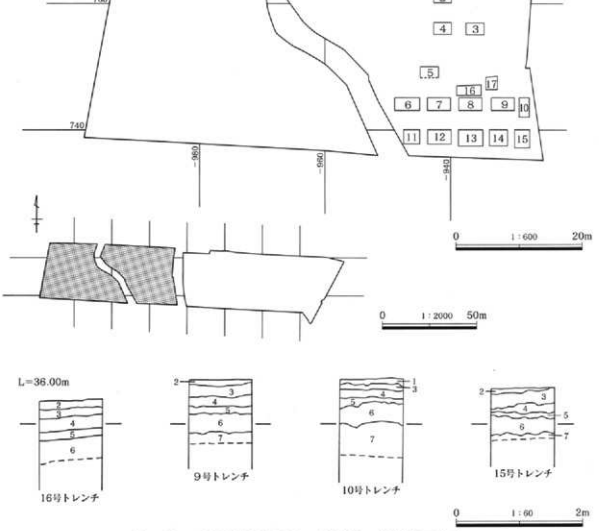
第197図　3区8号溝

第７節　旧石器時代の調査

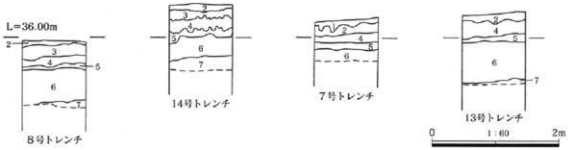
旧石器時代の調査はローム台地の１区と３区で実施した。試掘トレンチは２ｍ×４ｍを基準に設定したが、縄文時代までの調査の状況によって３ｍ×３ｍ、２ｍ×３ｍ等を設定した。

遺物は１区で16号トレンチと13号トレンチで、石核とナイフ形石器が１点ずつ確認された。また縄文時代の住居の調査時に（３区５号住居）ナイフ型石器が１点出土した。

石核が出土した16号トレンチの東に２ｍ×２ｍのトレンチを設定し調査した。またナイフ型石器の出土した13号トレンチは調査トレンチを密に設定し、調査を進めた。前記２点以外に遺物の出土はなかった。次年度（平成16年度）調査で、さらに１区北側半分と３区の試掘調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。



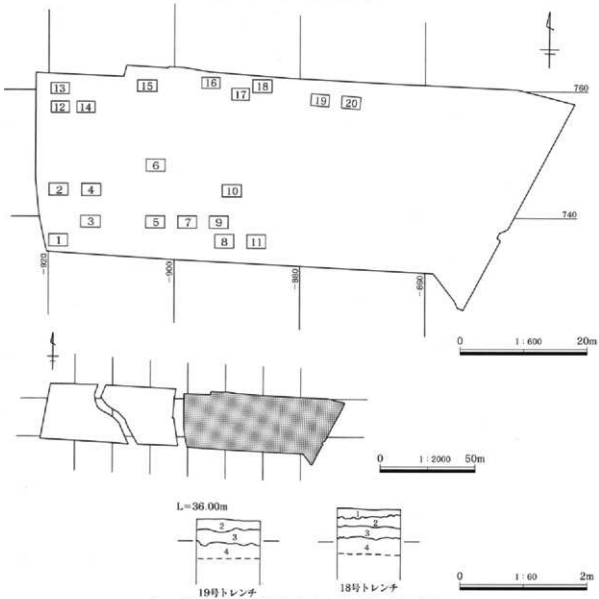
第198図　１区旧石器調査グリッド設定図・土層断面図（１）



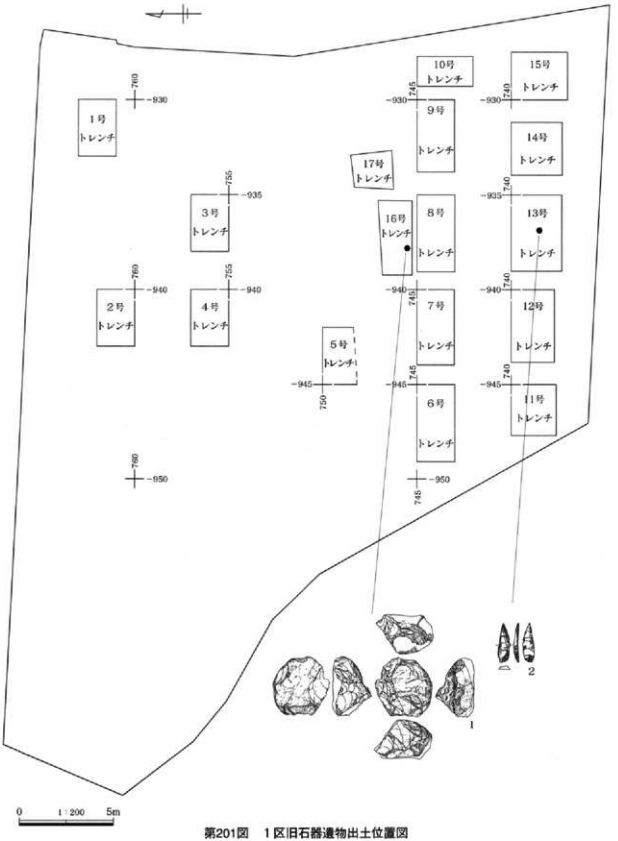
旧石器調査トレンチ土層注

1　暗褐色土　ローム漸移層（基本土層Ⅵ）
2　褐色土　Ａｓ－ＹＰを含む。（基本土層Ⅶ）
3　褐色土　軽石を含まない他は２層に類似。（基本土層Ⅷ）
4　灰褐色土　Ａｓ－ＢＰの混土で下部にＡｓ－ＭＰを含む。（基本土層Ⅸ）
5　にぶい褐色土　暗色帯への漸移層。基本土層Ⅹ）
6　暗褐色土　暗色帯。（基本土層ＸＩ）
7　黄色粘質土　（基本土層ＸＩＩ）

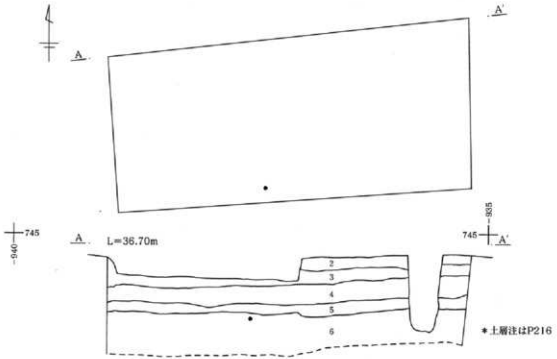
第199図　１区土層断面図（２）



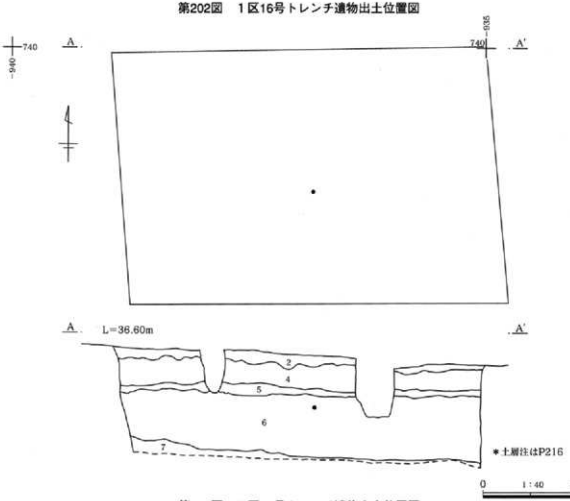
第200図　３区旧石器調査グリッド設定図・土層断面図



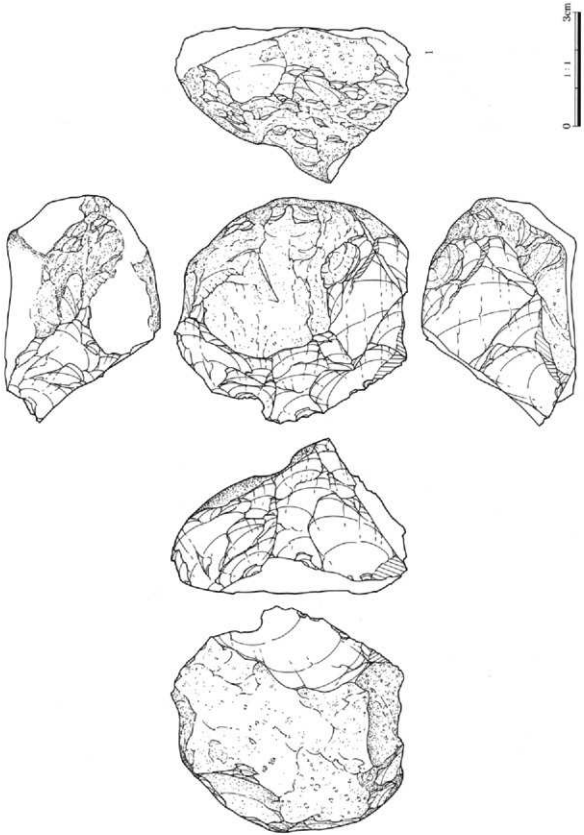
第201図　１区旧石器遺物出土位置図



第202図　1区16号トレンチ遺物出土位置図



第203図　1区13号トレンチ遺物出土位置図



第204図　旧石器出土遺物（１）

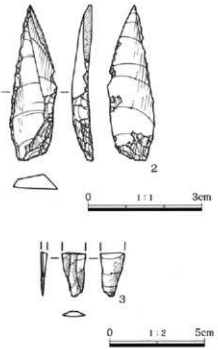
ここでは、明確に旧石器時代の調査で出土した１～２と縄文時代の遺構調査時に出土した３を報告する。

１は１区ほぼ中央やや南よりの745－935Ｇで６層上部より出土した。６層は暗色帯である。ＡＴ（姶良丹沢パミス）の層位が不明であるため、１の出土層位はＡＴとの関係が不明である。１は石核で、石材はチャートである。表裏面ともに自然面を残す。打面作出後に貝殻状の剥片を一定方向から剥離している。長さ59㎜、巾62㎜、厚さ41㎜、重量141.1ｇである。

２は１区南側の735－935Ｇで６層上部（暗色帯）で出土した。１と同様にＡＴとの関係は不明である。ナイフ形石器で、石材は黒曜石である。基部に打点を残す縦長剥片を素材とした、２側縁加工の小型ナイフ形石器である。なお、正面右側上端部の刃部に自然面をそのまま残している。長さ41㎜、巾13㎜、厚さ６㎜、重量2.12ｇである。

３は３区西側の745－900Ｇで３区５号住居より出土した。出土層位は不明である。３区５号住居は縄文時代後期初頭である。３はナイフ形石器で、石材は黒曜石である。縦長状の剥片を素材とし、正面左側縁部下端にブランティングを施し、破損している。ナイフ形石器の未製品と考えられる。長さは現状で23㎜、巾13㎜、厚さ３㎜、重量0.63ｇである。

他に旧石器時代の遺物の可能性が考えられるものが数点あるが、次の節の遺構外出土遺物で報告する。



第205図　旧石器出土遺物（２）

第８節　遺構外出土の遺物

平成15年度調査の１区南側半分と２区、平成16年度調査の１区北側半分と３区で出土した遺構外遺物は28,000点を超える。大半が縄文土器で27,000点あまりである。１区で22,000点あまり、３区で5,000点ほどである。本節で扱う遺構外出土遺物は、表土掘削時の表土から出土した遺物と、遺構確認時に出土し、遺構への帰属が不明瞭なものであり、大半は１区南西側の包含層からの出土遺物である。縄文時代中期後半の加曽利E式から後期初頭の称名寺式・後期前葉の堀之内式が主体を占める。わずかではあるが後期中葉の加曽利B式が出土している。古墳時代から近現代の遺物も極わずかであるが出土している。本節で掲載する遺物の区ごとの内訳は１区1550点、３区424点である。

１～32は大型破片で器形復原できたもので、掲載は1/4縮尺である。

１～５は縄文時代後期称名寺式の深鉢である。沈線で区画が施される。６～８は縄文時代後期称名寺式に併行するもの、あるいは称名寺式に含まれるものである。６は口縁部に横位に１条隆帯を貼り付け、隆帯上に刺突状の刻目を施す。胴部に縄文を施文する。７は胴部に条線を、８は胴部に縄文を施文する。

９～30は縄文時代後期堀之内式で16以外は深鉢である。16は注口土器である。９～15・23・25は胴上部で括れ、口縁部が外に開く器形である。胴部に縄文を施文後沈線を施文する。２・３本１組の沈線で蛇行・曲線・同心円状の懸垂文等を描く。17～22・24・27は地文が縄文以外の無文や条線である。20は条線を縦位・左右斜位に施し、格子目状に施文する。堀之内式に含まれると考える。26・28はいわゆるコップ形の器形で、胴部下部から口縁部が直線的に外傾する。26は地文に縄文を施文後沈線が懸垂する。29・30は称名寺式の系統で考えられる土器である。30は底部を欠損する大型の深鉢である。

31・32は深鉢で精製土器である。加曽利B式である。

33～100・102～112・114～128・130～132・134～138は縄文時代中期末で、ほとんどが加曽利E式と思われる。33～79・81・82は口縁部破片である。34・36は口縁部が強く内湾し、口縁部下に１条沈線が巡り、口縁部下の横位沈線から∩字状の沈線が懸垂する。34は口唇部下に１条微隆起帯が巡る。35・37・40～42・49・57・62・64・66・67・70～72・74・77～79・81は微隆起帯あるいは隆帯を有す。89・97・105・116・117は地文に無節Ｌｒ縄文を施文する。中期末と考えるが後期初頭まで下る可能性も考えられる。125は地文に櫛状工具による条線が施文される。

101・139～241・243～331・333～535・537～669・888・904・912・913・925・947・1003・1015・1017・1085・1095・1117・1119・1138・1140・1165・1166・1176・1201・1203・1226・1229・1230・1308・1322・1335・1337・1338・1348・1352・1370・1384・1389・1394・1399・1408・1412・1415・1433・1437・1439・1442・1448・1450・1451・1458・1465・1468・1469・1472・1473・1476・1501・1509・1515・1523・1541・1542・1544・1549・1551・1641・1653は縄文時代後期初頭称名寺式である。

139～241・243～289・291～295・888・904・912・913・925・947・1003は深鉢の口縁部片である。沈線で区画し、区画内に縄文を施文するもの。区画内に縄文を施文後、円形の刺突文を施文するもの。区画内に円形や点線状の刺突文を施文するもの等である。210・215・225・231・245・253・273・274・276は把手である。215は把手上部より隆帯が懸垂し、隆帯を挟んで１対の円形刺突文を施す。把手上部が鳥の顔の輪郭、隆帯が嘴、円形刺突文が目を表現しているように思われる。

253は波状口縁で波頂部に蛇の頭状の把手が付く。側面に円形の刺突文が施され、目を表現しているように思われる。

101・290・296～331・333～535・537～665・1015・1017・1085・1095・1117・1119・1138・1140・1165・1166・1176・1201・1203・1226・1229・1230・1308・1322・1335・1337・1338・1348・1352・1370・1384・1389・1394・1399・1408・1412・1415・1433・1437・1439・1442・1448・1450・1451・1458・1465・1468・1469・1472・1473・1476・1501・1509・1515・1523・1541・1542・1544・1549・1551・1641・1653は深鉢の胴部破片である。口縁部同様沈線で区画し、区画内に、縄文、縄文施文後円形刺突文、円形や点線状の刺突文を施文する。470は微隆起帯で区画し、区画内に円形刺突文を施文。区画外に縄文を施文する。「関沢類型」と思われる。1370は隆帯あるいは微隆起帯で区画し、区画内に円形刺突文を施文する。「関沢類型」と思われる。

666～669は胴下部から底部破片である。胴下部にわずかに沈線で区画し、区画内に縄文を施文する。称名寺式の底部破片である。

671～682・684～703・705～715・718～722・724～756・758～761・763～774・776～780・782～787・789～799・801・802・805～823・825～875・877～879・882～885・887・889～892・894～903・905～911・914～924・926～946・948～962・964～971・973・974・976～985・987～995・997～1002・1004～1014・1016・1018～1048・1050～1061・1064・1065・1067・1069・1071～1073・1075～1081・1086・1089・1091～1094・1096～1099・1101・1104・1106～1115・1118・1120・1121・1123～1125・1128・1130・1131・1133～1137・1139・1141～1164・1167～1172・1175・1177～1184・1186・1189・1190・1192・1193・1198・1199・1202・1204・1205・1207・1209～1218・1224・1225・1227・1231・1236～1240・1242～1244・1246・1247・1249・1251・1253～1255・1257～1259・1261・1262・1265～1274・1279・1281～1283・1285～1287・1289～1291・1294・1296～1299・1301～1307・1309～1316・1318・1320・1321・1323～1325・1327～1333・1336・1340・1341・1343・1345・1347・1349～1351・1353～1356・1358～1364・1366・1368・1369・1371～1375・1377～1379・1381・1383・1385・1386・1388・1391・1392・1395～1397・1400・1402～1407・1410・1411・1413・1414・1416～1425・1428～1432・1434・1435・1440・1441・1443～1447・1449・1452～1454・1456・1457・1459・1461・1463・1464・1466・1467・1470・1471・1474・1475・1477～1491・1493～1495・1498～1500・1502～1508・1510～1513・1516・1518～1522・1524～1540・1543・1545～1547・1550・1552～1555・1559～1561は縄文時代後期前葉堀之内式である。

671～682・684～703・705～715・718～722・724～756・758～761・763～774・776～780・782～787・789～799・801・802・805～823・825～875・877～879・882～885・887・889～892・894～903・905～911・914～924・926～946・948～962・964～971・973・974・976～985・987～995・997～1002・1004・1056は口縁部片である。

1005～1014・1016・1018～1048・1050～1055・1057～1061・1064・1065・1067・1069・1071～1073・1075～1081・1086・1089・1091～1094・1096～1099・1101・1104・1106～1115・1118・1120・1121・1123～1125・1128・1130・1131・1133～1137・1139・1141～1164・1167～1172・

1175・1177～1184・1186・1189・1190・1192・1193・1198・1199・1202・1204・1205・1207・1209～1218・1224・1225・1227・1231・1236～1240・1242～1244・1246・1247・1249・1251・1253～1255・1257～1259・1261・1262・1265～1274・1279・1281～1283・1285～1287・1289～1291・1294・1296～1299・1301～1307・1309～1316・1318・1320・1321・1323～1325・1327～1333・1336・1340・1341・1343・1345・1347・1349～1351・1353～1356・1358～1364・1366・1368・1369・1371～1375・1377～1379・1381・1383・1385・1386・1388・1391・1392・1395～1397・1400・1402～1407・1410・1411・1413・1414・1416～1425・1428～1432・1434・1435・1440・1441・1443～1447・1449・1452～1454・1456・1457・1459・1461・1463・1464・1466・1467・1470・1471・1474・1475・1477～1491・1493～1495・1498～1500・1502～1508・1510～1513・1516・1518～1522・1524～1540・1543・1545～1547・1550・1552～1555・1559～1561は胴部片である。

1566～1580は縄文時代後期後葉加曽利B式である。1566～1572は深鉢の口縁部片である。1573～1580は深鉢の胴部片である。

683・704・716・717・723・757・762・775・781・788・800・803・804・824・876・880・881・886・893・963・972・975・986・996・1049・1056・1062・1063・1066・1068・1070・1074・1082～1084・1087・1088・1090・1100・1102・1103・1105・1116・1122・1126・1127・1129・1132・1173・1174・1185・1188・1191・1194～1197・1200・1206・1208・1219・1220～1223・1228・1234～1235・1241・1245・1248・1250・1252・1256・1260・1263・1264・1275・1277・1278・1280・1284・1288・1292・1293・1295・1306・1317・1319・1326・1334・1339・1342・1344・1346・1357・1365・1367・1376・1380・1387・1390・1393・1398・1401・1409・1426・1427・1436・1438・1455・1460・1462・1492・1496・1497・1514・1517・1548・1556・1558・1562～1565・1581～1640・1642～1652・1654～1756・1758～1762・1786は縄文時代後期と思われるものである。中には称名寺式・堀之内式・加曽利B式の可能性の高い者も含まれる。称名寺式・堀之内式に併行すると思われるものである。

1769～1785・1787～1793は胴下部から底部片である。1769は底部に網代痕がみられる。器形などから縄文時代後期加曽利B式と考えられる。他は型式は不明であるが縄文時代後期の所産と考えられる。

1763～1765・1768は蓋と考えられる。縄文時代後期と考えられる。1763は径4mm程の孔が焼成前に開けられていた。1764はやや厚手である。表裏面に指撫での痕跡が明瞭である。1765は摘みを欠損する。橋状の摘みの可能性が考えらる。1768は直径11.6cmと推定される。やや厚手で表面に指撫での痕跡が明瞭である。

670・1766・1767・1794～1802は土製品である。

1766・1767はミニチュアの土器である。1766は、ほぼ完形である。底部は丸底である。1767は底部は丸底である。

670・1796・1797・1799は土錘と思われる。670は1/2縮尺の掲載である。平面形が隅丸長方形と推定され、長軸方向に径3mm程の孔が貫通すると推定される。土錘と考えられる。1796は1/3縮尺の掲載である。焼成前に紐をかけるための彫り込みが十字に施される。1797は1/3縮尺の掲載である。深鉢型土器の胴部片を再利用している。上下端部に抉れ、擦痕がみられる。擦痕は紐をかけた痕跡と思

われる。1799は1/3縮尺の掲載である。平面形は隅丸長方形または楕円形と推定される。長軸方向に径２㎜の孔があく。

1794・1795・1801・1802は用途不明の土製品である。1794・1795は上下が端部で左右は割れ口である。表面に縄文を施文する。把手の可能性も考えられる。1801は平面形は円形で上端部に面取りが施される。中央部が厚く、端部が薄くなる。1802は破片下端に径３㎜程の孔が貫通していたと推定できる。用途は不明である。蓋の摘みの可能性が考えられる。

1798は垂飾と考えられる。ほぼ完形で、上部が太く、下部は徐々に細くなる。上部で両側面に径４㎜程の孔があく。類似するものが１区２溝58、１区38ピット１である。

1803は古銭で、昭和15年の十戒アルミ貨である。

1804～1809は古墳時代～古代である。1804は土師器壺で折り返し口縁で、４世紀である。４世紀の遺構は確認されていない。1808は土師器高坏で坏部と脚の裾部を欠損。５世紀である。1804～1806は須恵器椀で９世紀である。1807は長頸壺の口縁～頸部である。外面に自然釉で、９世紀である。５世紀は１区46号土坑の１基が５世紀である。９世紀は、３区２号住、１号竪穴状遺構であり、関連すると考えられる。

1810～1818は石族である。

1819～1835は打製石斧である。1833は右側縁の中央付近が抉れるが、形状としては撥型である。他は両側縁の中央付近が抉れ分銅型である。完形以外のものも分銅型と推定できる。1829は抉れ部分に着柄時の摩滅が良好に観察できる。

1838・1843は石核である。

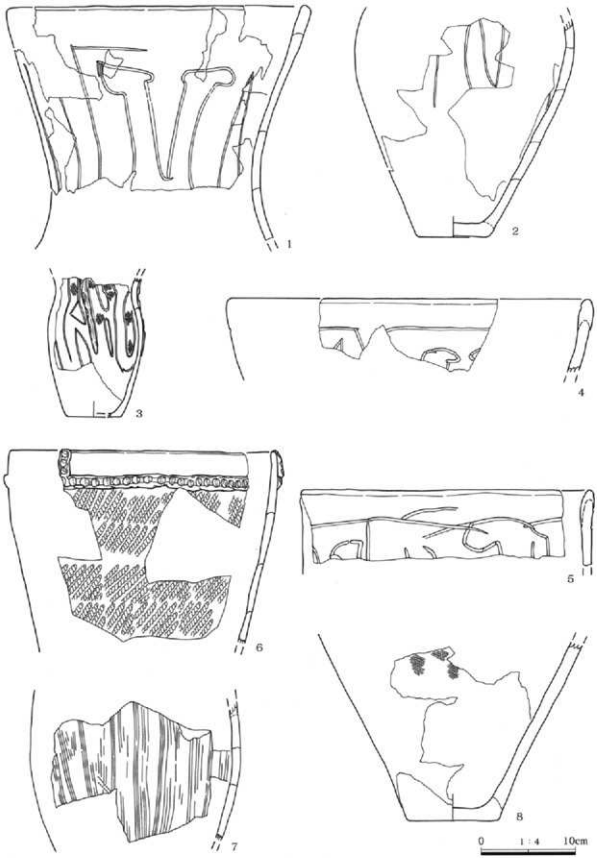
1839～1842・1844～1848は剥片等である。

1849～1886は磨石・凹石・敲石類である。

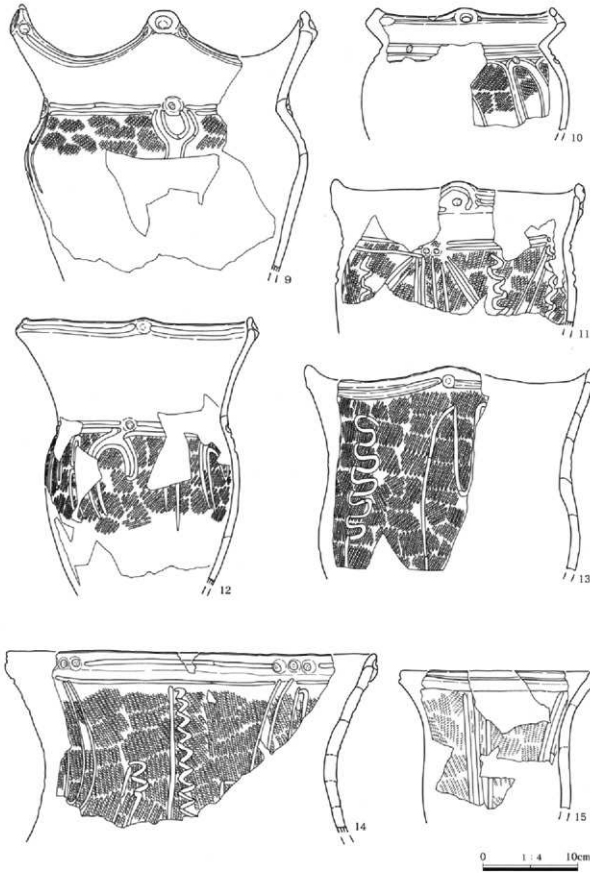
1887～1889・1891・1892・1895は石皿で、多孔石に転用されているものもある。

1890・1893は軽石製である。

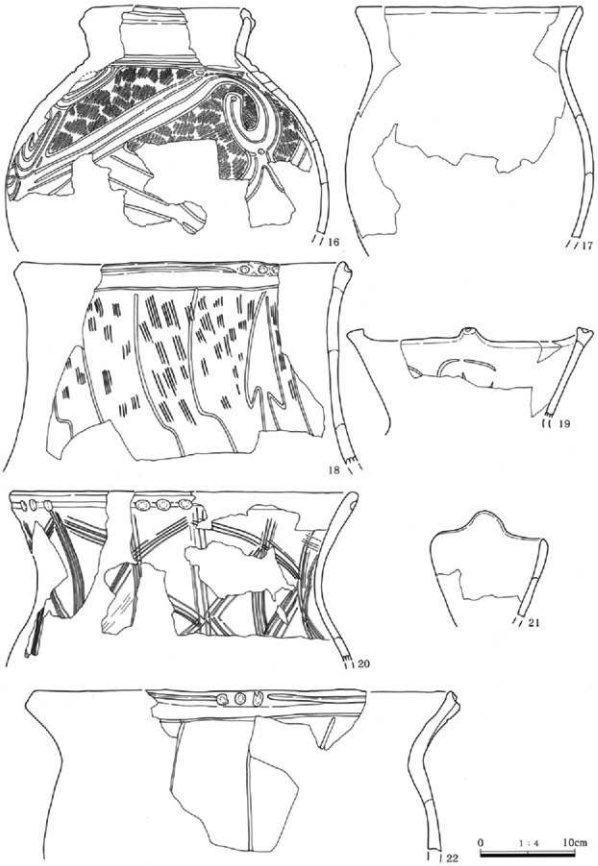
1894・1896は砥石である。



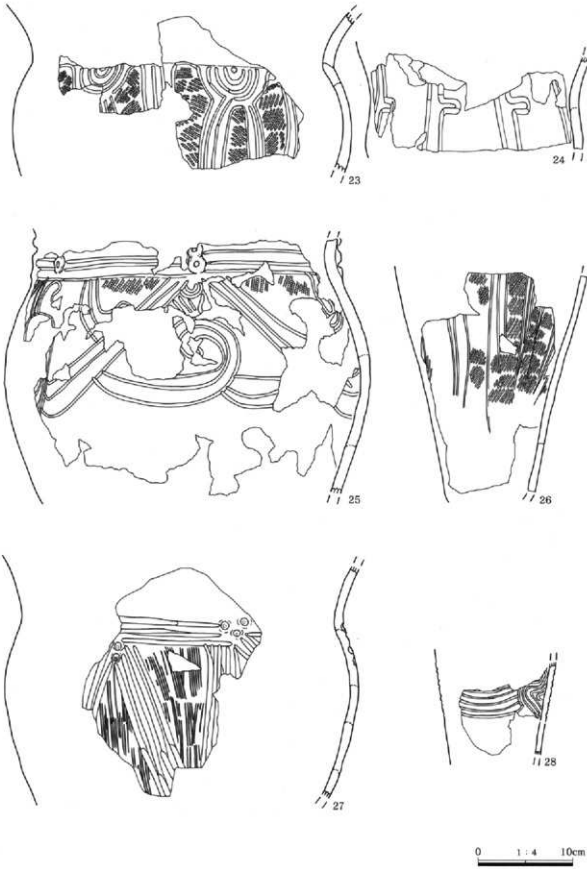
第206図　遺構外出土遺物（1）



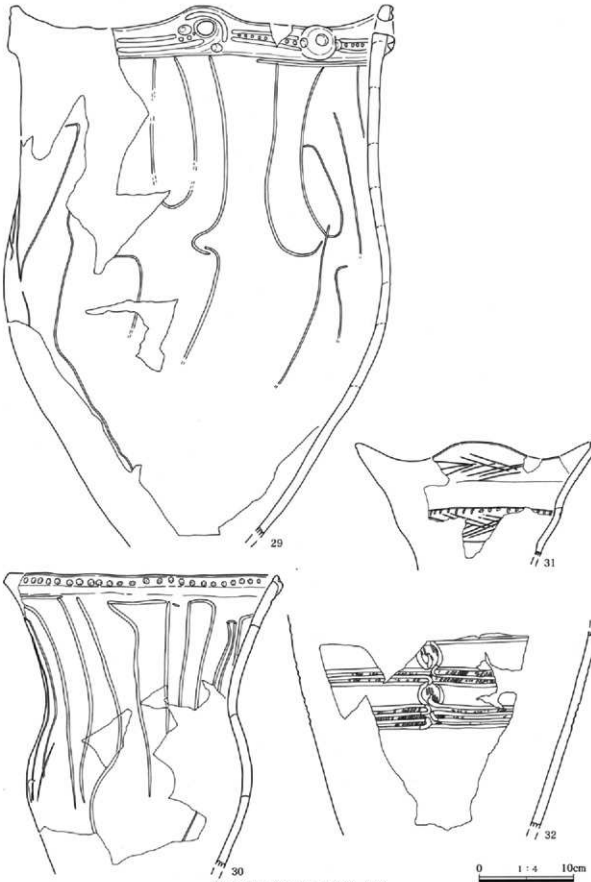
第207図　遺構外出土遺物（2）



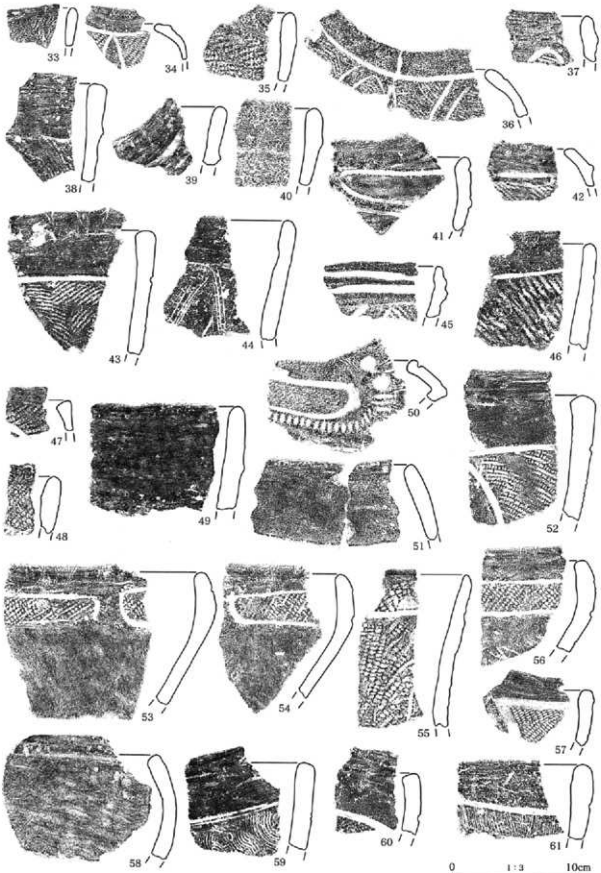
第208図　遺構外出土遺物（3）



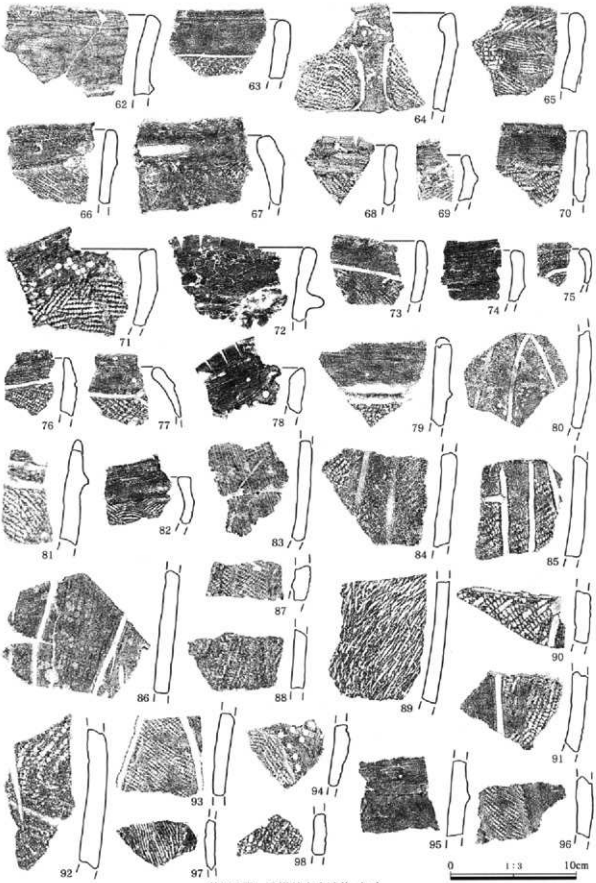
第209図　遺構外出土遺物（４）



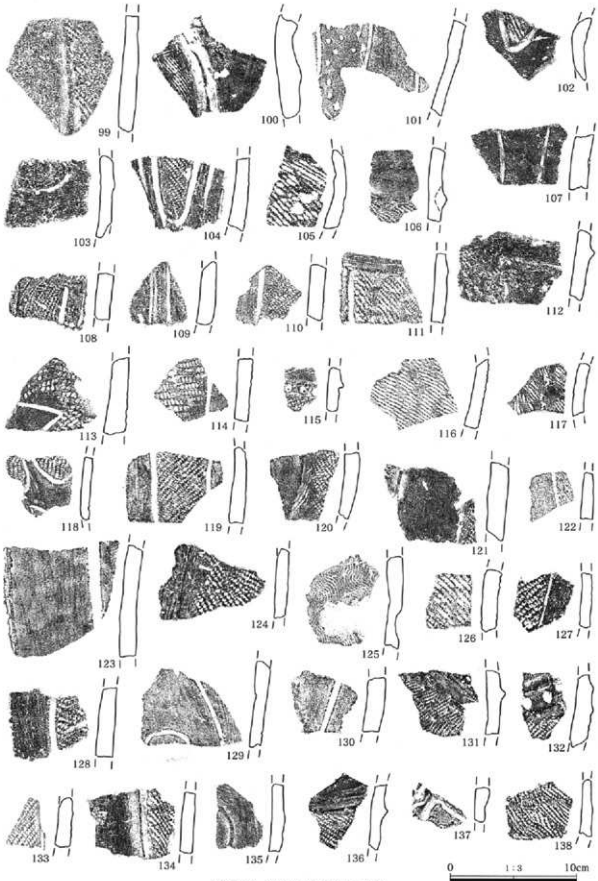
第210図　遺構外出土遺物（5）



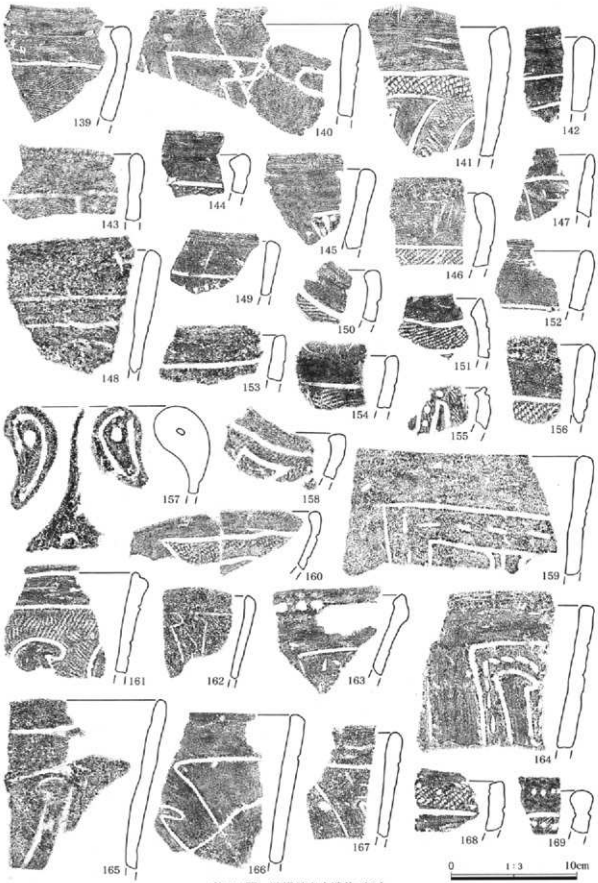
第211図　遺構外出土遺物（6）



第212図　遺構外出土遺物（7）



第213図　遺構外出土遺物（8）



第214図　遺構外出土遺物（9）